## 山岳



Vol.92/1997

## 最高の

#### **22/1-2**

山岳テントとして高い評価を持つ ヘリテイジの "エスパース" シリーズは、 1970年カモシカのオリジナルテントとして始まりました。 現在ではスリーシーズン用から厳冬期遠征仕様まで

7機種がラインナップされ、 数多くの登山者や冒険家に愛用されています。





ガッシャブルム1峰 (8,068m)・ベースキャンプ 1997年7月16日登頂 提供・小西浩文

ス。

#### カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

#### カモシカスポーツ

山の店・本 店 ☎03(3371)4333 〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3

山の店・横浜店 ☎045(212)2044 〒231 神奈川県横浜市中区桜木町 3-11

- ●AM10:30~PM8:00 (月~金) AM10:30~PM7:00 (土·日·祝)
- ●定休日/日曜日 (6月・7月・8月・12月は定休日なし。他の月 は最初と最後の日曜日は営業します)





#### Щ

#### 岳

一九九七年



# 山 岳 一九九七年 目 次

立山・劍岳登山史	カカボラジ初登頂	女神の山「チョモラリ峰」全員登頂 ――一九九六年信州大学・ネパール警察ヒマラヤ遠征隊の記録彼 気トナチュリ初発耳	登山隊一九九六大リー峰をネパール側より初登頂	た頂――K2単独無酸素登頂戸山岳会青年部K2登山隊の記録山	シェルパの二〇世紀
上宅	崎県山丘	部业	西	高本	野口下
目 松	協協	光	<i>I</i> D	雅	勝二是
晃 修 ·········· 95 87	岳協会 隆 77	則 :: 59	保 … 53	史 ::: ::: 45 38	彦郎雄  28 20 7

ムキー場計画 鳥海山のスキー 鳥海山のスキー	会務報告 (一ヵ *	追 悼 氏 (川 大澤伊	学杉山岳帝の名は「本のま」(小泉 知らぬ かんりゅう (田村の) アルブアルブ
スキー場計画から中止までの自然保護活動	会務報告(一九九六年六月~一九九七年五月)	井 洋)、会報『山』訃報・追悼文一覧 田成男)、林田正幹氏(松田雄一)、田村眞知子氏(川喜田二郎)、山崎彰人氏(藤田産三)、春田俊郎氏(中村純二)、泉 亮氏(阿部 淳)、徳島和男氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	本のある山旅』(斉藤善久)、『日本アルプス―見立ての文化史』(岡澤祐吉)、『見知らぬオトカム・辻まことの肖像』・『山からの言葉』(大谷一良)、『冬のデナリ』 知らぬオトカム・辻まことの肖像』・『山からの言葉』(大谷一良)、『冬のデナリ』 (小泉 弘)、『山』(大森久雄)、会報『山』図書紹介一覧 (小泉 弘)、『山』(大森久雄)、会報『山』図書紹介一覧 (小泉 弘)、『山』(大森久雄)、会報『山』図書紹介一覧 (

写真	英文梗概····································	イヌワシ生態調査班の活動	鳥海山南麓イヌワシ調査報告書澤
		藤	井
		淳	政
	A21	志  A64	信 :: A54

海外登山の記録……………………………………………………………………………………………48~49 

追

表紙挿絵・本文中カット 渋谷正己



# プロジェクトとしての登山・たのしみの山歩き

木下是雄

ぶたのしみのための山歩きでも、多少の計画性は必要だ。しかし、この二つは別ものとして話を進めることに大きな たのしみの とするのは一つのプロジェクトだ。「何人かの隊を組織し、 とで触れるが、一言でいえば「計画を立てて試みる仕事」である。ある頂に、ある時期に、ある登路を選んで登ろう みのための山歩き」あるいは短く「山歩き」と呼ぶことにする。プロジェクトということばが何を意味するか 最近における本会の典型的なプロジェクトであったナムチャバルワ登山でも、 クトとしての登山」あるいは短く「登山」と呼び、山中で自分を抱き包むものを享受しようとする山登りを「たの き方を享受するという受動的な側面とがあると思う。本稿では、 私は山登りという行為には計画を立て、それを遂行するという能動的な側面と、 ひとりの山行でもプロジェクトの性格が強い場合は少なくない。 ロジェクトとしての登山、 瞬間がちりばめられていたに違いない。 すなわち「登山」と、たのしみのための「山歩き」との間 一方、 年配の登山者がこどもをつれて日だまりの 相当の資材を準備して大きな山へ」という場合はもちろ 計画を立てて遂行するタイプの山登りを 参加者ひとりひとりにとっては珠 山中の風物やその中での自分の生 に線を引くことは難 カヤトの プ にはあ ロジ 山 に遊 玉の

異論はあるまい。

対比しながら洗い出してみる。 本稿ではまず、「登山」のいくつかの特質を、これといくらか似た性格のプロジェクトである実験科学の研究計画と

に鞍替えする、その過程だ。加齢とともに「登山」がどんな具合に難しくなるか、私自身はその困難とどんなつき合 い方をしてきたか 次に取り上げてみたいのは多くの人が、年をとるとプロジェクトとしての「登山」からたのしみのための ――を述べてみたい。

しかし、これらの議論に入るための地ならしとして、 まず私のキャリアに簡単に触れておこう。

#### 三つの流れ

山岳」のこの号が会員諸氏のお手許に届くとき、私は八十歳になっている。

立っている。 た。これらの書名が語るとおり、私のキャリアは「物理」と「山」と「言語技術教育 て、三巻の選集を出版してくれたが、その巻名は 本をつくってくれた。また一昨年、晶文社の津野海太郎氏が「あなたの書いたものを縦組みで読みたい」と言いだし 私が七十歳になったとき、若い人たちが私の書いた雑文を集めて『物理・山・ことば』 『物理の樹』、『山 ひと スキー』、『日本人の言語環境を考える』だっ (後出)」の三つの流れで成り (新樹

の会 な山登りは続けていたが こんどは山登りではなく物理を」と思い定めて、あえて東大スキー山岳部 一山」の流れは、私が中学生で、「物理」の流れはまだ地面に見え隠れする源流に過ぎなかったときに淙々と音を立 (TUSAC・OBの会) (旧制) に入って旅行部に身を置いた三年間は、 Щ の一員になったのは、 の流れは、 主流と並んではいても、 たまたま卒業前年の秋の遭難救援に参加したのを機縁としてス これが私の心を領する主流であった。大学では私は、 いちだん格が下の副流であった。 (TUSAC) に近寄らなかった。 後に私が東大山

た。

がわき道にそれた。本道に戻ろう。七十歳のとき私は、自分の仕事を物理

から言語技術教育にす

っぱ

り切

「物理」という私の活動の主流が「言語技術教育」という新しい流れに替わったのである。

キー山岳部に捲きこまれた結果である。

縁遠く、大学行政に忙殺されてい である。第二次大戦中は物理との間を割かれて三年半を海軍で過ごした。 大学を卒業してから七十歳までのキャリアで私が「これが自分の活動の主流」と意識していたのは、 副流として「物理」 の流れに併走していた「山」 た。 しかし、どちらの時期にも私の心の拠りどころは物理であっ の流れも、 全期間を通じて絶えることはなかった。 学習院大学にいた最後のころも物理 貫して物理 まっ

たく山に足を踏み入れなか

ったのは、

H

本の敗色が歴然としてきた一九四三年だけである。

たことである。 ていた。そのうち 0 しまった。一九五六年一月の鹿島槍天狗尾根の学習院の遭難のあと始末のために私がちょっと東京をあけた隙にきまっ 「南極隊に派遣されたときだ。 準備で設営面の推進力になったのは東大山の会であった。私も、 時期、 私の生活の中で「山」 「来年の本観測に備えて誰かを米国隊へ」という話が起こり、 日本の第 の流れが主流になったかに見えたこともある。一九五六・五七年に学術会議から米 南極観測隊が出かけたのは五六年十一月だが、このいわゆる「予備観測 自身南極に行く気はなかったが、応分の協力をし いつの間にか私が行くことになって

山登り の研究に大いに役立った。そればかりでなく、このときに生まれた海外の多くの友人とのネットワークが、 理の 私は南極観測船 面でも山やスキーの面でも、 ではなく極地 宗谷」よりも一 行 のプロジェクトに没入していたわけだが、 欧米における私の活動を支えてくれた。 足先に発ち、 翌年四月に帰国した。この間、 結果的にはこれは 私はい わば物理 「頭の洗濯」として物理 から強制隔離され

考えを主張するための心得」と考えておいて頂きたい。日本人はこういうことが苦手で、事故報告を聞いてもどれだけが (ランゲージ・アーツ、コミュニケーション・スキル) というのは 応 「言語によって情報を伝達 た 自 事 分 実 0

でどれだけが推測なのかわからないことが多い。また会議でも、 筋の通った討論によって合理的な結論に達することができず

に「たして二で割」ったりしがちである。

という問合せがきて私を戸惑わせている。 この方向転換の結果、このところおよそ十年は、毎年末に、 物理関係からではなく国語研究所から「今年の業績は?」

上記のように私を動かす主流は入れ替わったが、 副流の Ш の流れのほうは、とし相応の衰退を別にすれ ば 健 在

「登山」と研究プロジェクト』という奇妙な題の次章は、 いま述べたような私のキャリアを背景としたものであ

る

だ。

「登山」と研究プロジェクト

# 「登山」と研究プロジェクト

似点、 ここでいう「登山」、すなわちプロジェクトとしての山登りと、実験科学者の研究活動には似た点がある。 相違点を洗っていくと、「登山」の特徴が浮かび上がってくる。 その類

プロジェクトの語義を調べてみると、

①心にあたためている企て、もくろみ、計画。②大きな試み、大仕事。とくに相当の資金・人員・装備などの必要

なもの。③ある問題についての研究計画。4……

ぴったりと言っていいだろう。そして③は、プロジェクトという同じことばが学問の世界における研究計画にも慣用 というようなことだ。 (1)は個人的なスケールの登山の計画にぴったり、(2)は大がかりなエクスペディションの 計

なかで、六九年に、人類がはじめて月面に足跡を印したのである。 クトというのをご記憶かどうか。一九六一年から七二年にわたるこのNASA 子爆弾の研究・ されることを示している。 開 発計 画で、このプロジェクトの成功が広島 (3の例として有名なのはマンハッタン・プロジェクト(マンハッタン計画) · 長崎 の原爆投下につながった。 (米国航空宇宙局) また、 の月面探査計 アポ と呼ばれ た原 3 0 I.

研究 山」というプロジ まではわからない要素があって、 必要ならば新しい技術の 大きな「登山」 かし、「登山」と研究プロジェクトにははっきり違う点もある。この二つの似た点、違う点を対比しながら、 (試 登 がおこなわれているかの調査、 I の計画は、 クトの特質を考えてみよう。 (装備の) 実験科学の研究計画と似た点が多い。 多くの場合にことの成否がそれにかかっているという点である。 開発、 資金の手当て、……。いちばん似ているのは、 研究班の 前記のとおり私は物理の出なので、 (登山隊の) メンバーの選定、 目標ないしその近傍について今までにどんな探査 研究の話はそちらに偏ることを 必要資材の調査と入手の 両方とも、 取りついてみる 登

## 未知・未見の領域

お

許し願いたい。

この意味で、 ことのない景色を眺めたい、という素朴なねがいから始まった 山 立りは、 まだ誰 登山と探検とは本来同じ動機によるものだと思う。 も行ったことのない 頂 未知の、 処女峰の頂 と私は信じる に行ってみたい、 (信仰登山のことにはいま触れない)。 そこに立 って誰もまだ見た

羨ましいとしか言いようのない時代であった。 ル の探検時代に登山 プスの探検時代についても、 ったん近代的な登山が始まると、 者を駆り立てたものは処女峰が放つ上記のような引力だったにちがい 「処女峰」を「処女域」で置きかえれば同じことが言えよう。どちらも、 競争心が介入するので話は単純でなくなるけれども、一 な 11 九世紀前半 約 111 紀遅 私たちには れた日 のアル プス 本ア

ろ、自分は見たことのない場所を意味する。既登の岩壁でも未見であれば、それなりの魅力はあろう。 あるいは登路を試みることだけだ。この節の見出しに「未知」とならべて「未見の」領域と書いたのはそういうとこ これらの地域でいま私たちが望みうるのは、すでに行った人、登った人はあるけれども自分は行ったことのない山、 未知の頂の放つ引力が人を誘うことは学問の世界でも同様で、誰も手をつけていない問題、誰も成果を挙げていな

#### 初登

い研究は心ある研究者を魅惑する。

と書いた。この考えの自然な延長として、私は「登山」すなわちプロジェクトとしての登山は、 本来のすがたと思う。 の初めに、 山登りは「まだ誰も行ったことのない頂に行ってみたい」という素朴なねがいから始まったと思う 未登峰をめざすのが

い」という要素が混入しているからだと思う。 ることは否定できない。私の考えではこれは、処女峰の魅力には未踏、したがって未知という以外に、「到達が難し つか残っている。また、六○○○、五○○○≦級はたくさん残っているが、低くなるにつれてその頂が放つ引 残念ながらこういう登山は、一つの山については一回しかできない。幸い地球上には未登の七○○○☆峰 到達が難しい」ことも処女峰の魅力の要素に数えられると言った。難しいからこそやってみたい、やりとげたい というのはスポーツの精神である。このことについては後にヴァリエーション・ルートの項で触れる。 山が低くなれば平均的に見て登頂はらくになり、 山の魅 力が薄らぐ。

上の未登の高峰の数は限られている。一つの可能性は地球の外に飛び出すことか? 未踏の高峰の初登を志すのが 登山 の本領だとすると、「登山」 の前途は洋々たるものとは言えないようだ。 地

アポロ・プロジェクトで人はすでに月面に立っている。今一九九七年七月には、

昨年十二月に

に書いたように、

12

星 地 器で地 ていた高さ三二だり、 球 怕 に斜 から打ち上 面 に 85 (『タイム』誌七月二十一日号 にいい 積もっ 0 げられた宇宙船マーズパスファインダー か た赤い砂塵を分析してい 長さ六四だの探査機 b 数回 はずんでから、 (ロボット車) る。 岩石の散乱した砂漠をころがって止まった。そしてエアバッ 探査機の、 がノロノロと這い出して四周のカラー写真を撮り、 (Marspathfinder) 日光が当たっている部分は二〇度、 が、スピードを三五キロ 影の部分はマイナス八 に落として火 グに包まれ X線分光

だ!! つめる方針をとった」という今回は格段に安いが、 これを読んでいつかは自分も行ってみたいと思う会員もあるかと思うが、 二十一年前にNASAが火星に宇宙船ヴァイキングを送ったときの予算三〇億ドルに比べ 山登りにくらべればはるかに雲の上の話だ。 このプロジェクトの れ 予算は ば 極 端 Ŧi. 億ドル に 切 n

六度……。

して惑星への遠征を夢見るのは無理筋のように見える。 登山」と研究プロジェクトを比べるうちに、初登の話からつい地球の外に飛び出してしまっ たが、 登 山 0 延

長

は、 登峰 がどこにあるのか、さんざん探し歩いた例もある)。 エルゾーグ隊のアンナプルナ初登 登ってしまうまでそれがどこにあり、 に登ることに相当する。 然科学の世界で、 ある新しい事実を発見し、 違うのは、 山登りの場合には登るべき頂が最初からはっ どんな頂上なのかわからない場合が多いことである(もっとも山登りでも、 あるい の世 界最初の は新しい理論を打ち立てることは、 登頂、 一九五〇年 きりしているの のときのように、 山登り の世 に 研究 界で一 登るべき山 つの 場合に

0 の結果、 発見なり 未登峰 見つ は高いほど魅力があると言った。 理論なりのファンダメンタリテ か った事実や提案された理論がその分野の学問にどれだけ一般的に貢献するかということだと思う。 科学の世界で 1 1 (基本性) 「山の高さ」 と言っ てもい に対応するのは何だろうか。 11 か もし れ な 11 私 は そ れ は 研

ili

登

りに関しては私は高い未登峰の減少をなげいたが、

学問

の世界ではその心配はない。

0

0

発見が次の発見を

誘発するので、新しい未登峰が次から次に出現するからである。

# ファリエーション・ルー

えるかだけに集中するのである。したがって彼らは一番らくなルートで速く頂上に登ろうとする。 にされないのだ。 少なくなった現在、登山家が全力を挙げて立ち向かうのは主としてヴァリエーション・ルートの開拓・登攀であ クト・ルート)とか、 ルート、 (未踏のルート) によって研究に成功したとしても、 科学の研究者は、一度登った頂に達する別のルートをひらくことには熱心でない。 Ш 登りの世界では、 確実に登れそうなルートによるのが常例だが、ヴァリエーション・ルートとしてはしばしば直登路 つまり科学者の関心はルートの取り方ではなくて、どんな頂上に到達したか、そこに立てば何が 人を威嚇する厳しさをもったルート(岩壁、 頂が一 度登られたあと、ヴァリエーション・ルートの開拓がはじまる。 得られた結果が既報のものと変わらなければ、 氷稜、……)とかが選ばれる。未登の高峰 科学の世界では、 初登は比較的やさしい その研究は問題 新奇な方 グイレ が残り 法

ショ 方向にさらに徹底 登頂を必須の条件としない登山は、この二つの意味を兼ねそなえている。私はそれをスポーツ登山と呼ぶ。 のはスポーツである。スポーツということばは 登山家のほうは、 というのが第 ン・ル トの 開拓 すればフリー・クライミング、氷瀑の登攀、 義だが、そのほかに しばしば好んで難しいルートに挑戦する。難しいことを難しいが故に価値ありとしてそれ ・登攀はその典型で、 〔仕事を離れたあそび〕という語義がある。難しさを求める登山 主峰への登頂 〔熟練や敢為の精神を要する肉体的活動。 (本来の仕事?)を省いてしまうことがある。 ……となる。 しばしば競争のかたちを取 スポ ヴァリエ 必ずしも

に駆り立てる誘因としてこれに Ш 登りは 〈未知 の領域 へのあこがれ〉 〈あそびの精神 から始まったというのが私の考えだが、 困難への志向〉 が加わったわけだ。 近代登山がはじまって以来、 人を山

#### ームワーク

る。 にテントを出発し、それぞれのペースで登って何時間かの差で登頂するというような例が稀でない。 可能性を追求するとそうならざるをえないのかと思うが、 私たちの年代の者は、 登山におけるチームワークを強調されて育った。 私たちの時代の山登りではまず考えられなかった行動 今日の高所登山では、チームの二人が別々 極限まで登頂の

たせいだろうが、 これとは逆に、 ことは極地法登山の報告を読む場合と似てい 彼らの出す報告、 実験科学の前線では個人がチームに埋 何人もの名前を連ねた論文から誰がどんな貢献をしたのかを読みとることは難し る 没されかけている。装置が大規模になり、 実験が複雑 に

所登山におけるチームワークの問題は、 西欧的個人主義についての十分な理解を前提として、 一度、 Œ. 面から取

り上げるべきものではない か

## 登山」からたのしみの 「山歩き」へ

## 肉体的能力の低下

らだが利かなくなっていくのか。私の経験を記してみよう。 で自分を抱き包むものをたのしむ ながら洗い出してきた。ところで、「登山」に熱中していた人々の多くは、 ここまでは、「登山」すなわちプロジェクトとしての山登りのいろいろな面を、 「山歩き」 一に鞍替えする。 主として肉体的能力の低下のためだ。 年をとると受け身の山 実験科学の研 究プロ 登 どんな風に : n クトと比 Ш 0 中

か

ミディの頂上に上がり、氷河を途中まで下りて南西稜に取りついた。もちろんやさしい一般ルートだが、私はマレシャ 十三歳)、シャモニーの近くレズーシュにある友人マレシャルの山荘に滞在中だった。ロープウェーでエギーユ・デュ・ ルをリードして快調に登った。当時は身体はしなやかに動き、不安など感じなかった。 たのしんでいるが、岩登りはあきらめてから二十年以上になる。岩登りを本当にたのしんだ最後は一九七一年で うと思っていた。ところが事実は逆で、スキーは、リフトという文明の利器のおかげで今でも年間合計半月ぐらいは スキーのほうが岩登りより素早い動作が必要なように見えるので、私は岩登りより先にスキーができなくなるだろ Ŧi.

相手をして苦労したり、悪い条件は重なっていたが、このバランスの低下ぶりはこたえた。考えてみるとその前から を持ち上げて、そのステップに乗ろうとするとぐらつく。下りはもっと不安だ。学部長をやらされたり、学生運動の 山道の下りで飛ばす自信がなくなっていた。 ところがその何年かあと、どこかの山で何気なく岩にとりついたらいけなかった。膝ぐらいの高さのステップに足

クが狂っても致命的な結果にはならないから、瞬発力の低下がそれほどこたえないのだ。 る。スキーヤーももちろんフィードバックの連続によってバランスを保っているのだが、こちらは少々フィードバッ 動作は、 とわかった。前にスキーのほうが素早い動作が必要と考えていたのは誤りで、一見ゆっくりのように見える岩登りの いろいろ試みるうちに、これらはすべて、バランスが崩れかけたときに姿勢をパッと引き戻す瞬発力が衰えたせ 実は身体がちょっと傾きかけたときに瞬間的に引き戻す小さな動き(フィードバック)の連続だったのであ 11

かけることにしている。 いない)。 専門家に訊くと、 仕方がないから私は、七十歳前後からは、主として下りに備えて、山には伸び縮みのできる杖を持って出 持久力はトレーニングでもたせられるが瞬発力のほうはダメだという(その理由を私は納得して

やかな動きができなくなることだが、これは努力によってかなり進行を遅らせることができる。いわゆる体力、 **瞬発力低下の話が長くなった。このほかに「登山」から「山歩き」への後退を迫るものは、** 身体が硬くなり、

年

齢だ。

に見積もらないわけにいかなくなった。 の低下はあまりにアタリマエだから触れ ない。 私の場合は、 最近は山登りの所要時間を標準時間 の数割から十

# 登山」から「山歩き」への移行過程

を歩きまわって七〇〇〇景、八〇〇〇景の山々の姿にじかに接することが長年の望みであった。 私も若いときにはヒマラヤ登山を夢見たことがある。 体力的にそれは無理 な年齢に達してからも、 ヒマラヤの Ш

難しかった。ようやく宿望を達したのは退職の翌年、一九八六年、六十九歳のときだ。この年私はサンクト・アント ンで心ゆくまでスキーをたのしみ、夏は利尻・礼文に遊び、十二月にははじめてネパールに飛んだ。 しかし、 日本の生活は忙しい。 比較的拘束の少ない大学勤めの私でさえ、現役の間はそのチャンスをつくることが

ンスマイスター夫妻が参加し、 然な移行過程になった)。 できた数人ないし十数人でチームを組んで出かけた。 より若い学習院山岳部のOB、OGなどの二十余人のグループがあり、その中から、その時々に都合をつけることの それからの私のトレッキング歴は次のとおり(後述のように、私にとってはこれが 同行のメンバーは時によって違うが、私とあまりとしの違わない昔からの山仲間 また(1)以外には私の家内が加わっている。アラビア数字で示したのはその時の私の満 次の項の(1)には私と同じ専門の親友、 「登山」から「山 リヒテンシュタインのツィ 歩き」へ これ の自

(1) ポカラからアンナプルナ内院へ 69

(2) ポカラからバグルンパニ経由マルシャンディーの谷へ 70

(ネパール 一九八八-O三)

(ネパール

一九八六一一二二

(3) ②に続いてネパールのコダリからチベットのザンム・

(ネパール・チベット 一九八八・○三)

(4)ジョムソンからポカラへの途上、エルゾーグのアンナプルナ

(5)初登ルートの途中四三〇〇以まで 72

パロからチョモラーリのBC跡の上、四二〇〇以まで 73

(ブータン 九九一・〇四

(ネパール

九八九・一一)

フンザ カリマバード、グルミットの周辺 76

ランシサカルカまで

74

(7)(6)

ランタン山群

パキスタン ネパール 九九四・〇四) 九九二・一一

(8)パタゴニア

パイネ国立公園、 氷河国立公園、 フエゴ島 78

(チリ・アルゼンチン 九九六・〇二)

まり苦労しないですむものになってきた。これはこの期間の、 シェルパを連れ大勢のポーターをつけて(⑤ではガイドと馬)、昔風のぜいたくな歩き方をした。 ムでも平均五十五歳だった。いわば高齢者のチームだから、テント泊まりをつづけた⑴、 母 意図したわけではないが、 (集団のグループが年々としをとって行くので8ではチームの平均年齢六十七歳。 いちばん若かった②、3のチー (1)~(8)とトレッキングを続けるうちに、目的地の選び方、旅の仕方が自然に変わってあ 海外トレッキング以外の私の山行全般についても言え (2) (4) (5) (6)の旅では、

歩いたぐらいが関の山で、 忙しすぎたということもあったが、 てある事情で中 で覗いたパタゴニアへの郷愁旅行、 ではカラコラム・ハイウェイ 参加者の高齢化にともなって私たちのグループのトレッキングの計画が、だんだんらくなものになってきたの (4)までは、私は余裕と自信のあるリーダーであった。(5)で、体力的な余裕が減ったのを感じた。 止 したムスターグ・アタやコングルを眺めるシルク・ロードの旅も車主体の計画だった。 大体が車の旅であった。 (KKH) 広い地域だから主として車である。 体力の限界を感じはじめた。下痢をしたりムーン・フェイスになったりした。 の道崩れが多くて難行し、天気にもめぐまれず、ブアルタール氷河に沿って (8)は私にとっては四十年前に米国隊と南極ウェデル海に行く途中 表にはないが、今年(一九九七) (6)では、 計 画してい 出発前に

に歩

調を合わせて、それ以外の私自身の山登りも「山中で自分を抱き包むものを享受しようとする、たのしみのための山

歩き」に変わりつつある。

"三つの流れ"でごらん頂いたように、私が「山」を自分の活動の主流としていた時期はごく短い。

自分には許されないことだという考えがあって、それを貫き通してきたように思う。この、いわば律儀な考えは、 昔から私には、「山」第一の生活に飛びこんではいけない、それは登山家としての天分にさほどめぐまれてい な 私 11

などの年輩の多くの会員に多少とも共通のものではないか。

七十歳前後から私が毎年のように海外にトレッキングに出かけて山をたのしんだのは、この長年の律儀さへの反動

だったかもしれない。

# 登山史上の人・各務良幸

田口二郎(談

# シャイな人、各務良幸さん

先日織内君から各務良幸さんが亡くなったということを電話で聞いた時に、良幸さんについて話をできるのは君だ

けだから、何か話を残しておいてくれということだった。

借りて持ち歩いているうちに壊してしまった。丸善で装丁を直してもらい、それにウイスキーを一本付けて各務さん 務さんと麻生武治さんの共著『山岳大観』(昭和六年、木星書院刊)だった。もう装丁がガタガタになった古い本で、 に返したのだが、彼はシャイというか、物静かであまり仰々しくお礼をいうような人ではなかった。後で述べるよう いた。それが各務良幸さんその人だった。互いに話をするようになった時、一冊の本を僕に渡してくれた。それは各 交詢社に入れてもらったと記憶している。奥の玉突きの所に必ず織内君がいて、僕の知らない人を相手に玉を突いて して銀座の交詢社を利用していた。交詢社へ行くと、常連として島田巽さんや織内君がいた。僕は島田さんの紹介で 良幸さんについて思い出すのは、僕がまだ東京で働いていた頃だから随分前になるが、その頃、僕は昼寝の場所と

ターホルン北壁の写真も入っている。 な各務さんの山登りの記録や写真は戦災で焼失してしまったというから、『山岳大観』 は貴重な写真集であ マッ

幸についてである。 会っていたわけではない。 たのは各務さんの時代よりも大分後になる。各務さんは一九二○年代、僕は三○年代であり、アルプスで各務さんに 各務さんは一九〇四 (明治三十七) 年生まれで、 従ってこれから述べることは、登山家としての各務良幸、 僕は一三年だから十年ほど年上の人になる。 あるいは登山史における各務良 僕がアルプス へ行

# 陸上から岩登り、スキーへ

皆日本に帰ってきた。だから恐らく、 耳に入るようになったのかを考えてみると、恐らくそれは松方三郎さんから入ってきたのだと思う。松方さんはちょ 松方さんが教えてくれたのだと思う。 アルプスを登っていたが、大正から昭和へと時代が変わるとともにヨーロッパ・アルプスでぶらぶらしていた連中は うどその頃ヨーロッパから帰ってきたところだった。松方さんは槙さんと同じように秩父宮のお伴をしてヨーロッパ 僕が各務良幸という名前を知ったのは大学生の頃だったと思う。昭和十年頃だが、なぜ各務良幸という名前が僕の ヨーロッパに残って面白い山登りをやっている奴がいるぞというようなことを

山登りをしているのも当然である。 さんといえば各務一家の御曹司であろうとは推測できた。そうであれば、オックスフォードかケンブリッジへ行って 我々も大学生ではあったが、就職を控えているから、各務鎌吉とか平生釟三郎といった名前は聞こえており、 しかし難しい山登りをしているものだと不思議に思ったものである。

ッパにいたということを言いたいからである。 各務さんのことが松方さんを通じて僕の耳に入ってきたことに触れたのは、松方さんは各務さんと同じ時代にヨー

松方さんと各務さんとでは経歴は随分違っていて、各務さんは暁星に行っていた。暁星を出た人で山をやった人は

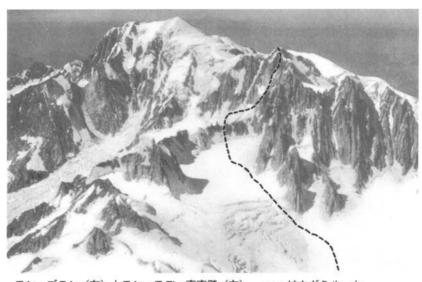
入る。 きな役割を果たしたと思う。暁星を出た良幸さんはイギリスへ行ってケンブリッジ大学のプライベート・スクールに だったようだ。中肉中背の人だったが、後年のことを考えると中学時代に運動家であったことがその基礎づくりに大 はフランスのカトリックの学校だったから、しゃれた校風だった。各務さんは暁星時代から陸上をやり非常な運 では初見一雄などがいる。 案外多く、思いつくままにいえば、舟田三郎、その相棒として麻生武治、おとなしい方では藤島敏男、 その時の先生から岩登りの手ほどきを受けてクライミングに目を開いたというところが面白い。 東京の山手の大金持ちの子どもは、学習院へ行かなかったら暁星に行った。 暁星というの やんちゃ 陸上からロッ 動家 な方

インスロップ・ヤングで、『マウンテン・クラフト』を書いたばかりのヤングがいたわけだから、 ないところに入ったことになる。というのは、ケンブリッジの山岳部の大御所はイギリス登山界の大御所でもあるウ そしてケンブリッジに入ってスキー部に入るのだが、その時にスキー部ではなく、 に入っていたら、その後の各務さんの足跡はまた違ったものになっただろう。 山岳部に入っていたらとんでも もし各務さんが山

ク・クライミングに入ったわけである。

## スマイスが触媒に

後で触れる赤坂のスイスアルプス博物館にはミューレンでの各務さんの写真が展示されている。 ミューレンとかヴェンゲンへ行く。そこを抑えていたのがアーノルド・ランだ。当時の一九二〇年代にハンネス・シュ ナイダーがオーストリアのアールベルクで新しいスキーを始めた。それに対抗してランは学生を集めてスキ 対抗競技に出場している。 気にはやったスピード狂が集まってきたといえる。スピード狂といえば、良幸さんはオートバ スキー部に入った各務さんは、 そこにケンブリッジとかオックスフォードの若いスキーヤーが集まってきて競技スキーを始めた。 イギリスではスキーをする所はないからスイスへ行ってやる。グリンデルワルトの 運動神経が抜群だったからたちまち上達して、オックスフォード、ケンブリッジの ストックを支えにし イにも乗ってい



モン・ブラン(左)とモン・モディ東南壁(右)

----はカガミルート

#### (写真は『山岳大観』より転載)

幸さんが写っている。

てスキーの

先端を跳ね上げ、

得意然とした若き日の

有名になったのは、 トでキャンプ6まで登った時のもので、八五〇〇景まで登 そのなかに『キャンプ6』というのがある。 代でスマイスの本を持っていない人はいないのではないか。 そして少し年をとってからアルパイン・クラブへ入る。 スが活躍したのは一九二〇年代後半である。 ウンと二人で初登攀したことによる。 きな壁であるレッド・センチネルに名登山家ジョン・ブラ シャモニへ行ってモン・ブランの側峰のブレンヴァ側の大 征に何回も参加して、 プル人間のような男である。 かしスマイスは高校を出たあと空軍に入る。エベレスト遠 スの登山は、 そんな連中のなかで知り合ったのがフランク・ た。 クスフォードかケンブリッジのどちらかを出ている。 スマイスは大学は出ていないが才能のあるマルチ 非常な登り手だった。そのスマイスがイギリスで エベレストに行ったということよりも、 エベレストに勢力を注いでいたが、 カンチェンジュンガの国際隊に参加し 何十冊も本を書いており、 イギリスの登山家というのは、 というのは、 彼がエベレス その頃のイギ 我々の スマ アルプ スマイ

が各務さんにとって大きな機縁になっていると思う。でなければ各務さんが次から次とあんな大きな山登りをやると いうことにはならなかっただろう。 長い氷用のハーケンを作って、 人は万丈の気を吐いたわけである。そのフランク・スマイスと友人になったのがわが各務良幸さんであり、そのこと 人とイタリア人によって登られる前夜の時期である。 スでは意気が上がらなかった。 アルプス中の目ぼしい氷の壁を登りまくっていた。 『ドイツの星』といわれたヴェルツェンバッハという氷登りの神様みたい そのような難しい所をスマイスが登ったということでイギリス 後にアルプスの三大北壁がドイツ 1)

各務さんにとってはスマイスが難しい登山への触媒の役割を果たしたと思う。 Ш 登りには触媒のようなものが必要である。 槙さんがアイガ 東山稜を登ろうとした時にもそういう人物が

# 登山史に残るカガミルート

トのガイド、 ティによって成されたということからしてもその難しさが推し測られる。各務さんの記録は『アルパイン・ジャーナ なってスマイスに帰国命令がきた。そのためスマイスとの計画は中止になった。諦めきれない各務さんはツェルマッ ン・モディに拓いたカガミルートであろう。各務さんの回想(『岩と雪』第十六号、「モンモディ東南壁の追 アル 当時ロンドン・タイムスの記者であったスマイスと二人で、ガイドレスで登る計画を立てていたが、 ゴッドフリー・ペレンを電報で呼び出してパーティーを組んだ。このルートの第一 プスにおける各務さんの山登りであるが、何といっても最初に挙げるべきはモン・ブラン 一登は三十年後にボナッ Ш 憶 直前に に

間 から"フライング・ジャップ』と呼ばれるようになったということだ。さらには、マッターホルンの北壁である。一 がかかる。 次にはダン・デランからマッターホルンまでの大縦走がある。 十八時間とい う最短記録をつくり、 フライング・ダッチと呼ばれていたオランダ人の記録を破ったこと あれは大縦走で、ギザギザな稜線が続 いて非常に時

ル』第四十三年誌上に掲載されている。

H

ナーにして登り、四分の三を登って、ヘルンリ稜を登る登山者による落石が多いため登頂は断念した。スマイスと組 九二八年のことで、一九三一年にシュミット兄弟によって登られる三年も前のことである。この時もペレンをパート

んで冬のアイガーにも挑んでいる。

シュミット兄弟以前にマッターホルン北壁に手をつけるというような着想はスマイスが触媒になっているのではない 僕は、各務さんがこうした大きい高度な山登りをやったのは、スマイスによって刺激されたことによるとみている。 というのが僕の想像である。

田に行き、 から、これらの登攀については日本ではほとんど知られていない。 クに出たりして日本よりも向こうで知られている。という意味ではやはりこの人もエトランジェ いうことが頭にあった人である。従って、槙さん、松方さんをコインの表側としたならば、裏側が各務さんだといえる。 た人だ。二人がヨーロッパ・アルプスを登っていた時も日本の登山界に貢献したい、日本の登山界を啓蒙したいと 頭の中にはなかったと思う。自分の山登りを日本に伝えることもしなかったし、ジャーナリズムも注目しなかった 一本を向いていなかったという点では二人に共通した点だが、徹底したエトランジェはむしろ良幸さんだったろう。 僕の登山観からいえば、 ついでにいえば、欧州仕込みで各務さんに一番似ているのが麻生武治さんで、武さんは暁星を出て農大を経て早稲 時の彼はまだ若かったし、スキーに狂っていたし、スマイスらと楽しんで登っていたから、 舟田三郎さんなどと冬の槍に登ったが、日本をとび出してドイツのベルリンの体育学校へ入り、オリンピッ 当時の日本のチャンピオンは槙さんと松方さんだ。この人たちは日本の登山観と直結して 日本の山 (異邦人) といえる。

#### 本 限登山の先駆け

今から七~八年前になるが、 登山 の足跡であるが、 赤坂にスイス政府観光局のスイスアルプス博物館が開かれるに当たって、 日本の登山史から見て各務さんから得られる素材があるのでは スイスに関

とビクビクしていたら、 のある日 本人が招かれたことがある。 閉会に当たり誰かが代表して主催者に挨拶をしなければならない。 年配の各務さんが指名を受けた。 僕も女房とともに出席した。出席者の一人一人にスイス山 各務さんは遠慮深く訥々と話をした。 僕にお鉢が回ってきたら困るな その時僕は各務さん 岳会が た 1

を見ながら次のことを考えていた。

ヤ ある。 やヨーロッパでは一つの概念として成立した。従って日本人の若手が蝟集して腕を磨いた登山は「極限登山」という アルプスの三大北壁を登ることによって日本人の登山が初めて大きく人の目に映った。 に難しい山登りで腕を磨いていた。彼らの山登りは第二次大戦以前の松方さんらの時代とは違った山登りであっ アルプスで鍛えられるのを見て、『アルプスの秀峰』という本に日本人のシャモニ時代を活写している。 かには小西政継、 あった。昭和三十年代の後半頃、日本が高度成長期に入る頃に日本の若者たちが揃ってシャモニへ出かけた。その た高田光政をはじめ、今井通子、夫婦で冬のグランド・ジョラスを登って後に夫を亡くした鴫秋子さんといった人で エクストリーム・アルピニズム」とか「極限登山」とか呼ばれた。この用語は日本には伝わらなかったが、スイス その時に招待されていたのは、 の中から小西、 の時代を切り拓いたとみていい。 戦後の日本の登山史を考えると、マナスルも一つの時代であったが、その次にシャモニ時代ともいえるものが 植村直巳、 植村に応援を頼んだ。 加藤滝男・保男、 日本人で初めてマッターホルン北壁を登った芳野満彦、 後に日本山岳会がエベレスト南西壁を登るに際して、そうしたいわゆる。カベ 長谷川恒男、 鴫満則・秋子夫妻などがいた。近藤等が、 それまでの山登りと比べて アイガ ー北壁を初め 日本の若手が 彼らは て登っ

ズムの祖であると見るならば、 さきに赤坂のスイスアルプス博物館のオープンの会の話をしたが、そこで各務さんが挨拶をされているのを見なが 僕は、 各務良幸という人はシャイな人だが、 各務良幸は日本の もし日本の登山史からいえば、槙さんや松方さんが日本のアルピニ 極限登山」 の祖であると呼んでもよいのではないかと思った。

### 各務良幸氏略年譜

一九○四(明治三十七)年七月十日 東京で生まれる。暁星小

カ二一(大正十)年 渡英。ケンブリッジ大学に入学するた

九二六(大正十五)年 モンブラン登頂(パートナーはワシュ

開眼。ケンブリッジ大学ではスキー部に籍をおく

部を抜け、壁の四分の三まで達する。当時としてはルマットのガイド、ゴッドフリー・ペレン)。核心几二八(昭和三)年(マッターホルン北壁(パートナーはツェ

驚異的登攀

カ(昭和四)年一月 アイガー冬期登攀(パートナーは登攀。カガミルートと名付けられる(パートナーは登攀。カガミルートと名付けられる(パートナーは

りまとめは池戸誠二郎会員の協力を得た。

が、千代田区三番町の自宅が戦災で焼け、当時の手間縦走、朝鮮の金剛山水晶峰東面初登攀などがある他にダン・デランからマッターホルンへの最短時

す。日本郵船、小松製作所、宮城蔵王ホテルに勤務九二九年 帰国。帰国後は、わが国のスキー普及に功績を残

帳や写真とも焼失したため日時不明

九九七年八月六日 死去。享年九十三歳

スキー術』(昭和十一年、第一書房)がある。
著書に、麻生武治氏との共著『山岳大観』、『一般九。紹介者加藤泰安・麻生武治。一九七八年復活九。紹介者加藤泰安・麻生武治。一九七八年復活

「編者注」 ①本稿は、各務良幸会員の逝去に際し、追悼欄に収録すべく、田口二郎名誉会員に「アルプスにおける各務良幸」を語ってもらったものであるが、内容的には山岳史の一頁を飾を語ってもらったものであるが、内容的には山岳史の一頁を飾を語ってもらったものであるが、内容的には山岳史の一頁を飾る、日本人によるアルプス登山史であり、登山史上からも貴重のあるので、独立したテーマとして採り上げることにした。田本大田の一名のであるので、独立した。田本の一名のであるが、日本のではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述ではなく談話をお願いした。また、取り会員は高齢なので記述では、日本のは、日本のでは、日本のは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは

②各務良幸氏の次女・太田幸子さんのお話によると、ツェルの各務良幸氏の次女・太田幸子さんのお話によると、ツェルマットにはペレンの娘さんが健在だという。良幸氏の「ペレンマットにはペレンの娘さんが健在だという。良幸氏の「ペレンには小さい子どもがいた」という話をもとに、一九九五年ツェルマットを訪れ、案内所で尋ねると娘さんがいることが判明。七十歳代半ばの彼女は「ミスター・カガミのよく覚えている」と訪問を喜んでくれたという。往年の名ガてよく覚えている」と訪問を喜んでくれたという。往年の名ガイドが娘に語ったであろう思い出話の中で、ミスター・カガミイドが娘に語ったであろう思い出話の中で、ミスター・カガミイドが娘に語ったであると、ツェルのお話によると、ツェルの名称はいう。

27

# シェルパの二〇世紀

ヒマラヤ登山・観光とシェルパ

# 一、「シェルパ」のイメージ

ろで欧米では「シェルパ」は、 いろいろな意味を認めなければいけないのかもしれない。とこ もはや誤りとは言えないように、「シェルパ」という言葉にも ると、「瀬戸物」を陶磁器一般を指す言葉として用いるのが、 違いだ、とは私も何度か書いたことがあるのだが、ここまでく 称であり、ヒマラヤ登山の高所ポーターの意味で用いるのは間 とはネパール北東部の高地に故郷をもつチベット系の民族の名 舞台裏で文書作成などにあたる事務局のことである。 ミット)の準備のために、「シェルパ」が組織された。 九八六年、西ドイツのボンで開かれた先進国首脳会議 例えば「悪路に強い」ヴァン・ シェルパ 会議の (<del>+</del>

パが経済的に豊かになって教育が普及するとともに、

かつての

にも多くの観光客が訪れるようになり、近代化が進み、シェル

方で、シェルパは変った、という人々も少なくない。ネパール

映像などを通じて、大量に再生産され続けている。だがその一 というイメージは、今日では観光業者のパンフレットやテレビ く、常に快活で献身的な、下積みの役割を厭わないシェルパ、 「サーブ」(旦那様)に対して忠実で勇敢な、 の一冊、「タンタン、チベットをゆく」の中でも、シェルパは ウェアの名称として用いられているのだそうだ(注1)。 て描かれている(注2)。そしてタフで信頼に値するだけでな いは、これも欧米や、最近は日本でも人気の高い漫画シリー タイプの自動車や、「信頼性の高い」コンピューターのソフト 理想的な従者とし

鹿

勝

が

シェ

ルパとの区別

は、

生まれによって身分が厳しく規定さ

ば

n

3

用

1)

移住

者は、

しばしばボテ、

登 今日までの、 このようなシ Ш が 接遭遇する以前 に され 確認して 時 エル 間的 ほぼ一 シェ 欧米や日 た二〇 パの に な ル シェ 世紀間 パ自身の おくことにしよう。 は、 イメ 111 本などの近代世 0 それはヒマラヤを舞 ル 紀 が 1 18 初 1) 2 ジが形成されるに至った背景を探 は姿を消 対象となる。 わゆる伝統的 頭 から、 0 過 程での対応に 大衆観 一界に属する人々によっ した、 だが、 な生 というの 光の 台として本格 活 時代 つい 0 シェル 在 ても であ り方を、 を迎えた 15 が近 的 る な

#### I ル 18 0 伝 統 的

ま

もあるの

比較 てきたの 南 チ ル マンズやポカラといっ 1 " 流 的古くから定着していた人々と、 高 I 域 J. 地 1 なり広 ル ルパ 18 は から移住してきた人々とを含んでいる。 がチベ を自 ゥド 六世 中 範 'n 囲に及んでいるが、 部 称 . する人々の分布は、 紀 1 0 J カト た、 のことと考えら 部 近年 マンズ北方、 から大ヒマラヤ主脈を越えて、 ブティア、 域のソル・クンブ地方へと移 の都 市 その せ 部 n てい カンバなどと呼 0 ランタン谷まで、 東部の国境 11 41 ぜ 転入者を別に る 15 ずれの地 これ 5 現 に近 在、 5 111 方でも ネ 0 代 11 18 住 そ 前 新 カ T ル T 1 1 0

> 分布を広げてい 高地 た人々の子孫に加え、 な 住者自身も、 間 るヒンド 後にはインドのダージリン での 11 へ移住 通婚 つまりシェルパ ウ 1 に障害はないし、 状況によってはシェ 教 2 さらにそこから周辺 徒 の社 チベット とは、 その後チベ 会と異なり、 系の人々の多くが 地方などをも含む その子供達は 六世紀 ルパ ットからネパ 割合とゆるや 0 Ш にソル を自称することが珍し 地 の村 もちろんのこと、 . 都 用 1 クンブに定着 かで、 部 ル 市 る自 部 0 みでな ま 中 部

<

移 0 n

0 L

家畜としてはヤク、 だけ確保できるかが、 半に導入され 夏のモンスーンの降水には 耕と牧畜であって、 地に立地する。 る飼料によって制限される。 ているのだが、 般的 ヤギなどを飼育する。 栽培できる主 役畜として利用するほ にはシ そして労働力を組み合わせて、 たジャガイモなどで、 I 飼育できる家畜 要な作物 N ル その ウ の生 18 作物の作付可能な面積を規定する。 0 シ、 両 活を支えていた最 村は標高三千以前 化は、 および か、 それらは乳や、 恵まれるが、 者は不可分の そこで個々 糞が肥料として重要な意味をも 才 の頭数は、 両 オムギ、 畜糞を主とする肥料 者 0 関 0 冷涼で土 11 かに 世帯 毛を採っ ソバ 係に 特に冬期 も重要な生 後 から は限ら 効率よく経 や、 あ 四千公 壌 たり、 それ に確保で は れ やせて そこで た土 をどれ 11 は 近 11 は お 高

り、

複雑な十 によって家族と家畜とが分散、 点に耕地や放牧地、 てゆく か に腐心する。 地利用のシステムとともに、 草刈 具体的には、 地、 倉庫を兼ねた家などをもち、 移動しながら生 標高 夏に増えた家畜の一 の異なるいくつもの 活するとい 部を、 季節 う、 地

変化

要因

ついて、

注意をしておきたい

第

は、 0

Ш に

地に

おける一

般的

な人口過剰傾向

0

顕

在化である。

のシステムをもつくりだしてきたのだ。

餇

料の

不足する冬の前に交易物資として放出するという、

交換

地や きない 中 もっとも あった。 商人を相手に、 生業であ 交易は自らが必要とする生活必需品を入手するために不可欠な そこを突破する手段とノウ その間に立ちはだかる大ヒマラヤ主脈という障壁があるだけ、 たのは、 冷涼で乾燥したチベット高原と、 低 シェルパをはじめとするヒマラヤ南 Ш 北 地 高 地 厳しい るば 带 な 0 地住民が、 ・エルパ このような交易に負うところが大きかったのである。 仏教寺院を建設す 人々に比 かりでなく、 低地という、 自然条件の下で、 高価な贅沢品を取引きする、 の農業、 相対的 べても、 しばし 牧畜や交易の実際の在り方は、 に ハウを持つ者にとって、 全く異なる生 yるなど、 しばしば は恵まれ 自らの食糧すら充分に自給 ばチベットや 温暖多湿なヒマラヤ南 高い ているかにみえる中 より高 面高地の住民にとって、 態条件を結ぶ交易は、 経 投機的 济 生活水準を維 力を保ってこら インドの な商 利益も大き 業でも 都 地 級 市 面 0 Ш

10

ても、

また時

期

によっても多様であ

り

それ

6

É

0

11

てはすでに多くの

文献

もあるので、

ここではこれ以上述べな

ステーシ

3

ンと

呼

ばれる都市や、

茶をはじめとする商

品作

東部 ただ、 の山 地 住 一九世紀後半から二〇世 民の生活に影響を及ぼした、 紀前半に かけて、 0 か 0 ネパ 歴史 的 1 ル

第二 とは、 ラヤ 中級 世紀 どのチベット・ビルマ語系の諸語を母語とする諸民族に加えて、 に 高地 民の交易は、 や、 とは困難であった。 グルカ王 もなった。 トでの動乱 向上させたが、 ェルパ ルバテ・ヒンドゥー) あ り、 にお は、 インド側から中 初め以降、 越えの交易の衰退、 山地帯に よく知られ ジャ イギリ などのチベット 朝の国家権力を背景とするヒンドゥー 13 後の 当 て土 ガイ 時 かつてのような意義を失い おいても、 中 カ そのことは人口増加に一 スの統治下に入っ のネパール 地 リン 利用 ているが、 国の政策がこの交易に大きな打撃を与えたこ モの導入は一時 第二 級山 は、 ポ 地帯 ない は、 -系高地 ン 農民の開 先住民であるライ、 では、 \_ チ 般 し停滞である。 主に高地住民の従事してい 東部ネパ 1 0 2 住民が、そこへ に ンビ 道路の整備などにより、 シッキムやブータンと異なり、 的 拓 たヒマラヤ 九世紀 には農業生 渓谷経 ールでは、 定住が進んでいたから、 つつあっ 層拍車をかける結果と 末 一九五九年のチベッ タマン、 Ш に 由 進 は 教徒 産 地 0 実際に 出 限界的 0 たのである。 ル 力を飛躍 0 1 0 グルンな 1 てゆくこ は たヒマ わゆる な水準 E 0 高地 開通 的に ル

1 18 1] ル

0

p 市や道路 0 大規模農園 茶の生産などの 東部国境 鉄道の建設や、 に接するダージリン地 (プランテーション) ための厖大な労働市場が生 物資、 サー などの成立である。 区はその典型的 E スの じた。 供給、 な事 茶園 ネパ 例 0 整備 1

都 ル

に

からぬ人々が、 わけダー れらの要因があ ジリンとその周辺へと、 職と新たな可能性を求め 11 まって、 東部ネパ 流入してい て 1 ル 山地 ったのである。 英領インド、 から は とり 少な

18 0

#### 登山、 観光とシェ ル

(1) H 1 ・ジリ 0 シェ ルパとヒマラヤ登山

兵 な ら徴募されたグル ことが多か ママリー は 仕が 7 ス 11 ヒマラヤは ある。 統治 鎖国 保するに ほどに困難だっ 同 初期の登山 下の 状態にあっ 行するの のような例外を除けば、 登山隊 2 \$ インド た。 九世紀末から、 L 植民 が 隊は、 のべ カ兵をはじめとする、 た山 だっ たから、 か Ų 1 地機構の協力を得ることは不可欠だ 般的であった。二〇世紀前半には、 雪 たのであり、 スキャンプへ 岳地帯の旅行には、 それ 線以 ヒマラヤ登山の主要な舞台は 本格的 自体 上の登山のためには、 アルプ が今日とは比 のアプローチ、 そこでは輸送手段や な登山の対象となり 英領インド軍 スの ネパ ガイドを同 1 ~ to ル 11 0 0 0 4 将校や わ ネパ 行 ラスや Ш に 物資 なら 始 炒 地 する 3 か

> キャ あ ラバ 2 たとい ンの原型は、 2 7 6 ょ 植民地 僚の旅行や英領インド軍 0 軍

ある。 年代 はダー 1 ル I 前半のイギリス 山地の出身者で、 ル 彼らがチベット高原を経由するアプ ジリンであり、 18 を本格的に高所登 ・チョモラン 多くのシェ そこで雇用したポ 山 に 7 使 ルパ 用 Î し始 が含まれ ヴ 0 1 8 I. ター た V 0 チの基点とし ス てい 1 は、 の大部分は た。 登山 九 隊 木 to



ブの中心の村ナムチェバザールの土産品屋

この時 目指す 間に定着する。ベースキャンプから頂上へ なキャラバンをスムー 華々しい成功にはまだ至らなかったにせよ、 ようなシェルパ 地法が、 ものキャンプを設け、 在であるとの評価が、 ンプ以上での 0 に対しては、 カラコルムやパンジャーブ、 だったのだろう。 ッジを与えて顕彰する制度を作ったのである。 隊員達の出 ·登山 期からである。 ねるようになり、 ルパ その背景にあった。 最後まで忠実に仕える原住民の従者、 ヒマラヤの巨 当隊も、 荷 特に目覚しい活躍をしたシェルパには、 の登録名簿や記録を整備し、 時の欧米の社会では、 今日想像する以上に高い関心が寄せられていたし、 版した書物などを通じて広まってい のイメージが、 上げにおいても、 シェルパを雇用するためにわざわざダー 「シェルパ」はヒマラヤ登山に欠か そして登山の過程で実際に生命を失ったシェ 物資を集積しながら前進する ヒマラヤの高峰を目指す欧米の登 ヒマラヤの 峰を攻略する戦術として確立 ズに進めてゆくうえでも、 ヒマラヤン・クラブのダージリン支部 以後、 ガルワールなど、 登山隊の活躍を伝える新 シェルパたちは際立 巨峰 東部ヒマラヤばかりでなく、 きわめて受け入れやす の初登頂を目 登山隊 のルート上 秘境で苦闘するヒー というステレ 西部ヒマラヤを またベー Ħ への斡旋を行 頭に述 2 したとい 指す登山 タイガー せ にい た 山 7 な ースキャ 0 聞 ゆ る極 家 to 存 才



カトマンズ/タール街のシェルパの登山用品店

ルパも、少なくなかったのだ。

実際の出身がどこであるにせよ、 高地から、 職 ところで、 を求めてやって来たチベット系の人々全体を指している。 ないしはチベ ここで脚光を浴びたシェルパとは、 ット からそこを経 移住先であるダージリンでは、 曲し て ネパ y 1 ル

易に比 位置 末端 おい 0 るのも、 た、 彼らにしてみれば、 不安定でリスクも大きいか 彼らはシェ 以にわ イメー 一づけ 元であ ては、 高地 ネパ マラヤへ た が、 るに たマ る ジがつきまとうの 出身の身体適性 1 そして両者につい 彼らは ル ル 登 にせよ、 立山隊の 、ネジ 出身の傭兵グル 14 18 2 0 時インドの治安維持に重要な役割を果たし 登 登山 アプロ メントの Ш 丰 括され 支配者の 自らの 隊 隊と同 t 0 ラバ ーチ途上の に加え、 11 イポ to て、 能 才がシェ た。 わりに、 カと構造的に一 側 ン運営 力だけ 行し 勇敢、 に 彼らがそこで従事した職 決して偶然ではない 属 ター 7 様々な異文化集団を相手の交 資本も不要で、 ル 11 イギリス統治下の は楽なも に頼らなけれ 忠実、 てい 18 る限りにおい 職はその中 の評価を高めたのだが、 たの 致するようにみえ 素朴とい 0 ti でも ば 収入も高か のである。 て た ならない I 1 ーンド た 漳 業 ル 雇 共 てい 18 不は多 か 11 用 通 in 交 0 な から



初めて2回登頂 たダージリン登山学校のナワ ン・ゴンブ氏

1

だが、 変化を遂げてい には、 消す。 登山 そして終戦後、 一隊とシェルパをとりまくヒマラヤ 次大戦の勃発とともに、 E マラヤ 登 Ш 登山 から 再 開 隊はヒマラヤ され 0 状況 た 九 Ŧi. 5 大きな 代

九 (2)四七年、 ヒマラヤ登 インドとパキスタンは分離 Ш 0 黄金時代 九 Ŧi. 年

と呼 るチ ラン 登山 がすべ もあった。 るようになっ でには、 年には、 わ を開放した。 Í ぶに ば 3 隊 7 ゴリ に、 I 0 て登頂され 戦前からの リー 0 ル ふさわ 中 それまで鎖国してい 登頂 18 K 1. K た。 ター イツ・ はその典型であろう。 領内にあるシシャパンマを除く、 に成 2 その一九五〇年には 宿縁の チ p い た p 以功し、 オー 3 谷 モランマの初登頂者、 頂者は、 登 H 本隊 頂 九五〇年代はヒ 山に初登頂する。 ストリー 成 九五 たネパ 功 のマナスルを含め、 0 二 躍 隊 三年にはイギリ ヒー がナン 黄金時代は、 まずフランス隊が 1 ル が、 01 スは マラヤ登山の黄 ガ 後イ テンジン として名を知られ 111 . 外国人旅 独立し、 界を 主 18 ス隊が 英雄 ・タリ ルバ 要な八千 九六〇年 'n アン 0 行者 け トにと、 時 巡 金 九 隊によ チ ル ナ Ŧi. 代 門 ま

11

IV Įі

+

三〇年代までの そのアプロ ところで、 F にせ 九 スタイルを踏襲していたとい Ŧi. よ、 〇年 代前半 登山そのものにせよ、 までの E マラヤ登山隊 -基本的 てよい。 には の多くは、 E

退し、 待される役割 + もたらす。 12 てきた。そして、 全般の基地としての性格を失ってゆき、 ジリンで、 の従事していた交易 らざるをえない。 隊と同行して故郷へもどるシェルパの立場は、 も多くの登山隊が集中する地方の一つとなったのである。 ズがとってかわる。 九五〇年代 登 かつてと同 Ш ソル・クンブに は いわ とりわけ 戦前 も後半に入ると、 様、 \$ ば国家的事 従 からの経験者を中 登山 そのソル・クンブは、 他 来と同じだったし、 シェルパも、ダージリン在住の古強者が からの収入が断たれた後は、 0 一九五九年のチベット動乱以降、 職 住 一隊のハイポー 業の性格を帯びており、 む人々が、 種とは比 ダージリンは 心に行 ~ 4 直接雇用 ターという職業は、 実際の のにならない ネパールの中でも、 ネパールではカト わ \$ れていた。 雇用 されるようになっ はやヒマラヤ登 微妙なもの ハイポーター t 高い シェル だが、 主に たしか 収 登山 に 入を ・マン に な 期 18 最 31 Ш 1

八千片 (3)峰の初登頂 E へ(一九六〇年代 マラヤ登 が終った後の一 Ш 0 鉄 の時 ti からヒマラヤの 九六〇年代以降、 大衆観 ヒマラヤ 光 時 側

の末端に身を置

き、

その

利益のため

に忠実に奉仕することが、

なっ

た

すなわち、

支配者

確実に成長の見込める有数の基幹産業と位置づけられるように

たのである。

ヒマ

まま彼ら自身の利益となった時代は終っ

ラヤ登山の黄金時

代

は

また過渡期でもあっ

職

への経済的依存は

層強まっていった。

だが、

彼らが活動す

る地域は、

かつてのような植民地ではない。

民地時 での た大衆観光(マス・トゥーリズム) したといってもよいであろう。 やく個人の楽しみを目的として行うという、本来の姿をとり な 1 多くの観光客を迎えるように アジア、 た時代は過去のものとなり、 登場し、 合った登山 登山を目指すエリート登山家ばかりでなく、 九七〇年代後半に入ると、 い山 からの ールは、欧米や日本などの先進資本主義国ばかりでなく、 登山は著しく多様化しはじめる。 代の 地の徒歩旅行を目的とするトレッカーなどがヒマラヤに 東南アジアなどの新興経済地域や、 その数は一九七〇年代から急速に増加していった。 初登攀や冬期登攀、 スタイルはもとより、 を楽し む一般の登山者や、 縦走、 なり、 物価も安く、比較的治安もよい ヒマラヤにおいても、 ヒマラヤ登山の鉄の時代は、 国の威信をかけて初登頂 の幕明けの時代でもあっ 単独登攀など、 観光はネパールにお 特別な技術や装備を要 ヴァリ インドなどからも、 それぞれ エーシ 登山 より ョン・ 0 力に見 はよう 木 て、 た。 東 ま 2

ヤの場合、 地として大衆化するためには、 力あるイメージが、 メージに導かれてなされる行為である。 ところで観光、 そのイメージとは、 とりわけ大衆観光とは、 大量に流布されなければならない。 特定の 言うまでもなく、 ステレオ 従ってあ 基本的に 7 る地域 まず世界最高 1 プ は 化 既 t した魅 成 0 光 1

シェ

ル

18

象とする観光

わる

限りにおい

ては、

I.

ル

で

者なのである

部

わ

8

て有

利

な

条 携

件

な

0

0

あ

3

ある。 全人口 ように、 ル を紹介する観 の時代へと継 も社会的にも下位 ルにおいては、 かのような錯覚を抱いたとしても不思議はな パはヒマラヤ てくれる者とし とりわ Ш シェ 麓 1 グラ イギリス植民 に ルパ % 17 0 ひろがる ル語を母語とするヒンドゥ 承され、 登 に 光パンフレ 闽 地方、 に関 Ш も充たない を産み出しながら増幅されたうえで、 に シェルパをはじめとするチベット系の人々 ての やトレ に位置づ 代表される仏教文化であ するこうい 再生 とり 地 神秘のチベット」 " ットやテレビ番組などを見れば、 時代に形成され、ヒマラヤ登山 勇敢で忠実で快活な キングを目的とし けられる存在 産され マイ わ いけネパ ノリ 2 続けてきた。 たイメー テ 1 1 1 ル でし を代表する人々である 的な、 教徒からは、 であ ・ジは、 り か てヒマラヤを訪 11 な 3 そしてそこへ すなわち 現 先に I 実のネパ ルパ 多数を占 0 だがが 文化的 Ł 大衆観光 \$ マラヤ なの 記 転 0 べは、 黄 L 生 観 に 1 I 金 た 7 導 5 85

ョモランマをはじめとする氷雪を頂く峰

N であ

り、

次

で

商

3

着々と経済力をつ 働としての かりでなく、 た状況の下で、 けてきた。 11 ソル イポ クンブ、 9 す I 1 な ルパ わ 1 ち とりわけチ は V " 観 光関 九七〇年 キングガ 連 3 0 イドと 代に モランマに 職 種 入ると、 を通 0 た

> 期市 ない 加工 通じ できる穀物や野菜、 〇年代以降、 交易のために旅行することも、 タマンやライ、 となったシェルパの世 から 店 " 诵 食品、 労働者として雇うようにさえなってきた。 周 から 7 が 称 運ば 開 辺の村々でも、 軒 工 現金収 を並 かれるようになったが、そこでもシェル ヴェレ 嗜好品などを、 れてくる衣服、 ソル・クンブ べるよう グルンなど、 入は ラン、 スト街 果物、 増えた。 観光客 になる。 帯では、 道 レッ 沿 もっ 雑貨 のいくつかの村では、 あるいはカトマンズやタライの いの村 低地の村に住むシェルパ以外の人々 賃 カー む ぱら現 ほとんどしなくなっ 金労働 や、 農業・牧畜や家事などのために、 直 け ^ 接トレッ 0 々には、 0 食糧 砂 金で 者や 糖 生鮮食糧品 品 購 茶 力 p 1 I 入するだけ シェ タバ が 産 ル 18 訪れること 18 コとい ルパ は、 の経 などを 度、 自身が 低 供給 する 地 0

イポー タル、 グを請 ンズやポカラなどの 入して縫製す 一九八○年代に入ると、 ターや 資本を貯え、 け負う旅 る工 さらにはリ ガイドなどの賃金労働者は、 行代理 場 都 の経 経営者として自立するまでの 市 店や 部 営などまでを手が " 資本を蓄 ホ クサ 進出、 テ ル クやテント 定住し、 積 したシェル 3 多くのシ け 0 るよう 登山 経 10 18 T. ルパ 0 は、 時的 な カト 材を輸 0 "

ちシェルパ、 事とみなされるようになってきてもいる。その一方で、この職 ヒマラヤ登山の 種へのシェルパ ているのだ。 という図式は、 ハイポーターやトレッキングのガイド、すなわ 以外の民族集団からの参入も目立ちはじめた。 現実にはすでに成り立たなくなっ

# 四 ェルパの近代化と伝統回帰

変化が、 11 をもたらしたのも事実である。 成功をおさめてきたといえるだろう。 経済的に見る限り、 民族集団としてのシェルパの社会に、さまざまな問題 シェルパは二〇世紀を通じて、 だがその過程で生じた 目ざまし

ソル 因だろうが、それだけではない。彼らにとって教育とは、 学校が設置されただけでなく、そこでの就学・進学率や教育内 П ルパ自身が経 容の水準もかなり高 辺境にもかかわらず、 能であればインドや、さらには欧米などの高等教育機関 シェルパは一般に、その子女の教育にきわめて熱心である。 ・クンブをはじめとする、 つてを頼ってまず子女をカトマンズやダージリンへ送り、 次世代への投資なのである。 済的に豊かになったことなども、たしかにその 他の地域に比べ、 外国からの援助が集中したこと、 シェルパの居住する地域には、 経済的に余裕のある世 かなり早くから多くの シェ 何よ へ留 要

語

学させる。このようにして、一九七○年代後半以降、大学を卒

60

こういった状況に対する危機感は、

とりわけ一九七○年代に

業し、 てゆくことは、今日でもシェルパをはじめとするチベット系の 着いてゆく。 やはり彼ら自身のいうビジネス、それも観光関連の世界に落ち た者も少なくない。 医師、 ネパールにおいて官僚や一般の企業の中枢へ入っ 教師やエンジニアといった専門職に就くようにな だが高等教育を受けた者の多くは、

人々にとっては、きわめて困難なことなのだ。

シェ あった。だが、ソル・クンブから遠く離れた都市で、 パ社会の教養人として、また祭礼や葬儀、 後、 侶としてチベット仏教を学ぶことを意味していた。 シェルパにとって教育を受けるとは、かつては僧院に入り、 化から、多少とも距離を置かざるをえなくなることを意味する。 育ったシェ 人々の生活に必ずしも生かされないばかりか、むしろしばしば ターについて学んだ成果は、 が教育を通じて継承した知識は、 の専門家として、地域社会に密着した存在であり続けた。 のだ。 や英語といった母語以外の言葉を通じて、経営学やコンピュ しかし高等教育を受けることは、一方ではシェ 僧院に留まるにせよ、還俗して村で暮らすにせよ、シェ ルパ社会の内部の較差を拡げる結果を招く。 ルパの中には、 シェルパ語を話せない者も少なくな 彼らを送りだした家族や、 シェルパの伝統文化の中核で 死者供養などの儀礼 最近、 ル 彼らは 18 ネパ の伝統文 彼ら その 1 僧 ル

ぎ込んできたエネルギーと資金とは、 国営放送でシ 法 開 志を集めて、 寺院も完成した。 数三百名弱、一九九○年代半ばには五百名強を擁するまでにな 会員でスタートしたこの組 8 式や葬儀を行うための寺院 トマンズでも行うとともに、 ル・クンブの村々で行っていた新年会やその他の年中行事をカ た会員制の組 彼らは に は、 九九六年には 0 の「ネパールは多言語国家である」との規定を背景として、 かれるようにもなっ の資金集めを開始する。 会館も一九八二年には それは変貌 家族のレベルでは、 地位確立に貢献してきた壮年 まずカトマンズ在住のシェルパの親睦、 光関 シェ I 連の 織 実 ル してゆくシェ (シェルパ ルパ また、 、現に漕ぎ着ける。 18 企業の 語のニュー た 0 親子の 歌と踊りを教える講習会が、 ほぼ同じ頃には、 経営者へと転身をとげ、 さら 織 ・サー 一九七〇年代半ばに二十名たら (ゴンパ)を兼ねた会館の建設のた 部がオー ルパ は シェルパの伝統にのっとった結婚 に スを放送するよう運動をすすめ、 世代間ギャップの問題でもある。 ビス・センター) 社会全体の問題であるととも 層の間で強 こういった活 九九〇年に制定さ 九八〇年代はじ なみたいてい プンし、 若いシェ 10 互助を目的とし 一九九五年には 現在 動 彼らにとって を作 ル に彼らが注 0 8 ħ 毎週 18 には会員 \$ 0 のでは 達 シェ り ずの 0 " П 有 ル

ない。

イド

どの賃金労働

進出し、

しだいに旅行代理店やホテル、

登山

用

具

店な

高所ポーターやトレッキング・ガ

ジを創造し、定着させること、 ゆくこと、 しつつ、一方では伝統を守り、 メージを今後どのように操作し、作り換えてゆくのか、 貴重な資産であり続けている、 ことだが、 ことは歴史のなかで「忠実なシェルパ」を演じてこざるをえな に続いている。 かった彼ら自 で過去の遺 たしかに西欧 つまりは二十一 観光業の世界で生きてゆく限り、 物であり、 身 の作 が、 もっとも強く感じていよう。 7 た 清算され シェ 世紀にふさわし ない そのための模索が、 というのも事実である。 るべき側 ル パ しは新たに築きあげ 0 面をもってい イメー 11 シェ それが今日 3 ルパ は、 今日 かし 0 あ 近代化 しもなお も不 その 皮肉な る意味 イメ てさえ その 1

著者注

(1)

- Adams, V. "Tigers of the Snow and Other Virtual S herpas, An Ethnography of Himalayan Encounters" 1996, Princeton Academic Press
- エルジェ「タンタンチベットをゆく」1983、福音館

(2)

# K2新ルートからの登頂

――一九九六年、日本山岳会青年部K2登山隊の記録

# 隊の発足から出発まで

の国境、 を引きつけてやまない。 河最奥にそびえ、 た。これが「非情の山」と言われるゆえんである。 が訪れ、栄光の陰に数々の悲劇のドラマが急峻な山容に刻まれ イタリア隊により初登頂が成されたが、 ○○○は峰の中でも屈指の難度をもつ山である。一九五四年、 九九五年二月、 標高八六一一片、 北緯三五度五三 JACマカルー隊出発も間近に迫った頃であっ 今日に至っても圧倒的な高度と存在感で我々 世界第二の高峰K2は、パキスタンと中国 二分、 このK2に行こうと思い立ったのは、 東経七六度三〇分に位置する、八 その後も多くの登山隊 バルトロ氷

次代を担う若手の育成、さらには斜陽と言われて久しい大学山次代を担う若手の育成、さらには斜陽と言われて久しい大学山なった。そうすれば必然的に大学山岳部出身者中心の隊になるであっのではなく、自分で登山隊を組織してみようということだっなった。そこで考えたのが、マカルーの次は連れて行ってもらかった。そこで考えたのが、マカルーの次は連れて行ってもらかではなく、自分で登山隊を組織してみようということだった。そうすれば必然的に大学山岳部出身者中心の隊になるであった。そうすれば必然的に大学山岳部出身者中心の隊になるというという。

山

本

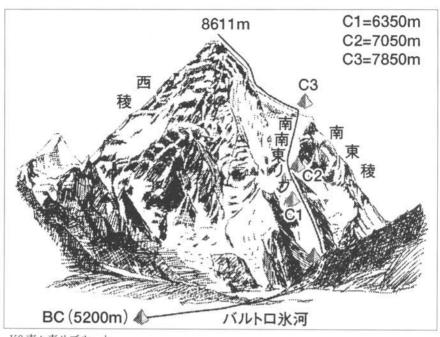
篤

わってもらい、公募ではなく、二人がよいと思う者の一本釣り委員長経験者で大学山岳部に強い思い入れのある松原尚之に加登山隊の編成は、まず私と同様に学生時代日本山岳会学生部

岳部の底力を示し得ると思った。

た。

38



ル

1

は、

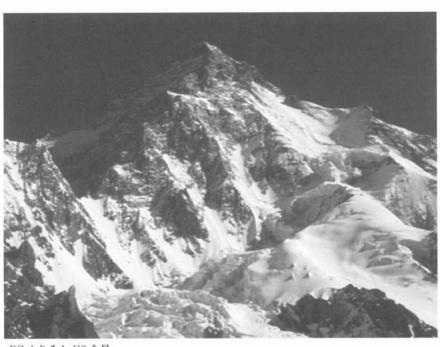
最初最も多く登られている南東稜を予定し

たが、

K2 南々東リブルート

過去の な利点である。 九四年スペイン 験を積もうと考えた。 登山方法は、 ル クスな極地法を採用 ルー 南 隊 1 ースキ 東稜の肩に 自 0 分達 残置物の追従となることや、 トである南々東リブに目標を定めた。このル 荷上げ等すべて自力で行うことで、 ただし、 るべ 若く経験の少ない 合流する。 ースで力を出し切ることを主眼 からその全容を望むことができるのが大き スク隊により完登されており、 高所ポ 最終的 下部が急峻で困難が予想される メンバ n 1 ステ に は 1 他隊との競合によるト ジでは酸素も が 多い 切頼ることなっ より質の高 ため、 1 使 比較的 才 用 は

資的なサポ まってくれたという意味ではうれしい誤算だった。 名と考えていたので少々多いとも思 から始まっ 発起人の方々により、 七歳の隊編成となった。 トを受けることになった。 伊丹紹泰氏の五名の代表発起人を中心に七十 田川芳信青年部担当 さらに信頼できる各大学の先輩 支援する会 これにつ 最終的に十大学十 理 事、 ては、 たが、 が発足し、 橋本清氏、 計 九 画に賛 名 から優秀な若手 初最大で 資金的 村井龍 またこ ¥. 同 均 も十五 年 れに て集 氏



とに、

医師が一名参加できそうだということになり安心してい

年が明けてからその医師が参加できなくなり、

五月末の出発に二月頃から

日本人医師はあきら

た。

ところが、

四月末までいろいろと努力したが、

スケジュール調整ではどうにもならず、

めざるを得ない状況となった。

BC よりみた K2 全景

そこでまず、 外を問わず、あらゆる面で多くの方々からご心配をいただいた。 方であったが、 化を図った。下馬評では「彼らでは登れない」という予想が大 準備を始めた。 登山隊のメンバー編成と並行して各方面に打診した。幸いなこ 自信を深めることができた。 力レベルは高く、私自身はこれならかなりやれるのではという 方、大所帯でかつ非常に若い登山隊ゆえ、 一月より四月まで計五回の富士山トレーニングで体力 同行していただく医師を探すことが第一と考え、 富士山では、 毎週土曜日には、 私が予想していた以上に個々の 日本山岳会でミーティ 日本山 岳会の内

約五十\*ようの医薬品を携行した。また、「パルスオキシメーター的五十\*ようの医薬品を携行した。また、「パルスオキシメーターが入山することになっており、一名くらいその中に医師がいるが入山することになっており、一名くらいその中に医師がいるが入山することになっており、一名くらいその中に医師がいるリエゾンオフィサーに軍医をお願いすることも考えたが、最リエゾンオフィサーに軍医をお願いすることも考えたが、最

九九五年十二月より実質的

以上のような事項を決定し、一

害全般 n 氏 理 0 いただく機会を設け、 グに合わせて行 ス の練り直しを行 有効な活 H 本上 に 所 馴 0 0 登 マラヤ U 化 用 7 法に Ш 0 効 i 0 果的 つい (塩田純 模様をスライドやビデオを交えて直 協会の 全隊 K 方法 7 飛 員 2 一先生) 登 田 が 増 <sub>山</sub> 和 理解を深 Ш Ш 夫氏ら過去のK2登 の難しさを検討し、 本正 茂先 以上の勉 嘉先生) 生 めた。 高 強会をミー さらに、 所 高所に に お け タクテ Ш 接語 おけ 重廣 経 る テ 験者よ 運 る障 1 1 恒 動 0 7 夫 4

友好

隊 時

\$

0

き

な

は

幸

実

手伝いに来てくださり、 # あ 0 べての準備を終え、 りが 梱包 発し ひとりである村井 た たいことに、 は PL 月 五月末、 各隊員の出身母体 龍 中 旬 予定通り作業を終了し 氏の会社 より Ŧi. 隊に分かれ、 月 亡の倉庫 0 連 を中 休 手をお 崩 心 け 勇 借 ま に 躍パ た。 で、 1 多く Ĺ こうしてす て行 代 キスタンへ の方々 表発起人 0 た

#### 際 0 登 Ш 活

フ 我 ま ンプ入り 1 々より ル 年. ク 1 合を避 カラコ ス 直 前 遇 取 より 間 n ル 付 前 け プはそれぞれ独自に固定することとし、 る意 全般 11 に 4 は、 7 味 11 に 口 ドリ た でル 悪天候に苦し 例 年に Í チ 1 なく天候が 1) を南 隊とは、 木 ル めら ダン隊長 K 東リ どちらが先行しても れる登 不 ブ 順 率 に で、 変更. Ш 11 るチ であ 1 1 後に大 ij た 2 ス 隊 が た 丰 から

> is 的 我 か 問 であっ なの け 題となっ で最 声 など、 第 後 まで た 次隊登 たテントサイ ベースキャ 何 0 1 頂の ラ 、翌日、 7 1 ル ンプ入りと同 iz \$ 74 0 なく気持ちよく行 名が 15 7 頂上 0 打 時 に達 ち合 に 確 した 認 わ 動 L 世 が、 でき た。 や た 大変 落 チ 1) 石

て設営し 予定高度よりずっと上にようやく猫 は特に難し 突き出ているとい ていたこともあり、 ースキャ 何とかなるだろうと考えていたが、 場がないことで、 また荷上 ば、 悪天候 際 ンプI の登山 ル 1 11 ンプ建設 (六三五〇以)、 岩を砕 下工 活動 げの方も、 よる停滞はたびたびあ 箇 所は 作隊 は 0 なく、 3 用に持参し 余裕があるほどであっ た状態であ 氷 最初これだけ大きな山 困 0 もともと体力には自信の が 難視して を削 後半の んばり キャンプII 2 ても、 た工 2 た。 E 落 11 たル より、 2 石以 事 0 どうにもならな たも 額 ま 甪 外 だテ (七〇五〇紅) 1 0 ほどの場所を見つけて、 ツル た 1 お 0 は F の、 特 2 お だから二、 問題とい ハシを荷 む に 部 1 ある隊員 天気さえよく 間 0 ね 5 順 題 調 は 技 は えば 上げし かが 術 0 に な た。 進 か 的 揃 h に

ント

は

丰

なれ

<

なったことは、

良い

方向

に

作 1: れ

甪

た

キャンプⅢ

(予定で

進

キャヤ

ンナ

が三

になり、

荷

げの負担、 たこと、 山

高所での

在 24 度

か

スキャンプで十

分な休養が取

か

し反

面

天候により

登

の進

行

が遅く、

2

にべべ

1

定して

11 滞

た 0

0

0

前

員中十六人が到達したことは大きな成果であった。○五○昼)で、翌日上部で行動する者のみ、睡眠時使用したことは大きなポイントであった。ひとりの不調者も出ず、八○○昼近いアタックキャンプ(七八五○昼)に、十八人の登攀隊○昼近いアタックキャンプ(七八五○日)に、十八人の登攀隊

表面 を支えたのは隊員たちの頂上への強い情熱であった。 とがはっきりと感じられ を余儀なくされた。すでに登山期間は五十日を越え、 一日間の休養の後、 量の新雪が積もり天候の周期も短くなり、 かし八月三日からまたしても悪天候となり、三 H プに集結し、 部の隊員の を増やし、 七月末に、 化した。 緊張感の持続が困難となり、 休養のために全隊員がベースキャンプに下った。 もはやこれ 順次ベースキャンプを出発する予定であった。 アタックに必要なすべての物資がアタックキャン 予定していた九名から十二名にアタック隊 までかと思われ た。 そして長い停滞とストレスにより、 たが、 IJ 秋が近づいてきたこ ダー 登 一度目の長い停滞 Ш 間 上部に大 行 0 確執も 0 決断

回復 П を出発した。 に入った。そして十二日午前 にダイレクトに入り、 0 短くなっ つのミスも犯さないという強い決意のもと、ようやく天候 0 第二次隊六名も、 見えた八 た天候の周期に対応するため、 月十 第一次隊は十一日、 Ė 二時二十分に出 翌十一日ベースキャンプを発っ 次隊六名がベースキャンプ 双方ともキャンプ 発、 アタックキャンプ 深いラッセル

> ディ タックキャンプを出発した第二次隊は、 に登頂した。 到達し、 を克服し、 竹内、 ションの下、 吉田、 稲葉、 つい さらに二日においた十 椎名、 に午前十一時十分、 午前七 高橋、 赤坂 佐野、 時三十分から十一 0 順で三 長久保の順に計六名が頂上に立 松原、 四日、 名も午 無風快晴 時 午前 後十一 谷川、 時 の絶 分の 時 田 Ŧi. Ŧi. 間 好 十分にア が 頂 のコン 分まで に、 Ш

た。

は訪れ 二次隊とも、 たことは、 悪天の周期に入り、 年イタリア隊の八名)、最年少登頂 し、ベースキャンプまで全隊員無事 こうして、 なかった。 本当に幸運であった。 K2登山史上初の二桁登頂 アタッ 今シー ついにキャラバン終了の二十四 ク時は天候に恵まれたが、 ズン恐らく 最 (高橋の二十二歳) に下山した。 後のチャンスをつかみ これ 十 五. までは一九八六 H 日より再び まで好天 を記録

## 最後に

きた。 十分に発揮し、 誇り得る成果であると思う。 全隊員が元気で帰国できたことは、 登山 大学山 また参加したほとんどの隊員は、 を振り返って、 岳部 よくやってくれたと思う。 で養 小さな事故、 た基礎的 若い隊員たちも自己管理 な体 登 けが、 力 頂 それ 技術 成功もさることながら 病気、 ぞれ を活 の持てる力を ことが H



K2 頂上にて。左:松原尚之副隊長、 右: 谷川太郎登攀隊長

八記録概 成 Ŧi. Ŧi.

月

7

加

H

18

田

発

Ti. 月 二十日 ネパ 1 キスタン先発隊 ル先発隊(松原以下三名)成田発 (谷川以下四名)

 $\mathbb{H}$ 発

六月四 六月七日 H H 飛行機、 ジープでトンガルへ移動 18 キスタン本隊 トラックでスカルドへ (山本以下十一名) 成 移動

た中、 ちろん、 所における危険認識、 というような壁にぶつかるであろう。 実に心残りな点である。さらに言えば、 を行うことの意味は、 回の登山の真価は、 ちがなければ、 していないと、 ふさわしい力を備えていたのは少数であり、 識している。 かしながら、 登った者に対し何が欠けてい 他人のトレースを追ったにすぎない。 これはひとえに私自身の力不足によるものであるが、 それ以上の発展は望めない。 今後の登山で必ずや「こんなはずではなかっ 私自身が最も伝えたかったもの、 参加した全隊員の今後に問 多くの方々の支援を受けてヒマラヤ登山 あまり理解されなかったようである。 たの かを謙 また登頂できなかった者 今回· このあたりを理解 い 虚に振り返る気持 他は条件に恵まれ 本当に登頂するに わ ず れるものと認 れにせよ、 すなわち高 た \$

六月十七日 六月十六日 六月八日 キャラバン開始 BC建設 南々東リブ取り付きまで偵察 (五二〇〇計)

六月二十二日 登攀開始

六月二十七日 C1 (六四〇〇次) 到達

七月四日 C1建設

ジャー=

七月九日 C2 (七〇五〇云) 到達

七月十一日 C2建設

七月二 十八日 C3(七八五○片、 南東稜の肩 )到達

村田、 八月十二日 椎名、吉田)登頂 第一次アタック隊

(松原、

谷川、

赤坂

八月十一日

C3建設

八月十四日 第二次アタック隊 ① 山 本、 稲葉、

竹内、 佐野、 高橋) 登頂

八月十五日 全隊員BCに集結

八月十八日 BC撤収、 帰路キャラバン

八月二十四日 八月二十二日 アスコーレ着 スカルド着

八月二十七日 イスラマバ 1 ド着

九月一日 全隊員成田帰国

隊長 長 山本篤 谷川太郎 33 (29)、登攀リーダー=稲葉英樹 副隊長 松原尚之 31

> 祥 32 (26)、椎名厚史(26)、安島伸一(26)、 28 (26)、竹内洋岳(25)、朱宮丈晴( 高橋和弘 隊員=松本伸夫(31)、赤坂謙三 高貝喜久雄 岡本憲 (22)、豊嶋匡明 (27)、長久保浩司 56 22 27 24 BCマネー 28 吉田 佐野崇 村田文 亀山 裕

山が浮かんだ。 K2、

孤高の山。

ラコルム・ヒマラヤ・バルトロ氷河の最奥に凛としてそびえる

標高八六一一以。

世界第二位の高峰。

カ

そんな僕の思いとK2峰の姿が重なっていったので

# 思考が消え、 時間が消えた頂

K2単独無酸素登頂

してそのことを深く見つめてみたいと思った。そしてひとつの あること。それは個が確かな個であることを意味する。 のにもとらわれず、 僕なりの哲学といえるだろうか。ただひとりあるとは、なにも れは過去十年にわたるヒマラヤ遠征を通して確かになってきた ただひとり、あること。それはすべてとひとつである」こ 周りの世界との調和が生まれる。 依存せず、比較もしない真に自由な状態に 僕は登山という行為を通 そのと

た。

ある。 土埃の国パキスタンへと向 五月十三日、木々の生命が輝 かっ た。 き出し た湯河原をあとに、

戸

高

雅

史

ないように感じられる。 勢四人の小さな遠征隊である。僕らが今シーズンK2初隊となっ 員は妻の優美のみ。ほかにリエゾン・オフィサー、 六月六日、標高五二〇〇㍍のベースキャンプへ到着した。 山も氷河も厚い雪におおわれ、まだ冬の眠りから覚めてい 白 色の世界に静寂が満ちてい コックの総

ツィ) である。 1 六月八日から、 (六二五〇ぱ)への氷雪壁をダブルアックスで登下降する。 へ向かった。取りつきのクレバス帯は這って進んだ。 順応と下山ルートの確保のため、 ひとりの登攀を開始した。 まず南東稜(アブル K2に全くひとり

しだいにK2と親密になっていくようだ。

界と閉ざされるような気がしたから…。 イの夜。テントの入口を開けて眠った。なんとなく、周囲の世十一日から五日間の予定で山に入る。初めての山の中でステ

を大切にしよう。

一大月十四日、三日ぶりにBCへ下りてきた。一晩中、雪とチョス月十四日、三日ぶりにBCへ下りてきた。一晩中、雪とチョス月十四日、三日ぶりにBCへ下りてきた。一晩中、雪とチョ

た。

六月十七日、ひとりで来た意味がよくわかってきた。この肉というものを閉じることなく、開いているからだろうか…。溶け合っていくようで、ひとりでいる孤独感はない。僕が自分次月十五日、K2と一体感を感じてきている。周囲の世界と

とらわれない瞬間にある。瞬間に生き、そして瞬間に死ぬこと過していく。常に無限の力に満ちた状態。それは過去や未来にいた状態であれば、この宇宙にあふれる無限のエネルギーが通のを閉じてしまえばそれははかない。だか閉じることなく、開体はエネルギーが満ちるところ、通過するところ。内にあるも

雪が降り続く。南から重い湿った空気が流れ込んでいる。今年ダー(七九○○≧)で断念し、BCへ下山してきて休養三日間。七月十四日、最初のアタックを、悪天の到来を感じ、ショル

で単独でルート工作をしながら登ったが、雪が深くて大変だっはなかなか落ち着かず、量が多い。順応で南東稜七三○○㍍ま常に強い西風が吹き続けている。好天期間が短いため上部の雪晴れた以外は好天が長続きしない。しかも七○○○㍍以上は、のカラコルムは天候が不順である。六月前半に二週間、完璧にのカラコルムは天候が不順である。六月前半に二週間、完璧に

をからでも充分満足な感じになってきている。ここにやってきたいら右の南々東リブへぬけるラインも考えられるが、単独で肩から右の南々東リブへぬけるラインも考えられるが、単独で肩まで登るのがやっとだろう。アルパインスタイルでの登攀ではまで登るのがやっとだろう。アルパインスタイルでの登攀ではは八○○○旨から上の深雪帯をいかにスピーディに登るかが勝は八○○○旨から上の深雪帯をいかにスピーディに登るかが勝は八○○日から上の深雪帯をいかにスピーディに登るかが勝は八○○日から上の深雪帯をいかにスピーディに登るかが勝は八○○日から上の深雪帯をいかに入じーディに登るかが勝は八○○日がから上の深雪帯をいかに入じーディに登るかが勝によりである。とこにやってきたいる。ここにやってきたいるである。ここにやってきたいるであるが、単独で着いた。

 $\subseteq$ 

た意味はもう充分に分かっている…。

C2(六九○○㍍)へ荷下げに向かった。歩いていて涙があふ可能性を感じられない。BC撤収を決心する。夕食後、ひとり七月二十五日、ついに帰りのポーターがやってきた。天候に僕はアタックのチャンスをひたすら待ち続けた。

れてきて仕 立ち止まり、 立ち止まり、 氷河を歩いていっ

る。

振 り返る。 以は自 時 間 分の ほ 夕暮れ ど歩いただろうか。 フィ ーリングに賭 0 南西の空に変化の兆しを感じる。 けてみることにした。 なにか変な感じがする。 ВС 後 方を ~ \$

にいったんC2へもどる。 うが強風とスノーシャワー 二十六日、 アタッ C 2 ~ ° クの準備をし、 夕方、 のため、七二〇〇片で断念。 さらにC3(七四〇〇年) ふたたびK2へと向 かっ 真夜中 向 か

○ススの岩棚へテントを張る。この イブラヒムとともに帰りのキャラバンは始 H В Cは撤去され、 まったい コ ック

十七日、

昨夜の疲れをとり、

午

後二

時

か

5

行

動。

七

ボ

トルネックをぬ

け、

トラバースへと入った。

深

雪に

イタ

IJ

後からきたイタリア隊四人と一緒になる。 二十八日、 アタッ クキャンプ(七九〇〇〇〇)に入る。 0

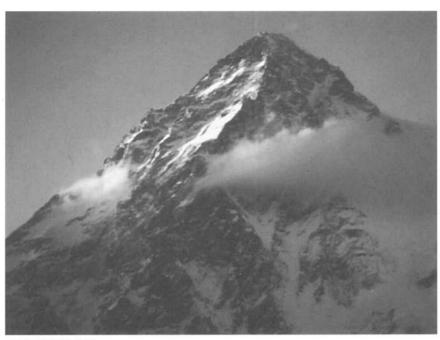
H

ており、 風はほとんどない。 かりに頂上ピラミッドが青々と照らされている。 ライトが見える。 七月二十九日午前 高のチャンスである。 びん 指 ラツセルもほとんどない。 0 の首) 凍 傷に気をつけ めざして登っていく。先行するイ 穏やかな、 時二十分、 時 間ほどで彼らに追いつ いながら、 まだ体も意識も半分眠 恵みの夜だ。 ピークへと向 無酸素で登るに 炒 2 くりと上 雪面 いた。 かう。 心配していた はよく締まっ っているが、 は 部 タリ 願 0 満 ボ 핅 ア隊 トル ても 0 明

> 4 調

グレ み、 いた体も、 ザと頂が順に照らされてい 届いた。そして、 国の大地から朝日が昇ろうとしてい てきた。 そうして、 ボ 'n 0 トル シャーも黄金色に輝き出した。 いつの ネッ っきに目覚めてきた。 薄黄色に変わる。 間 クの入口が近づくにつ ガッシャブルム、 に か夜が開け始 く から次第に雪 頭上に立ちはだかるハンギング 最 85 てい る。 マッシャブル 初の れ 眠気とけだるさを感じ 青白 光 る。 ラッ が 壁の傾斜が増してく 東方 ブ 1) 月 セ 夜から空が白 0 1 ル 地 K. が チ ピー 平 深 3 < クに I 中 IJ 7

ラッ 八時 のトライアングル でぬけられるかが、 していくのみだ。 に思 る。 ものになっている。 替わる。 1 は非常によい。 ア隊のメンバーも苦労している。 時計を見ると午前 間 わ セルを繰り返す。 ズで深 は ぬ時 不安定な雪が張り出し、 かかるだろう。 間 呼 がかか 吸、 これからの深雪の急雪壁をどれ ラッ かっ . そし ロッ 帰りのため、 登頂できるか否かの まだ、 セル てしまっ 九時、 体に疲れが残らない登りをしなければ て クめざし は腰まで。 無 ここから頂上まで少なくとも ボトル 理 た。 0 トラバース ない て ロープを五十四フィック ネッ 4 彼らに声をかけ、 ラッ 体をリラッ あ、 スピー 分かれ道となる。 クからここまで、 あとは セ ドでリ ル はかなりシビ を 開始 くら クスさせ、 頂 ズミカ Ŀ する。 トップを 0 スす アな ル 時 間 ス 部 1:



夕陽を浴びた K2

いない。

K2は甘くない。

ロープがデポされていた。

ひとつの判断を誤れば命を失いかね 昨年のK2での悲劇の残置物にちが い真の自由というものを感じていた。それは比較のない世界。

それはこの宇宙のなかでひとつの生命体として存るということ。

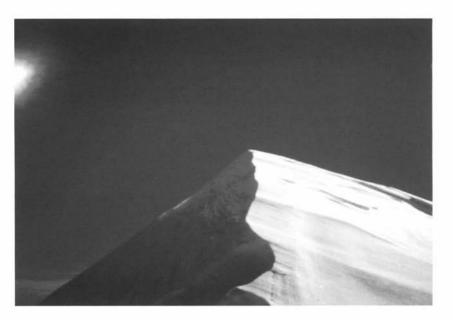
一時間ほどでトライアングル・ロックに着いた。

年前はここまで四時間かかったのだから。

岩の下に赤

ならない。

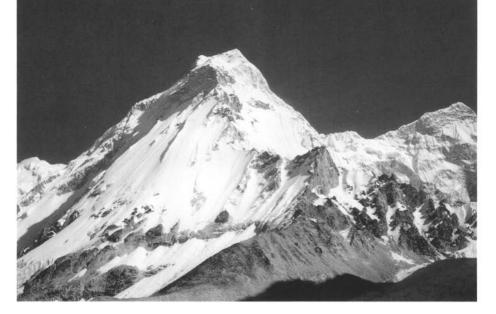
のは、 うとするのではなく、ただ事実を事実としてとらえ、その事実 のような僕の意識は、 在するのはひとつひとつの瞬間のみ。まるでカメラのシャッター えた。それは僕らの意識が創りだす世界にすぎない。 違和感はない。不思議なことに周囲の空気に僕の全存在が融合 が働くようにすること。僕はなにものにもとらわれず依存しな り出す虚構の世界から、自由なシンプルな世界へ。そこにある ること、そして下ること、ただそれだけだ。時間の連続性が消 していくようだ。八三〇〇章をすでに越えた。 く離れた世界。 こうしてここにいることがうれしくて仕方がない。 ただ、 喜びにあふれた力が湧いてくる。人の住む世界から遠 ただ、事実のみ。事実に働きかけ、それを変えよ 生命の存在限界をはるかに越えたところ。だが、 一瞬、 瞬に凝縮されていく。意識が創 頭の中には、



▲K2の頂上付近――「思考が消え、時間が消えた頂」より Summit of K2. Where thinking and a sense of time disappeared.

▼8 300 m 付近のボトルネックトラバース――「K 2 新ルートからの登頂」より Bottleneck traverse of K 2 at 8 300 m.

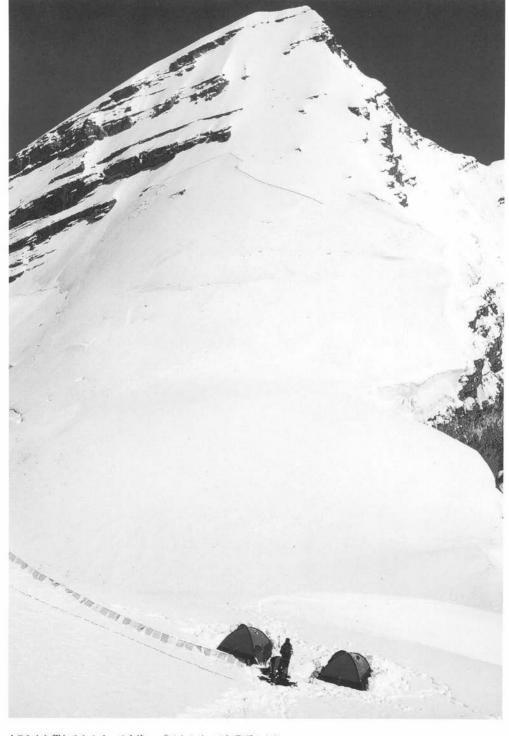




▲パサン・ラム・チュリー峰南面――「パサン・ラム・チュリー峰をネパール側より初登頂」より Pasang Lhamu Chuli seen from Kang Chung.

▼ラトナチュリより望むトランスヒマラヤ、ルンポカンリ――「ラトナチュリ初登頂」より View of Trans Himalaya, Loinbo Kangri seen from Ratna Churi.





▲C2より望むラトナチュリ主峰——「ラトナチュリ初登頂」より The highest peak of Ratna Chuli seen from C2.

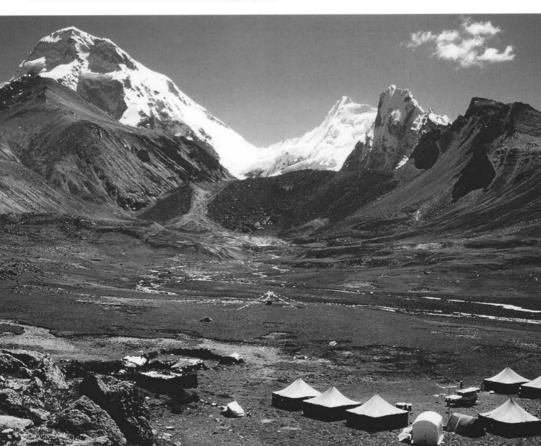


▲カカボラジ主峰――「カカボラジ初登頂」より The highest peak of Hkakabo Razi.

▼カカボラジ北面――「カカボラジ初登頂」より Northern side of Hkakabo Razi.



▼BC からのチョモラリ峰(右のスカイラインが登頂ルート)――「女神の山「チョモラリ峰」全員登頂」より Chomo Lhari seen from BC., summit route along skyline.



ない。 急になる。雪はいちだんと柔らかくなり、 語 な を必要とする。この三日間、 なのにどうしてこれほど体が動くのだろう。 りかけてくれ 危険な山 この高所でのラッセルは考えられない 両腕を使って、全身でラッセルをしなければなら なのだ。 トライアングル 赤いロープは ほとんどまともに食べていない。 山 . の厳しさを無 " 腰から胸 クか ほどの ら雪壁 エネル まで潜るよ 言のままに は ギー 1

0 いくようだ。それはこの宇宙にあふれる力、 するなら、僕の意識がというべきだろうか。 に閉じこもることなく。 ない力。開いてい 開かれていく。 僕という存在が消えていく。 はい な い じることなく。 エナジーがこの 自我という小さな世 認識作 決して尽きること 15 肉 体 p た通 用が止 īE. 確 過して に表現 んだだ

ただ、ただ登る。

ラバースのフィックスロー た。この雪壁を登頂後の疲労した体でクライムダウンすること 四〇〇は。トラバ K2はこのあたりでの登頂後の下降中 余力を残し、 1 時 スからここまで、 間 で雪壁をぬけ、 しかも暗くなる前 プまでたどり着かなけれ 軟雪の嫌 小さなリッ Ó 事 にここを下り、 故が一 な急斜面 ば危険であ 番多 出 が続い 1 0

IJ " 0 端 に乗り出 BCにいる優美と交信する。 1 ス

> う。 から の当たるところ、 状態が続くならば登頂は難しくなる。 も登ってきた。 らく考えていた。二十分ほどして例のイタリア隊のクライ り続けるか、ここまでとするか迷っていると告げる。 順調に行けたとするならば頂上まで約四時 僕の姿を確認できるという。ここからも今までと同 彼らも時間を気にして迷っているようだ。 おそらく今までほど雪の状態は悪くな だが、 ここから上 間 ま マー ま登 だろ か

#### 四

り疲れているようにも見える。

の違和感はない。 失われたとき、 なり危険な地帯にいるとい 悪くなればいつでも引き返す意識があれば大丈夫だ。 ば生きぬけない世界であ 無酸素登山、 だが、フィーリングはとても ここ八四〇〇日から上部は死と隣り合わせの世界。 それは人の有する生存本能が最大限に発揮され 生きて還ることは非常に難しくなる。 まだ、 充分エネルギーに満ちている。 う意識が薄れ、 15 い感じだ。 危険を感じる能 Ш と周 囲 超 0 高 分 111 界と が 所 力 か

てい あ たのだろうか。 の稜 に単独で取 南 々西 一稜の全景が 記録の中でしか知らなかっ りついたのか。 見下ろせる。 彼はどんな思いでK2に登 ナー た彼の存 カ + "

は

頂へと登り始めた。



K 2 頂上

藍の空に向かって突き上げている。僕は再び立ち上がり、頂

げる。なんと美しいフィナーレなのだろうか。真白き雪稜が

向かって歩き出した。味わい、

かみしめるように一歩一歩足を

に身近に感じられてきた。

ここまで来ると、まるで磁石が引き合うように僕は頂にひきていく。溶けていく。自き雪の斜面に、空に、山に、そして空ていく。溶けていく。白き雪の斜面に、空に、山に、そして空に、頂上への雪稜へ登りこんだ。パキスタンと中国の国境線間に。頂上への雪稜へ登りこんだ。パキスタンと中国の国境線である。両国のボーダーをゆっくりと登っていく。人の住む上である。両国のボーダーをゆっくりと登っていく。人の住む上である。両国のボーダーをゆっくりと登っていく。本人の住むについて考えさせられてしまう。はたしてこの線に何の意味があるのだろうかと。

を整えなければ動けない。ようやく落ち着き、改めて前方を見りがある。もしかしたらあそこが頂上かもしれない。雪壁に近りがある。もしかしたらあそこが頂上かもしれない。雪壁に近けで見ている優美に交信を入れた。僕のところからピークは間だという。息が苦しい。いっきに登りこむ。「ああ、まだ先にピークがある」<br/>
で見ている優美に交信を入れた。僕のところからピークは間だという。息が苦しい。いっきに登ったので、しばらく呼吸がだという。息が苦しい。ようやく落ち着き、改めて前方を見がある。もしかしたらあそこが頂上かもしれない。雪壁に近りがある。もしかしたらあるころが頂上がもしれない。当時に近りたがある。

L

地好さを感じ

た

踏 本能のように僕は登っていった。 み出していく。 ファッ トステップがしるされていく。 思考は止 まり、 無垢 時間も消えた。 0 雪 稜にひとつ、 ただ高 またひ みへと

う。 なんと静かなのだろう。 そして深い 世界なのだろ

に満ちてい 点に僕は立 九六年七月二 った。 空は鮮 九日午 や 後四 かに晴れわたり、 時二十分、 雪 や に わらかな空気 お お わ n た最

気がする。 の写真を撮った。 ひとりの自分だったのだろうか。 のとき僕は、 ができた。 無線を出し優美に頂に着いたことを知らせる。 それ 僕は頂 だれ は く僕だっ かが語りかけてくる声 やるべきことを終え、少しゆっくりする時 からの三六○度の光景を静かに たのだろうか。 それ が聞こえてい とも 味わ 僕の そして何枚 たような 中 0 もう そ 間 か

思議な程に調和 力の ここには、 及ぶも のは 何もなかった。 てい 何 てい to る ただ、 そしてこの僕もその中にいるような 白 人の作っ 黒 たも 藍 の 三 0 色 は 何 0 み to 人の 2 n 影 が 不 響

であ 三十分後、 界 0 引き返し点として山 僕は生きて還るために立ち上が 々の頂はなくてはならないも 2 た。 僕が生きる

還ろう

#### 夕 ル + ナナに

たちはなんとその調 すぎない。 に調和している。 自然は、 だが、 この字 なくてはなら 私たち人間ももちろんその中 宙はすべてのものが微妙なバ 和の 世 界から外れてしまっ ない 部 である。 たの Ó ランスで見 7 だろう」 n 部。 のに 部 私

と連なる山並みに沈みゆく夕陽を眺めていた。 峰での最終トレーニングを終え、 モンが跳ね、その上空を白さぎ達が縦横無尽に飛び の音が心に染み入るように響いてくる。そして、 のほとりでキャンプをし、遠くデナリ、 入り。 九九七年七月からのチョモランマ峰 タルキートナ ハンタ、 遠征 へ向けてのデナリ のキ 河 フォーレ 空では白 では時 チャ П り 折サー イカ 流 ナ れ 加

だ揺られてい てい す たように思う。 べてが調 た 和 の中にあっ 心 地好 た。 11 ij ズム そして私自身もその中に含まれ 0 中 に何も考えずただ、 た

H

0

のだった。 去ってしまっ 瞬の内に、 と突然、 なんともいえない 激しい音とともにモー 1: その時、 冒頭 11 に書い 1 ター E 1 ボ たようなことを気づい 0 1 世界はどこか トがやってきた。 へ消

振り返っ あるいは宇宙とい てみると、 K 2峰 2 遠 てよい 征 0 時 僕 かもしれ は Ill な カラコ 完全な ル 0



キャラバレ最終日

うか。で、僕が純粋・無垢になり開かれていったといってもよいだろ問和の中にあったのではないかと感じる。登山という行為の中調和の中にあったのではないかと感じる。

かいたいと思う。きっとこの遠征で僕自身が真に問われるので真剣であるひとりの人として、チベット・チョモランマ峰へ向登山家としてというよりもひとりの人として、生きることに七月からチョモランマ峰北西壁に行く。

加筆したものです)(この原稿は「山と溪谷」一九九六年十月号に発表した原稿に

はないかと感じる。

0

知ら

世

が

届

11

た。

# サン・ラム・ チ ユ リー峰をネパ 1 ル側より初 登頂

# 大阪山の会登山隊一九九六

大 旭

保

は Ü めに

アウィ 委員会は申請を受理、 私 たちち 峰 登 頂 計· 九 画を申 八四 年、 審查、 請 した。 ポストモンスーンにネパール そして推薦状の交付をするとのこ 未解禁峰でも日本山 岳協会海外 側 0 F 3 1

得てい とを知っ たからであった。 た。 申請するからには何かしらの許可 が、 しかし無情にも翌年の春、 取得の可能性 不許可 を

でに退 気が 草い 職をしていて、 とい うか、 働 ヒマラヤ登山を何が くの が 嫌 なの か、 メンバ 何でも八四年秋に実 1 -の若手 は す

代

え

の未踏峰を物色して、

偵察も兼ねて同じクー

・ンブ

0

スル

11

ね

ばならない状態となってしまっ

た

十日 ピー クから東 面の偵察を行っ た。

3

ウ

エスト峰に登山隊を出し、

帰路

チョラ・ラを越えて

れわれのような地方の社会人の小山岳会では、 得にはネパー か ねてから新解禁峰 ル警察などとの合同隊ならという条件がつき、 0 情 報はある筋から得 7 金銭的に た が、 実施 П 取 は わ

困難なことは明白だった。

以 後毎年、 トレッキングなどに出 ネパール・ヒマラヤ登山 かけては、 再三再 隊を組 pu 織 カト たり参加 7 ンズで登 した

能性は 申請や解禁の打診を試みてみたりしたが、 あるという条件がつ き、 壁は厚い もの P が はり合同隊なら あ た

11 Ш

つの 峰 に 出 間にか十二年 か け た際、 同 0 年 歳月が経 秋季の ち、 登 山許 昨 п 年 0 九五 覧表を見たとこ 年秋にマナ

53

が同一の山とは思わなかった。
く、この時点ではチョーアウィ峰とパサン・ラム・チュリー峰ていたが、この新しい名前の山を真剣に調べる時間的余裕はなろ韓国隊にパサン・ラム・チュリーという新解禁峰が許可され

の計画書があった。
の計画書があった。
の計画書があった。
の計画書があった。

**腫らしつつ数日のクーンブを楽しんだ、としておこう。**まに残ったワイフはダウンジャケットに包まりパンパンに顔をは膝までのラッセルを強いられながらも偵察をしてきた。ターは膝までが大量に残っていたがアンプルバ・シェルパら三人と私雪はまだ大量に残っていたがアンプルバ・シェルパら三人と私子に残さ伏せ、偵察のためシャンボチェへ飛んだ。十一月の大力を楽しんだ、としておこう。

## 行動記録

手前、 作った。そこからナンパ・ラ氷河左岸沿いを登り、 I. H この西稜ルートは六七三五公のピークを越えて、 作および荷上に従事してピークを越えた六七○○≒のコル手 から十月一日まで延べ七日間、 そこでBCをジョサンバ、中央モレーン帯 西稜基部にABC (五六〇〇江)を設けた。 六七三五だピークへの (五四〇〇) 九月二十三 ナンパ ルート • ラ

オューの頂上部が見えていた。このC1から望む頂上は遙かに遠く、岩峰の左にBCから見

前にC1を設営した。

イックスの必要もなく意外に早く登り切った。い稜上へと引き返す。しかしラッセルは膝下程度で、ここはフバースしてみるが再び稜上に出るところで雪崩が出て断念。長て1から一旦下ってコルに出る。稜右側の最短ルートをトラ

十月九日、六二五〇㍍のコル手前に仮C2を設営した。

C 1

Cへ降りた。悪天も続き十六日まで休養を取る。トラバースを終えたところでフイックス不足で断念して全員Bトラバースを終えたところでフイックス不足で断念して全員B「トサカ尾根」から七一○○≒岩峰三角形岩壁下を右側への大十三日、谷口、北村とシェルパ二名でアタックをかけるが、

ザイルをセットする。十七日、谷口、北村はC1、シェルパ三名は仮C2に入る。十七日、仮C2で合流後テントを回収し、トサカ尾根を経て十七日、谷口、北村はC1、シェルパ三名は仮C2に入る。

フイックスロープ三○○旨などを荷上。彼らの内一名がC2にシェルパは大トラバースを二往復してテント、食糧、スノーバー、二名が上部で明日のアタックに備えてラッセルをしている間、することが出来た。

する。出発時に気温を計るとマイナス二〇度であった。三ピッ十九日、上部にクレバスがあったので明るくなってから出発

留まり、三名のアタックメンバーが集結した。

になっており、迂回のため右に大きくトラバースする。稜線づたいに登る予定だったが、途中の稜線への岩稜がハングここからルートは七一○○≧岩峰の頂稜コルへ向かって登り、チほど登ったところでシェルパがリタイヤ。

ザイルとスノーバーを回収して右に振る。直登三〇〇㍍で頂

稜に達した。

ピッチ進むと頂上で、ちょうど正午であった。ここから右にナイフリッジが続いており、メインザイル

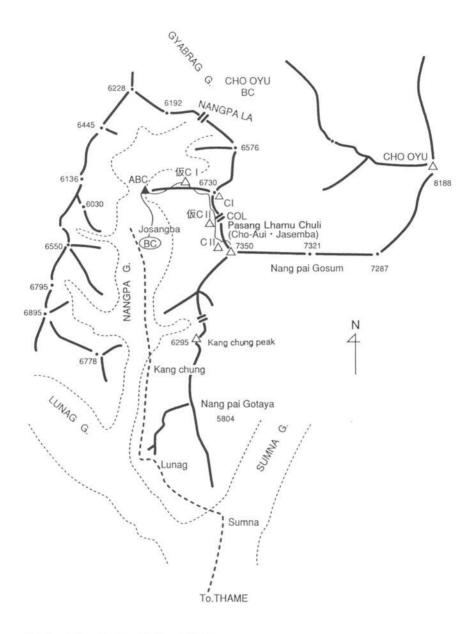
で三

頂上は両手で抱えられる程小さなピラミッドピークで、身動ヒッチ進むと頂上で、ちょうど正午であった。

長い下降を続け午後七時四十五分BCに到着した。き出来ないまましばし展望を楽しんだ。

# サンバ・ピーク)について付記――パサン・ラム・チュリー七三五一㍍(ジョ

大五年度ネパール観光省は新たに五つの山をオープンにした。 7351m Latitude 28 04 24 Longitude 86 36 53 と位置づけされるが、地図上にはそんな山はない。



パサン・ラム・チュリー 7350 m 概念図

標高参照 (1996 初版)

Map produced by the Survey Department of His Majesty's Government of Nepal in co-operation with the Government of Finland.

されている。

ヤ研 の意 八年改訂 4 III 究計 は七 Ш 28 塊と表 版 画 一一〇ぱでシュナ の五 04 RSNH) してい 万分 0 86 る 地 クーンブヒマール、 36 イダー 図ではナンパイ・ゴスム(三つ 23 を採 が 測 用している。 量したネパ ミュンヘン一九七 ナンパ 1 ル · E 1 0 マラ ーゴス 頭

几 からI 峰、 П 峰、 Ⅲ峰とも言 b 九 てい

チ ナンパイゴスムI峰七三五二點と紹 も記されている。 をジョサンバ ウ・アウィ 年度長野県山 I と呼 峰 で申請している。 んでい 岳協会発行の年 る。 六六年 報では 介され、 いずれを採用するか迷うと E・ヒラリ 古原 シェ 和 ルパ 美氏 1 氏は はこれ 0 -報告で 0 を Ill

故諏訪多栄蔵氏は山名をチョー Mount Everest Region 十万分の一』) 七七年発行の れはR・G・S・ 『世界 Ш (六) 岳地 図集成』 年 ・アウィ七三五二にとして採用 発行 (学習研究社) によると、 を参考にされたと思う。 Ŧ. 1. 地 理 学 協 会

チ 3 | 九六年十一 义 日の標高 アウィ 月 が 七三五 採 発 用され 行 0 四点と紹 『ヒマラヤ てい 3 介され、 名 峰 事 中 典 国科学院の十 でも薬 師 義 -万分の 美氏 は

ラム・チ 九 七年三月ネパール 2 IJ 1 0 名で制定され 地 理院発行の た新し 五万分の 地 図が 地 治出た。 図に はパ そして高 サ 2

隊

0 構

成

隊長

54 (

隊員=

谷口守

西平

子.

さを七三五〇以としている。

に出 の地図から七三五四景とし、 メンバー十 翌十三日 登頂は八六年日本ヒマラヤ協会隊 て北西稜を登り、七二〇〇はでビバー 名によりチベッ 残り六名の全員による初登頂 1 チベット名チョ 側 いからの 許 (八島寛隊長) 可で六 され ク後、 1 た 五二〇計 十月十二 ウ 標高 1 であ 峰を は 0 コル 中 H 用 E 74

名、

している。

18

没後、 校や、 を得て彼女は無理してセミカプセルスタイルでどんどん登高 念してスター 重ねアタックを敢行し登頂後南峰でビバ に参加したシェ サン・ラムとはシェ ネパ 銅像などが建てられ 1 勲章が授与され、 ル 女性 ル 18 二が 初 0 Ñ, ルパ エベ V Ŧi. 族の女性の名前。 スト 記念切手が作られたり、 H 後 にアタックするという情 7 ーク中、 ガ ル マー 九三年イ 疲労凍死した。 9 登 頭を記 登山 ンド 隊 を

## 記録 概

活動期 目 隊の名称 間 的 ネパールヒマラヤ、 大阪山の会登 九九六年八月二十五日~十月二十 Ш 隊 九 18 サ ラ 4

三五〇ぱ)をネパ 1 ル 側 より 初

チ

1

1]

峰

£

Ŧi.

二大西保 柳原 武彦 35 北村俊之 34 48



7100 m 岩峰と頂上を望む View toward 7100 m Rock pinnacle seen from Col.

#### 報

告

K

チェ到着、

十月二十六日カトマンズ着解散。

随時帰

http:www.sum-met.or.jp/ showa-p/oac 大阪山の会ホームページ 岳人」五九六号(一九九七年二月号)

大阪山の会登山隊報告CD(M1)

行動概要

九月六日先発隊シャンボチェ着、 八月二十 ンボチェ着、先発隊ターメ着、 四日先発隊出発、 九月一日カトマンズ集合、 九月十五日までター 九月九日本隊シャ

月一日〇1 (六七三五年) 建設、十月九日仮〇2

九月二十三日ABC(五六〇〇章)建設、

(六五二〇) だコル手前)建設、十月十八日C2

メで順応、九月二十日ジョサンバBC(五四〇〇)

九〇〇年)建設、十月十九日隊員二名登頂後BC帰

十月二十一日BC撤収、

十月二十四日シャンボ

# ラトナチュリ初登頂

一九九六年信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊の記録

## はじめに

功した記念すべき実りある年だった。 ル・ヒマラヤに残された未踏の七〇〇〇以峰一 九九四年および九六年は信州大学の山仲間にとって、ネパー 一座の初登頂 に成

ナⅡ峰北稜という第一級のバリエーションルー 九二年から組織をあげての遠征を検討し、 当初はアンナプル ト登攀を計 画

0

たマルシャンディ河支流ナル・コーラ上流のプー・チュー しかし九二年、 0 域の山々、 の落石と雪崩の危険性から中止を決定。 両 山群をめざすことになった。この山群はネパール・ヒマラ 具体的にはヒムルンヒマール北西面とペリヒマール 九三年の二 回にわたる偵察の結果、 同時に計 画を進めてい 下部ルート 源流

> ヤの して以来永く閉ざされた、 開祖ともいうべきH・W・ティルマンが一九五〇年に入域 グレートヒマラヤの北方、チベット

渡

部

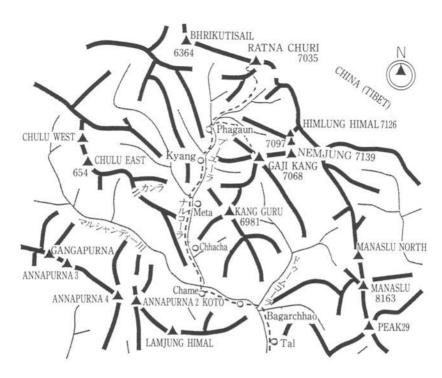
光

則

との分水嶺山脈にある遙かな山々であった。

録は「もうひとつのヒムルンヒマール」として刊行され、 北大隊によって初登頂されたことを現地で知らされた。この記 請した山々のひとつ、ヒムルンヒマール北峰(七一二六景)が 九二年、 第一次アンナプルナⅡ峰北稜偵察隊は、 その折 に申

信大ヒマラヤ遠征実行委員会はネパールで数多くの登山を実践 ル主峰ラトナチュリ この山群に残された未踏の七〇〇〇に峰はギャジカン(七〇 山々の様子が広く知らされることとなった。 当初の申請ではヒムルンヒマール西峰)とペリヒマー (七〇三五景)。これを同時期に登るため



賜

詳細な 11 確認を中 た。 てきたネパ か 打合 ネ せ 年 1 1 0 幕 結 府とする必要があ ル E ル 果、 政 警察登山探検財 1 府 111 合同 は 渡部 ラ 隊 1 0 0 ナチ 成立をみた。 両名をカト 団に合同登山 リに 関 7 ては ズに派 の交渉を重ね ギ K 造 境 F. 3 0 位 7

置

K

政

ると

11

う

理

曲

で

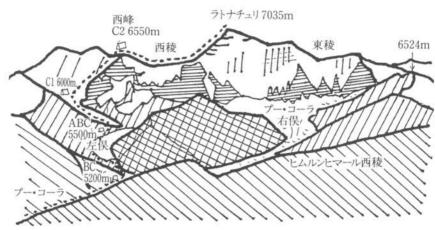
3

カ

この 成功し 係に基づく格別のご尽力、 けでなく、 ざして交渉を継 のみを許可 物 許 があったことを申し添える。 可取 たも 得に その 0 してきた。 0 際 続 間 に培 引続き当 L た結 ては、 九 われたネパ 果、 74 およびネパ ギ 初 年 秋期 + 4 0 3 計 П カン 限 1 闽 に ギ 通 ル ŋ 初登 という 1 警察当 b t É 3 ル 政府 カン 頂成功による実績 1 特別許 局 + 機関 との F 0 全員 1 П 厚 IJ 0 が 登 初 11 かおり 配 信 頂 登 を 慮 頂 頼 た。 0 関 85 12

#### アプロ 1 チ

席して合同 1 ル警察の を出発し、 3 荷 れた作業を行 0 九月六日、 月 梱包作業 モンスー 手 隊 厚 14 ンの 0 ポ は 11 H H 結 本隊 1] 出迎えを受け、 0 蒸し暑い ポ 夕刻にカトマンズ入りをした。空港ではネパ 団式と壮行式があり、 スアカデミーで警察長官以下多くの 関係機関等 リスアカデミ 四 名 なか、 九 月 通関等もスムー 0 ネパ 日後発隊四名、 1 挨拶ま 0 1 体育館を使 バス三台 ル わ 隊 員 1 15 スに運んだ。 追 角 內 各 させ わ K 緒に汗に 将官が 関 台はポ れ た ても 西 空 Sig ま 隊 港



概念図およびルート図

を横断 ラマ教によるプジャを行った。 Cを建設。 九日、 ラ側より初登頂されたヒムルンヒマール主峰 日本とネパー Ė 二十二日 左岸にある標高四六○○≒のパングリ 九八三年秋期に弘前大隊により南東面のドゥド 標高五二〇〇ピプ とギャジカンより流れ出るパン ル両国旗と両 タシ・ゴンパの僧侶にBCに来てもら 1. 山岳会旗の下に祭壇を設けた。 たくさん コ ーラ左俣右岸 0 タル グリ チ 3 ネム 氷 を張り巡ら 0 力 台地 河 ル 3 カ 端 В

ラムジ マルシ 1 增 H 用 2 水と道路決壊のため、 百七十八名のポー トラック二台で出発した。 ,県庁 ンディ 所 河に沿 在地 のべ 0 て十 ター 3 その PL サ によるキャラバンを開始。 H H 1 はデュムレ止まりとなっ ルを出 ナ か il しモ . I 発 ン ーーラ ス 1 入口 モンス に 0 ょ 1

70

風景に 十八日、 を懐かしが のよう が途絶 Ħ. 部は H そこは二 驚 深嘆 す に張出 標高四〇〇〇ぱの えてて 7 深 る。 て歓迎し 部 ンマ 廊下帯 お ポ た尾 り 村の対岸 1 派 夕 落 1 てくれ、 0 根の末端 僧院 石 0 入れ の高台に T 0 峡谷入口 危険も 1 部に お守りまでいただい 替えを行 • 僧侶の ガオンに着く。 あ は あるタシ・ あ 0 って、 0 岩盤崩壊と地 家はギ 崖 の上 緊張させら ナ ゴ とい 集落は + 18 J に 滑りに カ 1 全員 特異 右岸 ・ラに入 れ な 0

り道

に着い

ここま

では

街道

筋

0

ジに宿泊した。



プー・コーラ左俣氷河から望むラトナチュリ (7,035 m)、左は西峰 (6,600 m)

二、登山后力

が元気にBCに集結した。

力

キャ

ンプ

を置い

て順次高所順応を図り、

の安全を祈った

H

本側隊員の大半は、

プーとパ

二十五日、

カル

(高山性潅木の香木)

0

煙

0

なか、

読経

登山

ールが聳え、BC上部五四○○㍍のモレーンの頂きにBCの対岸には真近に北大隊により初登頂されたヒム

て初めて秀麗

なラト

ナチュリの全容が望まれた。

てへ に戻ったときには、 南稜鞍部からの氷河出合五五〇〇kiにABCを建設した。 を続けたが、 身付随の症状を訴え、 九日まで降雪が続いた。 十六日、 左俣氷河右岸の 、リコプターの救助要請をした。 ABC 大事には至らなかったようで、 BCでキッチンボーイのペンバ モレー 元気に出迎えてくれた。 の荷上げの大半は完了したが、 脳血栓の疑いがあることから大事をとっ ンと側谷を辿り、 この間も 悪天のため十月一 BCからABCへ ラトナチ 我々がカトマンズ • " ユ 翌日より二 IJ 日に飛来 IJ 0 順応活 西 が右 九月 峰 0

名 隊 を経て南稜に 九月三十日、 IJ は ター 西峰 ル 南 11 田辺、 稜 鞍部 回目のアタックを開始した。 I. 一作後、 の広い 内田、 アレ、 雪原のC1予定地 ABC帰着。 ヌル、 K ABC~C1間の氷 ゥル 第 (大〇〇〇) ガ、 次アタック ルの六

1 河上に五ピッ 0 荷 F. げ Ŧ 固 定 1 プを張 る 他 の隊員たちは ABC C

チ固 支点はすべてス 南 とって停滞する。 中止し、C1より 九ピ 一稜の 定 甪 六日、 " ル チの 1 トトエ H プを張 第 古 p 定 1 2 次ア B と天候 1 0 って下り、 CK 13 タッ H 1 プを要した。 は回 一戻る。 を使用。 西峰 ク隊はC1建設後、 C2予定地に達した後、 復 Ŧi. したが、 (六六〇〇計) 日まで悪天が続き、 Ħ 西稜を主峰に 悪天の 大雪の後なので大事を に登 ため 昨 向 H かっ アタッ 頂 に C1帰着。 В 引 て二ピッ 南 き続 Cでも クを 稜 は き

を訴 固定 た との鞍部 快晴ではあるが の登りは、 ABCを経てC1入り。 スタカッ 七日、 かし 1 固定 1 T 前 (六四〇〇次) を張 ながら、 による 硬くクラストした雪壁 回のメンバ 強風のため様子待ちをし 1 2 ・プが 登攀をきらって下山を主張 た。 頂上直下一〇〇ぱの地点で内田 1 尽きたことから、 鞍部は広いプラ 八日、 までの下りは、 により二 C2建 に 固定 目 1 設 0 ネパ 201 て、 アタックを開始 1 急峻な箇所に三ピ (六五 で 七時 - プを伸 1 そこより主 ル 五〇紅。 側 C2発。 止 むなく メンバ 隊 ば 員 した。 から 7 九 È 引 不 " 1 H F き は 調 2 峰

前

n な 11 状況となっ 目 0 7 7 " 7 は 最早 0 ため、 時 間 的 今まで三パーティに分けて各々 にも最後で あ り 失敗は許さ

南

あ 3 分C2に帰着。

十五日、

C2を発っ

て B C

に

帰

たが、 に登頂 行 辺 の二名はC2から トを配した。 ( 動していたメンバーを一 すかさず した。 特に問 リーダー)、 この 題が この六名 上部 間 生じなか 一次の波状攻撃をかけるべく全員登 他 0 0 サ サポート のメンバー ツル 2 ポ 部入れ替え、 1 たため、 の :: -要員 を狙ってアタッ 名にし もすべ のうち、 第一 第 ぼ 次ア てC2まで達 り、 次アタ タッ 澤 ク隊 田 名 ク隊 " ク隊 K と同 0 サ 頂 ウ て ル ポ は 0 ガ Ì

遙かなる宝石の峰、 田 1を経て十三 飛翔する渡り鳥の姿に感激 C 2 渡りに遭遇し 引き返した ドゥルガの五名、 H 頂上間、 第 日にC2に入る。 地点からさらに三ピ 次アタッ た。 計十八ピッチ)、そこは ラトナ 次 七時C2を発。 々と編隊を ク隊とサ チュリ した。 0 应 ポ 組 頂 " H んで、 1 きで 十二時十 F 1 固 田辺、 隊 永 頭上 あ 41 定 は 間憧れ た 1 分初登頂に成 BCを 0 プを 光 続けてきた、 輝く蒼空 伸 出 " Ŧi. ル ば 功 澤 C

0

勢を整えた。

天候は六日以来晴天が続き、

十一日

にはC2に於

41

て、

"

ル

り、 3 は 7 H 遙 1 か北 ヌル、 コ には 次アタッ ラの谷を隔ててヒムルンヒ ル トラン から スヒ 7 登 隊 頂 マラヤ 1 0 0 7 H ルンポ は 1 II マー 渡部、 快 晴 カ ル 7 山 IJ 風 群 から 村 \$ 0 望 四山と、 p



ラトナチュリ西稜より望むヒムルン・ヒマール山群 左より、ヒムルンヒマール(7,126 m)、無名峰(7,097 m)、ネムジュン(7,139 m)、ギャジカン(7,038 m)、ヒムルンヒマール左肩にマナスルがのぞいている。右端はアンナプルナII峰。

て登山活動を終了した。 十九日、C2を撤収しBCに集結。翌二十日、C1およびA

## 一、帰路

じる。 路下山となる。 雪化粧のプー 午後四時近くになったため、 シャンディの街道筋までほとんど脱出行の有様となっ やき消耗する。 使えず、 五名で帰路のキャラバンが出発。 首を複雑骨折して、 人ドクター 月二十二日、 プー・ガオンのヤク馬 ポータートラブルの連続。 恐れていた悪天候。 に着く。積雪でカン・ラ越えは不可能となり、 ショレスタ氏 下流のナル・コーラは廊下帯の道 ストライキにより食料と燃料が切れ、 BCを撤収。 雪の中を担いで降ろすことになっ (警察病院医師) 降雪が始まり難渋することとなる。 パングリカルカ泊まりとなる。 高層を雲が速く流 \* 七頭) 連日の交渉にほとほと手を 日近くの交渉の末、 を主体にポ は雪道で転ん 0 れて不安を感 ため駄獣は たが二十 出 7 発が 往

からアン

その

)背後に一段と高くグレートとヒマラヤがマナスル

ダウラギリまで遠く連なって聳えてい

プルナ、

シヴァコティ、

ダンバル)が登頂。

十六名全員登頂することが

八日、

第三次アタック隊

リー

一内田、

金子、

小林、

り救助要請したヘリコプターでカトマンズに搬送され ようやくコトに帰着。 二十八日、 ドクター はチャー ・メよ

編成 ドラ・ポリスクラブ講堂で歓迎会が開催され、 カトマンズに帰着。音楽隊を先導に市内パレー ール着。 二十九日以降ポーター替えをし、 荷の 打って変わって快適な旅を続け、 整理 これより、 梱包に 御礼と報告、 バス、トラックをチ 挨拶まわり、 ロバによるキャラバンに再 十一月一日、ベ + 遠征報告をした。 ターし、 ドクター ドの後、 シ Ξ のお見 マヘン

え、 くの方々がご出席くださり、 舞いとあ で祝賀ディナーパ 九日と十日、 わただしい 1 各々帰国 日々だった。 テ 1 を開催したところ、 の途についた。 盛会であった。 七日にシャンカール すべての行 内務大臣 はじ • ホ 事を終 テル

### 録概 要

隊の名称 九 九六年 信州 ネ 10 1 ル警察合同 ヒマラヤ遠

#### 征 隊

主 催 信州大学山 岳会、 信 州 大学学士山 岳会

目 的 ラトナチ 1 IJ 初登 嵿

活動期

間

九九六

年

八月~十

月

隊の 構成 総隊長 1 野 村昌男 55

H 本側隊長 11 渡部光則 46

H 本側 登 攀 隊 長= 田 辺治 35 隊 員 11 金 子 鉄

男

H

のアタッ

ク、

頂上直下より引返す。

+

24

H

第

次

50 澤 中田克彦 38 内 H 28 花谷泰広

ネパール側隊長 =グプタ · バ K

ウ

ĺ

ラナ

56

ネパー ル 側登攀隊長=ギ 夕 バ /\ K ウ ル ジョ

1 44

隊員=ラムカジ・ジヴァコテ 1 36 サ

7

バ

K ウ ル・アレ 30

サー ダー=ヌル・シェルパ 38 Н A P

フ

ル ル・バハドゥール・ライ ・グルン 34 ドゥルガ・バハド 43 ダンバル・バハドゥー ル

(38)、ツル・バハドゥール・タマン 30

医師 =ヴィシュワナス・シュレスタ 32

リエゾンオフィサー=ジャヤ・ビシュヌ・ネパ IJ 1

40

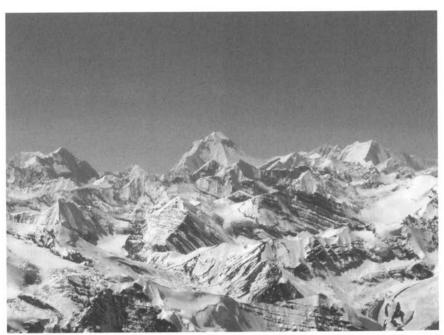
通信 ジマン・カバス 士二 バブ・ ラム 29 . パウダル ナワン・ギャルツェン・シェ 32 コ " ク 11 ラ

ル 26

行動概要 チンボー イ五名、 メイルランナ 一二名

六日 八月二十一日 1 建設。 カトマンズ出発。 二日西峰 本隊、九月一 到達。 二十五. 日後発隊カトマンズ入り。 八日C2建設。 H BC集結。 十月一 九 日 Н 

65



西峰より望むダウラギリⅠ峰

#### 報

#### ...

なお、本遠征公式報告書は九七年十一月刊行予定で九七」。 
「日山協第三十五回海外登山技術研究会資料集一九九七」。

路下山。十一月一日ベシ・サハル着。三日カトマン

全員登頂に成功。二十二日BC撤収。降雪により往

ズ帰着。九日以降順次帰国。

およびサポー

ク隊

(渡部、野村、花谷、ジョシ、ヌル、

アタック隊

(田辺、

澤田、ドゥルガ)

の五名登頂。十

十六日第二

名登頂。十八日第三次アタック隊

(内田、

**計十六名** 

林、シヴァコティ、ダンバル)五名登頂。

# 女神の山「チョモラリ峰」全員登頂

# 一九九六年日中合同登山隊の記録

### 長野県山 岳協会

はじめに

いう、畏怖の念さえわいた。 していて、言葉が出なかった。こんな山に登ってもよいのかと 美しい山と大いに期待していたが、現実はそれをはるかに超越 九九五年九月の偵察時、 初めてチョモラリ峰の全容を見た。

チンツォで最初に北 チベットからシッキムに抜ける街道を南下していくと、トー 面を眺めることになる。 まさに秀麗で、天

たのは、この西面ではないかと推測される。さらに南へ進み、 ラという分水嶺をなす緩やかな峠に至ると、西壁が眼前に迫る。 女が裳裾をたなびかせるイメージである。さらに南下し、タン П 一慧海が「 毘婁遮那のおごそかに座するがことく」と表現し

パーリの町の菜の花越しのチョモラリ峰は、三角錐で、人々に

微笑みながらそびえ立っている。 仙女の峰」と呼ぶにふさわしい名峰である。 見る方向で著しく姿を変えるが、いずれ 6

地

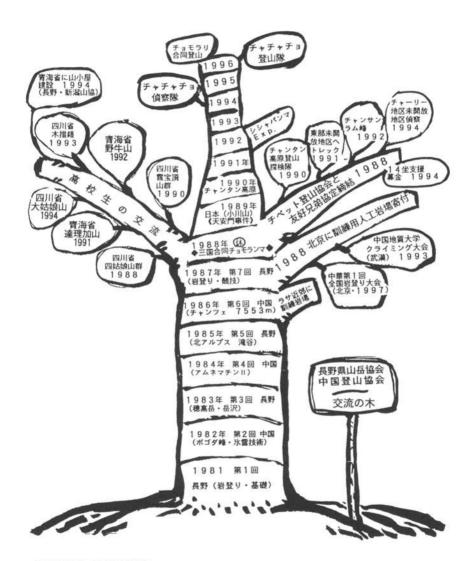
元の人たちが

### 計画の成立

ることができた。

この峰に、一九九六年秋、日中合同隊は幸いにも全員登頂

たちは「交流の樹」と呼ぶ次の図を使用する。 山協会と交流を続けてきている。 長野県山岳協会(以下長山協)は、一九八一年以来、 この図の樹齢はチョモラリ計画実施点で十六年である。 その歴史を説明するため、 中国登 この 私



日中合同登山技術研修会

間 は でき れれ、 育成に に 0 てい たずさわ H 中 3 奺 H 2 方の若 中 た 人は 合 同 11 登 岳 かなりの Ш 人が育てら 技術 数に 研 修 会 れてきた場でもあ 0 ぼ は、 り īF. 年 確 計 把 画

ラリ 広さと大なる成果を踏まえてのもの 九三 合 可 登山 年 八月、 を正 式 中 に 国 提案してくれ 登山協会が であ 長山: た 協に対 る 0 は 交流 L て名峰 0 歴 歴史と幅 チ 3 E

相手国

を訪

問

あうも

0

で

この時

0

研 0

修

者

は

現

在

長

Ш

協

お に 7

氏

行

わ

登

前の

基本を深く研

修するも

であっ

た。

毎

年交互

よび

中

玉

登山

界

の中

核になっ

てい

る

F 3 彼らはこう言っ モラリでい いり 登山をしよう」。 てくれた。 地道 な交流活動 の記念碑として、

はこ で、 は、 峰 チ 外国 チベ が世 れまで登山 3 モラリ 人 ット 界 の立 0 登 鎖 され ち入り Ш K 0 時 家 そびえるチベット な 0 代 垂 が禁じられ か およびその 2 涎 た の的であ 理 由 で てきた地 後 りな あ 自 0 る 中 治 がら、 EII X 紛争 域 亜 てあ 東 チベ 地 P る。 域 とい " チ 1 1 3 うこと 側 から モラ 県

協との友情を第一 に 相 当 に入域し登 な努力を要し 義 山 にし するため たと た特 聞 别 11 に がなも T 中 お 0 り  $\mathbb{R}$ だっ 登山 7 協会は to 0 1: 7 K 0 提 家 案は 0 許 長 П

> Ш 取

した。

組 月 2 ٤ 承 諾 W 提案を受け 0 政 返 0 事 裏 を 付 た私 H た 0 たちち わ た it め には、 で あ る。 大計 年. 間 私たち 画に 0 検討 対する組 なりに を要し、 友情 織 とし 九 むく 7 九 74 0 取 年.

> ようと最大限の努力をし た結果であ 0

握

### 備 期 間

め方と基本戦略を十分検討した。 載せられたが、 私 争 たちち K 谷 は Ш 実 施決定後、 協会交流 基本戦略 部 直 長 は次 ちにこの を長 の四 その 野 点であ 計 に 招 内容は議定書 画 0 11 責任 b た。 闹 そこで今後 者であ 隊 0 員 忘備録 る張 徹 0 江 底 進 援 に

合同 登 Ш の意義を正 確 15 踏 まえ行

することを

確

認し

てスタ

1

1

t

②全員 一登頂 をめざす。

③安全登山 に徹する。

4 環 境保全に努める。

たち はこ 0 四 点をまとめ 美 峰 を、

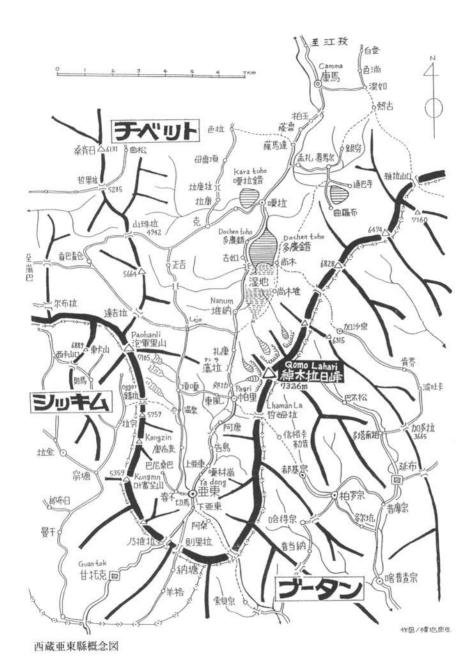
私

と表現 九九五年 ĺ た。

母体の は日 た。 この 中 間、 実行委員会と財政支援をお 十二名による偵察隊を派遣 N H 月 K をはじ 長野 85 市 とす で議定 3 書の調 願 報 いす 道 隊 計 る後援 印 0 画 式 参 が 細 から 加 会も活 \$ 部 行 決 わ ま れ 確立 動 り を 1 さ 月 始 n 15 進

九 九六 登 Ш から 年. 開 に 入り、 始された。 双 方の 準 備 が 進み、 八月北 京に隊 İ が

集



### 登山活 動

(1)予定した作戦 第一ステージ= 荷上げとC2建

ステージョ ステージョ C3建設と荷

アタ

"

ク

第四ステージ 11 撤収

(2)各キャンプの状況 BC=四七〇〇篇、

トラックで入る。

大テント九張、

パー

1 ナ 通

ル 信

テント(日本製、 インマルサット基地) 張、

C2=六〇〇〇六、 国境上のコル。 テント八張

C3=六八五〇片、 セラックの陰。 テント四 張 テント十張

C1=五三〇〇六、 氷河上。 大テントー 張、テント +

張

(3)行動の 概要

八月九日 Ė 北京 成 H 5 北京 成都

H 成都 5 ラ

H ラ サイ ギャ ンツ I

十九 H H 1 t 建設 ツェ 5

Ŕ

一十六日 C2建設

> H のため 会 В C

月 四 H

九

登山

再

C 3 建設

第二次隊登頂 第一次隊登頂 (十五名) 十名

Ħ

H

H C 3 撤収

十六日 C 2 C1撤収終了 撤収

H

BC撤収~シガツ

I

H シガツェーラサ

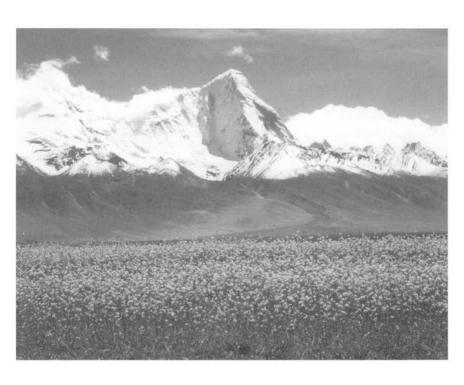
于 五 H ラサー 成 都

H 成都 北 京

三十 Ħ 北京 成

行動内容

作を二 のアイ C で四日間荷上げしてもらうことで解決した。二つめはC1 が多くなったことである。 2の建設である。 ひとつは全員登頂を目標としたため、 ースフ 日間で完成したのは予想以上の成果であった。 ステージのC2建設までについては三つ 1 ルの突破であった。 予定地の これはBC~C1間を民工約二十名 コル はプー 高度差二〇〇江 タン側からの湿気の 荷上げ量 の問題点が 0 (特に食糧 三つめ ル 上部 トエ. あ



建設できる状況であった。第一ステージはまあまあの天候で、 ほぼ予定通りの進行となった。 り道にあたるらしく、常にガスの中で、三度目の到達でやっと

想していたが、傾斜は落ちず、C3までの長い距離を固定ロ をつけてC2へ戻った。翌日はC3建設をと意気込んだが、 南稜に出れば傾斜は落ち、 り作業であった。時間はかかったが、半日がかりで完成した。 のルート工作から始まった。傾斜が強く、 夜から降雪。 プを張らなければならなかった。一日では無理なので、 第二ステージはC2から南稜に出る高度差二○○≒の大雪壁 せっかくの固定ロープは雪崩に埋められてしまっ ウォーキングだろうと偵察時から予 固定ロープのベタ張 見通し 同

がBCに撤退し、再度C2以上の工作をすることにした。 ここで日中の考え方に大きな違いが出た。 C2の停滞は危険と体力消耗等の不合理さであきらめ、全員 BCに下山して、現状分析と今後の展開について検討した。

当初の計画通りの作戦を主張した。まだ半数の日本隊員がC2 食糧の荷上げが全員登頂の必要条件と考えたからである。 泊まっておらず、高所順応が不十分であることと、 日本側は第二ステージが完成していないので、これを完成さ 方中国側は、 度休養を取り第三ステージのアタックに入りたいという、 食糧の荷上げは最小限にして、順応が進んで 計画通

0

た その理 その後じっくり全員登頂をめざせばよいという主張であっ い てしまうとい る隊員で一気にC2に達 由 は チョ う速攻案を強く主 モラリ 峰周辺の天候の悪さと変化の速さであっ L その足でC3を建 張した。 第 次隊を登 設 し登 頭さ 頂 しせ、 た。 をし

私も日本隊員にていね もタクティ んなことは 熱心に議 なかっ 論され " クス表を描き直 た。 た ここが合同 順 いに説明し、 調に上 してみた。 1 登 Ŀ 意見も聞いた。そして何回 山の ^ 向 キー か 0 ポ てい イントであろう。 る時には、

上がる。

0

目

まうので、隊員には十分説明したつもりである。
に入れた。しかし、すでに上部で活動していた者が第一次アタッに入れた。しかし、すでに上部で活動していた者が第一次アタッに入れた。とかし、すでに上部で活動していた者が第一次アタッの間に、速攻型に作戦を変えることにした。先発隊のアタックの間に、

第二ステージと第三ステージがひとつになってしまったわけで第二ステージと第三ステージがひとつになってしまったわけである。

をめざす。 で第一次隊のアタックを待つ。 天候の回 第 復を見きわ 一次隊 は め 荷 E 登山 げ をし 再 開。 な か 5 第 順 化 次隊は に 取 り組 直 線に み、 C 頂 2 1:

てくる。 月八日、 C3を出るとすぐに深いラッ 1 ーラン シーバ ーを通し て第 セルだという。 次隊の 様子 から 般に 伝 わ は 2

> 風で飛ばされ新雪は少ない ければ登 ンシーバ だがんばれと言うだけであっ 通過できるかどうかわからな られる。 1 そして昼ごろ、 れ な が告げてくる。 11 0 ではない ナ イフ そして頂上。 はずの所である。 かという不安も吹き飛 た。 15 とい エッ 約 う連絡が入る。 3 時 状 間後、 第一次隊が登頂できな 0 軟雪部分にはばまれ、 極度の苦労が 通 過したとトラ 下からは 大歓 声 から

標が H おい 達 せら て、 + n た H には 快晴 の中、 第 次隊も登頂。 全員 一登頂

主張 雪穴に残置することで折り合 てを下ろすことが 心はテイクアウトである。 最終ステージは撤収作業であ L N た がり部隊の日 中 国隊 員は無理だと主張 できた。 本隊員は当初の計 問 登山機材は固定ロープも含め 題はC2の た 2 た。 対立し 画通り全量下ろすことを 環境保全という目 余っ た た食糧であ 局 てす 標の 2 部 た 中

ピンチに陥っ 埋められ クウト C2から全員下山した翌日降雪があり、 0 困難さを思い知らされ たのを見 ていただろうと想像せざるをえなかっ た時、 もしもう一 た場面 H であ 荷 下ろ 2 Ш を ル 1 てい から テイク たら 雪崩

## 成功の要因と反省点

成功の要因の主なものは次の点である。

①十五年にわたる日中登山交流で培ったコミュニケーションの①十五年にわたる日中登山交流で培ったコミュニケーションの

②計画の出発点で、基本戦略を十分検討し徹底したことが、を登山、環境保全という困難な課題を最後まで追求することが登山、環境保全という困難な課題を最後まで追求することが、ト

成功の直接的な要因になった。 じ的確であった。特に一度BCに徹底した後の作戦変更は、 と経験豊かな加藤隊員の協議による判断、対処は全期間を通 と経験豊かな加藤隊員の協議による判断、対処は全期間を通 の滞在の多かった隊長、最前線の山田、羅申の登攀リーダー

④天候の判断が当たったことも大きい。この地区の気象データの天候の判断が当たったことも大きい。この地区の気象データまた、主な反省点は次の三点である。毎天候の判断が当たったことも大きい。この地区の気象データまた、主な反省点は次の三点である。

なぐらいの、困難な作業といえる。余力のなさが原因である。このためのタクティック表が必要の人の食糧の荷上げが多かったこともあるが、最終的には

きり指名すべきであったと思っている。で、区別意識が薄かったようである。協力隊のリーダーをはっで、区別意識が薄かったようである。協力隊のメンバーなの必要であった。彼らはすべてチベット登山隊のメンバーなの②中国側(特にチベット)隊員と協力員の任務分担の明確化が

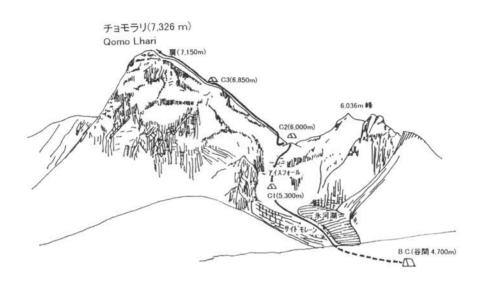
③日本隊員の未成熟さが目についた。高所経験が少なく、行動の日本隊員の未成熟さが目にゆとりと思い切りが足りなかった。また書類作成の未熟さなため、上がらなかった等)など、日常生活レベルから直すなため、上がらなかった等)など、日常生活レベルから直する。

### おわりに

私たちは、チョモラリ計画をほぼ完璧に成功させた喜びとと私たちは、チョモラリ計画をほぼ完璧に成功させた喜びとともに、「交流の樹」をまた一段成長させることができたこともをに、「交流の樹」をまた一段成長させることができたことも私たちは、チョモラリ計画をほぼ完璧に成功させた喜びとと

峰は、一九三七年にイギリス隊が南稜から東面に回って登頂、登頂ルートについては、次のように考えている。チョモラリ

①テイクアウトが完全実施できなかった。全員登頂達成のため、



チョモラリ峰スケッチ

目

H

本

記 的

隊の名称 標 友好 チ 好と交流の総事業を記念し、 野県山 3 で発展 E ラリ 中 国合同チョモラリ峰登山隊 岳協会と中国登山協会の十五年にわたる友 峰 0 ために合同登山を行う。 (七三二六) 両登山協会のさらなる 九

だが、 では タンと は 九 な 七〇年にインド・ブー 一稜とい 0 か 国 なり かと推察される。 1 境を忠実にたどって登 1 える。 困難に思えるの 0 詳 細 この は不明である。 ル タン隊 1 で、 1 のブー 前 0 が た。 南 私たちは、 隊はさらに東 稜 - タン側 地図上 から登頂 チベ か か 5 7 面 0 0 T プ とブー ル 展望 るよう 1 か

П 目 秋天の北京 か 5 H 中合同 参画され 0 朝 F てい 3 モラリ る曽曙生氏に、 峰 登山隊のフィ 北京で次の手紙をお ナーレとした。

 $\mathbb{R}$ 

あ

た

り

中

・国登山協会主席で日中

登山技術研

修会には

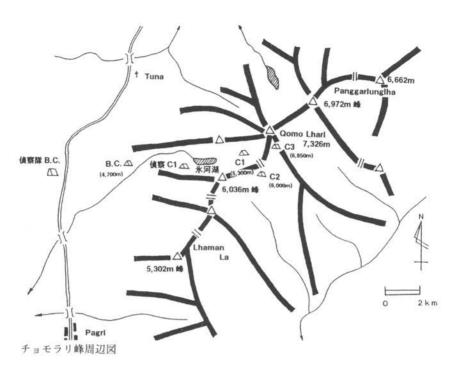
員は故国 に向 か う

両国 一朋友のこころには

3 までも美しく

モラリ峰がそびえ立

隊長=宮本義彦)



隊の構成 争 報道隊 日本側 K 側 役員 役員 成天亮 隊員=·宮本義彦 役員=百瀬尚幸、 ・印は登頂者 副隊長)、•平塚章 Ш

中伸作

36 ・三尾敦

• 松谷拓也

24

63

32

洞井孝雄

46 ・加藤 39

=王鳳桐、

洛桑達瓦、

張江援

(中国側責任者)、

(秘書長)、

趙建軍(通訳

11

• 羅申 開村 25

登攀隊長)、

39

女

(女性

32 33

丹增多吉

34 桂桑

【協力員】

青

文彦、 ・嗄亜、 報・女性 濃毎日新聞)、 ・東野良、 伊賀上賢司 · 普布、 村田彰、 ·加拉、 多吉占推 ・小斉米、 (以上NHK)、 格桑平措、巴桑、●多布吉、 ・米山悟、 (新華社)、 次仁班旦、 高橋克昌、 郭思 · 鮎沢政文 平措次仁、 (中国体育

信

後

援 催 頂 間

長野県をはじめ 長野県山岳協会

団 国

田村宣紀、

清水公男(医師

52

(隊長)、

・山田誠

(45) (マネージャー)、

主登期

九九六年九月八 九九六年

Ħ

. H

中

登山 体

協会

八月~

九月

## カカボラジ初登頂

### 幻 の山カカボラジ

でも知られてきた「幻の山」だ。 八一は)は山の写真すら公表されず、 の国の最高峰であり、 けていない大自然や秘境が取り残されている。 ンマー連 邦 (旧ビルマ)の北の端にはいまだ人を寄せ また未踏峰でもあるカカボラジ山 資料が皆無に等しいこと そのひとつ、こ 五八 0

う言い伝えられた幻の山が国際的に最初に確認されたのは半世 れたうえ、分離独立を掲げるカチン族と政府の対立が加わり、 ドにより報告された。 雲の向こうに手のひらを直角に立てた山がある」。 周辺を踏破した英国の植物探検家、 だがその周辺は広大な密林や峡谷に遮ら キングドン・ 地 ウォ 元でそ

> 数えられてきた。 長い間、 外部の侵入を拒み、 現存する世界的な秘境のひとつに

尾

临

隆

しかしようやく一九九三年十月に軍事政権とカチン族との

和

に、私はこれまで外国人に固く門戸を閉ざしていたカカボラジ 平が成立し、 登山許可決定を早める要因になったようだ。 への登山許可を申請した。 の登山申請が、ミャンマー政府に寄せられていた。 国内の情勢は好転の兆しを見せ始めた。 同じ頃、 世界中から六隊もの外国隊 このことが これを機

Ш 0 偵察に出かけることにした。 九九五年、 一月下旬から約五十 日間 をか

報はほとんどない。そこで私は当時十

ミヤ

ンマーの最高峰でありながら、

この山に関する資料や情 歳の息子を連れて、

77

け、

往

復 Ŧi.

できなかった。 この地域特有の豪雪と悪天候に阻まれ、 ○⁴。☆にも及ぶカカボラジまでのアプローチの調査を行ったが、 山の姿すら見ることは

か だが結局、彼らもまた山の姿を見ずに引き返さなければならな かうフランス隊や、 ったのである。 この偵察行の帰路 に、 日本の一ツ橋大学山岳会隊ともすれ違った。 同じくこれからカカボラジの偵察に向

だった。 くれた。つまりこの時期には山麓の雪が消え、ベースキャンプ 的は果たせなかったが、「カカボラジを登るには七月から八月 に至るまでのアプロ かけての夏の時期が一番よいだろう」と地元の人々は教えて カカボラジへの登頂ルートを確認するといった偵察本来の目 ーチが比較的容易になる、 という理由から

で狩猟や薬草を採りに出かけることがあるのだという。 現に彼らは夏になると、 カカボラジのベースキャンプ近くま

# ミャンマー人による初登

山岳組 ので、 ンマーには唯一、ミャンマー登山協会といった、 その ここ十数年来、 年の 織が存在するが、 ンマーの登山家たちをトレーニングするためである。 Ŧi. 月 私は再びミャンマーに渡った。 実質的な登山などほとんど行ったことが その活動の内容はハイキング程度のも 国を代表する ミヤ

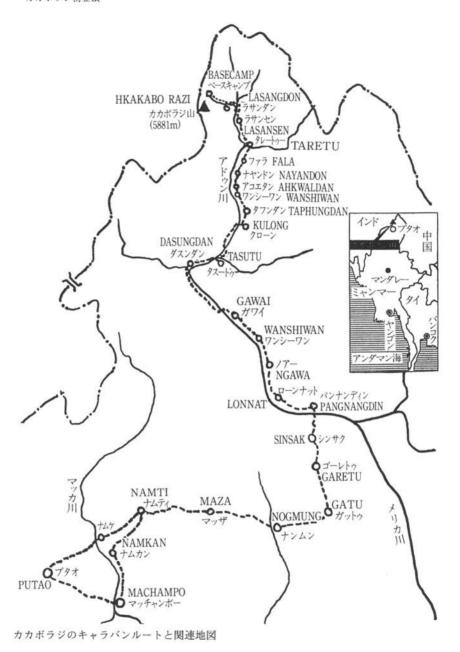
> 11 ない、というのが現状のようだった。 たしかたのないことだ。 かつての国情を考えれば

らためて知ったからだ。 た。この国の最高峰が人跡未踏の処女峰であることをその時あ 実際に現地に行って交渉を重ねていく段階で、その考えは変わっ だけの登山隊、 このカカボラジ登山計画を考え始めた頃は、 つまり私と私の家族だけで登るつもりだったが、 尾崎ファミリー

0 ンマー人によって初めて登られるべきものだ、ということをそ 時強く認識した。 国のシンボルとでもいうべきカカボラジは、 自国民であるミャ

た。 ニングはミャンマーの中央部、シャン高原の西のはずれ 祖国の最高点に立ってもらおうというものだ。 0 マー・フランス三国友好カカボラジ登山隊」とあらためた。そ トレー 面倒な書類手続きに時間を浪費してしまい、 カロー付近の岩場で行った。約一カ月の期間を予定していたが、 目的は、ミャンマー人に登山技術を知ってもらい、 すぐさま登山隊の名称も、 ニングに終わってしまったのは、かえすがえすも残念だっ 「尾崎ファミリー・日本・ミャ 結局二週間程度の 第一回目のトレー 彼ら自ら

側の実力のほどを知ることができた。受講生十二名のうち十名 なかったが、とにかくこれまでは知るすべもなかったミャンマー こんな短期間ではトレーニングの成果などほとんど期待でき



79

の力を持っていることがトレーニングを通じてわかった。 の力を持っていることがトレーニングを通じてわかった。 までがヤンゴン出身者で、彼らはほぼ予想通りの初心者だった。 できたこの二人の若者は、ガルドジ(26歳)とナンマー・ジャンセン(23歳)。 彼らは冬の偵察時に私が雇った現地のガイドだった。 債察の時にほんの少しだけ、その実力の一端をチラリだった。 債察の時にほんの少しだけ、その実力の一端をチラリだった。 債察の時にほんの少しだけ、その実力の一端をチラリだった。 債察の時にほんの少しだけ、その実力の一端をチラリだった。 していることがトレーニングを通じてわかった。

した。

## 家族とともにカカボラジへ

同年七月、私たちは本格的にカカボラジへの登山を試みるこ

風土はガルドジのような屈強な男でさえも、 だ。十歳の息子 故郷の村に帰る途中、 わず常に笑顔をふりまいてがんばって歩きとおした。途中の村 上げたくなるほどのこの困難なアプローチを、 雨季のまっただなか、 わが隊のエースであったガルドジの死を知らされる。 ーニングを終え、 私の妻フレデリックと小さな二人の子供たちも (真)と七歳の娘 ナンマー・ジャンセンと共に、 マラリアに倒れたのである。 亜熱帯雨林のジャングルを約一か月か (沙羅)は、 いとも簡単に 一言の文句 大人でも悲 この地 いったん 彼は 死に 域の も言 鳴を

追いやってしまうのである。

氷河モレーン上の標高三八五○㍍地点にベースキャンプを設営だにしなかったアクシデントに見舞われながらも、八月十一日、今回の登山は出だしからわが隊のエースを失うといった予想

そしてまた奥行きの深い複雑な山だった。はしない。カカボラジは想像していたよりもはるかに難しく、折雲間からのぞかせるが、決して容易にその全貌を見せようと正面に仰ぐカカボラジの北壁はその圧倒的な城壁の一部を時

して八月十八日、標高五一○○旨地点に達した。の後岩稜のコルを越え、危険極まりない上部氷河を強引に突破標高四三○○旨地点の岩壁の中間に第一キャンプを設営。そ

年はあっさりと引き下がった。ち合わせていなかったからだ。残念だったがそんな理由でそのち合わせていなかったからだ。残念だったがそんな理由でそのまだ始まったばかりだったが、これ以上登山を続けるにも登路まだ始まったばかりだったが、これ以上登山を続けるにも登路

## 外国人ひとりだけの再挑戦

ることすらできない超緊縮予算での再挑戦になった。 てきた。今回は予算不足のため、 翌九 六年のほ ぼ 同 C 時 期 に、 私 前回 はまたこの のように家族を連 カ カ ボラジ 最終的に れてく

手段を使わざるえない状況に追い込まれたのであ はスポンサー なしのすべて自費という、 かつてない思い き

2 た

登山 きらめなければならなかった。 ていた。当初メンバーに予定していたENSA(フランス国立 の外国人は私一人だけという、 カボラジ登山隊」の名は変わらなかったが、ミャンマー人以外 尾崎ファミリー・日本・ミャンマー・フランス三国 ・スキー学校) の教官ら三名の参加も、 実に淋しいものになってしまっ 資金不足のため 友好好 あ 力

ここにミャンマー側のメンバーを紹介しておく。 ミャンマー登山協会会長のドクター・ペンソー

52 歳

は今

3 てついてきてくれるのだ。 のカンカンムー少佐 (42歳)。 回が初参加だが、 ての指揮をとる。 まり登山活動ではすべて私一人の判断に委ねられているのだ 副隊長は九五年の偵察、本隊共に苦楽をわかち合った盟友 何とも嬉しいことに、 立場上、ミャンマー側の隊長という名目であ とは言ってもベースキャンプから上の行動、 彼がミャンマー側の実質的 彼らはこの私を全面的に信 類し なす

るし、 この二人をフランスのENSAに送り、三週間のトレーニング を受けさせたのだ。 登山 (29歳) が参加した。二人とも九五年の試登にも加わってい 多少なりとも経験は積んだ。 一隊員としてはヤンゴンからテ 正直いってその程度の経験でカカボラジが そして私は九六年の六月に、 ェトン君 (33歳)、 ソーモー

> 格的 たからだ。 登れるなどと考えたわけではなかたが、 な氷河 0 ある山で多少なりとも経験を積ませてやりたか 今後のことも考えて本

の人たちだ。 あとの登山メンバ 1 はすべてミャンマー最奥のタフンダン村

歳)、そしてデジー うしてもこの飛び抜けた実力をもつ三人の力が必要だった。 九五年以来のナンマー・ジ (21歳)。 カカボラジを成功させるには、 ャンセンとその兄ジョ 36

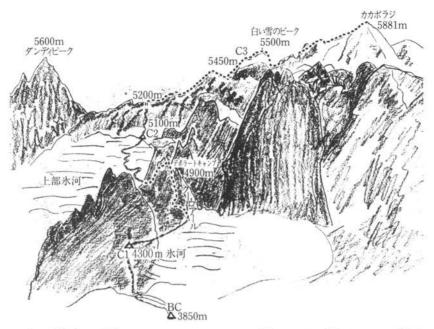
"

1

### 雨 のなかの困難なアプロ コーチ

は、 今にも切れて落ちそうな竹とツルだけ となる。とにかくうんざりする雨のなか、 が人の侵入をはばんでい 置するカカボラジのアプロー るところが泥沼と化す。 生きぬこうとしている魅力的な山岳少数民族が住んでい 亜熱帯雨林の深いジャングルが続き、その上部では険. くつもの危険なガケ崩れの跡を通過しなければ ベースキャンプまでは雨季まっ 雨季には小さな支流を含めたほとんどの川 そしてまたあらたな冒険が始 大自然の厳しさと闘い、 そして数えきれない る。 この困難かつ長大なアプロ また調和 チは、ベースキャンプの まっ ただなか た。 で編 しながら力強くたくみ イラワジ河 道は での過 h かが、 だ吊 ほどの川を渡る。 82 酷なキャラバン 激流 ならな かるみ、いた り橋を渡 0 源流 直 ーチに 15 前 あるい に位 ま

0 11



荷

E 伸 ル

げ

が

始 た。

まる

ば

L

して次の

H

か H

is

は

Ŧi.

人の

隊員によって精

力的

に

取り

付き、

その

のうちに第一キャ

ンプまでル

1

カカボラジ北面ルート図

※点線のルートは裏側になっていて見えない

所

だ

月

H

ンマ

1

3

+

0

人で昨

年

同

到着し

た。 て九

昨

年 年

はおよそ二

週

間

家族と楽しい時を過ごした場

月

H

あ

0

な

か

11

1

スキ

プ

お

数

0

E

ル

ブ

三

マラリア蚊を含めた吸血虫など、

は 濁流

とな

2 11

てそこを渡る人間

に

む

か

2

て牙をむける。

ま

た

嫌

な U

毒 ただだし

虫

歓迎をうけ

か n 7 族 知 1 П n  $\mathbb{R}$ īE. 0 な 隊 籍 確 をも に 員五人のうち三人までが、 は、 驚異的な チベッ す でに四世代にわたってミャ スピ ト系の少数民族 と疲れを知らない タフンダ だ。 彼ら マー 村 彼ら 0 強さは 住 住 0 む む 体 T は ル 力

### ス帯の突破

私は圧倒され舌を巻く思いだった。

が ル 7 稜 に 0 集 月 向 荷 0 Ŀ. コルまでの t か げ 3 2 危 を T 174 険な H ル 1 たあと、 ル ル 1 私とナンマー T. 作 ト工作を完了させた。 1 でも を開始した。 大岩稜 ある。 0 コル ジ + ンセ 0 に 突き上 H 0 ンは ル 今回私が用意した 1 で 1 け BCからC るク は 一往復し 落 石と て大 7 1 崩 ま

二日行程の垂直の岸壁をはたして登ってこれるのかどうか、 それは別問題だ。 たからだ。 ただはしごを用意したから今度は登れるかというと それにこの重くてかさばるはしごを背負って、 カカボラジ山 5,881 m

る。 実にあっさりとこれらのはしごをかつぎ上げてしまったのであ 11 2 た危惧もあった。だが幸いなことにタフンダン村の三名は、

る。

昨年はこのは

帯で使う組立式の特別に作ったアルミニウムばしごが入って 特別な装備のなかには、これからでてくる上部氷河のクレバ

ス

しごがなかったことが直接の敗退の原因とな

作った。 降り続く。 い。そこで大岩稜の切り立ったコル上に、 雨季だから当然なのだが山に入っ C1から上部氷河のル ート工作は遠すぎて効率 ても毎 仮のデポキャ 日嫌になるほど か悪 から

るかに上まわる数のクレバスに行く手をはばまれ、 この日、 ンツーの三人が上部氷河に入り、 活路を見い出すことはできなかった。 タズタに引き裂かれた迷路のような氷河のクレバス帯に挑んだ。 りのテントを張った。ここから私とナンマー・ジャンセンとジョ 八月二十七日、 さんざん苦労して突破を試みたが、 猫の額ほどの狭いスペースに、 アルミばしごを組み立て、 私たちの予想をは なんとか けっきょく ズ 張

横切るルートだ。 向 氷河突破のメドがつかないまま、 の大岩稜 かう。 ここの通過は距離にして約五〇〇にはあり、 八月二十八日、 上部にお п 能性 0 お あるルー きのうの過激な行動で体中のあちこちが痛 15 かぶさっている巨大なセラックの真下を トがたったひとつだけあった。 とにかく今日はC2予定地に どんなにスピ

ドを出 は広域にわたってものすごいデブリで埋めつくされている。 して登ったとしても三十分はかかるところだ。 その一 83

### 0 故

な は 11 年 11 クレバ い所だからだ。 は つセラックが ひとつ。 か えっ スが てそ 様 あ 崩れ れ に 2 て通 祈 が大きく幸 てペチャンコに押しつぶされてもおかしく りながらそこを駆けぬけるしか方法はない。 過するの 11 した。 は 不 可 能だったからだ。 昨 车 は幅三十ぱもある広 ルート

しみ すると 下に埋まっているようで、 1 かし ながら、 の期待も空しく、 私たちはそこを無 昨年荷物をデポ あきらめざるえな デポ品は手の 事 した所まで登りつめた。「もし に 通過 届かないほど深 深くもぐるベタ雪に苦 か っった。 11 雪 0 か

げる。 頂 崩にたたき落されないように用心しながらジリジリと高度を上 に悪く、厳しいものだった。 (3700) いないの 上に続くと思われるのこぎりの 私はそこから垂直の岸 頂 さらに五十四 に達した。 稜線には い上 0 壁に付 一壁に がった。 プで五ピッチを伸 時 取り付き、 11 た雪の 八月二十九日、 々、わきをかすめ この日、 刃のようになっ 状態は昨 昨 上部氷河のベルクシ ばし、 年 0 C2から 年 最 た標高五 カカボ ていくチリ雪 よりもはるか 高到達点 ・ラジ 頂 上稜 £ 1

15

せ

線に向 ルント

か

てル

トを伸ばす。

この

稜線に出さえすれば

あ とは を重

の上にC2を設営した。

力

ボラジ

登山

の本当の

むずかしさはここから始

まる

0 だっ 実際のカ

た。

るごとに急激にしぼんでい

った。

今までが序

0 観 D,

もなるだろう、

と思っ

てい

た当

初の

楽

主 義は日

> 積 ほど両側が れ な巨大な雪 に ば、 気温 もってい たどらなけ が高 たちどころに雪崩に飛ばされてしまうことになる。 る重い雪 切り立 庇 11 ため を右 n ばならなかった。 雪 に った鋭い雪稜であるにも 左に は 0 状態が非常 微妙な飽和状態を保って 捲きながら 斜面を直線的 に 悪い。 頂 E. 稜 かかか 今に 線をできるだけ も崩 に横切ろうとす わ 5 11 た ず、 れ落ち 忠実 面

を出 きた。 悪すぎるの はずである。 しこれでなんとか 達した。ここが 悪雪の稜線が続く。 なかった。 の手の 0 発。かつて私が経験したことがないほど技術的にむ カカボラジ 時 初めて最 か、 登 九月二 今日 攀 この 頂 は 初の もまた頂 0 現在自分たちがいる位置を確認することが 上でない 私 H 日は時間切れでたっ の最も得 頂上は、 午後四時 顕著な白 いよいよ頂 上に届 のは言うまでもないことだが、 まだは 意とするところな 11 近くまでルート工作をした。 雪 くことは るかかか 0 上アタックのつも ピー たの七ピッチし 7 なかっ なたにそびえて Â. 0 だ た 五〇〇計 のだ。 が、 りでこ ずかか か 相 が伸ば L 手 に 0 か が L

してしまうという予期し デントに見舞われた。 で用意した四 いことは 台 重 0 な るも ガソリンコン 四 0 ない、 で、 台とも修理不能の危 連 そし H のうち四 0 悪天候 て致命的とも 台ともすべてが 1 機的 加 え、 な状況がやっ 11 えるアクシ 今 0 故障 登 ılı



カカボラジ山頂。筆者とナンマー・ジャンセン

アルミはしごを切断するのこぎりと、野菜、タマゴ、ジャガイ と共にベースキャンプにもどってきた。二台のガソリンコンロ におりて、 もなさけなかったが、とにかく全員がいったんベースキャンプ くる必要がある。 タフンダン村に置いてきてしまっている。 が必要だ。 てきた。今後登山を続けて頂上を狙うにはなんとしてもコンロ モなどの食料も持ってきてくれた。彼はこの仕事をたったの五 を持ってきたのはいうまでもないが、スノーバーを作るため は誰かがタフンダン村にもどってそのガソリンコンロを持って 九月十日の午後、待ちに待ったジョンツーが二人のポ 登山隊はあと二台のコンロを持っていたが、 コンロの到着を待つことにした。 こんな理由で登山を一時中断するのはなんと 登山を成功させるに

## 初登頂、そして初めての晴天

デジーの四人はC1に入った。

日の夕方、さっそく私とナンマー・ジャンセン、

ジョンツー、

日間というすばらしいスピードでやってくれたのだった。その

プに達したが、極度に危険でデリケートな悪場に時間をうばわこの日、私たち二人は白い雪のピークを越え、頂上稜線のギャッルキャンプ)入りを果たした。の強力なサポートを受けて、標高五四五○㍍のC3(ファイナカ月十二日、私とナンマー・ジャンセンはジョンツーとデジー

0 が崩れはじめた。 れ ここに戻ってこなければならない。果たしてそんなことが可 なると、 つきはじめ ため苦しい停滞をよぎなくされた。 それらを補充しにベースキャンプに一旦下りて、 ていた。 は思うようにのびなかった。 九月十三日と十四日はかなりの もし翌日 に頂上アタックをかけられな それに燃料と食料が そしてこの夜から天候 積雪と悪天候 また 底 15 能 を

ルート

ちの力をはるかに圧 手こずることはめったになかった。 0 Ш すでに登山を始 よりもずっと標高 80 倒しているのだ。 てから二十五日、 0 高 11 他のヒ カカボラジの難しさは私た マラヤの もたついているのだ。 山 々でもこんなに

だろうか

ギャップに到着した。 た二日分の雪は、 ると視界は閉ざされ イナルキャンプを出発した。 九月十五日の朝、 私たちを充分に苦しめたが、 雪が降り始めた。 私とナンマー・ジャンセンは六 カカボラジの正真正銘の極度に困難なピ はじめは晴れていたが三十分もす 難しいル ートに降り積も それでも何とか 時 半にファ

0

絶頂にほうり投げられたような気分になっ た

たち 十分、 てミャンマーの最高峰、 そうな急峻な山々が顔を見せている。 海のはるか彼方には垂直に切り立った、 アルナチャルプラデシュの山並みも一望できる。東西南北、 かぎり山また山が続く。すぐ近くにはチベット高原、 途中からヘッドランプの光をたよりに慎 間そこに滞在したのち頂上を後にした。 ンマー 初登頂劇は幕を下ろした。 九月十六日朝、 の実に三年ごしの悲願がここに達成されたのだった。 後三時十二分、 無事に五四五〇㍍のファイナルキャンプに到着した。 ・ジャッセンは無事ベースキャンプに帰着した。 登山始まって以来の晴天が訪 カカボラジ初登 かつては幻の 尾崎ファミリーとミャンマーの人 頂の瞬間であっ この日の昼過ぎ、 山とい クライマーを引きつけ 下降は困難を極めたが 重に下り、 わ れた。 れたカカボラジ 夜の た。 インドの 見わたす 私とナ 約 かくし 十分 ら遠ざかってしまいました。

### 山岳図書を語る夕べ

## 「アルプ」の変遷

―創刊から三〇〇号まで―

宅

## アルプ」創刊まで

な青空と銃声の木魂が思い出されて、それまで好きだった山かたちは、死者や怪我人を戸板に乗せて下まで降ろしたんですが、 の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に居合わせた私の機銃掃射で五十数人の死者が出ました。現場に関係を決している。 である。 である。 であるとは予に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予に東京の場合が、 である。 である。 であるとは予に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予 に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予 に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予 に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予 に東京外国語大学に入りましたが、まさか山岳部を作るとは予

三十二年に「まいんべるく」という同人誌を作りました。これり、絵を描くのが好きな連中で、そういうのが集まって、昭和串田さんを囲む若い外語のOBは、文章を書いたり、読んだ

たきっかけだと思います。

から名前を変えました。田久吉さんから「まいんべるく」が正しいと指摘されて、二号田久吉さんから「まいんべるく」が正しいと指摘されて、二号がまたひどいもので、語学が堪能なはずなのに「まいねべるく」

専門の創文社の社長が、ある日夢を見て山の雑誌をやらなけ ばと思い込んで串田先生のところに電話をよこしたというので かと言わ Ш 0 画を撮ってい n 二年勤めた明治生命を上役と喧嘩をして辞めた後、 まし 宅が一番暇だと、 た。 きっ る時 に、 かけはば 編集責任者にされたというのが本 串田先生から山の雑誌をやらな かば いかしい 話ですが、 'n

# 題名は「アルプ」、広告なしで

出 りました 0 13 たようなものです。 戦前 お宅に伺 田さんと尾崎喜八さん にあっ た梓書房の雑誌 て決めたのですが、すんなりと「アルプ」に決ま 題名は串田さんと私が上野毛の尾崎さん 0 線でゆこうとは、 山」のことが頭にありましたが、 初 80 から決まって

た 聞 高 たちの頭 木正 いただけでうっとりとしてしまうような時代でしたから、 創刊号に書い の中のアルプと言っても、写真で見るクロッカスの咲 スイ た事ですが、 スの ガイド 当時外国に行くのは夢のまた夢で、 の免許を持ってい るという話を 私

> く残雪のアルプスの風景だけです。そういう風景の中に育 0 育てていくような題名でいこうとなったわけです。 ようなアルプス志向といいますか、夢の山、 てイメージが膨らまないんです。 本の言葉や形に直してしまうと、 ものかを求めてみようと。 『山の絵本』は外国の翻訳を読んでいるような書き方で、 いい昭和三十三年三月を目指すことになりました。 しかし高原とか豊か あまりにも露骨・具 尾崎先生 0 あるいは心 見碧 な山 11 出 麓 遠 体的過 版 などと 方 は並 の中に その p ぎ H 何

いい性格を引き出せたという気がしています。あでもないこうでもないと考えなかったことが、「アルプ」の準備期間はほとんどなく、作りながら考えるという感じで、あ私のところに話が来たのが昭和三十二年の十月か十一月で、

昭和三十三年一月八日に、創文社に電話をして、翌日ぐらい昭和三十三年一月八日に、創文社に電話をして山に行ったなりと呑んでくれて、以後月に十日は充電と称して山に行っんなりと呑んでくれて、以後月に十日は充電と称して出きれて、翌日ぐらいて写真を撮ったりしていました。

者は誰にと決まってい さんに会ったり、二十九日には東京薬大で うなどして具体的 月二十日に毎 に動き出した。 日新聞社 ました。 に槙有恒さんを訪 原稿料は四百字一 この頃になると創刊号の 朝比 ね たり、 枚千円などの 雄さん 黑 田 執筆 に 初 会 子 0

ままで通したので、

これも「アルプ」の性格づ

けになり

まし

が 言葉で書

言えません。

その

は串

田さんや、

後で編

集に

加 ほ

わ

2

た

ける人か

がよくわ 辺り

からなかっ

たの

て

私

は

とん

甲

11 り

なすっ 言 編集責任者ですが、 などにも電話をしました。 条件を全部話し、 て下さって、どんな雑誌 ってなかなか原稿をいただけませんでした。 ているんで、 11 原稿を下さい 最高責任者は串 使い 原稿の催促をすると出来次第電話をすると まし 走りですと説明をしました。 た。 深田久弥さんはマイペースで仕 になるかわからな 山口 闽 耀 尾 久さん、 崎 0 両 11 先 以前から近く 加 というの 藤喜 生 私は 郎郎 事 形 解 は

値

1958-3 Alp ことが 見ていてばったり会う 行 話になることになり 和泉校舎の屋 今度は仕 深田さんの た たり、 あっ 事の たのです 家に遊 明治大学 上で山 面 で お U が ŧ 111 II な

うに隅々 をゴミというわ 一面にしたいので広告無しで行こうという方針 現 在 て広告は絶 7 は雑誌広告その 採算 までゴミなんぞを落とさない 0 けでは 辻 対 入れ 複を合 はあり ない \$ わ 0 ٤ ŧ せようとは考えたくな が せ 山の情報に とうとう最後まできれ しんが、 この雑 ように なっ てい したい、 誌はア で か ますが、 ル 2 プス き た 長 な \$ のよ 広 広 雑 調 15 告 誌 な 子.

> 噴煙 おられ さんの と山、 分い もよけれ 売は下手 後はそれを持 うな感じが出ているんですね。 ていながら山の森閑とした感じ、 大変です。 の接点から発したような絵がいいとなったんです 段でお 写真や絵を入れるについ 霧中 うより版画 文章では尾崎、 ました。 年をとっても人間 をい 個人的 人と自然との接点です どうしてもセガンティ でし るのなら 願いしたんです。 ば」と言ってくれましたので、 な方でした。 名の有る方たちに、 ただきました。 た。 版 一の世界ですでに名をなしておられるんですが 0 なつながりで、 編 7 画では畦 お手伝いしましょう」と言ってくださる方が大 集会議 串田 お願 両先生 0 畦 11 地さんのような方が 地梅太郎さん。 に行くの 0 無名の ても 番いい資質を持ってい 曽宮さんの絵は、 時 から、 1 に、 の目に適う方は 創刊号は曽宮一念さんの 創 拝借料とも言えないような安 アル どの 形も あるいは噴煙 から が楽で、 刊号に曽宮さんの絵が出ると、 思 突兀とした山 プ ない雑誌です 15 人が自分 絵の 畦地さんはご存じ 出 され に 曽宮さん 誰 相 方は安心でした。 大変に省略が ます。 応し 0 な 11 の轟々と鳴るよ 考え のか が、 より て、 11 か いら、 が 選ぶ を自 私に 玉 人と山 高原 一桜島 p わ 闽 のとな き は は 0 2 0 分 7 商 通 0 Ti. 0 11 H が 11

があったかは、私からは言いにくいのです。ルプ」らしいところ、山の文学の世界を育てるのにどんな苦心だけはまかせてもらいました。ですから「アルプ」の最も「アロ耀久さん、さらに後の岡部牧夫君なんかで決めて、写真関係

プ」は完成したのです。

これが、串田、大谷両氏のカットとみごとにマッチして「アルかけるなど、雑誌としてはぜいたく過ぎるほどの手間をかけ、正典さんがすばらしい手腕を見せ、表紙も特漉紙をローラーに正典さんがすばらしい手腕を見せ、表紙も特漉紙をローラーにがよりはいるできます。

# 串田さんと尾崎さん、そして大谷さん

串田さんが大学を辞めたひと月後にお目にかかると、学校を串田さんが大学を辞めたひと月後にお目にかかると、学校での枚捨てたと言うんです。申田さんは書く前に頭の中ですでに四枚捨てたと言うんです。一か月に六○本も書くことも驚きですがさらに、「原稿用紙を無駄にしたよ」と、一年間でたったのです。

紙を無駄にしない推敲、本物と偽物の差を知ってから、私は文原稿となってくるんです。尾崎先生の推敲、串田さんの原稿用吹き出しを入れ書き直しをし、最後にペンで清書して、見事な尾崎さんの場合は大学ノート一行に細かい字で二行ずつ書き、

失敗談と言えば、

十三号の表紙の版画は逆さまに

印刷されて

ういう重い荷を背負って誕生した雑誌だったんです。そこまでの文章を求めていたと、今になると考えられます。そプ」というのは、尾崎さんと串田さんの暗黙の了解のもとに、章が書けるということを一切言わないようにしました。「アル

す。 ている方がいらっ 0 になったので、第二刷ではちゃんと訂正してありますから、こ スをしでかしました。しかし完売となり、何と増刷ということ ALP 4月号 ところが第二号では見本がまだ手もとに来なかったこともあり、 カット、下に左から「ALP 第二号四月号に限って表紙が二種類ある訳で、もし両 アルプ」の表紙は上に大きく誌名を横書きに入れ、 しゃ 1958」として出してしまうという大ミ れば、 これは貴重品ということになりま 1 1958-3」と入ります。 中央に 一がり、

15

プ』では原稿料が安いので、本当はいっしょう懸命書きたくな

さらに辻まことさんがギターを抱きながら「『アル

のだけれど、なんとなくいっしょう懸命書きたくなる」と深

くして原稿料の

安い雑

誌はない」と笑わせながらの山談義で盛

くれましたが、誰も気がつかなかったですね。いますが、心優しい大谷氏はずっと後になって、逆だと教えて

人との接点と捉える人など、特集号を考える時は大変楽し 高原を遊びの場所と捉える人、 ね なものをやりましたが、売れ行きはいいし内容も面白いんです 欲が出て特集号を出そうということになり、 いをしました。年に一、二回ぐらいは特集号を企画しました。 た車輪もうまく動くようになり、 こんな具合に素人のような失敗を重ねながらもガタピシして それにいろんな人の考えていることがよくわかる。 精神・心の牧場、 後は順調でした。そのうち 高原、 あるいは 山小屋と様々 例えば い思 Щ

# アルプの夕べ・アルプ展・そしてアルプ教室など

月まで六回もつづけられ

ました。

誌では『アルプ』に書くときがいちばん苦しい。これほど労多さん、尾崎喜八さんの詩朗読と講演、深田久弥さんの「山の雑さん、尾崎喜八さんの詩朗読と講演、深田久弥さんの「山の雑さん、尾崎喜八さんの詩朗読と講演、深田久弥さんの「山の雑さん、尾崎喜八さんの詩朗読と講演、深田久弥さんの「山の雑さん、尾崎喜八さんの詩朗読と講演、深田久弥さんの「山の雑さん、これだけのこうして順調に雑誌の基盤も出来上がったころ、これだけのこうして順調に雑誌の基盤も出来上がったころ、これだけの

田説 民謡、 アルプ展が新宿駅ビルで行われ、 今度は九段会館で、これ であって予定を三〇分近くオーヴァーする盛会でし んの「山男」の版画スライド映写、 また名調子、といった具合で、 らしい演奏で聴かせた後は、 のセレナータ・エスパニョー 同 その後、十周年記念として「アルプ」の執筆者による第一回 [じような「アルプ百号記念の集い」は六六年六月十七 の裏書きをしながらウィスキーをぐびり、そしてマラッツ コンソル・ゼフィール また満員の愛読者で埋まったものです。 の山 シャンソンのセ・シ・ボンをこれ ルなどのギターの名曲 後を尾崎喜八のアイルランド の舞曲集演奏、 九六八年五月から七三 と盛り沢山。 さらに 畦地 を数曲すば 梅 福引 太郎

真垣 九七〇年六月から七二年六月まで四回行われた「アルプ教室 く毎年開くようになってしまった次第です。 色紙などのほか写真も多数出品され、 草野心平、尾崎喜八、 スの色合いが濃いわけで、もっとも 第一 もちろん、そうしたイベントは本筋ではなくてファ 武勝、 回は曽宮一 辻まこと、 念、 串田孫一、 上田哲農……こんな一 倉員辰雄、 深田久弥、 小野末、 「アルプ」らし 大反響をよび、 Ш 鳥見迅彦さんらの 流の画家の作品や 口源、 畦地梅太郎 いり けっ 催しは ンサービ

第一回の講師は尾崎喜八さんと宮下啓三さん。尾崎さんはではないかと思います。

います。間ずつ密度の濃いレクチャーで、口述筆記は一六二号に載って間ずつ密度の濃いレクチャーで、口述筆記は一六二号に載って「山と文学」、名れぞれ二時

この四回のレクチャーは、後に「山と文学」のタイトルで一定さんの「わたくしの山の詩」、第四回は畦地梅太郎さんの「わしの山男」と近藤信行さんの「山岳文学と小島鳥水」といった充実したもので、異色の山の教養講座でした。
た充実したもので、異色の山の教養講座でした。

実に残念でなりません。
茅ヶ岳で亡くなり、このレクチャーが最後の作品となったのは、
この教室で講演された深田久弥さんは、それから一週間後、

冊にまとめられてい

ます。

りだと思います。

## 「アルプ」を彩る人々

文章となると難しいんです。かということになります。書き手の人柄が滲み出てくるようなかということになります。書き手の人柄が滲み出てくるようなさて、動きだした「アルプ」にどういう方に書いていただく

しまうんです。締切日に間に合わず、一つの文章に三ヵ月ほどんは、とてもいい文章を書くんですが、原稿を頼むと改まってで、泣く子も黙る恐ろしい存在だったようです。そんな山口さ執筆者のひとり、山口耀久さんは獨標登行会のチーフリーダー

くありません。ここまで熱中する著者がいるなんて編集者の誇ないから押さえてくれと。そしてそのままひと月経ってしまう。ないから押さえてくれと。そしてそのままひと月経ってしまう。なすばらしいことはない。山口さんの文章には一字一句、漢字、もらおうと思いました。もし完璧なものができるのなら、こんもらおうと思いました。もし完璧なものができるのなら、こんかりました。出来上がっても頭の中で推敲しているらしく、かかりました。出来上がっても頭の中で推敲しているらしく、かかりました。出来上がっても頭の中で推敲しているらしく、

「アルプ選書」というかわいらしい本も作りました。 串田先生が『すみれ色の時間』、山口さんは幻の名著と言われている生が『すみれ色の時間』、山口さんは幻の名著と言われているたと思います。次の本の題名ができて、いくつか原稿もありました。それが先月(一九九六年)、創文社から電話がきまして、した。それが先月(一九九六年)、創文社から電話がきまして、した。それが出了。次の本の題名ができたそうですと。「アルプ」が終わって十三年になりますが、その時は後二篇を残すのみだと終わって十三年になりますが、その時は後二篇を残すのみだと終わって十三年になりますが、その時は後二篇を残すのみだとまっていたんです。その二篇が十三年間かかったわけです。来年、それが出るかも知れません。

貰っているからいいだろうと言う心ない人がいましたがそれ

は

中

す。 になって近藤信行、 れたように、 多くの著者が緊張して書いて下さいました。 蜂谷緑さんご夫妻も書いてくださってい 後半 ま

や畦地梅太郎さんなどに相談することもありました。 Ш では駄目で、 あ ました。 なことを言われましたが、 書いて下さる方に頼むものですから、 たことがありました。 Ц って、 あ る時 そこから踏み出さずにやってゆくには一人二人の ただ尾崎文学、 期ちょっと中 岡部、 昭和四十年から編集同 私の五人です。 するとどうしても力の だるみになり、 串田文学はこうあるべきだとい 私はそうではないと言う自 それ以外にも内田耕 人制を導入しました。 同 新 人誌じ 人が 出 ある方、 p なくてつ ない かと勝 信 5 作さん う が 2 串 知恵 0 5 あ か 田 が 手 n 1 2

ら、

まず長続きしないでしょう。

### アルプ 終刊まで

文社は逃げはしないんですが、 が 0 稿料を全く払 ~あっ 努力もありましたが、 広告なしでやってこれたのは、 て参りました。 が足を引っ張る形で 事 わ 情 な 11 も知らずに、 で逃げてしまう出 あ 編集同 の時代そういうことはままあって、 「アルプ」 串 無い袖は振 人制を取る頃から創文社 田さんは創文社からたくさん 編集者だけではなく出 版社 0 原稿料 れないから待っ \$ あ n ま が した 滞 2 たこと 版社 0 て下 他 原 創 0 側

> 熱意、 げんな気持ちで書いた文章、 そんな気がします。これはどんな雑誌でも 剣な人たちが「アルプ」を支えてくれたんです。 はいけない、 たことが一 け とんでもない話で、 まいとした串田さんの表に出ない行為のおか そんな一部の人を除いたほとんどの人たち、 努力が読んでくださる方々をひきつけたので 度ほどありました。 というお気持ちが 逆に自腹を切ってでも著者の方に迷惑をか 撮っ 強か この雑誌をこのまま絶えさせ た写真、 2 たからこそだと思います。 描 同じですが いた絵で構 自分の げで持ちこたえ は 0 人 仕: な たちち 事に真 1) 1) か、 0 た か

十年 ら、 神」もその一つ。ご主人が亡くなられて東北で畑仕事をし 詩人の故三野混沌さんの夫人、吉野せいさんの「洟をたらした がありましたが、 す。 してい た原稿を串 13 から育ってこなかったのは今でも残念です 厳しい 度田村俊 また若 ックナンバーをご覧になるとわかるんですが、 ますがある時期レベルが落ちてくる、 生活 H い人達に登場してもらいたいという思い 先生 子賞をもらっ の中で書かれた素晴らしい が推薦し その中で感動 て 7 11 ます。 冊の本にしました。 したことが このよう 文章です。 い くつ 試 行錯 な方 to 最 から あ が 誤 強 か 眠 初 は高 昭 時 15 2 なが 7 和 時 期 X 期 Ŧi. 0

執筆狂になる、 昔は、 Ш 0 世界は活字と一 という言葉があるくらいでしたが、 緒になっていて登山家 世 は 0 0 か は

そろそろ幕を引こうかと言い始めたのは終刊の二年逆らえず山の世界でも活字離れが起こり始めました。

河田さんなどの執筆者が亡くなり、どうやら山の世界も変わってしょうか。但し、胸を張っての終刊です。資金がなくなって倒産するわけでもなし、著者がいないとは言っても新しく担う倒をするわけでもなし、著者がいないとは言っても新しく担うのようか。但し、胸を張っての終刊です。資金がなくなってのようなどのは終刊の二年ぐらい前

した。



方については何人かが方については何人かがらこのあたりでうだからこのあたりでことだったのです。三百号、ちょうど四半世百号、ちょうど四半世日がある。

刊号は三回分ぐらいの厚さです。いう形をとりました。こうした事情と連載物があったので、終いう形をとりました。こうした事情と連載物があったので、終「それぞれの終刊」を書き、あとは普段の通りさらりと行くと

体をこわしてリハビリのために愛宕山の階段を上る話だったと意識から捨てて書いた人もいます。山口さんは「愛宕山」で、言って感傷を入れずに、あるいは終わりということすら自分の編集委員たちは小さな思いを抱きながらも、終わりだからと

が、ほとんどの方には唐突すぎて、ずいぶんとお叱りを受けまの続きです。やめることは二号ぐらい前に初めて書いたのですめるというような文章を書いています。私は百号に書いたもの思います。終刊とは関係のないような、さりげない顔つきでや

言われながらやってきましたが胸だけは常に張って、前向きで右往左往したり試行錯誤したり、つまづいたり、様々のことをこれが大体「アルプ」の三百号の軌跡とも言うべきものです。

した。

でもやめたのは惜しいとも思わないわけではありませんが、今でもやめたのは惜しいとも思わないわけです。

く日を私たちは楽しみにしているのです。 で実に芽を出し、広まっているはずです。いつかそんな花の咲じて四半世紀にわたって耕し、播いて来た山の芸術の種子は、 が止符といいましたが、串田、尾崎両先生が「アルプ」を通

九九六年十一月二十一日 於:日本山岳会集会室

Ш

はじめて登った外国人は明治十一年

(一八七八年)七

この錫杖の

頭

はその後柴崎家に保管されてい

たが

昭

和

174

外国人も登山ができるようになっ

た。

### Ш 岳史懇

### 1/ Ш . 剱岳登山

明治 仏分離令による廃仏毀釈で立山信仰は一大転機を迎えた。 内する 峅寺や岩峅寺には宿泊施設の 戸時代には一夏に六、七千人もの登山者があって、ふもとの芦 H 本三 たといわれる。 五年(一八七二年) Ш 霊山として全国からの信仰登山者でにぎわってきた。 中 剱岳の登 語」も多数 古くから駿河の富士山、 Ш 史で、 いて栄えてきた。 には女性の登山が解禁となり、 7. 山は大宝元年 「宿坊」が多くあり、 しかし明治新政 加賀の白山ととも 七0 年 登山者を案 女性 府の神 に また 開 江. 0 Ш

> 月の 峅寺へ下山した。 て立山温泉から室堂へ登ったが、 公使となったアーネスト・メーソン・サトウ。 英国公使ハリー・スミス・パークソンと通訳でのちに英国 悪天候で頂上へは登れず、 針 の木峠を越え 昔

井

上

晃

みられる。 と推定され、 槍の穂先、 頭が見つかり、 陸地測量官・柴崎芳太郎ら一 れている。 方、 剱岳は明治四 しかし、この時頂上の岩室で古い槍の穂先、 錫杖はいずれも立山が開山した奈良時代の古い 0 また付近にはたき火の跡も残され 時 代に登頂した修業者が残してい 十年 七月、 行の登山が登山史上 測量のために登 ていた。 で初登頂とさ た参謀・ 2 たも 錫杖の

物館(芦峅寺)に保管されている。 家から富山県へ返還されて、現在は平成三年に開館した立山博年国の重要文化財に指定され、富山県の置県百年を機会に柴崎

### 趣味登山の第一号

あった。

「一九○九年)七月。吉田孫四郎、河合良成、野村義重、石崎光瑤の地元越中富山の四青年での、河合良成、野村義重、石崎光瑤の地元越中富山の四青年で登山から二年後の明治四十二年(一九○九年)七月。吉田孫四越味登山として剱岳に初めて足跡を残したのは柴崎氏一行の

雪渓から登り、頂上に立ったのは午前八時半だった。この時の同行で宇治長次郎の名前がつけられた「長次郎谷」のいた石崎と合流した。快晴の二十四日早朝真砂沢を出発した。を案内役として七月二十二日立山温泉を出発。室堂で先発して一行は柴崎氏らと剱岳へ登った宇治長次郎(大山村)ら三人

一番一個</l>一個</l>一個一個一個一個一個一個一個一個一個一個一個一個<

高岡中学では河合の二年後輩。 日本山岳会にはこの登山の直前である四十二年四月入会 登 へ入ったが健康を害して大正十三年三十七歳で亡くなっ Ш 0 IJ 1 y 1 格である吉田 孫四郎 高岡共立銀行 は高岡市 0 の豪農 まの 北 の三 陸

河合良成は福光町生まれで、父親が光瑤の実家、石崎和善商記録を発表するなどリーダーシップをとっていたようだ。(会員番号一九五番)。立山温泉で一切の支度を整えたり、登山

会の支配人格として勤め、 大正三年わずか二十九歳の若さで亡くなった。 11 PU て実業界に転じて小松製作所社長として活躍した。 る 男 はこの登山のあとの四十三年五月入会(会員番号二〇三番 野村義重は富山県舟橋村生まれ。 戦後第一次吉田内閣で厚生大臣を務め、 外交官をめざし養子先を継ぐ意志がなかっ 時 養子に行っ たが剱岳登山の一 光瑤とは幼ない時 富山県内きっての大地主の カ月前 から その後追放になっ に実家 日本山 へ戻って 住 品会 んで

らし親しかった。 上京してからも明倫学館(加賀藩子弟の留学施設)で一緒に暮上京してからも明倫学館(加賀藩子弟の留学施設)で一緒に暮っての四人のうち吉田、河合、野村は四高~東大の先輩、後輩。

おられる。 0 藤平正夫元会長が したスポー 第 この登山はこれまで信仰登山としての立 頂 ・ツ登山 吉田 孫四郎について の舞台へと発展するきっかけとなった。 山 臣 第七十 咖 年 と題 (一九七九年) してくわ Ш から剱岳を中心と に

## 別山尾根からの初登山

大正時代に入っての第二登は吉田パーティーから四年後の大

伯 長次郎 出は前年 七月 他 登 他 人を連れ 近藤茂吉により登られ n 一人は現在 ず、 引き返し て長次郎谷上 0 平 蔵谷をはじめて下っ た別 山尾 部 た。 で露営、 根を平蔵だけ連 一十五. 翌日頂上に立 日宇治長次郎、 れ

> わ 頂

> > は

四年

てい と命名 沂 は た 0 時 長次郎 平. 蔵自身は四 が 下 2 年七月冠 た谷を平 蔵 松次郎ととも の名誉の ため 初下 平. 蔵谷

登

て通 招くの た谷 Ti. 大きな誤 て妥当であるが L かしこ なので、 たの では な 0 命 か それ べろう 一蔵谷 名に く恐れ 彼が に平 かと思う。 0 0 が 通 名称を与えたことは大きな誤解を後 11 一蔵尾 多分に て田 りもし 根とい 部 ない あ 平 重 蔵が る 治 う名称を与えることは 谷に彼の名を与えることは は 初 田 長次郎 80 部 T 重 别 治 Ш から 著 尾 は 根 U わ を案 85 が 7 世 下 山 極 内 旅 8 に 0

早

月尾

根

から

0

初

登頂

に

成

功

た

出 郎 谷から登 月 てい に 大阪 頂 後 0 榎 谷徹蔵 别 山 7 剱 から 針 岳 0 向 木 かう 峠 か 5 H 1. 部 重 Ш 治と木 を越え、 理 九 太 H 郎 E 次

11 海 登 える計 んは七 という素晴らし 大縦走の 時 画であっ 月 案内 途 高 た。 to 中 地 であ 連 か n 5 登山であっ す の最後に剱 0 入 山 た 重 一荷を背 登 槍 山 ケ 路 岳 岳 負 别 0 Ш T Ш 1/1 師 尾 0 屋 岳 も整 根 Ш を 通 か 行 備さ 6 は 0 破 7 登 天荒 れ H 頂 T 本

> に成 U Ш 功 行 てお 0 あ 七月にも毛勝 2 た 先 0 登 Ш 山から剱岳まで北 と同 じくパ 1 オ T ワ 1 ク

方

か

6

0

初

旦 地点の三 助と四人の芦峅 根に気づい 頂  $\mathbb{H}$ 部、 している。 冠 松次 木暮が 角点を発見。 7 郎 年 北 0 が 方稜 案内人の一 0 佐 時 に登 伯 冠は 平. 線 蔵、 から 2 ·日頂 頂上 た。 行で尾 の縦走をす  $\pm$ 大正. E から早月川 蔵を案内 直 根に 1 年 取 t る 月十 に向 n 付 週 て長 九 間 か H 2 前 次郎 てのびる尾 0 日早 t 飯塚篤之 月 か

黒部 人として黒部川探検をつづ 冠 0 はこ 11 JII 0 屋まで達するなど八年 の登 谷 の美しさに魅せら 山 のあと、 1. け、 Ш 間 れ Ш 大正十 に 頂 翌七年 から わ た 朓 n 四 年 黑 から宇治長次郎を案内 80 下の 部 たはるか下 0 開 廊下を完全溯行、 流 れ 3

### 女性 の 立 Щ 剱 岳 初 登 Ш

平

ネス・ たという。 たらしく、 治六年立 五十歳) 昔は デ 女人禁制 L Ш 外国人では明 ま 1 温 その 泉を 4 た 0 旧 7 娘ヤ 後 盆 あ 営 告 た立 神 コ 治二十 15 峅 職 7 寺 0 11 Ш 妻や た深か 3 0 解禁後 全女 74 ハンナ・テレー 年八月、 見六 娘たちも 性 初めめ が 郎 登 右 オラン る習 衛門 て登 つぎつ 4 慣 0 きに た (当時十二 ダ人技師 妻 女 新 チ 登 I は、 4 7 n 時 明 15

間余りで登って頂上に立 ととも 十六日早朝立山 剱岳 に針の木峠を越えて立山へ登り、 への初登山は大正九年七月、 へ登って同夜芦峅へ下山している。 った。 竹内鳳次郎夫人のいさ。 三十日長次郎谷を三時

### + i 登 山

中学校教諭、 を使って弥陀ケ原まで登っ りはじめてスキ 明 治四十 Ш では大正 中島直人の二人が雪の立山登山を目的にしてスキー 年 一月、 1 九年三月、 術 が紹介され、 わが国 たが、 富山師範学校教諭、 ヘオーストリアの 悪天候のため追分付近から引 全国各地へ急速に普及した。 内山数雄と富山 レルヒ少佐 によ

デンマーク体操を日本へ伝えた。 高田連隊でレルヒ少佐にスキーを習い、 の白馬岳スキー 内山は翌十年四月に、 登山に成 新潟の関山スキークラブ笹川速雄と初 功してい る 内 一山は新潟県村上の出身 のちに北欧へ留学して

き返した。

### 積 雪期 の登 頂 と遭 難 事 故

東山稜初登攀に成功、 へ変わりつつあるとき、 心に新しい登山用具を使っての岩登り、 大正年代各大学や高等学校に山 わが国の登山界は新しいアルプス的な登 大正十年槙有恒 岳部が創設され、 (慶大〇B) がアイガ 雪山を対象とした登山 学生らを中 1

> が立山 山 大正十一年四月二 へと脱皮、とくに学生登山者に与えた影響は大きかった。 の積雪期初登頂のあと、 して夜八時半室堂に戻 H 三田幸夫リー 別山尾根から剱岳に挑み、 ・ダーの慶大パー た ティ五 H X

夫

午後全員初登頂

疲労凍死した。 悪天候で引き返す途中、 **槙有恒、三田幸夫、** この翌年の十二年一月、立山で初の冬山遭 板倉勝宣 十七日松尾峠で猛吹雪のために (学習院OB) の三人が立山登山、 難事故が起きた。 板倉が

えた。 ティーの起こしたアクシデントだけに登山界に大きな衝撃を与 この事故は当時わが国トップクラスの技術と経験をもつパ 1

### 岩登りの始まり

笠原勇八、中村初太郎の三人が七月二十七日第 峅の佐伯宗作と第一 から上半部を登った。 翌十三年七月十、 半部をきわめて八ツ峰完登の記録を達成 大正十二年夏には八ツ峰が開拓された。 十一日明大の馬場忠三郎が佐伯宗作とハッ 峰 続いて学習院の岡部長量が八月一 から第五峰 までの下半部を縦走、 早大の舟田三 した。 Ŧį. 六峰 H 翌日 郎 0 鞍部 苦 小

回にわけて八ツ峰を登った。 このあと早大の小笠原勇八、 峰を完登したあと、 クレ オパ 藤田 トラ・ニード 信 道、 近 藤 ルへ初 正 佐藤房忠も二 めて登った。 現

けつ

けた。

か

0

て自分が初下降

した谷で非

業の死をと

## 池の谷初下降と初溯行

元富 けぬ谷 Ш ili 直 0 市 石黒 という意味からつ 内 に か 清 切れ落ちてい 6 剱 蔵 であ 岳 を眺 8 けら る谷 ると、 れ が 早 たこの 池 月尾 0 谷 谷を初 根と小 (タン) 窓尾 踏 破し で 根 あ たの には る。 から 行 さま 地

へ出 伯八郎と二人で池の谷左俣を初 大正 十三年八月十四 H から十 F 降 六 11 窓 H 尾 に 根 か を越 けて、 えて馬 昔 峅 場 0 島 佐

とげ 尾根寄り H 馬場島 さらに翌十 松太 から小 か 郎 5 0 咖 頂 74 窓尾 Ĩ. 年八月、 達 根を越えて池の谷右俣を溯行、 L 个内 石 人 黒は友人の黒田 0 0 時 佐 代とし 佰 八郎、 7 良太郎、 は 兵 次 困 難な の六 登山 人で、 原 最後は早 田 をなし 清 次、

安治 II: 0 登 四十年ぶりに の手で日 Ш 記 録 がは長 本 Ш 石 岳 11 会会 間 黒の偉業が 埋 もれて 報 世間 九号 11 たが、 に知られ (昭 和 登山 史研 究家の 年 発 Ш 表 崎

遭 月入会(会員番号六一三 難 昭 石 黒は た py 明治 + 鱼 津 岳 年七月二十七日、 三十一年 友会会員二人 富山 市 0 4: 遺 前 ま かれ、 体発見 年 H 月 本山 0 池の 報 岳会は 7 谷で雪 池 大正 0 谷 崩 七年六 0 た 俣 85

> 本 1/1 窓 が 尾 折 れ 根で転倒し、 ており、 肺 その に穴 が ま ま富 あい 7 山 いることが 戻 たが、 わ か り Ш 後 H 肋 後

中げ

た後

輩

0

霊をなぐさめ

たい

との気持ちだっ

た

꽿

H

Щ

0

途

急逝した。

享年六十

九歲

# |冬期の登頂とバリエーションルートの登攀

殿冬の 寸. 山 剱岳 が 登 5 れ た 0 は大正 + 四 Ŧi. 年 11 ず n \$

慶大パ 立山 は十 1 テ 咖 1 年 で あ る 月 田 幸夫ら六人が、 七日 0 越を経

登

頂し

た。

入り、 木勝 剱岳 別山尾 の四 立山 は 人パ 翌十 根から苦労したすえ、 1 登っ 1 Ti. テ 年 1 たあと、 1 月、 が 芦 大賀 + 峅 の佐伯 道 日 景 亀蔵を加えた五人で剱岳 登頂に成功 渡辺 亀蔵ら九人を連 郎 四年 斉 れて室堂 長 郎 アタッ 青 願

テ 1 同 + によ 24 年 2 て登ら 頁 九 H n に た 源 郎 尾根 が 高の 一四錦 司

を果たした。

岳 た明大の から 源治 ル 源 1 治 に 源治郎 郎 郎 1 尾 を間 馬場忠 尾 根 根 尾 違 0 とし えて 名前 根の名前 郎 は今 たら..... 尾 が 根 あ 西 で記録を発表、 0 0 部 渡辺が剱沢小屋 尾 とい に最 根 は 佐伯 初の 0 たこと 足 源治 11 跡 つとはなしにその名 へ戻 を残 か 郎 5 して 渡 た時 辺ら 峅 に出 る 大 が から J. 山

ば れ るように 2

亡するという事故が起きた。 信夫、 部 た。また東大谷左俣が昭和四年八月東京商大の吉沢一郎、 高橋健治、 正太郎は 昭 和 0 Ŧi. 井上鐘、 车 今西錦 和 つぶれた小屋 月には 一年八月チンネが登られた。 大久保最司ら四人パーティーによって登られた。 書をしたためていた。 司 剱沢 が左方ルンゼから左稜線を三時間かけて登 の中で動けな 11 屋 中でも東大山の会窪田 が雪 一崩で押しつぶれて、六人が死 いり ま 三高の西堀栄 ましばらく生存して 他吉郎、 田中 郎 H

隊そろって八ツ峰を完登した。

往復する日帰り登頂をしている。 大の入江保太とともに、 ら小窓屋 同 年六月三、 根を初 四日同 登攀。 志社大の児島勘次、 また児島は 馬場島から早月尾根を十 同 八年三月二十二 田 中昌 雄は馬場島 時 H に同 間かけて 志社 か

11

て、手帳に遺

と縦走して第四、 三峰鞍部から第一、二峰 乗越 JII 登喜 まず早大今井友之助、 昭 和七年春に 男も へ入った早大、 II 日長次郎 なると、 Ŧi. 峰 谷出合付近から取り付いて第 0 東大、 鞍 鞍部まで下って引き返し、 池野信一の二人が四月二日 積雪期の八ツ峰、 部 から下 慶大パーティ 5 て小 屋 源治 1 戻っ によって登られ 郎 尾 第三、 八ツ峰第一 た。 根 峰に登り、 が、 東大小 四峰 别 Ш

早大の

スをたどっ

て第五峰まで縦走、

第五、

六峰鞍部

小

屋に戻っ

峰まで下降した。 往 まで縦走、 復、 方慶大隊は 翌三日 同夜長次郎出合の岩小屋でビバ 金山淳二と谷口現吉が第 悪天候のあとなので慎重を期 早大、 東大パーテ 1 Ŧį. 1 to 1 日 ク、 峰 上半 からハツ 7 翌四 同 部 H を登って H は に第 峰 V. 0 山 頭 を

功した。 雄 ルを経 峰と初下降した。 また東大の小川は 小 て剱 原勝郎は十 岳頂上にいたり、 同じ 九日単独で源治郎 日ハシゴ谷乗越から二俣へ出て、 頃内蔵助平に入ってい 積雪期北方主 尾 根 を頂 稜線の初縦走 た立 Ŀ. から 教大の 第 長次郎 沢 峰 本

J 辰

### 積 雪 期 の池の谷などに足跡

尾 根など剣岳 昭 和 九年になると、 西面 0 13 積雪 リエー 期 ショ の池の谷、 ル 1 剱尾 1 新たな足 根 厳冬期 跡 が 0 早 印 甪

れた。

夏に石黒清蔵が 木)の二人は四月九日午前一 まった大滝、 まず日 が成され 時間 をか 大の けて往 広 ゴ 田賢治 登 ルジュ帯を抜けて池の谷左俣から頂上 ており、 復した。 富 Ш 時 県朝 期せずして地元の岳人により. "行けぬ に馬場島小屋 H 町 谷 (出身) とい を出 渡辺克巳 わ れ 発 た 池 雪 現 0 達 崩 谷 姓鈴 初登 L は 埋

昭 多くの 和十 延 部 でば 方 年 L たとい 0 明になっ 月卒業試 信 頼 を集め う たの 験 I F. の最中 7 1 で 試験を放棄し Î 1) た。 K. 後輩 が 昭和 あ 0 り 四 Ш て捜 後 岳 輩 部 Ti. 索 員 年 0 rfri が ~志賀高 出 六十歳で亡く 倒をよく見 動 卒 原 で遭 7

教大は

昭

和

七年

存

の北

方主

稜

線

から

の初登

頂

に

0

づ

11

T

年

浅巌、 18 記録。 根 和 伯栄造の三人で馬場島 また同年十二月二十五 乗越までの縦走に成 プを設け、 トラニードル 0 鈴木正 小 成と榎本忠亮は三 根を登 頭 窓尾 さらに翌十年 咖 0 浜 はさみ 月二 支稜に 野 年春 彦が 根 b TE. 小窓、 男 か H この 奥平 5 を初登し には残されていた剱尾 取 0 池 月二十三 りつ Ш 中 池 **以功**、 1 あと 本正 0 0 IF. に H 谷乗越を経 谷右俣を登 か H き、 英、 根 出 四隊 に沿 夜十 た。 5 早月尾根を下山 須 には須賀幹夫、 成の三人が二十日 て積雪 早 日 長次郎 賀 須賀幹夫の二 1 月 0 は に分かれ 2 て中 時 11 窓 尾 单 期 で四四 独で 屋 根を往 て登 馬場島小屋を出て東大谷 2 0 東大谷 - 俣本谷を登り、 て登 一根 頭に 月四 末端 根 池 頂 て馬場島 頂 中 した。 0 復 出る初登攀をして 0 平. 谷乗 池の谷尾 牟 が大窓に前 H のテントから出 池の谷右俣から 初登 第二 厳冬期 曲 -蔵谷を下り、 浜 同年八月 野 越 へ入り、 武信と芦 攀 登 IE. に 根 男、 出 0 成 月尾 初 進 7 が早大、 功 クレ 須賀 ま 峅 中 登 に + た 剱 は 頂 Ш 7 0 别 た る 才 小 幹 佐 0 Ш 降 を 尾 湯 Ш 昭

> 上半 木茂雄 を登 チンネ 雄 部 り 0 0 西 が 2関学パ 登攀に成功し さら 四人で小窓のキャ Ш 実 へが ーティー 同 池 0 谷出 24 に H 合 中 より登られた。 0 ВС ナ 島 路四 から から 池 郎 出 の谷左俣 金 発 三月十 尾 実 池 を下 0 谷 七日早 佐 b 藤 根 大青 下半 尾 青 根 部 木

茂

と一気に下って初下降に 越えて長次郎 三人が厳冬の ンプ を第 井捷之助が 宿 十二月二十八日 厳冬の八ツ峰登攀を狙 は第 願 か ンネは から約 を果た 峰まで 峰 関学 Ŧi. 早月尾 源治 0 0 時 鞍部 頭付近 門間で頂 往 た。 0 郎尾 には 塩津 復 足根上部 から Ш で雪 上に 厳 本 根を初登攀して別山 **V**. īĒ. 必則 雄 成 第 英、 っていた慶大隊は 教 功。 1. のC3から登頂 洞を堀り、 大  $\mathcal{T}_{i}$ 第 峰 郎ら十三人パ 0 騰 2 て積雪 さらに翌二十六 中 池 Щ 雅 さらに第四 隆 Πİ 二十五 期 が 初登を成 74 ーテ 十四年 豊泉進、 月六 L 尾根を下降してい た H あ H 峰 大 1 H か 森敏男、 Ш 1 薄井 た。 本 5 は 0 雄 第 一月ようや 窓 源 剱 治 また同 頂 修 0 大洞 郎 助 1: 3 を 0 +

<

### 元 富 Ш 高 校 の

根 酒

< なっ 太平洋 争となっ た 昭 和 士六 年 以降 は登山する人の姿も少な

本医大 和 は 昭 Ŧi. 和 年三 月 末から、 年. 東 大谷 PU 月にか り け て積 偵 雪期 中

戦

後

0

昭

H

完登、初登攀として実を結んだ。

十年代になって合宿では東大谷へよく通った。途中の滝で引き返したのが同校東大谷開拓のはじまりで、昭和昭和八年九月、三人の部員がはじめて東大谷へ入ったものの、

バークを重ねて三十一日ガスの中を東大谷中俣登攀に成功 正夫は今村顕次と二人で翌十八年五月二十八日に クしたが、 月には藤平正夫、 を下った(このルンゼはのちに富高ルンゼと命名)。十七年七 上直下二百段まで迫ったが、ルートの偵察不足で失敗、 和十五年七月藤平彬文、 雪渓の状態が悪くて敗退。 若林啓之助、 南彬、斉藤義則が東大谷中 山田禎一、土田敬らが再びアタッ しかし気のすまない 入山、 ルンゼ 途中ビ - 俣の頂 藤平 第

人の部員で春山合宿が立山で行われた。 富山高校は戦後の二十一年三月に 同 も同年五月剣沢へ入り、 11 ち早く活 またOB 動 八ツ峰上半 を の藤平正 再 開、 <u>+</u>: を 夫

一登)、高校生活の最後を飾った。

林啓之助が源治郎尾根第二峰平蔵側フェースを初登するなど、 切った(初登攀)。また同七月十三日には藤平彬文、南彬、 夫、南彬の三人が東大谷中の左俣門ルートを苦労した末に登り 初登攀に成功。 OBも含めて剱岳の岩場に新しいルートを開拓してい (現役) 大間知修造 十二年七月二十二 ついで二十三年五月二十五日藤平彬文、 日には 同 の四人が東大谷中俣本谷 藤平彬文、 藤平正 夫の った。 0 B 藤平正 無雪 期

### 戦後の足跡

幕を閉じ、学制改革により富山大学となった。

かし同校も二十四年八月の夏山合宿で二十

五年

間

0

L

光雄、 出たが天候悪化、 洞 5 ブナクラ谷出合にBCを設け、 大の藤平、 十四人で立山 の六人が雪洞を使って早月尾根から剱岳に登頂したあと、 を掘 薬師岳 BCへ戻った。 È な積雪期の記録をみると、 新村正 て登頂 伊藤、 槍ケ岳の長いルートをスキーで縦走した。 一、広瀬文雄、 剱岳へ登頂。 舟橋、 てい 慶大も同 カニの る 池田パーティも関西登高会と同じ時に はさみで引き返し、 時期山田リー ついで三月から四月にかけて前 浅野清彦、水谷祐次、 まず関西登高会が二十二 池の谷右俣から早月尾根上 ダーら七人が剱沢に雪 再び池 福原喜代 0 また、 谷右 一年一月 俣 部 京 Ш 男 か

二十四年三月には早大(碓井リーダー)が未踏の赤谷尾根か

四月日大 大 谷左俣を下って右俣から登頂している。 極地法で大窓、 (傘木リーダー) (松田リーダー) 小窓を経 が北 仙 が頂上に露営、 人尾根 て剱岳登頂。二十六年三月に から極地法で剱岳登頂 剱尾 根を下降、 は 池 法 同 0 年. 政

月京大 二年三月には法政大 岳 に延ばした宇奈月尾根から僧ケ岳を経て剱岳にいたる長いルー ・を極地法で成功させている。 から仙人ダムで黒部川 ほか二十九年三月関西学院大 脇坂リーダ 1 (佐々木リーダー)が京大隊ルートをさら が極地法で毛勝山から剱岳まで。 を渡って三の窓を経て登頂。 (森川 リー ダー) が、 Ŧi. 龍

の谷周辺の岩場に足跡をつけた。級の活躍をみせたほか、神戸山岳会、広島大なども三の窓、池地元の魚津高校が高瀬宗章、具康兄弟をリーダーとして超高校

た昭和二十五年ごろから旧制富山

高校の強い影響を受けた

ていった。 が 名古屋山岳会、 2剱尾 和 根 三十年前後 ンネ、 直登会、 からは地 東大谷はじめ未踏の岩壁にル 第二次RCCや成城大、 元の魚津岳友会、 ベルニナ 京都府大など - を開拓 Ш 岳 会

### 参考資料

・山崎安治著「日本登山史」「剣の窓――登山史ノート」・日本山岳会編「山岳」会報「山」

安川茂雄著「近代日本登山史」

東京創元社編「現代登山全集3 剣立山黒部」

富山県山岳連盟創立三十五周年記念誌「太刀の嶺高く

広瀬誠著「立山黒部奥山の歴史と伝承

坂倉登喜子、梅野淑子著「日本女性登山

田部重治著「わが山旅五十年」

日本山書の会編「山書研究」

遺稿と追憶・石黒清蔵顕彰碑建設委員会編「剱嶽に生きる」―石黒清・日スト言の名為「上言布名」

蔵

0

京都府立大学山岳部編「部報」

日本大学山岳部編「部報」

中日新聞東京本社編「岳人」

山と溪谷社編「山と溪谷」「岩と雪」

「富山所引土州「ごジュアル富山百斗」(「富山田富山高等学校同窓会編)創立五十周年記念「富宝」

富山新聞社刊「ビジュアル富山百科」

晃氏のお話を同氏に要約していただいた。 編集注 一九九七年二月二十一日 日本山岳会集会室での井上

# 学校山岳部の発足

中村純

一、学校主導の山岳会

れるようになってきた。
の場が、富士山や日本アルプスなどに出かける試みが行わを引率して、富士山や日本アルプスなどに出かける試みが行わい身の鍛練と共に、山の美しさや雄大さに惹かれた教師が生徒、明治中期から我が国においても、登山の気風が高まってきて、

学習院輔仁会旅行部の記録によれば、明治二十四(一八九一)学習院輔仁会旅行部の記録によれば、明治二十四(一八九一)学習院輔仁会旅行部の記録によれば、明治二十四(一八九一)学習院輔仁会旅行部の記録によれば、明治二十四(一八九一)

から日光、白馬連峰、妙高山などに出かけている。
れ)年四月になってからで、委員は大岡忠徳と田中薫の両名、九)年四月になってからで、委員は大岡忠徳と田中薫の両名、

会としての記録は残されていないので、『北辰会雑誌』の記事も多かった。この年の春、山口高校から転勤して来た、金沢生も多かった。この年の春、山口高校から転勤して来た、金沢生きの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は少なく、林並木教授など、寮をの修養は図られたが、参加者は、本のでは、本ので、『北辰会雑誌』の記事を入る。

などに頼る他 海岸などで な 0 が実状で、 行き先 は医王 山 Ŧī. 箇 山 加 賀

イル』十二 JU 九九九 を設立してからである。 高 生が主体的に白 冊の中 一四月、 に記されてい 広 面 瀬寿雄らが や立 この時 Ш を目 世話役となっ 点以降の記録は 指すようになるの 「ベ pu は ル 高旅 大 グハ IE. 行 1

この年

から機関誌

『群巒』

年には東京府立第一 野 が Ш 四年生全員 高女では、 女性で 装備の不完全さなど指摘する声もあった。 は明 を率 治三十 その後毎 いて、 高女と合同で富士登山も Ŧi. 年. (一九〇三) 戸隠登山を行 登山を行 年、 明治三十九 0 たの 長野 が最 行っ 高 女 ているが、 初である。 0 (一九〇六) 渡 辺 敏 校長 Ę 谷

から ~副部 部として 芦 遠足部 長に就任、 中では明 史』創立百周 遠足 部 矢内原忠雄ら三名が委員をつとめ 治 74 十 が置かれ、 年記念)。 (一九〇九) 大島教諭が その趣意書によれ 年六 部 月 長 Ŀ に 旬 た ば 衛 校 友会 藤 H 神 教 露 戸 論 0

で隊列 4: 戦争後の情勢を受け、 隊 を組 重 一隊も んで歩い 組 んだ たようであ 耐久能力を養うの とあ るように、 が主目的であっ 有 馬 や箕 面 に 百名内外 て 衛

部 # 内に か たが、 けたりすることは学校側が許 では、 Ш E 研 夏休みを利用し 大正 究会が生 に入ってアルプス指 ま れ て、 数名で 部 0 П 日本ア 行事として日 L な 向 か 0 風潮 ルプ 0 た。 ス が高まると共に、 に 大正十三 本アルプスに to 出 か け t-

> 遠足部 九二 により、 内に 漸く芦屋 年になって、 水泳会• での岩登りや登山 競 水野 技遠足会と共に山 一样太郎 発刊され • 活動ができるようになった。 波多野 てい 岳会を発足させること

が大正元(一九一二) よって始 ヶ岳や白馬岳に出かけた(『山 東京高師付属中学校では、 められ た 生徒委員 年六月、 4 に伴野 矢沢米三郎、 初 區 から 清 第十年 中 登 山 を目 III 伊 号。 小六 藤 的 長七教諭 郎 た Ш 岳

井千仭教諭が、 会京都支部 今西錦 年七月には乗鞍、 縁となって、 京 都 可 は富士 中では大正四 同年九月、 生. Ш 徒十三 組に 白馬、 参 二九二五 名を連 加 富 京都 士山にパ している 中 れて、 Щ 年七月、 1 一川 ティ 御嶽に 部 城三 が を出 登 博物地理 創部 0 Ш た。 た H 扣 本 この 当の Ш が 年 꿪 機

立第一 和二 に登った。 率 範 fr. (一九二一) 年八月には大阪梅田 0 の生徒は佐々木校長引率 高女では、 女 性登山会とし 二九二七 女の生 燕から槍に縦走している。 大正八 校長以下教諭が生 徒 年には山 て、 名は 九一 大 正 九  $\equiv$ 教諭と共 岳部を創 のもと、 年七月、 徒 高女の を引 九 四十八名で立山 設 11 に 白馬 した。 す 冰 四 生 i 富山高女と富山 れ 徒 も登 岳 て 年 が、 富士 月 Ш 登 年. や 九 0 は 関 月 に 山 と槍 n 谷 阪 心 教 大正 東京 0 Ш 女 0 夕陽 子 あ ケ 岳 昭 師

優れた 教諭が実施を唱道して始められた活動である。

### 導 の Щ

れた日 れる。 よる自主的な山 ズムの我が国への導入や、 れるようになって来た。 山 岳会発足 本山 まで学校側が 岳会の影響が大きな契機になっているものと考えら 0 状況を見て来たが、 岳部の登山活動が、 主導の、 これにはウェストンらによるアルピニ 明治三十八(一九〇五)年に創立さ 主として中学校における遠足会や 大正期に入ると生 旧制高等学校や大学で見ら 徒や学生に

> この年大木操・山口 高旅行部五

成

は伝刀林藏案内の下に、

鹿島槍

から

年』。

出 班に分けて燕 て講演会と懇談会を開いた。 アルプス登山 日本山岳会に入会していたので、忽ち意気投合して、共に山 かけるようになった。そのうち、校内に山岳会を作って日 明治四十三年第一高等学校に入学した守島伍郎と大木操 年六月下旬、「一高山岳会」なる名稱の同好会の たまたま東寮二番室に入ったが、二人共既に中学の 日本山岳会から高野鷹藏・辻村伊助 独立させようとの動きが強まり、 二 九 など行いたいと望むようになった。大正二 四 槍や、 年になると、 七月には四十名の同好者を得、 焼岳、 前穂高岳の登山 高山 岳会を校友会の一員 ・小島烏水を招 を行っ 発会式 二九 た。 時 0 74 41 耐 本 に

同じく日本山岳会員であっ

た日高信六郎は、

中塚癸己男、

上条

守島の中学後輩

常念・槍・白馬 の水彩展や、 桐テント三張りの購入に当てられた。 認され、 行部」と決め、 秀介と計り、 部費五十円也を獲得することができた。 山崎直方の写真展を開き、夏には御嶽・木曽駒や、 名稱は校友会総会での議決を容易にするため 会に臨んだ。 ・姫川あるいは、 同年三 針ノ木・立山に 一月五日激論の 五月十六日 この に は 出 部費は片 原 丸 かけた 深は 承 Ш

められたのは、 司山 まで出る有り様で、委員らは漸く胸をなで下ろすことが 講演会を催したところ、参会者は六百名にも達し、 は東京から小島烏水・辻村太郎・高野鷹藏を迎え、 岳会」を作る決心を固め、 ことに対し大きい悲観も味わった由である。早速三高 耳にし、大いに喜ぶと共に、 が在学中であったが、 らを伴い、 正五年伴野清· ノ窓雪渓をつめた後、 八峯キレットを通り唐松から祖母谷に下り、 これより先、大正二年の夏、三高では小島烏水の弟 E 第八年三号)。 穂高. 大正十年のことであった。 から槍 大島永明は二高の中上川小六郎と共に 長次郎雪渓から劔岳に登頂 一高山岳会が突如として成立したことを 三高で山岳部が校友会の への逆縦走に初め 十月二十八日発会式を挙げ 山岳会の先鞭を一高につ て成 功 小黑部鉱山 一員として認 た した。また大 座 幻灯付きの けられ れな た にも 0 小島栄 できた 経 山 由 H

霧島登

Ш

など行

2 た。

京大でも大正四年入学

た前

H

中

原らと図り、

学友会内に「登山部」

を発足させ

六郎も が 足させた。 石川 一は伴野さ ĨE. 太郎の講演が行われた 式 Ш に 石川 岳会の設 清 運 この日、 動部 中 欣 百 の 瀬慎 111 立. は 小六郎 に刺 高野鷹 大正二年 本多光太郎顧問も列席して、 太郎 員として 激され、 一蔵の紹介で入会している。 の紹介で日 が幹事となって、 『山岳』 頭から北 認められたのは、 大正三 第十年一号)。 アル 本山岳会に入会、 ナ 一高 九 スに出 四 大正 この 高野 Ш か 二高 岳会 けてい 年五月八 于一 中 鷹藏 年 Ill <u></u> 九 to 岳部 Ш III が、 H 进 欣 11

木員 0 紹 介で日本山岳会に入会した。 岳 信 年五月二十 教授であった。 第十年一号)。 岳部としては 九日、 この年槙有 発会式では小島烏水が講 慶応義塾大学山 槙有恒らによって作られ、 恒 は中 岳会 村 清 太郎 が大正四 演 会長は鹿 を行 高野 った 鷹 九 藏 子

年五月となっ

7

る。

足。 V. 会の会長や日 H が 和次い 助教授を会長に発起人数名で山岳会を発足させ、 委員は矢田城太郎他五名であっ 頃から全国 高 頭 式 本山 大正 0 0 岳 高校・大学で山 会の Н 74 本山 年にはその後、 朝輝会員も出 日嶽志」 などに惹かれ、 た。 岳会や旅行部、 六月に八高 席し 神戸高商では七月十日、 ていい る で山 七月下旬 Ш 七高でも辻 神戸 品会が 岳部 徒步 Ш 0 発 設 岳

れら対して表中アンダー

ラインを付した旅行部

岳部は、

(『山岳』第十年)。 発会式は十二月十 日 に 行 わ れ 高 野 进 村 から 出 席 1)

父方面 小笠原 稲田大学体育会では大正九 に出 勇八らが中心となって、 かけている 『リュ ックサッ 山 二九: 岳スキー 2 第 部 年十月、 号)。 舟 田 郎 秩

教授に代わった。 岳部」となった。 った 東大では運動会スキ (東大山 の会五 この 委員 十年 は別宮貞俊 時部長は鹿子木員信教授から末広 1 部 史 が大正 山と友』)。 岩永信 十二年拡大されて「ス 雄 沼 井 丰 太郎 1 Ш

### 学校山 岳部のまとめ

以

Ĩ.

我

か  $\mathbb{R}$ 

に

おけ

る学校

山

岳部

0

発足を、

年

一月順

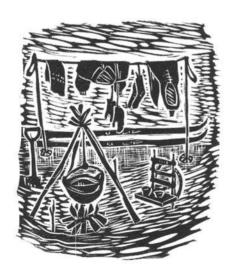
たが、 to ニズムの発展に直 かける形式を取っており、 0 明 治中 が 中学校では大体山好きの 別表であ 期から学校 接かかわることは少な 山 岳会の 登山 名の下に登山が の P 教諭が生徒を引き連れ R には寄与 か 0 行 わ n るように て山 T に出 ル

高校・ した意義は大変大きいと考えられる。 れ 本山 かつ生徒や学生の 大学に 岳会の存在 おい と共に、 て 自主的 学校側 我 が国 から な登山活動を 登山 運 史上、 動 部 示す 0 登 to 員 Ш ので 0 発展 あ 0

#### 別表 学校山岳部の発足

発足年月I	1	学校山岳会名	発起人
1891年(明治24年)	8月	学習院輔仁会旅行部	富士谷孝雄教諭
1898年(明治31年)	5月下旬	四高山岳会	北條時敬校長・林並 木教授
1902年 (明治35年)	8月	長野高女登山会	渡辺敏校長
1909年 (明治42年)	6月上旬	神戸一中遠足部	大島教諭・衛藤教諭
1912年(大正元年)	6月	東京高師付属中学山岳会	矢沢米三郎教諭・伊藤長七教諭
1913年 (大正2年)	6月下旬	一高山岳会	守島伍郎・大木操
1913年 (大正2年)	10月28日	三高山岳会	小島栄他
1914年 (大正3年)	3月5日	一高旅行部	日高信六郎·上條秀 介·中塚癸己男
1914年 (大正3年)	5月8日	二高山岳会	石川欣一•中上川小 六郎
1914年 (大正3年)	8月	大阪夕陽丘高女登山部	校長他
1915年 (大正4年)	5月29日	慶応義塾山岳会	槙有恒他
1915年 (大正4年)	6月17日	八高山岳会	矢田城太郎他
1915年 (大正4年)	7月10日	神戸高商山岳会	
1915年 (大正4年)	7月下旬	七高山岳会	辻荘一他
1915年 (大正4年)	9月	京都一中山岳部	金井千仭教諭
1915年 (大正4年)	12月17日	京都大学登山部	小島•中原他
1919年 (大正8年)	4月1日	学習院旅行部	大岡忠徳・田中薫
1919年 (大正8年)	4月1日	四高旅行部	広瀬寿雄·藤井剛士
1919年 (大正8年)	9月	東京府立第一高女登山 会	
1920年 (大正9年)	10月	早稲田大学山岳スキー 部	舟田三郎・小笠原勇 八
1921年 (大正10年)	4月	三高山岳部	
1921年 (大正10年)	8月	梅田高女登山会	
1922年(大正11年)	5月	二高山岳部	
1923年(大正12年)	4月1日	東京大学スキー山岳部	別宮貞俊・岩永信雄 ・沼井鉄太郎
1924年(大正13年)	4月	神戸一中山岳会	水野祥太郎•波多野 一雄

る。 すなわち、当時、日本山岳会の創立時の会員は、学校山岳部 の設立を全面的に指導・激励して来たと同時に、山岳部〇B側 を設立委員を含んで次々に日本山岳会に入会し、その中心的存 在になるといった相互関係によって、我が国における草創期の 山岳界は大きく前進することができたのではないかと考えられ る。



### 义 紹 介

## 『本のある山旅

大森久雄

久雄氏である。



山と溪谷社・刊 : 本体 1,800 円 A4変形/285ページ

がありました。

わ ツ登山の教祖的存在の彼がこういっているところが 41 なければならない 記』の序文で る ゆるママリズムには本など余り関係なさそうに思えるからだ。 A ・F・ママリー ひたすら 彼の言葉どおりというわけではないが、 困 登山者が早晩いわゆる のは、 難な未踏 が、 天の命ずるところである。」と書い その著書 ルートに挑戦し続けた、 『アルプス・コ 執筆 狂 昔から登山の 1 の犠牲となら 11 カサ 面白い。 わばスポ ス登 15 て 鐢

多くの書き手によって膨大な量の山

岳書が残されて

版された。著者は、 して、人と山と、 限に広く深いというわけである。 きた。一方、 読み手にとってもその本の世界に遊ぶ楽しさが 山の本との関わりを織り込んだ紀行文集が出 永年山や旅の本の編集に関わってきた大森 そんな楽しみの中での 試みと 無

のある山 とした顔をしていると思った。 最初にこの本の表紙を見て、 ないタイプの山の 歩きを語 数 仲 々の作品を組合わせ、 間のひとりである」とあり、 それを補って、カバーのそでに「まことに本は最高最良の かねてから、 旅 0 たら、 だ。これでは判りにくい向きもあ 山を歩くたのしさや山の紀行的要素と先人の 新しい 本がつくれるのではないかという編集者意 世界を持つ文章が出 その間を往っ タイトルも少し変ってい 近頃では珍しく大人向 さらに たり来たりしながら山 あとがき 来、 るかも い には ままでに 知れない け 7 の清 本

Ш

とつ でにも、 と、その意図を明瞭に書い 的引用の意味が主だったように思う。 の本が好きな人にとっては大いに興味深いことだと思う。 ることは大変な仕事である。 ながら書きすすめることが多かっ 0 Щ 例えば故人の安川 の紀行にふさわしい文章をいくつも 茂雄 ている。 仮にそれが記憶の端にあったとし などは、よく先人の文章をひき たが、 ユニークな発想で、 11 ずれに 彼の場合は文章の支援 取 しても り出して見せ あるひ 特に Ш

ンの谷

だった。 いながら、

エタンソンの谷、

と聞

いて何

かを思い

出

実は私が最初に読んだのは

II

ーエタンソ

読書指針 をまとめた巻末の「図書一 うまでもない。 最良の山仲間」というだけの愛着が底流にあってこそなの きたとしても簡単ではない筈である。 較的易しいが、 あろう。 いているか、 まず再読、 にもなってい となると、 こうして登場する百二十余名の著者とその書名 ある特定の山について誰と誰が、 再 誰がどの 々読して、 たとえ著者が山の本作りを仕事 覧 山のことを書い 意図する部分を確かめる作 は珍しい切り口の資料、そして そして、 たかを調 どん 本 べるの な本 は に 下に書 は 最 して は 業が 11 比 高

0

に連載 それと随想四編となっ に国内の山二十一編、 したものと『アルプ』他に発表されたもので、 本文は 初 出 てい Ⅱとしてスイスとフランスの山 覧 にあ るとおり季刊 『ビスター 構成は で四編 ij I

塩山 よっ か 0 で越えて野呂川両俣から登っ 15 中で、 り生まれた頃のことを思い起こしながらだから読みすす て憧 駅から歩くのが当り前だった時代の雁坂峠、 中で私などが共感を覚えて懐かしかっ \$ 僅かば れ か が生 か 2 まれ、 かりの文献をむさぼ 登っ た山のことである。 た北岳のこと。 り読んで未 戦後の貧困と混 た 知 例えば中 0 は、 夜叉神峠 0 Ш 昔、 -央線の 0 む でを脚 本に 夢 0 ば 乱

である。

羨ましい

境地

であ

り、

その感無量

が伝わってくるきれ

と思っていた矢先だったからだ。 日記』に触発されて、 読んで以来、 や、メイジュに逝ったジャン・コストのことが、 ていただけるだろうか。」と著者が問う。 谷の名が出てくるロジェ 谷をみつめる。 何十年も胸の底に温められ、 今年 ・デュプラの 0 3 1 著者は夢を果たして訪れ、 ッパ 0 「もしかある日」 山旅で訪 佐貫 そのとおり、 が男の その昔、 れ ってみた アル 本を

0

後の岩稜も、 という三十数年の夢はかなった。ジャン・コスト が通過した氷河も 葉もここには存在 谷には影というものはいっ 谷はやたらに ロジェ・ 明るく、 11 ない。 ま目の前 デュプラがうたった岩も、 日の光は 争 さいない。 にある。 略 まぶしいほどつ ラ・メイジ 幸せと充足のひととき。 湿気とか湿度とい 2 に が 辿 会 つった最 この た 11

た 壊された風景に失望した 書体験からとは限らない。 n に行ってみて、 ところで、 の中で著者が自分の紀行として綴るものはもの静かな味わ 「御坂の山」や「大菩薩連嶺」 本書で取りあげられた山へ登る動 これは意外、 御座山 また、 馬鹿 などがある。 にしたもので 山に のことや、 って、 そして、 結局、 6 無関 機は必ず ない 心だった と見直 人為的 それ Ш

詣の深さの をもって読み手の胸に入ってくるものがあるのだが、 故か、 多くの文章をひき過ぎて、 折角の 味が埋 中には 6 造 n

てしまっているのもある。

はり、

わせ」という試みの難しさなのであろう。 著者の 11 う「山 の紀行的要素と先 人の作 品の組

世界があるのではなかろうか」としめくくるのだが、できれ 記憶がある。 たとき、 実、 ともこのことは、 誌に川崎精雄が書いているから知る人ぞ知る、ともいえる。 0 0 話が出てきて、 この辺で、いくつかの編をざっと辿ってみよう。 「荒船山と神津牧場」 私も登山史上不滅の存在となっている大島亮吉の汚点を知っ これを自 著者は 大方の読者にはショックを与えるだろう。 著者もいうように、既に八年前の『山と溪谷』 分の中でどう仕末をつけたらいいの 「しかしこの二人には自然に対し には尾崎喜八の詩を盗用した大島亮吉 まず、 共 か へ有する る困った 卷頭 事 ば

当なのだ。

はさんざんになぶられる不幸せな山の代表と化した」ことも本 しに触れられたらよかったのだが。そして、今では「この山

地

る 北 n を繞る」、吉田栄次の「森林高地の三日間」、織内信彦の「みど 年のマウンテンガイドブックによってであるが、さらに遡れば 八ッ彷徨』 讃美した、 池の冬」など、北八ヶ岳にこんな良い時代があっ 八ヶ岳の苔蒸す針葉樹林帯をボヘミアの森林高地に見立てて にはじまる「岳へのいざない」に感心したのは昭 戦前のパイオニア達の文章、千坂正郎の がひかれる。 私が、 この中の「八ヶ岳 はい たことの証 『にう』 和 1) Ш 十九

み合

その本の出版をすすめたのが他ならぬ著者だったと知って、 旧 だが、これは文句なく面白くて随分人にもすすめた記憶がある。 えて貰って本のタイトルにまでしているが、 その石川欣一は雨飾山のことを大町 たそれを取り出 いと書いている。著者は三度目で登るがその山頂は霧だっ 制松高山 さて、「常念岳」に出てくる朝比奈菊雄の『アルプス青春記』 雨飾山」は石川欣一の 品部 0 して拾い 知性ある悪童達の天衣無縫の生態を活写した、 読 『可愛い山』 みしたりで、どうも寄り道 0 「百瀬慎太郎さん」 の影響で登ったとい まだ登ってはい 自 に教 在 う。 な な

た新緑を「ひそやかな浅

い色をまだ濃厚に残しながらも、 一之瀬から一時間ほど登って出

生.

き

合

新緑などという並の言葉では

生きとしてはちきれるような緑。

11

かっ

秩父将監峠」で、

この種の話を導入部に置くことは避けた方がよかったのではな

くつか挙げたあと「うらやましい珠玉の文章によって飾られ 北 壊が行き届いてしまったこの山域の現実を嘆くが、一方では源 多摩 Ш 源流の山々」では多くの意見をひきなが ら、 白 然破

ている」からという。そして、誰しも思い至る山口耀久の

「八ヶ岳は幸せな山である」と切り出し、

追いつかず、……」

と巧みな描

写が入る。

八ヶ岳」 かの理

では

何故幸 北

せ

曲

を

『本のある山旅』なのだ。

流域 の森の穏やかな雰囲気が好きで

う印 色に 沢 象がひときわ鮮 揺れてい の向 か いり 側 るのが目に入ると、 0 Ш やかだ。 肌 が 新緑の葉裏を風にそよがせ、 まさに脱皮を終えた山とい 銀 ねず

ライン川の「そうだ、 が、 シャンペリーでダン・デュ・ミディと対面しながらジャヴ 0 である。 と「ヴィルトシュトルーベル」について。 というあたり、 の……」とロマンを馳せる佳編である。 の言葉を思い起こす。 次いでⅡの、ミシャベルの山は先に触れたので「幻のボナヴォー」 節に惹かれて訪れるのだが、ボナヴォーには行き着けず、 特にヴィルトシュトルーベルの山頂で、 前者ではエミール・ジャヴェルの「一登山家の思い出 さりげ ここは分水嶺なのだ、 後者もまた味な山を彷彿とさせてくれ ないがすぐれた書きぶりであ 二つながら心憎い旅 ここがロー それもヨー ヌ川と I ッパ る ル

ることはないだろう」と、 もう手放すことはない書物だが 山と人』を入手する数奇な経緯について書く。 かを浮き彫りにし、 さわしいものとなっている。 対する熱い思いが行き渡っていて、この本の最後を飾るのに 11 やる言葉で結んでいる。 終りに並ぶ随想四編のうちの 続いて稀覯本、 愛蔵する本の、 特に「書物」とは著者にとっ しかし、 「ある本の運命」は著者の 深田久弥の ここがついの栖 いつかくる運命を思 そして、これは ーヒマラヤ 7 本に にな 何

> た。 ノクロ写真を大ぶりに挿入したことも全体の品格のために良か そして、著者も「北八ヶ岳」の中で稱えている新妻喜永のモ

しさに遊んで欲しいものである。 な時代だからこそ、 うだし、 近頃では、 第一、 昔の良い本も納まるところに納まってしまっ 山の本について語る相手も少なくなっ 世代を問わず本書をすすめて、 山の本の楽 た。 そん たよ

斉藤善久

### 宮下啓三/著

## 日本アルプス 見立ての文化史』



変化は趣味の分野の山登りの姿さえ変えてしまった。 それ以来全ての様子をすっかり変えてしまった。 にやって来たペリー 0 黒 船 1 ず書房・ 驚 この か 年5月発行 され 本体 2,500 円 その 変わ た B5判/250ページ

日本は、

江戸幕府の末、

横浜

探ってみようと試みている。この辺りのことを結びで著者は次 ス」という造語をもとにして、 りようを、 今では誰 もが抵抗なく口にもしている「日本アルプ 著者は日本文化史の一側面 から

も刺激してきた。」 宿命と感じていた閉塞感をやわらげ、しばしば詩的想像力を 験の一端を象徴する事例であると同時に、島国に住む人間が 「このようにして日本アルプスの名は、日本人の異文化体

も思える。 に、登山 たが、今回の著書で、このような不統一の雑然とした状況を、 在しているの まるで加藤周一が日本文化を指し、「雑種文化」と捉えたよう 表記方法について発言し、 著者の宮下氏はこれ の世界も同じように雑然とした様々な考え方が同時存 が日本の登山界の姿でもあると言っているように までにも、 その統一化を図ろうと努力されてい 何回 か登山に関する外来語 0

れはそれで済むことになろう。

"

野を学生相手に何 言葉に時代を見るというユニークな視点は、この方面の専門分 た ものとい 日本アルプスという今では何気なく聞き流してしまうような える。 十年も講義してきた著者ならでは気づかなか

を語るものといえるだろう。 日本アルプスという造語から話を進めているので、 点からすれば、この本はユニークな日本文化史の一 北海道や 側面

明治時代の山の状況からすれば、

ラスキンの尊崇者の小島烏

このため、当然ながら著者の身近な山や登山者が対象となって うに散らばる優れた登山者すべてに手を回すこともでき 九州など日本全土の山を網羅することはできないし、 解しているのか、このあたりのことまで著者の筆先は及んでは 弥に似た文化的登山を楽しめるとする者が、この百名山をスポー だろう。百名山の話しにしても、 るかもしれない。 いない。しかしそれがこの著者の姿勢なのだと理解すれば、 いて、この点、読む者に見方が一面的だと非難される余地は 的にとらえ短期間で登り終えた重広恒夫のような人をどう理 ェの言葉は必要ないだろうが、ママリーの言葉は興味を引く 実践的な先鋭的山登りを心がける者に、ニー その山すべてに登れば深田 日本じ 久 あ

チ

れば、 るといった表現は適さないように思う。 者の姿に、言葉の定義の仕方にもよるが、 著者の気持ちが漂ってくるようにも思う。 るスポーツ的な山登りの日 ているようにも思える。この主張の延長線上には、 れが日本独自の登山に普遍性を持たせる一つの方法だと主張し 高峰に登り、 H 本アルプスという日本語を定着させたのが 著者の考えが風流の精神に収斂していくように思え、そ 風、 寒気、 高度など自然の悪条件で苦闘する登山 本での在り方に方向を示そうとする しかし、ヒマラヤの 風流なことをしてい 小島烏水だとあ 個を重視す

水が けたかどうかには疑問がある。 ルパインクラブの てみても、 九〇〇年ころに 一段的 かが Ш 批判し なれ 者にとって、 てい ば、 た頃 ない 技術 の冒 ٤ そこが 0 一険的登山でさえ、 進 概には言 歩が 冒険登山 であり、 えず、 彼 の対象であ の所属するア 彼の亡くなる ラスキンにし

魔

力

のようなものが

いかに日本人一人ひとりの心深く影響

か を発見し、 見失われる」と書いてい ても具えており、 何だったのだろうか。 ことで理解できるが、 ンの信奉者だというのは、 部分であること」とある。 美は生まれるとの芸術観を持っていたという話しである。 ては祭られる神は同時 なかで、 ない」を引用し、和辻哲郎の分析として、「日 11 った非人格的な形にせ スキンは、 日本の山岳風景のなかに、 本居宣長の説、 深山幽谷を跋 の第二部第二章には 祭祀 然のうちに啓示され 0 丸山真男は、 烏水の言う「わが民族のエー に祭る神であるという性格をどこまで遡 る 究 渉した」 人格神 極 よ 同じキリスト教に関わ ラスキンの尊崇者・鳥水は、「ひた 0 究極の絶対者というものは 対象は漂々とした時空の彼 という。 わが民族のエートスの 0 「自然の真 形にせよ、 日本の思 る神 ウ 0 I 意志との 想 は神の真理 ストンがラスキ 理 本 2 生とか形 (岩波新 神話 トス」とは た者とい 調 にお あ 和 りか 彼の 方に 0 から 17 相 在

は

H に背を向 本ア ルプスとい けようとする大町桂月にしても、 う造 語 を積 極的 に使 用 しようとする鳥 異国文明の持 水や

あ

n

蝶ヶ岳であ

り爺ヶ岳であ

り

鹿

島槍

であ

n

ばよい

のである。

H

本アルプスという呼称は、

それらの

Ш

から

ある市町

Ш

11

に

が、 永らえていると言えるように思う。 プスでしているように思える。 ようである。このような人々はその擬似体験を今でも日本アル フランス・スイス・イタリアにまたがるアルプスを連 ら本場のアルプスを想像するものは確 えたかがわ 四、五十才から登山を始めた者に、 かるし、 その影響力が 昔の 今なお登山 かに少なくなっ ように 今なおアルプスの名は、 H 0 本アル 世界では生 想させる たようだ ナ ス

着したものでないため、 そのような状況は今も変わらないだろう。 を積んだが、 コ・グラートをヒマラヤの長大な雪稜に見立ててトレーニング えない。 た日本アルプスを初期の会員と同じように見立てているとは思 昔から住んでいる者にとっても、 る トレーニングの場としてさえ十分な条件を提供してはい 並みは、 それにしても現在 つてヨー ましてヒマラヤの高峰を指向する者に、 甲府 て名前を挙げるとすれば、 ロッパ 日本ではせい 盆地に住む者と同様、 0 のJAC会員 アルピニストは、 例えば安曇平から眺める北 ぜい 富士山が選ばれる程度だった。 が、 その呼称は彼らの生 鍋冠山 今でも西山でことた 本場のアル ベルニナ山群 日本アル であり、 H プスに見立 アル プ 本ア ス のビヤン プ ス Ш 7 て

住む人がこの 山域を呼ぶとき必要なだけのようにも思える。

され、 うに思わ 文科系の者がしたり顔で理科系の専門分野を語り、 そのことは山 らない山 ているというだけで、 がしたり 明 治 初期、 分類され れる。 顔で文科系の専門 登りの分野に国家権力の目はほとんど及ばなかっ 国益に関する分野はあらゆるもの に登る者には幸せだった。 たり系統だてられ 例えば医者でない者が医者の分野を語り、 分野を語るような状況も生 た。 しかし、 しかし、 が専門的に検討 山のことを知っ お 国 理科系の者 0 まれ ためにな たよ た。

が間 が野放図に動 般に与えな 犬には申し訳ない 日々あ る。 き いような日 それだけ 回れるような状況がある、 が、 に 本の登山界でありた Ш 登 に 山には犬死にだと言 関 わる者の責任 とい は われそうな局 0 重 た印象を 11 あ ぶれ 世 間 面

思う。 皮肉を込めその状況を見立ての文化史としてまとめたようにも る状況は、 外来の登山 H 用 本の登山界の現状だ、 語と同様、 日本アルプスという造語 と温厚な著者はソフトに、 に象徴され

れ ていくことだろう 本場のアルプスに見立てた日本アルプスと同様、 この本で著者は日 からも、 和洋混交のまま、 本の と示唆しているようにも思える。 登山界の将来像を示してはい 奇妙な落ち着きを見せながら続 それ は今もこ な 15 が

伝記作者がするような、辻まことの私生活にわたることを詮

「あとがき」で述べていることだが、

著者は、

多く

0

けると信じ」、辻まことの文章と画の仕事を辿ることで

なくても、

「自分のもっとも大切な、

意味深

当

は描

ない。

著者が

従って、

を自分で納得出来る形に文字で描きだそうとした作品であ

山の本」ではない。といって、辻まことの伝記でも

『見知らぬオトカム』

は、

池内紀が辻まことという人

0

肖

像

岡澤祐吉

池内 紀 著 見知らぬ オトカ 4

辻まこと/著 Щ か 5 0 葉



平凡社 • 刊 1996年6月発行



見知らぬオトカム

みすず書房・刊 1997年4月発行 : 本体 2,800 円 A 4 判/229 ページ

定価:本体 738 円 160 ページ

5 引用と著者による文意によって再構成する。一見辻まことの文 書いた文章を、或いは描いた絵を、丹念に読み、調べ、 ことの肖像を描くに当たって、 ませて、 に見えて実は緻密な手法をとった。 の声はなるたけおさえて、辻まことに語ってもらう。耳をす 一心にその声を聴きとるような手法をとった」。 辻まことに語らせるという単 つまり、 著者は辻まことの 拾 辻ま 紬

が本名で、一九一四年辻潤と伊藤野枝の長男として生まれ、 め 到な企ての下に、そのように見せて一方では己の思いを散りば 章を並べそれを読者に読ませているように思えるが、これは周 九七五年十二月にこの世を去った。「収まりの悪い人物だった」 今更いうまでもないことかも知れないが、辻まことは、 思想を語るという、二重三重の巧妙な仕掛けになっている。

巧妙な文章家、 と、池内紀は本書の冒 け出して他の人になっている。串田孫一さんは「不思議な人物 さえ込もうと様々な言葉を使うが、 についたことも主に仕えたこともない。 山に行き山で呼吸をし眠り、 図鑑の制作者、広告作家、詩誌『歴程』同人、スキーの達 アフォリズムと風刺 頭でいう。 画家、 鉄砲を撃ち、ギターを弾 その度にするりとそこを抜 の効いた短文の達人、 色々な人がこの人を押 版画家、 風刺家、 定職

辻まことの多様性を、 書の内容は、 凡そ年代順 生い立ち、 に、 全部で十六の章に分 参戦から、 かれれ 生き方 てい

> を進める。 様々な角度から項を変え、 まことの精神を偲ぶ 精 神、 風刺の心、 最後は 「過ぎ行くアダモ」で、遠く去って行った辻 絵画、 章を改め、 風刺家、 山との関係、 また交錯させながら、文 モラリスト等、

0

本の中でも割かれている部分は当然少な に、また山が人間辻まことのすべてではなかったように、 山 については、辻まことの著書が限られたものであったよう

から、 思いがしないでもない。 この自由な人との接点が、 山の本は、『山からの絵本』、『山の声』、『山で一泊』 間的魅力にも拘らず 仲間としスキーで無人の山中を跋扈する、非典型な登山者。 の声を聴き、 というが、辻まことはそういう山と自然を自分の領分とし、 名山すら出て来ない。本人はヒマラヤではなくウラヤマの話だ 残されているが、世の山の本のようにヒマラヤはおろか日 辻まことは、 現在登山家という典型的な鎧を着ている多くの人たちと、 山 に限らないが、辻まことを知る人の範囲も限られ、 奥日光の猟師キンサクや鹿や狐やムササビを山 山には登ったが世にいう登山家では 「それはごく小さなファンの 体何処かにあるのだろうかとい 環にとどまっ な の三冊が か 2 本の た。 だ 山

全部 人間 見知らぬオトカム』を読めばその「不思議 わかる、 他人の書いた一冊の本だけで分かる訳がないというこ と宣伝したいが、 そんな訳には行 か

読んで自ずと納得することになる。 著者の心によってあ なって来る。池内紀が辻まことに似ているということではない、 まことが忽然とそこに顔を見せる。池内紀に辻まことの姿が重 がやっとできた」と一九四○年生まれの著者が述べるとき、 しかしその姿はなんとも辻まことその人だと思われるので、 本の中に注ぎ込んで「私にはいちばん書きたかっ ぶり出された、 池内紀の辻まことが姿を現 た本 进

L かし、

- 年来辻まことに魅せられ、

心の大切

な

部

現在の登山家にとっても、 た辻まことという「不思議な人物」が存在したことを知るのは、 が見事にやってしまった。 が の中に、 よいだろう。辻まことを語ることと同じになり、 残念ながら、この本の内容を細か これ程自由な精神と思索を駆使し、希有の才能に溢れ 多少は心強いのではないだろうか。 本書を読んで、 に説明することは Н 本で山に登 それは著者 ıĿ. 0 85 た人 た方

分野になるように思われる。

ラリー 全てを纏めて一冊にしたものである。一九七〇年一月号から の山の本で、辻まことが 『山からの言葉』は、 の山 月号迄の全五 の本の 辻まことの遺稿となった。此の度 シリ ここでは表紙の絵と表紙の言葉には直 十七点(途中六 1 『岳人』に描いた表紙と表紙の言葉の ズの中 本人の知らぬ処で出来た四 の一冊として再刊され 回 は病 のため 『平凡社ライブ み)。 冊目

通

0

場合と異なり、

りでないのが却って惜しまれる。 載っているが、 接 のつながりが そうなると、 ない。 絵は絵で、 ないものねだりで本書全体 線や形は明瞭だ 文章は文章だ。 色刷 が りが あ が色刷 0 四 占

な色彩感は矢張り独特なものといえるのだ

か

かっている。それを乱暴ながら一 池内紀のいうように作者の眼は鋭い風刺の光で外部 による風刺の効いた数多くの絵を描いている。 ストを紹介し、 辻まことは、 一方、自らは 戦後スタインベルグ等アメリカの 『虫類図譜』を始 括りすると、 これら 山の絵は、 め 力 の世界に向 独 1 の場合、 自 1 ・ウーニ のペン 别

ようだ。描かれた登山者たちの背景にはその静寂が仄見える。 よりも、 風、丸顔ドングリ目玉、 出 いに似て柔らか 毎号の描き方は様々だが、ここでは登山者は外部の対象とい アンハットをかぶってレコーダーを吹くハイカラな登山者等々。 の岳人、 向こうで煙管を持った親父さん、地下足袋に背負子にハチマキ めて見ると、謂わば登山者百態で、 そうだが、山に関わったときには絵が優しくなる。 来た人の山 辻まことの山 作者と同じ世界の人たちになり、 山小屋の大将、かと思うと、ステッキを立ててチロ の静寂があって、 い。この人の山の絵には、 の水彩画や油絵と同様、 74 一角い顎や大鼻の男、 透明な色彩が心 真面目な顔、 『岳人』 山の声 風刺も内輪のから 髭男、 の姿勢を伝える 0 を聴くことの カリカチュア 表紙 こうして纏 囲炉 の絵 裏 \$

五年のことだ。鳥は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではななのである。「公害はまっすぐいえば『人害』」で、地球上でものである。「公害はまっすぐいえば『人害』」で、地球上でと断じたのは既に七二年のことだし、八千㍍を初めて無酸素でと断じたのは既に七二年のことだし、八千㍍を初めて無酸素でと断じたのは既に七二年のことだし、八千㍍を初めて無酸素でとがじたのは既に七二年のことだ。鳥は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではな立ている。鳥は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではな立ている。鳥は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではないである。「公害はませい。」というにいる。鳥は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではないである。「公害は一番初めに風の音を真似て鳴いたのではない。」というにいる。「公言は、「おいった」というにいる。「という」というには、「いった」というには、「いった」というには、「いった」というには、「いった」というにはいる。「いった」というにはいる。「いった」というにはいるというにはいる。「いった」というにはいるにはいるにはいる。「いった」というにはいる。「いった」というにはいる。「いった」というにはいる。「いった」というにはいった。「いった」にはいった。「いった」といった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった」にはいるいった。「いった。「いった」にはいるいった。「いった。」にはいるいるいるいるいった。「いった。「いった」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。「いった。」にはいるいった。「いった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。「いった。」にはいるいった。」に

夜辻さんの姿を見た人たちは、今どうしていることだろう。余談になるが、三十余年前千代田公会堂で開かれた「アルプの夕べ」で、辻さんはウィスキーを飲みながらギターを弾き歌の夕べ」で、辻さんはウィスキーを飲みながらギターを弾き歌の夕べ」で、辻さんはかられた「アルプの夕べ」で、辻さんはかってお酒を飲めるのは大変な人だと思った。会場全体が暖かな笑いに包まれていた。それにしてもあのた。会場全体が暖かな笑いに包まれていることだろう。

### 『冬のデナリ』 西前四郎/著



福音館書店・刊 1996年10月発行 定価:1,751円 B5判/447ページ

この本の著者西前四郎は筆者の大学の先輩であり、同輩でも B 2 B

ぐらいの息吹きは感じられるのはあたりまえだ」という人。

「谷川の石にもたれて二時間も坐っていれば、

山の一呼吸

いかと想い、足下の湿った淡い緑に繊細なエロティシズムを感

の一人の希な登山者の思想に触れるとき、

山登りも街の生活も、

あったが、

だけであった。出ないで利尻に行くことになったのは、結局西前と筆者の二人出ないで利尻に行くことになったのは、結局西前と筆者の二人は西前であった。同期の山岳部員は七名ほどいたが、卒業式も学生時代の最後の山行に、冬の利尻岳に行こうと提案したの

情熱がより濃密であったことを意味している。

それはとりもなおさず、学生時代の彼の

山に対する

れることになる。 れることになる。 れることになる。 れることになる。 れることになる。 れることになる。 れることになる。 れることになる。

大学を卒業して、西前はアラスカに行ってしまったし、筆者

もモスクワで生活していたので長い間会う機会はなかっ 八〇年の早春に、 私たちのチョゴリザ 征 登 Ш た 励会

遠

0

激

道の交差点で信号待ちをしている時、 ラギリⅣ峰の登山の話などをしてくれた。 していて、 も兼ねて、 デナリの冬の登山や一九七五年の大阪府岳連 大阪でOB会の集まりがあった。 隣りにいた彼がぽつりと 集会も終り、 その 時 西前 梅田新 も出 0 ダウウ 席

「デナリの風は凄かっ た……あの時の風の咆嗜が今も耳 「の奥

に残っているんだ

i

った。

そして彼は私たちの遠 『冬のデナリ』にはこの時の烈風の情景が次のように描かれ 征登 山が無事であることを念じてくれ た。

あがり、 り腹ば を登ろうとするが、 中央に出て行く勇気はなかった。……さらに傾斜をましたガリ に集まる水のように風が集中する。その堅く氷化したガリ 「パス(五五五〇片) った足の力を抜くと、アイゼンをつけた靴先が風に浮き いになった。ピックを氷に刺し、 体をめくられそうになる。 四つんばいでは吹き飛ばされそうで、 まであと百以だった。 にじりあがろうとする。 しかし漏斗 ぴた 0 í 0 П

はいずり はデナ ま ij わるジ 峠% の最低鞍部ですさまじい轟音をあげ、 1 の腹の底をゆさぶり、恐怖をかきたてた。」 ガリーを

グランド・ジョラス北壁冬期第二の記録を持つ登山家だった。

彼 の著書 『冬のデナリ』 は

第二部 第 部 白い風の冬 旅立ちの夏

第三部 みどり甦る季節

ると、 の三部より成っている。本書を読了して再び各部 物語 0 起 承転結が鮮明に甦ってくる。 彼の人生 0 見 が 出しを見 見

隊 レッジの大学に留学するという幸運をつかむのである。 カにやって来る。この登山を無事完了させ、その上彼はアンカ は夏のデナリに登り、その時の山仲間、 短い言葉で集約されてい 第 (筆者注、 部の「旅立ちの夏」では主人公・児島次郎達社会人登 関西登高会) る。 がセント・エライアス登 詩人ヒッピーのアーサー Ш に 翌年に アラス

Ш

と次郎は厳冬のデナリ初登頂計画を練り上げた。 揺する。隊の スイス、ニュージーランド、 中心であるが、 のデナリ峰に南 スに落ちて死亡する。 ところが、 第二部の「白い 中 入山三日目にして登山隊は不幸に見舞われ隊は動 各々の出身地はアメリカ、ドイツ、 で最も経 山稜より挑む。 風の 久二 ジャックはリオネル・テレーと組んで 験豊富なフランス人のジャ では、 日本と国際色豊かな登山隊である。 隊員はアラスカに住む登山家が 八名より成る登 Ш フランス、 " 隊 から クがクレ 冬期

とジロー

は

自分を強く責めた」

彼はタクティ

クスの

担当であ

た。五日

H

にはジローら二名も食糧が尽き、第三キャンプへ下っ

た彼は、

二名の隊員を失った。

ダウラギリIV峰を初登頂した二

隊員デイブの 日記にジャックのことが次のように記されてい

「この冬の山の風と光と影、 幸せだったのだ」 こんなささやかなもので彼は満

線上にある五五五〇ぱのデナリ峠の下方に設営する。ここから 三名が頂上アタックに向かった。隊長やジロー達四名は最終キャ これはまた西前自身の気持でもあったのだろう。この災厄にも ら山頂はブリザードが吹き荒れ、 ンプの雪 かかわらず隊は登山を続行し、 洞でアタック隊の帰還を待っていた。その日の夕方か 最終キャンプを頂上に通じる稜 アタック隊は帰って来れない。

のことを「デナリの風は凄かった」と彼は後日述懐していたの 行くが、強風にはばまれ、その手前で引き返して来る。この日 でもあるが、 翌三月一日、 ジ 六年前に西前と筆者が利尻岳の頂上に立った日 ローと隊長グレッグが救援にデナリ峠に登っ 7

た。事態はジローのあらゆる予測を越えている。 ら二人が救援を求めて下山。「登山隊はばらばらになってしまっ をくってい ブリザー る ドのために最終キャンプのジロー アタック隊を送り出した日 から三日 達は雪洞で足留め 戦術の失敗だ 目には 隊長

> 三名の壮絶な死闘が、零下五〇度、 られていた。 デナリ峠では二 その描写の迫真力は凄 月二十八日厳冬期初登頂を果したアタック隊 風速 五〇だの中で繰り広

そして、 目の三月九日、救援のヘリがやって来てジロー達は救出される。 ここで再び悪天候のため三日間閉じ込められてしまった。 ら救出され、ターキッナに収容されているのを知った。 方、ジローら二人はカッヒナ峠の第二キャンプまで下るが、 アタック隊三名も、 前日すでにヘリで第三キャ

だった。 り、最終キャンプを経て第三キャンプまでたどり着いてい 押し込み、その上にアイゼンをくくりつけ、氷化した斜面 三月七日彼らはデナリ峠から凍傷でふくれ上った足を靴の中に ブリザードの脅威にさらされながら、 アタック隊は生き抜 たの を下

ある。 題にした」とあとがきで言っている。 第一部、 彼は「この著者を第三者として描ききることを自分の課 部の主人公・次郎 (又はジロー) は著者自

冬のデナリ登山の意義をさぐろうとする。 デナリで生き残っているメンバーのその後の人生を描きながら、

第三部の「みどり甦る季節」では著者西前四郎自身が、

冬の

ダウラギリN峰 前 は デ ナリの への遠征である。 後でもう一つの海外登山を行 この登山で、 登攀隊長であ った。 前

述

L

**なこよご「一)は"など、ハッド)に呼ぶていま、生はずこ**人の隊員が下山時に滑落して命を落してしまったのである。

話し合った。そして彼は言っている。ていた。西前は隊長グレッグを訪れ、あの時のことをじっくり島に住んでいて牧場や農園を経営し、野外活動用のナイフを作っうになったのだろう。隊長は今はシアトル北方のサン・ホアン 彼にはデナリの隊長グレッグの気持が更に深く理解できるよ

に気をとられて、ぼくたちの誇るべきものを、今まで忘れていに気をとられて、ぼくたちの誇るべきものを、今まで忘れていではね……。あっそうだ。最後の一週間で露呈した自分の失策ではね……。あっそうだ。最後の一週間まな方もない冒険を楽しんでいたということだ。最後の一週間またんど。

書で美事に描き出した。

た四郎の気持を。郎に尋ねる。三人のアタック隊を残して、最終キャンプを去っ郎に尋ねる。三人のアタック隊を残して、最終キャンプを去っだったアーサーは今は著名なライターである。彼は遠慮なく四アンカレッジに腰を落ち着けているデナリの登頂者、ヒッピー

たまるかと思いながら、いつも死は身近にあった」でも訪れるさ。そのことはみんな承知だったろう?絶対死んでど、ジャック・ファーリンの時と同じように、死は突然、誰にとじゃなかった。君が生きたがっていたのはよく知っていたけとじゃなかった。君が生きたがっていたのはよく知っていたけ

業も、生き方もそこから導きだされたんだ。いろんな意味で、一あの冒険を経験できたことはすごく幸運だった。ぼくの職

君に感謝しているよ」とアーサー。

登山後三十年間、自分の心の内奥にあったこの澱りを彼は本辱など人の記憶の中にある感情の澱りを扱いかねていました。」「いや、アーサー、生きていてくれて、本当にありがとう」西前はかすれた声で返事している。

確かに、この物語りを書き上げたのは西前四郎自身だが、確かに、この物語りを書き上げたのは西前四郎自身だが、確かに、この物語りを書き上げたのは西前四郎自身だが、確かに、この物語りを書き上げたのは西前四郎自身だが、

不慮の事故で急逝された。

(田村俊介)

### 北海道雪崩 新雪崩学入門。 事故防止研

編



山と溪谷社・ 1996年3月発行 : 1,800円 A5版/160ページ

とめた するために、北海道大学低温科学研究所のスタッフとともにま 崩現象を正しく理解し、 山岳スキー 本書は、 雪山の最大の危険である雪崩事故の被害を少しでも少なく 「雪崩の教科書」である。 北海道 ヤーで組織される北海道雪崩事故防止研究会が、 0 山々を主なフィールドとしてきた登山者や そして適切な知識と技術・装備によっ 雪

にできる雪崩の危険判別法 雪の科学的性質 選択、 崩の潜在的危険がある雪山での行動判断 本書はまず、 と続く。そして手による弱層テストという、 危険地帯通過方法、 山岳雪崩遭難の実態調査 (第2章) および雪崩の発生メカニズム (第4章) キャンプ地の選択という登山の重 が具体的に示された後、 (第1章) (第5章) 現地でも簡単 から始まり、 (第3 ル 1

要な場面ごとに解説される。

これまでの山岳情報誌や登山関係の書籍でも、 れていた情報のように思われるかもしれない。 そして一見すると、 ここまでは、 わば雪崩に遭わない 本書ほど体系化されてはいなかったものの、 ための知識と対策である。 応は取り扱

何シー 既存の断片的な知識を一度すべて捨てさること、 その誤りは悲惨な雪崩遭難へとつながる。 ところがその雪崩のイメージと知識には往々にして誤りがあり、 てしまいがちである。 集めた情報から、 の否定」を求めている。 かし編者は序文で、 ズンか経験すると、 雪崩について、 それが完全に正しいならば問題はない。 これは重要なポイントである。 本書を読むに際しては、 誰しも先輩から聞 ある特定のイメージを形成し いり た知識や自分で いわば 雪崩 に関する 冬山 常識

数は、 はり雪崩は起こるのである。 が締まって」いても安心はできない。 いなければまず大丈夫」ではない。降雪がない時の雪崩発生件 表層雪崩の破壊力の前では身を守ってくれない。「 たとえば、「太い木が生えているから安全」という常識 実は吹雪の時と同じほど多い。 そして「気温が 気温の低い夜間でも、 雪が降って 低くて雪 は、

よるものであることや、 によるヒマラヤ登山の全死亡者の四十八パーセント強は雪崩に 常識 に惑わされるのはベテランとて同じである。 九〇年代に入ってからの記録によれば、 H

る ことが、そのことを明確に示してい 高所登山者一○○人のうち二人は確実に雪崩の犠牲となってい また事故者四人のうち三人が雪崩事故によるものだという

とは分からないと明示しながらも、これまでの「常識」に従っ たのかを、背筋を伝わる寒気とともに気づかせてくれる。 てきた登山 ひとつづつ解説して行く。そして、 は このような、 誤解について、 者やスキーヤーに、いかにこれまで自分が幸運であ 一般に広まっている雪崩に関する 本書は豊富な資料と緻密な検討によっ 現時点で分かっていないこ 常識 て ある 0

者が持つべき知恵と具体的手法である。 崩を避けるだけでなく、 の迅速な捜索救援活動によって生還するために、 う常識である。この「常識」に対して本書が呈示するのは、 そこで否定されるのは、「雪崩にやられたら助からない」とい 雪崩に遭遇してしまっても、パーティー まさに注目に値しよう。 雪山を目指す

11

かし第6章以降の本書の内容は、

の全員がこのビーコンを身に着けていれば、 カ 0 コンとは、 捜索が ナダの 6章は雪崩対策の装備であるが、その 紹介とその適切な使用方法に割かれている。 統計 崩埋没者の生還率は時間との競争であるが、パ 簡単に になり、 によれば、 11 えば手のひらサイズの無線信号送受信 スピーデ 雪崩ビーコン携行者の生還率は、 1 -な救助 中心は が 仲間による埋没者 п 能となる。 その雪崩ビー 雪崩ビー ーティ ピー 現に 機で 1 コ

> 効果はまちがいないとして、 していれば絶対に助かるわけではないけれど、 コンを携行していなかった者の三倍近くにもなるという。 欧州や北米の登山者やスキー 生存率を高める

の間では広く用いられている装備である。

ンになっている。 や欧州の山岳スキーヤーは、ザックにいつもスコップをつけて うのではない。軽量で頑丈なスコップを、 すべきとのことだ。そう言われてみれば、 内の多くの雪山登山に見られるように、パーティーに一本とい きとめたとしても、迅速に掘り出すことができなけれ ようもない。そこで必要となるのがスコップである。 るし、ザックの背面パネルはスコップの着脱が容易なデザイ もっとも、 たとえ遭難者が埋まっている位 たしかに最近の北 ひとりに一本、 置をビー それ ばどうし コンで

性が、 するこの第7章は、 に、 を、 またその効果の紹介と正 自らの能力だけで捜索し、 止研究会は、 て行方不明者を生じたパーティーが、 第7章は「セルフ・レスキュー」、 先の第6章と、 詳細に説明する。第6章で詳述され ここであらためて強調される。 日本への雪崩ビーコンの導入をいちはやく実践し、 本書のなかでも特に充実している。 ビーコンの具体的使用方法や注意点を紹介 しい使用方法の普及に努めているだけ 行方不明者を救出する」ための すなわち 編者の北 救助隊の支援を受けずに た雪崩ビーコンの 海道雪 「雪崩に遭 事 方法 遇

た場合の本格的 にしてセルフレスキューでは対処しきれず、 して十分に整理されてこなかっ ては重要なポ 章は、 イントであるにもかかわらず、 遭難者発見後の対応である。 捜索方法が第9章で述べられる。 たものであろう。そして、 これも雪崩対 救助隊が必要とな これまでは情報と 策とし 不幸

る知識や対策を貫く、 ために」という第11章は、 るスイスの雪崩対策が報告されている。「雪崩犠 自らの命は自 章は雪崩対策先進 分で守る」という考えこそは、 中心的な思想であろう。 国の現状であり、 本書の編者たちの願いであろうが、 特にアルプスを抱え 本書で強調 牲者をなくす され

が多 Ш であることから、 期登山を計画する際には、 山などの雪崩情報もまとめられており、 が載せられている。 の第12章では、 が、 南北 中 ・央アルプスや八 やはり大雪や日高等、 全国山岳雪崩発生地点地 執筆者たちの活動の中心 参考にされるべきであろう。 ケ岳、 1: 北 これらの地域 越の 海道の 図お Щ が北 よび雪 Ш あ 岳 る 0 海 情 いり 道 崩 0 は 報 0 漕

11

も違 にとっての雪崩対策については、 的と性格を良く理解しているためか、 人の執筆者による分担執筆でありながら、 感は感じら かかわらず実に充実した内容で、 総じていえば、 れず、 全体のつ A5判一六〇ページというハンデ ながりも論 日本語で表わされた現時点で 章ごとの記述スタイ 登山者やスキ 理 全員 的 か 0 が本書 スム ヤー 1 ル 0 1 な ズ に H

> と読んでもらいたい良書である。 者はもちろんだが、 最良のテキストと評価できるものであろう。 自称 「雪山のベテラン」にこそ、 雪山を志す初心

は

L

ても、 と名うたれてはいるもの ついてこれから初めて学ぼうという人々にとっては、 ないことである。 るにもかかわらず、 スペースに盛り込もうとしたためか、 本書が、 なる雪崩防止 策の基本を、 崩の怖さを知らない登山者やスキーヤー、 り読みやすい改訂版という形で、 に過ぎると受け取られてしまうの 切って内容を絞った「図説簡易版」といったような形で、 かしこれまでに雪崩を経験したことのない者や、 かも目の前で危うく仲間をなくしかけたという経 かし、 本書を興味深く読み、 より興味を持ちやすく、 īĒ. 本書にも改善への 確かつ高度な知識や具体的な対策手法 より容易に理解できるような、 マニュアル 私は、 全体としては読みやすいものとはなって が、 0 自分自身も雪崩に遭遇したことがあり、 また教えられるところも多かった。 要望が 本書の編者やその仲 あまりにも専門的あるい そして雪崩の怖さと被害防 ではない あるいは場合によっては、 な 写真 11 わ スノーボー けで だろうか。 や図が多用されて まさに は 間 な 雪と雪崩に たちに 験もあるた ダー 入門」と 限られ 入門 は学術 そ n 思 ょ 的 た

め L

なお、 北海道雪崩事故防止研究会の中心的なメンバーであり、

て著わされることを期待し

た

ルドの を絶 て中 本書 多くしようとした福沢氏 を 知 そなかったものの、 故が疑わ にはいられない。 在 識と対策が実際に活用されることによって、 件でも少なくし、 \* 0 国 0 た。 前 中心としていた私としても、 執筆者のひとりである福沢卓也氏 のミニ n 0 7 遭 11 難 + 九九四年九月 蒝 る ・コンカ峰 因 彼と同じ北海道の山々を登山とスキーのフィ は誰にも分からない 福沢氏とは そして雪崩事故からの生 の想い を登 日本ヒマラヤ協会の が実現することを、 Ш 中 緒に雪山 本書が広く読まれ、 74 to 人の は を歩き語らう機会こ 0 0 本書が出 仲間ととも 還者を一人でも 登山 崩に 雪崩による事 心から願 隊 版 よる遭 本書 され に 員 とし 消

加藤峰夫

ウ 才 才 日本アルプス再訪 日本アルプスの登山と探検 ルタ ル 7 1 1 . ・ウェストン ウェ ストン/著 著 水野 青木枝朗 勉 訳 訳





岩波書店 • 刊 1997年6月発行 定価:本体1,400円 定価:本体 660 円 文庫版/462ページ 文庫版/381ページ

ストンは一 初 8 て来 八 1 Ħ した。 八八年、 丰 + ij Ŧi. ス 歳 1 0 教 頃 0

して 彼は、

八九四

年

の四年をかけて、

北アルプス、

この 八九一年

極

東の島国

のすばらしい

大山

脈を「発見」

する。

2 た

に傾倒

て

11

よりスイスアルプスを中心として本格的な登山

宣教師として、 英国人ウォル

七歳

に

ター

ウ

I 0 時

富士

Щ

浅間

山

など、 ーから

まだ一般登山者など存在すらしていなかっ

の旅 た頃の 的となっ の登山と探検は、 行に先立ち、 H たのであ 本の山 若き登山家・ウェストンにとって未知なる日本の 「々と山村を存分に旅して回った。 一八九〇年に彼が宣教師の職を辞してい 年 間 の日本滞在における、 まさに最大の目 驚くのは、 るこ Ш そ K

> か 山

のが、 水が、 普及させる最大の礎となったことは、 等の生活目的の登山しかなされていなかった日本に、「遊びと 者に与えた影響ははかりしれない。 山の実践者であっ 持った。 目的で書かれた本書に偶然出会っ Ш ての登山」「登山のための登山」、すなわち近代登山を急速に 英国人に対して未知なる日本の 行き帰りに滞在した周辺の村々の旅行についてまとめたも 八九五年に一旦帰 創立につ はじめに紹介する『日本アルプスの登山と探検』である。 一九〇二年に再来日を果たしていたウェストンと親交を 日本の山 ながり、 たウェストンとの邂逅が、二人の山 岳環境の素晴らしさを世に紹介し、 国後、 ひいてはそれ その四年間に渡る日本での登山と、 た岡野金次郎 Ш それが一九〇五年の 々と山村の風俗を紹介する 現在広く知られているこ まで宗教的登山及び狩猟 そして小 自らが 好 日本山 島鳥 若 谷

る日 本の山々を縦横に逍遙し 書には約一〇〇年 つの登山記録は概してそれほど長くはなく、 前 ウェ た記録が生き生きと描かれている。 ストン が北アル プスを中 現代の登 一心とす

> けることはできないのか、 このような素晴らし ず素直に言ってうらやましい。 処女性にあふれる原始郷を自由に駆け巡るウェ った頃の 記に比べて記述は簡潔である。 あまりに い原 も豊かな日本アルプスの自然の 初の自然をもっと純粋な形で生か などと考えさせられる。 そして、文明を発展させる一方、 まだ大正池すら存在してい ストンたちがま しか

のだ。 見覚えのある高い山の頂きに覗いている真っ青な小さな空 の甘い香り、 ンドのような朝露がきらめ て、 もうそれだけで、 空には一点の雲もなかった。私たちはふたたび雑炊橋を渡 日本のマッターホルンともいうべき槍ヶ岳に向 谷間の空気は清く澄んで、木々の葉にはダイヤモ 足の方から聞こえてくる遠い渓流のざわめき、 生きていることがうれしくなってしまう 11 ていた。 頂上高く聳える松の木 かった。

ない新し 質的な魅力が立ち昇っている。 しさがその神秘ととも つの流れとなっ ウェスト かに感ぜら い道から ンのロマンあ た未知と困難を求めるアルピニズムの 頂 きを目 に描き出され、 ふれる記述には、 指す時、そこには後年先端登山 そして、 と同 H 時 本の猟師 H だ 本 o 登 Ш Ш たちが歩か 岳 の持つ本 0 萌

本の田舎での素朴な村人とのふれ 方、登山の記録だけでなく、 あ その行き帰りに立ち寄った日 明治中 期 0 その 風俗

明ら

れ

く態度で接し、 11 年 くるも に訪れるネパールの、 奇しくも昨今私たち日本人登山者が好んで登山やトレッ が感じられることはな 全体を通じて好ましく感じられ 性である。 H 本 である。 い外国 一の山 Ш の記録と同じくらいの質量を持って、本書を形づ ある時は 村の様子は、 田舎の民に接する彼は、 人に接する態度、 まだ江 山岳民族とのふれあいを想起させる。 戸時 友情をも育んでいるため、 私たち日本人にはとても興 代の雰囲気すら感じられる一 るの その田舎の は、 常に ウェストンの暖 民の素朴さは、 定の礼に基づ ほとんど嫌 妹 キング 00 ま か

そして、一九一一年、 玉 アルプスをまた精 初登攀するなど、今度は主に南アルプスを中心に登山を行った。 ウェストンは、 上高地の主と呼ばれ 本との最後 九〇二年 鳳凰三山 力的 から 0 別れとなっ ウェストン五○歳の時に三 に 登 た猟師・上条嘉門次らと、 0 立って回 地蔵岳オベリスクをロープを用 九〇五年にかけて再来日を果たした た る 九一 五年の英国 度目の来日を 懐かし い北 帰 7

登 の記録が主に収められている。 Ï に紹 介する『 H 本アルプス再訪』 には、 度日 <u>ا</u> (原題は 度日 の滞在 "The Play-時

時

H 本アルプスの登山と探検』が、 旅行記としての色彩濃く、 0

> な側面 軍人養成」 などに対するより深い考察を、最初の著書よりもはるかに多く 紀行文の中で登山と日本の田舎の風物などをあわせて紹介し も劣らない、それら日本研究の章の充実した内容であろう。 た登山とは関係ない「 人でもここまで詳しく調べるのは大変だと思えるほどだし、ま いたのに対し、『日本アルプス再訪』 ス再訪』 独立した章を設けて紹介している。 から富士山を包括的に記した「富士山年代記」は、 などの章もひじょうに興味深い。実際、『日本アル の魅力は、 日本の田舎の年中行事」や「近代日本の 南アや北アの登山紀行の面白さに勝ると では、 歴史や芸術などさまざま 日本の文化、 本 俗

0

ナ

ら八〇年前、 か、 本では現在まで位置づけられてきたように思う。 社会にとって意味のない行為、 るような登山というものは、 な言葉で語られているところである。 現代社会の中における登山の持ちうる価値というも 直截に刺激を受けたのは、 行為が人間にとってどれだけ普遍的にすばらし 期 部の人々が ところでしかし、この『日本アルプス再訪』の中で私が最 ということをはっきり記していたという事実に、 に、その父とも開 近代登山がこれから本格的に幕を開けようとい 行う自己満足的な行為というふうに、 祖とも言わ そこに登山 他のスポーツや仕 登山界という閉鎖社会に れるウェ 登山とりわけ生死を賭 の持つ真 ストンが、 事とは 0 ところが今か 価 11 のが、 とりわけ 4 登山 0 異 目から鱗 それ であ なり、 お 明確 H 7 H to

登

一山というものは一見何も生み出さない

無償

0

が 落ちるような思い がした。

を最も感動させるのは、 築かれた大都会を離れ、 理 n ために役立つという保証も含んでいる。 尚 んなによいことかという教訓を学びつつある。そして、 想的な形 るからである。 な活動的 Ш が、 最高の道 で人間 V クリ さまざまな意味で、 エー そのものを高める行動であり、 徳的価値を持ち、 ションとして、 人間の清らかな魂に訴えるもの 聖なる高みへと登りゆくことが、 登山という楽しみ 人気を増すように思 人間が為し得る最も高 略 また、 人工 いは、 人間 であ 的に その わ

な

るが、 界が、「今日、 るのだ、 する新しい行動の規範、 はまさに、 けをあまりにも崇拝しすぎる」ことを、強く憂えていた。 なってしまった」、という別の人の文章の引用ではじま クで美しい国というイメージが消えてしまい、 H 「本アルプス再訪」 ウェストンは日本という国、 同じように言われていることではないか。 と唱えてい 現代の私たちが模索するそれらの物質本位の発展 あと数年で二十一世紀を迎えようとしている現代社 人間の能率的価値や物力の優越性を示すも た。 の冒頭は、 あ る 11 は救い 「日本は、もはやロマンテ あるいは自分たちの が、 山 にこそ存在して 物質本位の国と そしてウ 住 2 それ に対 0 む世 7 1 だ ス 11 "

> 隠されているのではない あるがゆえに、 ストンが、 時 代以上に物質本位に発展した現代社会を救う魔法が、 しかし、 実に勇気づけられる思いがするのである。 古典中の古典である著作の中で語 無償で それが為され続けるということに、 あるにもかかわらず、 か。 それを我らが近代登山の父・ウェ ってい いや、 ウェストン たというこ 無償で」

0

ルプス』の巻後に」と、 巻末にある のものが明らかに読みやすい。 岡村精一・訳の同じ著作が再版されているが、 ひじょうに平明である。約二年 訳だが、 簡単に触れたい。 訳者である水野勉氏の平凡社ライブラリ ぜひ読まれることをお薦めする。 マンあふれる文章は、ウェストンとその著作に興味の かりやすく、 お、 これは氏にとって二度目の訳出であるだけに、 日本アルプスの登山と探検』 (岩波文庫版にはない) 小島烏水の 今回出版された岩波文庫版は青木枝朗氏の あわせて一 岡村精一 読を薦めたい。 ただ、 前にも平凡社ライブラリ 0 また、 訳者のことば 平凡社ライブラリー の翻 『日本アルプス再訪 1 訳に 版 青木枝朗氏の訳 の解説もたい 邦訳 ついて最 0 日本 í 文章 ある方 美しく か 後 版 0 6 が 翻 に

松原尚之

h 0 は 

わ

#### E° ュ ーベル 1 著 黒沢孝夫 訳

# 生と死の分岐



山と溪谷社・刊 年2月発行 : 2,678円 A 5 判/303 ページ

(一九九七年)、 神奈川県の教員を中心とする登 カラコルムのスキルブルム峰 技術をそなえ、 テントごと飛ばさ セラックの 知識も豊かで、 Ш n 隊 崩壊に誘発さ 叩きつけら 0 隊 で大事 員 経験 たちち

この夏

が、 も豊富な登山家が数多く参加して、 れて六名が死亡したのだ。 故が起こった。 う気がして、 ほど考えたって、 据えて登 句 た雪崩 らませて、 登頂後ベースキャンプで就寝中、 に 0 測り 何をしたって無駄なのだから、 山活 の爆風に襲われて、 悲観論に呑み込まれてしまいそうになる。 無謀な行為を頭に描く者がいるかもしれない。 知れない力を思い知らされ、 動をつづ しょせん人間 けてい たはずなのに……。 の力などた 安全登山を一 という点をい かが知れていると 何をしたって、 つのテーマに たずら その どれ 揚 何 13 ある。

膨 げ れ

をしたって無駄なら、 自分の 活動の規模を縮小する者がいるかもし 君子危うきに近寄らずだ、 とば か b 举

して、 は、 三百万マルクを遙かに越える資金を投入して、 記念して、安全問題研究に関するこれまでの成果を分類 に大きくなっている。 装備の改良に役立てられてきた。 て、 を蓄積し、 必要があるのだ。 らこそ、 に公表され だが、 ドイツ山岳会の安全委員会は創立以来二 ルックサックやハーネス、 直接、 九六〇年代よりも、 41 何をしたって無駄だというような状況が起こりうる 翻訳もされ、 研究してきた。 わゆる 登山者の役に立つ一書を編み出したというわけ 本書はそのために必読の一書とい 『凡ミス』を防ぐため そこで、安全委員会は創設二十五 それを拠り所にメーカーに改善提案し その研究成果は、 山の中で生き延びるチャ ヘルメット、 そのおかげもあって、 いに精い 十五年間にわたっ その さまざまな出版物 遭難事 っぱい 他もろもろの ンスは遙 故報告 周年を 今日 整理 か か

CK たとき垂直静荷重のせいでじきに死んでしまうとか、 I に弱いと分か 難や落雷による遭 イト は 本書には、 結びにしろとか、 ある条件のもとでは簡単にほどけてしまうから、 危険の 2 たので、 難からはじまり、 具 体例とその対策法が 胸でアンザイレンしていると、 ロープをハーネスへ結束するときには、 ブーリ ~満載 ン結びがリング負荷 7 あ る。 テー 気象遭 末端を プ結

ろ最良の

ハーネスとなる、

と本書は主

クを背負ったりして重心が高くなりがちなので、チェスト・ハー

誠にもっともで、特にアルパイン・クライミングの場合、

ザッ

ネスとの併用

が望ましい

のだが、

実際はほとんどがレッグ・ル

1

理由の一つに、シンプルで

プ式ハーネスだけで登攀している。

させられる。
かラビナのゲートが一瞬だけ開くとか、読めばなるほどと納得カラビナのゲートが一瞬だけ開くとか、読めばなるほどと納得いわゆるヌンチャクがそれ自体横揺れしながら岩にぶつかると、縫い着けてしまうか最初からソウンスリングを使うようにとか、

指摘だろう。
いーネスの欠点の指摘であり、②ヘルメットの着用についてのハーネスの欠点の指摘であり、②ヘルメットの着用についてのに注目されるテーマを二つだけあげると、①レッグループ式のどこから読んでも、興味をひかれる数々の話題のなかで、特

15 したとき、 スに胸で締める方式のハーネスを組み合わせれば、 体は後ろにそっくり返ってしまう。 椅子に腰かけたような状態から、 き、サバ折りの状態になりやすいのだ。試しに、吊る下がって での胸でアンザイレンする方式より、安全性が高いことは間 の別を問わず、 ないのだが、 ①現在では、 垂直静荷重を受けないという点で、一九六○年代 これ レッグループ式のハーネスが全盛である。 フリークライミング、 にも、 意外な落とし穴がある。 腹筋の力を抜いてみると、 だから、この方式のハーネ アルパインクライミング 現在のとこ 墜落したと 墜落 漳

がよいだろう。が、クライマーたちはこの点についてもっと真剣に考えたほうが、クライマーたちはこの点についてもっと真剣に考えたほう使い勝手のよいチェスト・ハーネスのないことがあるのだろう

②ヘルメット。

うに、 「二〇年前にはヘルメットが先鋭クライマーの象徴であっ る。」だが、「人間の頭蓋骨の厚さを脳の量と比較した値 の殻の厚さとその内容量との比較値にほぼ等し のに、スポーツクライミングが広がるとともに増 頭部 いまでは頭に何もかぶらずに登るのがカッコイ の怪我は、 一九六〇年代から七〇年代には 11 -加に転じた。 減少していた だ 1 止は、 から のであ たよ 規 卵

格に合致した、あまり古くないヘルメットを被るのがよい。

か

的確に判断してヘルメットを被ったり被らなかったり、臨機応フリー・クライミングだからというようなことでなく、状況を言われてみれば、安全性が高いといわれるフリー・クライミングでも、特に始めたばかりのうちは、頭に瘤を作ったり、小ングでも、特に始めたばかりのうちは、頭に瘤を作ったり、小つて事故にあった女性は、「スポーツ・クライミングであってつて事故にあった女性は、「スポーツ・クライミングであって

ラスカの辟遠の也で従走を試みていた二人の登山本書の遭難例のなかには、生還した例もある。変に対応したいものだ。

垂下降をする羽目に陥った。最後の一本になったハーケンで、ラスカの僻遠の地で縦走を試みていた二人の登山家が、長い懸

たとえば、

に判断し、それにもとづいて行動できる能力は、人間にはわずに判断し、それだからこそ、その話が伝わっている訳だ。このからだ。」無論、そのハーケンにセルフビレーを掛けた。自分を引きずり込まれてしまうからだ。しかし、彼は、いくよりは、あっという間に死んでしまうほうがずっとましだいらよりは、あっという間に死んでしまうほうがずっとましだからだ。」無論、そのハーケンはもちこたえ、二人の登山家は生還した。それだからこそ、その話が伝わっている訳だ。この例の前書きとして、次のようにある。「危険な状況の中で冷静の前書きとして、次のようにある。「危険な状況の中で冷静の前書きとして、次のようにある。「危険な状況の中で冷静の前書きとして、次のようにある。」

状をもたらすことがある。 り上げたときの反応と酷似している。」ここでニヤリとするク グが制約されると、いらだちや理由のない苦痛といった禁断症 依存状態は、たとえば悪天候などなんらかの事情でクライミン てエンドルフィンの作用はある種の依存状態をもたらす。 せるだけでなく、 たのである。 因性モルヒネ また、次のような一 (略称エンドルフィン)を生産することが判明 幸福感と安心感をもたらす働きがある。そし 中略 節もある。「ストレスを受けた人体は この例は、 エンドルフィン放出は痛みを忘れさ 阿片中毒者から阿片を取 内

ライマーも少なくないはずだ。

さらに、「登山者とクライマーの大多数はかなり運が良いと

と、本書が単なる技術書から一歩も二歩も踏みだして、クライと人間にもともと備わっているのだろう。」とか、「信用するのはよの点は――中略――両手でロープをしっかり握らせればよいのの点は――中略――両手でロープをしっかり握らせればよいのの点は――中略――両手でロープをしっかり握らせればよいのいえるのではないだろうか。ある程度の幸運というものは、きっいえるのではないだろうか。ある程度の幸運というものは、きっいえるのではないだろうか。

に苦労しただろうが、そのかいあって読みやすい本に仕上がっを駆使している。本作りは煩瑣を極め、翻訳者も編集者もともほかに、写真やイラスト、解説図などの図版、コラム、注など登山の専門用語ばかりでなく力学の用語が出てきたり、本文の本書は技術書なので、言わんとするところを伝えるためには、本書は技術書なので、言わんとするところを伝えるためには、

マーの心理にまで考察が届いていることをうかがわせる。

かしかない。」

(海津正彦)

ている。

た。

### ニコラス・オコネル/著 『ビヨンド・リスク』 手塚 勲 訳



山と溪谷社・刊 1996年12月発行 : 本体 2,390 円 A5版/496ページ

イミングはこの先、どこへ行くのだろう。 ミング、そしてクライミング・コンペティションなど……クラ ルパイン・スタイル、5・14の極限を攀じるスポーツ・クライ 急速な発展を遂げるクライミング。八〇〇〇に峰の無酸素ア

らがクライミングをどう考えているかを語らせれば、この本で 上重要な役割を演じた傑出した代表的な人物を慎重に選び、 グという多面性を持つスポーツのいろいろな分野から、登山史 自身がクライマーで作家である著者オコネルは、クライミン

まず本書に登場する一七名を順に記すと、

ラインホルト・メスナー

今世紀の登山の全体像を示すことが出来るのではないかと考え

ヴォイテク・クルティ ダグ・スコット クリス・ボニントン ウォレン・ハーディング ロイヤル・ロビンス

ジャン=クロ ドド K ワイエ

ヴォルフガング・ギ ジェフ・ロウ 

リン・ヒル カトリーヌ・デスティヴェル I) " Ł

ピーター・クロフト

トモ・チェセン

ぶつけて行く。 クライマーが一 以上、錚々たる顔ぶれである。これだけのメンバーに著者は、 番嫌がる「なぜ登るのか」という問いを執拗に

それぞれが率直に個性を表出させた、気取りのない自画像となっ な解釈はいっさい加えていない点である。結果、 本書で特徴的なことは、 インタビューを重ねる著者の個 本書は一七名 人的

クルト・ディームベルガー エドマンド・ヒラリー 卿 リカルド・カシン

ヴァルテル・ボナッティ

る。 幅はもとより無いが、 成が好ましい。ここに一七名のすべてについて、深くふれる紙 まとめ紹介しているので、 タビューに先立って、その人物のクライミング経歴を何頁 背景にふれ、優れた導入部としている。さらに、各人への 次世界大戦前後から的確にまとめ、一七名の活躍した各分野 はじめに」の章で著者はまず、クライミングの流れを第 強く印象に残った部分についてふれてみ 各々の世界にスッと入っていける構 かに イン

す」と結んでいる。

れは自分にはできる。 死ぬことではありません」 て登っていると、 はクライミングの基礎の一部です。しかし、何回も限界を超え し低いところにいよう』ということを時々刻々心得ていること す。『これは自分の限界だ。これ以上は上に行けない。もう少 何よりも ヒマラヤ登山に大胆な革命をもたらしたメスナーの偉大さは 生還" 必ず死にます。登山術とは生き残ることで、 した能力であろう。「心得ておくべきは、 しかし、これはできない』ということで

す。 創造活動という面で見ています。私のクライミングに自分の能 と感じれば、できるという確信を得られるまで長いこと待ちま 私は非常に用心深い男です。『これは自分にはできないな』 いちかばちかということはしません」と語る。 は最後に、 私はクライミングをスポーツという面でなく、

> の人生は消え失せますが、 です。人生のようなものです。私たちは人生を送り、 活動です。 力も恐れも表現したいのです。 ……(中略)……良い岩壁の良いルート 何かが残ります。 私のクライミングは実際に芸術 残るのはルートで は芸術作品 やがてそ

人の親方のようだ。 ライオン、いつまでも若いクライマーに温かな目差をそそぐ職 ツ・バディレ北東壁の再登を果たした彼は、意志強固な吠える ではこの一度だけだった」。自身の初登攀から五十年 登攀に出かければ、私か、チームのだれかが必ず頂上に立った。 「私のルールは一回の挑戦で成功することだった。 続くカシンは 成功しなかったのは一九七五年のローツェだが、 "絶対に退却しない" という意志力が凄 初 後!にピッ 登頂、 私の生涯 初

唯

には、 ンスがあったのにと、つい考えてしまいます」と回想する。 もしエリックが隊長だったら、 L 統アルピニズムである。「(シプトンを) 私は彼がとても好きだ ヴェレスト初登頂以降、 トは大遠征隊を動かすには確かにずっとすぐれていましたが、 登山は、マロリーに惹かれ、 ヒラリーはまさしく現代の英雄となった一人であろう。 尊敬しています。…… 他の一六名とは異なる香りの風が吹いている。 ソロ・クー 中 シプトンを尊敬するといった、正 あ 略) ……替 0 遠 ンブの開発と共に生きる彼 征はもっと成功するチャ わりのジョン・ハン 彼 エ 0

18 15 以上の山というカテゴリーに分けるべきだと思います。 「その代わりに、七五〇〇景から八二〇〇景までの山と、 資金調達を楽にし、 でないと説く。登山の観点からすればG4やマッシャブルムと 敬しつつも、「私自身を彼らと同一線上に見なかったのは、 きんでているこの五 同じやり方では取り組めないからです。 の他の八○○○☆峰といっしょにするのは誤解のもとです。 レスト、 ヒドン・ピークにたいした差はない。八〇〇〇だという数字は の高峰について、八〇〇〇景峰というカテゴリー分けは現 マン・ブール、 きです。それが現実のカテゴリーです」。この通りであろう。 イン・スタイル 「の大きさという点では架空のカテゴリーだと語る。 戦後最強のアルピニストと称えられるボナッティ。 うのは、 九五七年のブロード・ピーク初登頂に始まり、 K2、カンチェンジュンガ、 こうした山はほかより高いカテゴリーに属していて、 カシン、リオネル・テレイなどを英雄として尊 の歴史のようなディームベルガー 遠征隊を組織しやすくするかも知れないが、 つの山には、 別個のカテゴリーを設けるべ ローツェ、マカルーをそ ほかの山よりひとつ抜 自身が はヒマラヤ そして、 彼はヘル エヴェ それ 実的 シアル 7 彼

> 登山は山頂 自分自身を山に閉じ込めずに、 には登山を経なければならなかっ クライミングを人生の目的とせず、 の征服ではなく、 自己の征服、 山を使うことだ」。 手段として使うことだ。 精神鍛練の道場であっ

彼にとって

た。

ている」。強烈な自負心に辟易としないでもない。 単独登攀について、「私の次の世代は、 はそうした登攀をやって、自分で発見したかのように言 てしまったことをなぞって自慢しているのさ。 クライミング史上の偉大なマニフェスト、 私がドリュの登攀でや ドリュ 六〇年代の連 稜

は間違っていると思います」と論難している。 しつつも、「私はボルトを完全に拒否したボナッティとメスナー ビンス、スコット、チェセンたちも、 冒険がなかったら登山じゃない」。この考えは、メスナー、 険はない。 理的なルートを見つけるために頭を使ったものだ。しか が大切だ。……(中略)……ピトンの時代にはクライマーは論 考えを壊さないためには、ルールを作り、それを尊重すること 異曲を歌っている。中で一人、ド トを使ったら、 では不可能という概念を壊さないことが大切だ。 貫してボルトの使用に反対してきた彼は、「クライミング あとは筋肉の問題だ。 (中略) 私にとって登山は常に冒険だった。 ロワイエ 本書の中でくり返し同 登攀の動作はあっても がボ + 不可能という ティを尊 ボ 

ン・サラテ、ジョン・ミュアの三人を手本としたという彼の答 ライミング哲学が、ジョフリー・ウィンスロップ・ヤング、ジョ 良く知られている猛烈なクライミング闘争。 ビンス。友人であり、 的進歩を持たらした、 ヨセミテのビッグ・ウォールのエイド・クライミングに革 強力なライバルであるハーディングとの ヨセミテ黄金時代の巨人、ロイヤル ロビンスのあ . 0 新 7

えには、なるほどねと納得する。

何のかんのと言いながらもや

はり、 対称に、「私はただ上に着きたかった。……(中 ングに持っていかれた悔しさがにじみ出る。 るか』ではなかった」と飾らぬ言葉で回想する。 プを初登攀できたらすばらしかっただろうな」とつぶやく。 『いったい、できるだろうか』であって『どのようにうまくや 続く頁に登場するハーディングは、ロビンスの苛立ちとは好 ヨセミテの象徴、エル・キャピタンの初登攀をハーデ 「……エル・キャ 略) ……昔は 1

だボニントン。一騎当千の錚々たるクライマーたちを見事 ミテの黄金時代を巧まず活写している。 九七〇年代のヒマラヤ・バリエーシ ョン時代の先頭を進 に組 2

黒と白、右と左、正直に語る好敵手二人の感性の差が、

ヨセ

長のジミー 軍 一隊の戦 そして、 ٠ ロバーツから多くのことを学んだ。自身が強力な 車隊で指揮をとっていたことが後に山で役に立 初めて経験したアンナプルナⅡ峰遠征で隊

ん

安全性を重視する国民性か何かにあるの

どうして彼らはああいうやり方をするのか、私にはわかりませ は日本人で、そのほとんど全部が固定ロープ遠征ですからね

イマーが

何人かいるのに、

は偉大なクライマーが

酷寒と困難に立ち向かう冬季クラ いつも固定ロープです。

彼らは

でしょうね。

織し、数多くの成功に導いたリーダー。

式の指揮のとりかたではうまくいきません。先頭隊員のすぐ後 遠征隊を指揮するようなことはしたくないな。ヘルリヒコッファー クライマーだったからこそ、つわものぞろいのクライマー にいなくちゃ」 の信頼を得ることができた。そして、「ベース・キャン 隊長の仕事は隊員がそれぞれの期待を実現できるように皆

グループに強いることではありません。」と語る。 が和を保って働ける環境をつくることです。……自 分の意志を

チームが小さくてすみ、地元の人たちへの影響も軽く、 済をあまり乱さずにすみ、固定ロープをいたるところに残した ルパイン・スタイルの登山ももっと見られると期待してい を称えつつも彼の遠征スタイルは、メスナーが支援なしで単 11 りしないので、山をいい状態に保てるからです。でも、 41 でエヴェレストに登って以来、必要なくなった。遠征隊は小 かないかもしれません。ヒマラヤへ行くクライマーの約半分 ほどいいと、アルパイン・スタイルを縷々語った後で、「ア ボニントンと多くの遠征を共にしたスコットは、ボニントン そうは 地元経 、ます。 独

が深く悲しみ、

頁に、亡きヴォルフガング・ギュリッヒに、と献辞されている)。

惜しんだのが良く理解できる。

(本書

は扉

クライミング・コンペやスポーツ・クライミングに舞い上る

て何よりも優れた創造性に、早すぎた彼の死を世界中のクライ

彼のインタビューを読むと、

知性、

精神の強靱さ、

そし

トひとりのものではない。ヒマラヤは、 山にも適用しているように見えます」この痛烈な視線はスコッ をつくり、組織内を階層化するという具合に、 格についてはみなこういう印象を持っています。大きいチーム むけ、安全と引き換えに自分を会社に売り渡す――日本人の性 のが好きなのですね。 ープから離れて進むのを恐れているのです。 大会社に入り、 人生の諸 どのように登るのかを 日本人はそれを 問 題 から目 をそ

ピーター・クロフト。

厳しく問われているのである。

D

組織の中に

3

とを、ドロワイエ、ギュリッヒ、デスティヴェル(彼女は今や ンタビューを読むと、各自のスタンスの違いと共に良く判る。 クライマーの一人であるが)、リン・ヒル、 フリー・クライムの人ではなく、世界最高のオールラウンド・ について、クライマーそれぞれの考え方に大きな相違があるこ ラップ・ボルティング、グラウンド・アップなどさまざまな点 クライミングの分野は、クライミング・コンペティション 九二年、アウトバーンで悲劇的な自動車事故死したギュリッ 九七〇年代後半になって世界中で爆発的発展をみせたフリー・ クロフトなどのイ や、

> の追随を許さないアドヴェンチャー・クライミングの第一人者、 フリー・ トやハングドッキングをはねつけ、 人々を尻目に、グラウンド・アップ方式を守り、 ソロや、ビック・ルートの超スピード登攀などで、 高難度ルートの大胆

ラップ・

ボ

込んでいて、 ている点に強い感銘を受けました。彼がクライミングにのめ テル・ボナッティです。 ナッティに心酔しているという意外性に驚き、 ました」。ハードフリー・クライミングの先端を走る彼が クライミングを利用していたのです。これは、とても感化され が、同時に自分自身と世界について新たな発見をするため 強く伝わってきます。 彼は語る。「(尊敬したクライマーは)なんといってもヴァル 山の美しさなんかを愛していたことは明ら 彼はクライミングを目的でなく手段に使 ボナッティの本を読むと、 感動する。 その精 かです にも ボ

登がなかったら、 いなかったらフリーの初登はなかったでしょうし、 すぐれているとは見てい にソロは進歩です。でも私は必ずしも以前になされたことより 攀できたのはまったく驚嘆すべきことでした。 抵抗があるのです。ハーディングたちがあのころエイドで初登 いて、「おそらく進歩でしょうが、私は進歩という言葉には少々 そして、高難度ルート、 私はソロの初登をしなかったでしょう。 ません。 アストロマンの自身のソロなどにつ 彼らがエイドで初登攀をし 技術的 フリー は の初 か

ル・ボナッティよりすぐれたクライマーだと言うつもりはあり がずっと難しいのですが、 ません。 が前進しているんですね。でも、たとえば私のほうがヴァルテ えませんね。 したことを思えば、驚くべき人です」 ようと思っているのではありません。 言うのはばかげています。別に謙虚に話そうとか礼儀正しくし からエイドで初登攀した人たちよりすぐれているとはとても言 事情は変化しますが、私はアストロマンをソロで登った 彼が登ったものより私がフリーで登ったピッチのほう 彼らがしたことを土台に使わせてもらって私 私のほうがすぐれたクライマー あの時代にボナッティが ・だと

く感銘を受けたと記させて頂く。 うが、ひとつだけ、 著者オコネル同様、 ピーター・クロフトの知性と謙虚さには深 自分の感情を表わすことは避けたい と思

で成し遂げ、 て、ジャヌー北壁、そしてローツェ南壁をソロ・クライミング 5・13を攀り、 したフリー・クライミングと高峰登山であったが、チェセンは、 場するのは必然と言えよう。 フリー・クライマーが続いた後、最後にトモ・チェセンが登 クライミングの各分野を統合し、元の姿にもどし 高峰を超スピードで登攀する能力を合わせ持っ 七〇年代に入って枝分れを顕著に

け、

タイル、無酸素 高所クライミングの将来は小さいチーム、 必要な装備だけで余計なものはなし、 アルパイン

> るのは明白です。 将来はこれです」と結んでいる。

か。 語った書の中でこの一冊は、ここ二〇年来(いや、ひょっとす ると戦後かも知れない)、最良の書籍のひとつではないだろう の鍵はどこかの頁にあったであろうか。クライミングの深遠を たクライミング・ゲーム唯一のパラメーター、「なぜ登るのか て、最初のフレーズ、 A5判にびっしりと詰った五○○頁の大部を読み終えて、 誰もが今まで本当に解くことのできなか

グ・エンサイクロペディストの陰の労に謝意を表する。 互に『マウンテン』と『岩と雪』二誌の編集長として交流を続 池田常道氏の同じく百科辞典的 後の登攀情況などが注記されているが、これは本書を担当した た。日本語版には各インタビューの終りに、クライマー 感謝するとの一行は、私を一瞬にして二〇年前に溯らせてくれ 著者「あとがき」に、ケン・ウィルスンの百科事典的知識 時にライバル誌としてしのぎを削った、東西のクライミン 頭脳によっている。二〇年来、 のその

小泉 弘 一典の一つであるからだ。

### ジュール・ミシュ レ/著 大野 道 訳

な著作があるが、『鳥』『虫』

(思潮社刊)、『海』と本書

藤原

Щ



260 ページ

見えない部分も含んではいるが、 世紀に近いいま読めば、 ろう。ミシュレの『山』もそういう本の一つであった。二十一 訳されてよい、というより訳出されて欲しい本の代表であるだ ことがある。山の本の世界でもそれは同じで、たとえばレスリー・ るのだろうが、その盛況の中でも、 スティーヴンの "The Playground of Europe" などは、 ミシュレの 日本は翻訳書の出版が盛んなことでは世界有数の国に入 Щ Ш を日本語で読めるようになっ 時代の変遷にあって古びているとしか これはやはり、 重要なものがこぼれてい たのは 読むに価する あり 当然 が 3

フランスの代表的な歴史学者。『フランス史』その他の浩瀚 ル・ミシュレ Jules Michelet (一七九八~一八七四)

だが、

とっても興味をひかれる所以である。「自然は偉大であり、

その対象を「山」にとっていることが新しく、

レのこの本は、そうした思想の流れを直線的に受けているも

史の四部作もある。ここではその歴史学者としての分野に立 作品がどんな存在なのかをみてゆきたい。 入ることなく、私たち、 書店刊)など、ナチュラル・ヒストリー、 山を身近にしている者にとって、 つまり自然史、 博物

代の子であった。『新潮世界文学辞典』はミシュレに一項をさ 界の歴史は大きく転回し、人々の思想も大きな変革を経験した 年・明治元年である。一七八九年、フランス大革命によって世 き、こう記している。 原本 "La Montagne" その革命直後に生まれたミシュレは、 は一八六八年に刊行された。 まさに革命の子、 応 四

捉える思想は、 かけがえのない存在であることを明瞭に意識していた。 に聞きとりながら、「自然」が人間の精神にとって、 △その日からフランス史は、 しとげた祖国フランスの栄光を全人類の勝利としてかかげた。 こうした時代に生きたミシュレは、近代のつよい足音を確実 世界史を自由と必然の永遠の闘争劇と規定し、 然の風物を人間精神にとって価値あるものとして積極的に おそらく十八世紀以降の産物であろう。 そのまま世界史となった〉と。」 大革命をな 大きな、 ミシュ

私たちに

0

大である」というミシュレは、本書の冒頭で言っている。

う。」そしてそこから得られるのは「生き生きとした再生の精 高な山々の、温情にみちた好意に対しずっと感謝し続けるだろ で自らを示す。私たちはあれら威厳あふれる巨人たち、あの崇 だというのである。 あの高地の自然は、それを大いに愛する人々に対し、 喜 h

には、 自然、特に「山」にこのように対応する心は、 ほとんどなかった。 あるいは、 あっても、 この時代以前 明確には意識

より難いものであっ ヨーロッパでは、 長い間、未知で不可解で、 暗く、 近

ていなかったものであるだろう。

目で氷河を眺めていた」とミシュレはいう。 氷河はかつては嫌悪の対象だった。人々は悪意のこも 2 た

国書刊行会刊)で書いている。 ・H・ニコルソンも、『暗い山と栄光の山』(小黒和子訳

て登場する時代がきていたのである(スタンダール『パルムの の前に現れてきた。それはミシュレの時代のわずか前であった。 うな輝きを山に見ることは絶えてなかった。」 人々の目を曇らせ、詩人たちも、 キリスト教世界が始まって十七世紀もの間、 を眺めることで慰藉を感じるような青年が小説の主人公とし こうした暗く重く長い時代の果てに、 いま私たちが見馴れているよ 山が輝きをもって人間 △暗い 山>は

山

存在の鍵を見つけ出してゆくのだが、 重要な、 面としてこんな説明もしている。 こうした時代を生きたミシュ きわめて、価値あるものとして位置づけ、 レは、 Ш その過程では、 「を人間の精神にとって そこに人間 山の現

み取れるのだ。穏やかな平和の時代か、諸々の帝国を覆し 質 期、 いるモン・ブランの正面にこそ、 恐るべき寒暖計。 < 0 目をこらしておかねばならない。 大な出来事によって紛糾する何年間かを、もたらすのだろうか? あまり収穫の見込めない年をもたらすのだろうか? にも前進し、食料品が高価になって、少なからず共和国崩壊の 苦しむ。革命が遠くないのである。氷河はあの厳粛なる重大時 楽になって平和が保証される。 き、夏は強烈で収穫はあふれ、食料は容易に手に入り、 七年間は逆に後退すると信じられている。それらが後退すると 王朝を運び去ってしまう突然の大動乱かが、 因となった。それらは今や前進し、 今日アルプス地方では七年のあいだ氷河は前進し、 一八一五年から一六年にかけて恐ろしく前進した、 神経生命をも変化させる。 雨が多く、果実はほとんど実らず、小麦は不足し、人々は その上に全世界が、精神界も政界も、 多かれ少なかれ氷をいただい 逆に前進するとき、 3 大気の変化は、人の思考、気 われわれに雨の多い年を、 ツパ の未来の 読み取れるのだ。」 その年は もっと重 運命が読 つね 四九年 生活は ぎの 諸 7 寒

温 暖化 が 問題になっている現代に照らして、 興味ある見方だ

るものとして語られている。 ワの火山もアジアの高地も、 さて、この本の中では、 アルプスだけではなく、 どこまでがミシュレ自身の 豊かな山の森も、 すべてが価 極地も、 実際 ジャ 値

いうの 「アジアの威厳と母性を見て、 ジアに対するこうした視点も、 多くの思想や芸術が生まれた」 深い魂を最もよく表わす種族が出てきた。アジアからあれほど が、はたしているだろうか? 地理的体験によるものなのかはわからないのだが、たとえば は何のことをいうのか、 尊敬の念につらぬかれ という時の、 間違いなくアジアから、大地 うまく読みとれないのだが、 新鮮なものではなかったのだろ アジアとか種 な 11 族と 7 0 0 0 あ

書き、

カシの木の森が消えてゆくことに大きな不安を見たりす

ば、「ブナは森でにこやかに輝き、

炉でにこやかに笑う」とも

モミの林の中を歩くことに根元的な喜びを感じる文章もあれ

語られている。 間 \$ いう考えが基本にあるのだが、 にとって大きく積極的な意味をもつことを印象づける経験が 対象は地球そのもので、 いずれにしても、 ミシュレにとっては、 山はその大きな構成要素の一 地球が、 つまり自然の大地が 実は、 山というより つ、 L

うか。

ミシュレはイタリアで、 埋められ、 外に出ているのは顔だけという状態になっ 温泉療法の一つ泥浴を体験する。 身

11

一八五四年のA・ウィルスによるヴェッターホル

ン登頂

て何分かたつと 次 の十五分間、 自然の力が増大してきた。 私はその中 一に深

> いは、 く没入し、 幸せで、 せたもの、 体化は完璧となった。最後の十五分間には、 それは大地と人間との「本性の交換」だったというのである。 ハハ 埋められていない部分が苦情を訴えてい 思考は消えさっていくのだった。 つまり顔が私には邪魔になった。 ナルダイチというものであった。 私 埋 唯一残っ 私が自 たちち まってい 0 てい 亩 る体 に動 15 た思 だ から か 0

る。 ミシュレにとって、 山は自然の風物の象徴的存在として捉え

ある。 にスイスには、空が上下二つある」とか、「アルプスではすべ のピークを登る、 を的確にみていることも汲みとれる。そして「アルプスは光 てが整合している」というような表現からは、 られているようだが、 ところで、「山」とはいいながら、ここにはアルプスの それは地球の連帯を教え感知させてくれる」とも。 いわゆる山登り(アルピニズム)は登場し 湖はスイスの眼であり、 アルプスの性格 その青さゆえ 氷雪

うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 うことにほかならない。 もいえる。しかし、ミシュンがこの本の中で語っている山への想いは、山が人間精神にとって新しく現れた救世主であり、かけがえのない存在であるということにほかならない。

の自負でもあるのだろう。
「私は世界のあらゆる登山家が決してアルプスでやらないよいない。」というな多くの登攀を、多くの危険な絶壁下りを、いまこれを書いているテーブルにすわったまま行う」とミシュレは言うが、そ

と共生するという、 る新鮮な感性と思考とは、 も熱をもって語られている。 の鍵として重くみている姿は貴重である。そして、 ば首をかしげる部分もあるにはちがいないが、 飛躍があったり、意味のとりにくい構文(訳文も) 決して読みやすい本とはいえないし、 いま私たちがまた新しく直面している問題 読の価値をもっている。 現代に甦った思想家の、 現代の目からみれ 山を精神の Ш があっ 山をめぐ 再

(大森久雄)



大森薫雄著

『雲の

Ŀ

の診療所』

(いしずえ

## Щ 図書紹介一 覧一一九九六年度

## ●四月号

木下是雄著 山山 ひと スキー』(晶文社

小荒井実著『自然のフォーカス・山楽百花』(歴史春秋出版

隅田正三『チベット探検の先駆者 佐伯邦夫著『佐伯邦夫の山とスキー大全』(シーエーピー) 求道の師 「能海寛」 (波佐

出版

近代文藝社

文化協会

て一一九九五』 神戸大学山岳会・山 谷本蝉丸著『五十歳からまた始めた山登り』 岳部編『山と人八十年 (新風書房 未知の世界を求め

R.A. McDonald "ROCK CLIMBING in OMAN" Apex Pub-

## ●五月号 (六一二号)

小堀一政編『ザイル』明治学院大学山岳部五十周年記念号

富山県郷土史会校註『越中安政大地震見聞録』 (KNB興 産 出

版部

愛知学院大学山岳会・湯浅道男編『EVEREST From South-

立松和平著 『ヤポネシア抒情紀行 神様のくれた魚』(山と溪

谷社

日本山岳会丹水会編 『丹水二号』十五周年記念誌

熊谷榧著『アルプスの氷河を滑る』(白山書房

Mark Bles "IN SEARCH OF LIMITS" Hodder & Stoughton 阿部暁雄著『秋田六百三十一山全登頂記録

●六月号 (六一三号)

平井一正著『初登頂 花嫁の峰から天帝の峰へ』(ナカニシヤ

内田陽 著 『知命 からのヨー ロッパ・アルプス―希望と祈り―』

小倉厚著『定年後は山歩きを愉しみなさい』 (明日

宮原巍著『還暦のエベレスト』(山と溪谷社

辻斉著『魅せられてネパール』(私家版

辻斉著『魅惑のヒマラヤ』(楓工房

岡崎秀紀編著『サイハン モンゴル 自然・人・生活

モンゴルの交流史―』(報光社

フハイルハン山群バリラガチン峰は微笑む』(一九九二) 島根高校教員モンゴル登山隊編『モンゴル・アルタイ山』

●八月号 (六一五号)

島根県山岳連盟隊編

『草洋に浮かぶ白い女神』(一九九三)

細川呉港著『満ちてくる湖』

(平河出版社

143

穂苅貞雄写真集『安曇野―アルプス山麓の四季―』(山と溪谷松崎中正著山行譜『わが山路』紀行集『山おちこち』(楽山斎)

在文章 友生 『美皇里―ラリック山麓の日本―』(山と海

険から身を守るために―』(山と溪谷社) 北海道雪崩事故防止研究会編『最新雪崩学入門―雪山最大の危

マラヤーアルパイン・スタイル』(山と溪谷社)アンディ・ファンショウ、スティーヴン・ヴェナブルズ著『ヒ

●九月号(六一六号)

佐竹伸一著『朝日連峰の四季』 (無明舎出版)

高橋亭夫著『焼石連峰の四季』

(岩手日報社

上野巌著『山への想い』(山梨日日新聞社出版局)

石川富康著『五十歳からのヒマラヤ 四つの八千メートル峰登

頂』(山と溪谷社)

野口邦和著『山と空と放射線』(リベルタ出版)出版局)出版局)富山県警察山岳警備隊編『山岳警備隊出動せよ!』(東京新聞

聞社)間社(信濃毎日新聞社企画編集『空から見た信州の道』(信濃毎日新聞社企画編集『空から見た信州の道』(信濃毎日新

告書 インドヒマラヤ・ガングスタン峰』 明治大学山岳部インドヒマラヤ登山隊一九九五編『海外合宿報

南極(極地の自然環境と人間の営み)』(朝倉書店)

『信州の地質めぐり』 (郷土出版社)

Harish Kapadia "Spiti: Adventures in the Trans-Himalayya"

Indus Publishing

中村保著『ヒマラヤの東』(山と溪谷社

●十一月号(六一八号)

森田秀巳・松倉一夫著『山の常識・非常識』(山と溪谷社)

柏瀬祐之著『午後三時の山』(白山書房)小林静生著『山の本屋の手帖』(鹿鳴荘)

栃木県高体連登山部中国チベット学術登山隊一九九五年実行委

員会編『輝ける白き峰 ニンチンカンサ西稜初登頂の記録

九九五年秋シシャパンマ峰登山隊報告書『シシャパンマ』

(YMSタートル倶楽部)

大森久雄著『本のある山旅』(山と溪谷社●十二月号(六一九号)

"Alpinismo Italiano in Karakorum"

"K2: millenovecentocinquantaquattro" (イタリア山岳会ト

リノ支部編

と夜』(日本テレビ放送網)

安藤忠夫編『東海山岳

第七号』(日本山岳会東海支部

Explo Poland 1995

上條武著『上高地1神河内絵画き宿』(独木書房

●二月号(六二一号)

(山と溪谷社)

る―』(弘家坂) 日本山岳会信濃支部編『パトニーヴェイルからの風―山脈に語

る―』(私家版)

五人の探検家・登山家の伝記

David Gilmour "CURZON" John Murray, London 1994 Annabel Walker "AUREL STEIN Pioneer of the Silk Road" John Murray London 1995

rial Adventurer" Harper Collins, London 1994

Patrick French "YOUNGHUSBAND The Last Great Impe-

Alan Hankinson "GEOFFREY WINTHROP YOUNG-Poet, educator, mountaineer" Hodder & Stoughton, London 1995 Tim Madge "The Last Hero BILL TILMAN: A biography

of the explorer" Hodder & Stoughton, London 1995

明治大学山岳部炉辺会編『炉辺 第九号』

Jan Kielkowski "CHO OYU HIMAL & KYAJO RI HIMAL"

Robert Strauss "Adventure Trekking A Handbook for Independent Travelers" The Mountaineers Books, Seattle 1996

雁部貞夫著『辺境の星』(短歌新聞社

"THE HIMALAYAN JOURNAL Vol.52 1996"

●三月号 (六二二号)

新井信太郎著『雲取山のてっぺんから』(けやき出版)『雲取山長岡忠一著『スキーの原点を探る』(スキージャーナル)

芦生の自然を守り生かす会編 『関西の秘境よもやま話』(さきたま出版会)

芦生の森から』

(かもがわ出版)

佐藤芝明著『現代に活きる山の神伝承』(中央公論事業出版:浅野孝一著『信仰の山歩き41 関東霊山紀行』(自由国民社

薬師義美・雁部貞夫編/藤田弘基写真『ヒマラヤ名峰事典』

(平凡社)

静岡新聞社編『新狩野川紀行』(静岡新聞社

# 伊三郎 氏 (一八九八~一九九六)

県山岳連盟の実質的出発点と言える。会長は若尾金造氏で会員 せている。会員は百人。 歳だった。顧問に木暮理太郎の名も見える。 番号は一番、 ら豪華メンバーが山梨の山々を讃え、登山記や各地の情報を載 山』を発行した。武田久吉、大町桂月、平賀月兎 大正十三(一九三 大澤伊三郎さん 一四)年六月甲斐山岳会が発足、 県全域に及んでいるので、 (当時は照貞) は一〇番、二十六 現在の山梨 翌年機関誌 (文男) 氏

て記念講演をした。

会の仕事は との役員を兼ねる人もいて、 これより半月早く、 創作に在る」という小論文を寄せ山岳会の役割を説 の発行は九年後だが、これには小島烏水氏が ほとんど同時の発足と言える。 山山 岳

韮崎市に白鳳会が誕生した。

甲斐山岳

会

された。大澤さんは故百瀬舜太郎さんらを従え各地に山岳会結 和五 (一九三〇) 年六月、こんどは甲府市に南嶺会が 成

> ない。 B5版の小粒だがハイカラな会報である。 は大澤さんが依頼した茨木猪之吉氏の「北岳」の版 は先ごろ大澤さんの一周忌直後発見、 戦災による「犠牲」である。二号は翌年の刊行で、これ を創刊した。残念なことにこれは未だに発見され いま私の手元にある。 画で飾り、

とともに甲府中学校にも山岳部が創立されたことに協賛し、 澤さんは自ら山岳部の生徒ら若者を前に山の歴史や魅力につい 資料展覧会」の記事と出品目録である。 注目されるのは巻末の南嶺会設立記念事業 日から四日間 甲 -府商業学校の教室で開かれた。 展覧会は昭 第 和七年六月 П 甲府商業 Ш 岳

な解説もつけられた。『登高行』『リュックサック』をはじめ大 ど展示された。 ウインパー、 本の代表的な山岳古典をずらりと並べた。さらに目を引くのは 文書をはじめ江 ことに南アルプス、奥秩父、 三百点。このうち三分の一以上が大澤さんの所蔵品だが、驚く 靴などの道具類から山岳写真、絵画、書籍にいたるまでざっと [展はすべて会員の持ちもので、テント、ザイル、 コリー、 チンダル、 しかも、 マンメリー、ウェストンなどの原書も三十 戸·明治·大正·昭 W・ヤング、 一点一点には大澤さんの手による丁寧 富士山周辺の古地図、 和と時代を区切りながら日 A・ラン、 ヤングハズバ 浮世絵、 鉄鋲登山 成を呼びかけながら初代会長となった。そして、すぐに会報

記

は大澤さんを含め二月鳳

凰

四月瑞牆、

五月北 2 鳳

岳

示会終了直 仙

後の

七月には①

悪沢 富士、

赤

凰

もうひとつ、

別の記録によると、

この年の会員たちの

登高

白根

文

③悪

沢

赤

石とた

て続

け

山 石

行

そし 府

で十

月

の北

岳

仙丈と多忙な

年を締め括る。

深夜、 に

甲

市

学山 三人だっ らいしか展示できなかったという。 よると、 や写真に人気が集 岳 部 場所が 英国 たが、 報 H 解説付きの古地図や山岳書などよりも登山 狭 本山 『アルパイン・ジ 不まり くて特に大澤、 岳会の 観 客の水準は低い」と嘆い Ш 區 百 + 会期中、 1 瀬さんの 5 ナ 創 ル 刊号から 入場者は四 まで.....。 蔵書は四 展 て 示され 分 百 0 た。 用 Ŧi. 事 < に 具 +

t 瀬さんなど二十歳になったばかりだった。 とんどは二十 粋な行動が手にとるように見えてくる。 を手にしていると、 は生前の大澤さんから何回 会員もたった十四人、全員 べてみると、 をしたところがほ かし、 後援団体もな 感嘆の声をもらしてしまうのだ。 この 歳代、 地方都 かに 世紀の 大 会長の大澤さんでさえ三十四歳、 市 あ で、 前例もない。 澤さんの 2 この 山岳展 「かお聴きしたが、こうして (が汗を流して準備をした。 ただろうか。 奮闘 時代に、 が開 あれこれ ぶりと会員諸先輩 しかも、 こんなに超 驚きとい かれたとき、 采配を振るう年配者 思いをめぐらすと、 うほ 念のため 会員 このこと 支える百 たち 『南嶺 か 流 は 0 な 0 展 0 に 11 II 調 紬 示

武

背に読み取れ らのヨー 暮理太郎、 たるや、 から歩き始めたこともある。 ながらも、 ・ロッパ 単に今昔の感などと言っておられ 大町 郷土 での活躍、 桂 0 月 Ш 氏らの への愛着、 探検 近代アルピニズムの影響をもろに受 芦安村まで三 矜持に胸を張 静 観 H 本的 ない。 時 間 2 情 7 その 島烏 41 るの 意気軒昂 槙さん 水、 が紙

け

関係、 まで日本山 そんななか 具 代会長、このほ プと行動 田神社、 蔵書に見られるように、 私学理 1 力はこと山岳に限 で戦 事 岳会の支部長 自衛隊協力会などいずれも指導的役割を背負った。 タリークラブの 商工 後 か 0 スポーツ少年 山梨県 をお願いしてきた 所、 Ш ほ 大澤さんの研究熱心さとリー 2 たも 郵便協力会、 岳 か 連盟の ベスキ 団 0 ではな i 調停委、 初代 連盟、 更 11 甲 生保護、 スケー 府市 家業 議 1 0 伊勢神宮 連盟 酒造 y 教育委 は 組 初 "

伊二 の話 たとつくづく思う。 んと伸ばした大澤さんに向き合うと、 九十歳を越えてからは歩行が次第に不自由になられ 郎氏は一九二七年日本山岳会入会。 遺 になると相手を直視 影を前にして、 ご冥福をお祈りするばかりである。 もっといろいろとお聴きしておけば 饒舌に なる。 ああ、 会員番号一〇五 1/1 明治 柄 な 体、 の青年だと思 たが、 九 (大澤 筋 よか をぴ Ш

郎

## H・C・サリン氏

# HARISH CHANDRA SARIN (1914~1997)

長らくインド登山財団(Indian Mountaineering Foundation)の会長を勤め、日本山岳会名誉会員でもあったサリン氏が、一九九七年一月二十七日に亡くなった。八十三歳だった。の形で、サリン氏のお世話になったはずだ。謹んで哀悼の意をの形で、サリン氏のお世話になったはずだ。謹んで哀悼の意を表したい。

同の、 は、 というものだった。場違いといえばその通りだし、第一「ほん おくのが、 費の分担、 1) 0 です。」梶正彦にそう言い含められてニューデリーへ飛んだの 人じゃ、ダメです。彼がOKといえば、大丈夫だっていうこと 印象は、 の」の英国紳士なんて、 「とにかく大事なことはサリンさんと交渉して下さい。 一九七六年三月のことだ。日本山岳会、インド登山財団合 かげんもいいところだが、ともかく温厚でユーモアもたっ 日印ナンダ・デヴィ登山隊の先発として、 なるほど、これがイギリスのジェントルマンなのか、 とりあえずの僕の仕事だった。初対面でのサリン氏 輸送の手順などの細部を、本隊が着くまでに詰めて それまで会ったこともないのだから、 隊の編成 他の 経

ぷり、しかしまるで隙がないのだ。

れて、こちらがたじろいでしまったことも、一度や二度ではなった。さりげない言動のはしばしに、底知れない実力がうかがわら。やったのは登山隊の代表として、インドでのパトロンであったびサリン氏に、さまざまのお願いをすることだった。その中にるサリン氏に、さまざまのお願いをすることだった。その中にるサリン氏に、さまざまのお願いをすることだった。その中にるサリン氏に、さまざまの代表として、インド登山財団のサリン氏と交渉する、といった場面は、ほとんどなかったように思ったことも、一度や二度ではないたとのであった。

い。甘えすぎてはいけない、とも思った。

実際、 時代に、インド人の高等文官として勤務するというのが、 士山や関西へ同行したことがある。案内と書かない したわけではないからね」あっさり僕はいなされてしまった。 僚の関係は、 に聞きたいことは、 たからだ。僕自身は一応、南アジアの研究者だから、サリン氏 おける仏教の衰退やらについての講義を、僕の方が受けてしまっ しろ新幹線の建設における世銀からの借款の意義やら、 いうことであったのか。あるいは、インドで政治家や政党と官 その後、 それからも僕は何度かインドへは行ったのだが、サリン 日本山岳会がサリン氏を日本へお招きした折に、富 どういうものであるのか。 他にいくらもあった。たとえばあの植民地 「フム、私はまだ引退 のは、 日本に なに どう

氏はたいがいニューデリーには不在だった。州知事特別顧問と

みの官僚に勤まる仕事ではない。 央政府から派遣される、強大な権限をもった調停役である。な いうのは、 紛争によって州政府が機能しなくなった場合に、 中

死は、インドの登山史における一つの時代の終わりであるだけ し寂しい思いをしたものだ。一九五○年代から一九八○年代に うに思えてならない。 かわってゆく人は、インドでももう出ないだろう。サリン氏の きに考えることは困難である。サリン氏のような形で登山とか かけての、インドの登山界の発展にしても、日本を含む諸国 爺とでもいうのだろうか、往年の凄味はもはや感じられず、 でなく、ある世代のエリートのあり方の終焉を意味しているよ インドのヒマラヤでの登山活動にしても、サリン氏の存在を抜 だが、一九八四年にカトマンズでお会いしたときには、好々

九一四年 攻、学位取得 る。イギリスへ留学、ケンブリッジ大学で数学を専 (United Province) デオリア (Deoria) 五月二十七日、イギリス統治下のインド連合州 に生まれ

九三八年 鋼省等で次官等を、 インド高等文官(Indian Civil Service) インド独立(一九四七年)後は主に国防省、 またアンドラ・プラデッシュ、 試験合

> 顧問を歴任。駐ネパール・インド大使を最後に官界 グジャラート、アッサム各州の首相任命州知事特別

一九五四年 Alpine Association)の副会長となった(一九九二 年第三代会長に就任 (一九八九年まで)。 一九八九 協会の名誉副会長でもあった。 ヒマラヤン・クラブ名誉会員。 年まで)。英国山岳会(Alpine Club)、日本山岳会、 年には国際山岳協会連合(Union of International また、インド登山財団の創立メンバーで、一九六六 理事長を勤める。ちなみに初代校長はエヴェレスト Institute ダージリン)の設立にかかわり、 (チョモランマ) 初登頂直後のテンジン・ノルゲイ。 ヒマラヤ登山学校(Himalayan Mountaineering またインドのテニス

一九九七年 ニューデリーで死去。

鹿野勝彦

### クリシュナ・バハドゥー KRISHNA BAHADUR VERMA (1925~1997) ル・バ ルマ氏

ネパール人、クリシュナ・バハドゥール・バルマ氏は日本山

岳会の 数次に 亘るマナスル登山隊派遣 における最大の 献 者で

である。

そして、

クリシュナ氏

は 西堀

博士

のトリ

ブバ

玉

Ŧ.

将軍  $\mathbb{R}$ ル 18 ドにて非合法の政治活動を進めていたコングレスの政治家はネ のエベレスト初登、 ス隊によるアンナプル ヤにて開放された未登峰が次々と初登頂されてい ルと国交を結んだ。そしてヒマラヤ登山 ルには多くの国々が登山隊を派遣したいと望み、 たらよい り戻した国王トリブバ 活動する特殊な政治的環境にあった。 ングレス(会議派)を中心とした政治政党が民主化を目指して を解 は当時、 ールに帰り、 一九五〇年代のネパールはラナ家専制政治からの解放と、 (マハラジャ) 家の主要な者は皆インドに亡命した。 いたば 峰が登られる中で、 かよく判らなかったが、 新しい国造りの熱気に満ちていた。一九五〇年に鎖 かりの ネパール会議派を結成して公然と活動し、ネパー また、チョー・オユー、 ネパ ンは ナ主 ールは諸外国に対しどのように対処 現国 峰 日本はマナスル峰を目指した。 の初登頂に続き、 王の祖父に当たり、そしてラナ ヒマラヤの山 王制復古により実権を取 は、 ネパ ダウラギリなど八 Ŧi. N った。 1 各国はネパ があるネパ 三年に英国隊 ル・ヒマラ フラン イン L コ

11

よるマナスル登山 18 認められ、 登山許可は、い 0 ール人社会において有力筋を頼るしかなかった。 謁見の労をとられ そしてこの登山 まだ明確な登山規則も 許可の たのである。 申請 隊派遣が京都大学か は、 クリシュナ氏の尽力によって ネパール政府による なかった当時、 ら日 本山 西堀 複雑なネ 7 博士 岳会に ナスル

譲られて、当会のマナスル登山が実現したのであ

後年、 二年であった。京都大学の関係者の斡旋で日本各地を巡り、 例えばネパ する著作活動を続けられた。その代表的な著作が との関係を保ち、 地に多くの体験を得られた。二年後にネパール帰国後、 は日本及び日本人に対し絶大な関心を寄せ、 もあって、日本の登山界でもよく められた。 見いだしたもの』("What I Found in Japan")である。 ナ氏は政府関 るが、その最初は第一次マナスル登山 クリシュナ氏の名は、 ネパール・日本研究センターを創設し、その理事長を務 1 クリシ ル・サッ 係の様々な役職を勤められる一方、一 日本の歴史、 ュナ氏はスポーツ カー ヒンズー教の神の名と同じであること 協会の創始者の一人でもあり、 文化または日本人に関 知られることとなっ 関係でも顕著な働きをされ、 隊が派遣され 何回 か訪 『私が 貫して日 クリシ L た 日され 日本で て紹介 また 九 木 実 Ti. 氏

多くのスポーツ大会にネパール代表選手団を率いて参加された。

アジア大会

(ニューデリー)、ヘルシンキ・

オリンピックなど

らに、 アムリタさんも、 氏は日本人との関係を保ち、 急逝されたのは本年五月二十九日であったが、その前日まで同 様々な影響を与えることとなった。クリシュナ氏が七十二歳で 山家以外にも多くの日本人の知己を得たが、その人々は同氏に ンドラ・カレッジ)及びインド(ベナレス大学)にて教育を受 し、その後、 明らかではないが、 クリシ かつ大変に頭脳明晰な人であった。後年クリシュナ氏は登 クリシュナ氏の実弟ラム・クリシュナ・バルマ氏、 ュナ氏がネパールにていかなる環境の下に育ったかは 上流階級の一人として、カトマンズ(トリ・チ 時は異なるが日本に留学している。 一九二五年五月一日にカトマンズにて生 日本関係の研究をされていた。 実娘 3

+ 誕

生活協同機関 本会のヒマラヤ登山の歴史の一 により政府からプラバル・ゴルカ・ダクシン・バフ勲章を受け 五四~六〇年)、 クリシュナ氏のネパールでの職歴は、家内工業局局長 本会名誉会員であるクリシュナ・B・バルマ氏の名は (サージャ)総支配人、などを歴任し、その功労 観光局局長、パルパ県知事、 齣に永く留められるべきであり、 内務省次官 二九 補

(神原

ここに御冥福を祈る。

典でもある"JAPANMA KEKE PAYEN"(一九七八年に刊 に発行された前記 "What I Found in Japan" 編者注 クリシ ュナ · B ・バ ルマ氏の著書は、 の他に、この 一九八五 原 年.

> が、 CAカトマンズ駐在の安藤久男会員の協力を得て作成中である 部の文献目録は、 書室にも保管されている。ネパール語・日本語の本を含めた全 Search, Share"の名前で目録が作られ、この目録は本会の クリシュナ氏の論説 した "Who Said What" されやすいしかるべき場所に保管されることが期待されている。 内英文の日本紹介の文献は、クリシュナ氏により "Seek Research Centre)のライブラリーに保管されているが、この 重な文献は、現在、ネパール・日本研究センター(Nepal-Nippon が発行されている。 を主文とした英語・ネパール語による日本を紹介するための本 パール語の題名『熟練した勇敢な人びとの国・日本』のもと、 彼を中心とした日本・ネパール関係の書簡 行されたネパール語版) 目録完成の暁には、この貴重な資料が活用されるべく、利用 現在川喜田二郎名誉会員が中心となり、 また、クリシュナ・バルマ氏の収集した貴 「日本繁栄の奇跡―ネパールのための模範 があり、 がある。 他に本書を補足するために、 さらに一九九○年には、ネ • 新聞記事 J 図

### 奥 田 Ŧi. 郎氏(一九一四~一九九五

奥田 五郎先生は北海道教育大学教授を定年退官された後、 旭

の所は愛用の自転車で行くことが多かったとのことでありましの所は愛用の自転車で行くことが多かったとのことでありました。特に近く

こよなく愛した大雪の山々を再び訪れることなく逝去されましこ年三ヶ月の療養をされましたが、一九九五年十一月十八日、三年三ヶ月の療養をされましたが、一九九五年十一月十八日、交通事故にあわれ、以後入院、

を知り、 と話された後、 用のビーカーで紅茶を入れて下さり「山に登るとは……」など りました。 て、 山岳部の結成をということになりました。 顔を合わせているうちに本格的に山を登ろうということになり、 育大学) されるまで山 先生との 指導をしていただける先生がおられないかということにな 旭川分校に入学した時でした。幾人かの山好きの者が 有志一同で化学研究室に伺いました。先生は化学実験 そんな折、 出 岳部部長をしていただいた次第です 合いは、 快く引き受けていただきました。それ以来退官 奥田先生 私が一九五二年北海道学芸大学 が北大山岳部のOBであること 山岳部の結成にあたっ 現、 教

れた一時でした。

ての苦目、Bにしてのよろりを1つ情でになってナポッチの普及にも力を尽くされました。 の普及にも力を尽くされました。 の普及にも力を尽くされました。

シケ西面中央稜登山においては、アイゼンの着け方はもちろん、次の年四月、部としての本格的登山の嚆矢となったオプタテ

このように初歩的なことからの指導をいただいたことが

我

れ ただき、たくあんをかじりながらの酒。 ヒュッテでの泊りの夜、 なかったのでは。登頂を果たし、美瑛・白金温泉に無事下 どまだ一般的に出まわっていなかったというより小生だけ知ら もんだなー」ということで一同大笑。昭和二 と何かを切りわけてくださった。はじめて口にするものでした。 るので、 ていると、「上まで行ったらうまいものを食わすぞ」と云わ 指導をいただきました。 雪氷上の歩き方、雪山でのテント生活などを共に行い 先生、これは何ですか」「チーズだよ、 だんだんと昔の山登りのことなどユーモアたっぷりに話さ 日ごろの学校においての厳しさから一転した風情を見せら 何が出るのかを楽しみにひたすら登り稜線に辿り着く 風呂上がりに居酒屋につれ その時、 我々部員 知らんのか、 はじめは今回 んがへ 十九年、 ばりな 7 ながら チー こまった がら 0 ってい Ш Ш n

たことでした。 なくちゃだめだよ」と話されました。 者達でありました。 大雪山の無雪期の登山と近郊の低山でのスキーの経 の山とはどこにどんな山が……」との 私と同 の主要スケジュールに日高山脈がは 時 期の部員 それ 以後、 そのような部員に to 以後入部した者もほとんどは十 日高 0 Ш 0 その時も、 問 勉 いりました。 日高山脈 いいに、 強会となり、 またも呆れ 0 先生、 沢 験 我が 登りをし か 勝 日高 ない 岳 Ш れ p

評する人もある。……」とありました。

一後に、御本人の前ではこのような呼び名はいたしませんで

ただいたものでありました。 ものと考えます。また退官後も折に触れ的確な指針を示してい 年代の卒業後も現役とOBとのつながりを続けることができた

また先生は北海道学芸大学旭川分校主事を一九五九年より四

年間勤められ、その間に上川郡東川町旭岳温泉に、北海道学芸 大学大雪山科学研究所を竣工されました。これは一 般の学生の

研究の場と共に山岳部の登山拠点にもなりました。 方、退官後も、 理科教育発展のため、 旭川市内の小中学校

されておられました。 0 研究会等に精力的に顔を出され少々辛口ながら的確な助言を

させていただきます。 神威岳及びピリカヌプリ山などの指導をいただいたことも特筆 年の部報発行、一九六〇年一月のヌピナイ川よりソエマツ岳、 学芸大学、教育大学の山岳部としては一九五八年、一九六四

学旭川分校主事に再選された折の北海タイムスの に登った。人ざわりは良くないが、ひとすじバックボーンが通っ 評するものとして、一九六一(昭和三十六)年、北海道学芸大 ている感じ。この気骨は山の空気にはぐくまれたものだろうと 先生を知る資料は今となってはあまりありませんが、先生を 山が好き。北大理学部に在学中は、山岳部員としてよく山 「時の人」欄

> いただいておりました。 したが、仲間内では先生を「ゴロチャン」と愛称で呼ばさせて

ロチャン、雲の上から見る下界の山はいかがですか」と話しか 好きなパイプをくわえた生前のお姿を思い浮かべながら「ゴ

けたく思います。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

#### 略 歴

九四四 (大正三) 年 旭川市二 一代目市長、 奥田千春氏の五男

として出生

九三二 (昭和六) 北大山岳部員として先駆的登山をする 年五月 大雪山愛別岳

九三三 (昭和八) 二月 神威岳直下に達す 日高山脈中ノ川を溯行、

(昭和八) 年七月 リガイ山、 ノ川を下る ペッピリガイ沢を経て中ノ岳に登り、 元浦川からショベツ沢を溯行、 ť 中

九三五 (昭和十) 年三月 に登る 美生川からルベシベ岳、 チロ 口品

一九三七 (昭和十二) 年 本山岳会入会、 会員番号一七〇二。紹介者犬飼哲夫・ 北海道大学卒業。 明治製糖技師。

H

一九四二(昭和十七)年 海軍技術将校

一九四五(昭和二十)年 北海道農業会技師

学旭川分校)、四九年同助教授、五一年同教授、五九四八(昭和二十三)年 北海道第三師範(現北海道教育大

当たり設立発起人となる一九六九(昭和四十四)年七月(日本山岳会北海道支部発足に九年~六三同校主事。七七年退官。八一年名誉教授。

九八七(昭和六十二)年 日本山岳会永年会員九八二(昭和五十七)年 勲三等旭日章受賞

村、正四位を賜わる。九九五(平成七)年 心不全にて逝去。享年八十一歳。同日

九九二

(平成四)

年

交通事故で負傷

(渋谷正己)

ても残念なことでした。

渡辺正臣氏(一九一八~一九九六)

渡辺さん、こんな形で渡辺さんとお話することになろうとは

で終わるのか。口惜しい気持ちで一杯です。思っても見ませんでした。長い交友の果ては永いお別れの

最後の御一緒の山行は一九九四年夏のスイス・アルプスの旅でしたね。十数回のツアーコンダクターとしての旅、又、自らでしたね。十数回のツアーコンダクターとしての旅、又、自らでしたね。一まれいするパーティーを開きました。大袈裟なものではなかっながのでしたが、渡辺さんを中心にツアーを組んだメンバーですせんでしたが、渡辺さんを中心にツアーを組んだメンバーですおにスイスへ来ようと約束しました。とうとうそれは果たせな緒にスイスへ来ようと約束しました。とうとうそれは果たせなおにスイスへ来ようと約束しました。渡辺さんにとっても私達にとったも、一般の関係を表した。近辺さんにとっても私達にとった。近辺さんにとっても私達にとった。近辺さんにとっても私達にとった。一般の関係を表していました。近辺さんにとっても私達にとった。近辺さんにとっても私達にとった。一般の関係の関係を表しています。

かえる。何とも不遜で今思うと申し訳ない山登りでした。当時見した渡辺さんの山の文章は、高く遠い山の大先達として映り見した渡辺さんの山の文章は、高く遠い山の大先達として映り東した渡辺さんの山の文章は、高く遠い山の大先達として映りました。

・ます。

したが、山仲間の信頼と連帯が何のためらいも起こさせなかっぱして伊豆の山々へとご一緒しました。何ともあぶない行動ではして伊豆の山々へとご一緒しました。何ともあぶない行動でを用意していました。「運転中に若し私がおかしくなったらこ既に心臓を痛められていた渡辺さんは、胸にニトログリセリン

たのでしょう。 頼と連帯が何のためらいも起こさせなか 何ともあぶない行動で 0 して登る渡辺さんでした。

作ることでした。渡辺さんはこの方向で委員会が動き出したの 保護委員長を一年勤めただけでした。 ことを心掛けましたし、フィールドマナーノートは私の代になっ バトンを受けた私は、 を見きわめると、さっさと委員長の職を退いてしまいました。 で考える自然保護でなくみんなで一緒に登って考える自然保護 りある一年で、就任に当たって渡辺さんの示した方針は、 ていましたから、長い日本山岳会生活の中で役職としては自然 て完成しましたが、 長くフリー もう一つはフィールドマナーの高揚としてそのテキストを 一で仕 事をしていた渡辺さんは、 この完成は挙げて渡辺さんのご功績と考え 歩きつつ考える自然保護をしっかり守る しかしこの一年は大変実 役職には恬淡とし 会議

> 「書きによる活動でなく仲間との楽しい登山を何よりも大切に行事を重ねていますが、この会の生みの親は渡辺さんでした。 でである山行など、次々に新しいアイデアを出して実践しました。 は登る山行など、次々に新しいアイデアを出して実践しました。 ま々君の工学博士を祝う山行、シルバー登山者を助けて西穂高

から、 後輩がガイドブックを書いて献本しても決して甘口の に飛んで確認するという足で書いた自信だと思い とがあります。 持っている。 でしょう。ご著書の後記に「私は地図とガイドの内容に自信 とが出来たということは、登山界に対する大きな貢献と云える が渡辺さんのガイドブックによって安全で楽しい 御子息さんから聞きました。延べ六○○万人以上の登山愛好者 が、その後も出版継続中のガイドブックが二○種類ありました 八八年には総部数五〇〇万部に達しみんなでお祝いをしました 著書は北 一九五四年から本格的にガイドブックの執筆に専心され、 晩年事務所を閉鎖されたときには六〇〇万部に 海道から北アルプス、 だから安心して欲しい」と書い その自信は 点 富士、 角の疑点があ 箱根、 てあ 伊 れば、 豆 るの ます。 登山をするこ に及んで一九 を見 お 達 直ぐ現 せじ だから したと たこ は

集についても常に渡辺さんの助言をいただいていたそうです

返ってこなかったと云っています。

日本山岳会の

山田

えました。の影響を常に念頭におかれた渡辺さんの基本的な姿勢がうかがの影響を常に念頭におかれた渡辺さんの基本的な姿勢がうかが活字を媒体とするお仕事の中で、活字のもつ無限の広がりとそ

渡辺さんは、府立化学工業学校を出ると菅原電気株式会社に渡辺さんは、府立化学工業学校を出ると菅原電気株式会社に渡辺さんは、府立化学工業学校を出ると菅原電気株式会社に渡辺さんは、府立化学工業学校を出ると菅原電気株式会社に

らかな眠りを続けていることを信じています。
渡辺さん。共に愛した山岳の、その遥か中空にあなたがやすらぬかれました。素晴らしい人生だったと思っています。

(國見利夫)

渡辺さん、さようなら。

土倉九三氏(九二一一九九六

最も親しかった友人の追悼文を二回も三回も心をこめて書く

いう)に寄せた一文を再掲させて頂く。称京一中山岳部、戦後の学制変更に伴い今では「北山の会」とに飯盒の飯を食った京都府立第一中学校の山岳部のOB会(略ことは、私にはとてもできない。そこでまず左に、彼と私が共

をはいさな一手というの人の反である。京都一中では『岳郎 たばがいなくなった山仲間の間に、好き嫌いを超えて何ともいだ彼がいなくなった山仲間の間に、好き嫌いを超えて何ともい は倉君が死んだ。その存在感を無類に発揮した、全く特異な

領袖とする大興安嶺探検へと結集していったのである。一中・三高を通じての山仲間の御縁が、大先輩今西錦司さんをなっても、仲間であることに変わりはなかった。そうして、京仲間であり、よく北山や美濃を歩いた。しかし進学コースは異体は小学校一年生からの私の友である。京都一中では山岳部

る。その縁起の中身を見ると、次のようなことがある。
西・土倉コンビなども、この「御縁」が生みおとしたものであは、今西親分を囲む「不逞の輩」の旗挙げみたいなもので、今異常な歴史を生みだしたのである。大興安嶺探検を共にしたの異常事態が、これまたその後に尾をひくところが、戦時という異常事態が、これまたその後に尾をひく

えば一世をゆるがす大富豪だった。ここに彼の無類の誇り高まず土倉君は、祖父の土倉庄三郎の時代には大和の土倉家と

1)

世 て、

話

になったか判らない。

せ 11 ずして今西さん 魂と万事につ けての趣 のそれと波長のあう面 味・セ ンスの IE. から 統 かある。 派的姿勢が

あ

り

期

者的 情派 である。 ートナイスさを非常に愛した。 人間になっていったのである。 であり、 かも彼のさまざまの逆境の反面から、 ゴマ化し、 普通人の ゴ マスリは大きらい。 信義を自覚的に重んずる、 ハッタリ嫌いでむしろ臆病 その反面 彼はまた民 民主的 衆派 飾らない 生活 人

を喪ったことを、

淋しく偲ぶのみである。

勿論それに伴っての社会的信用である。 きにわたる彼の本業、 普通人たろうとする彼の良さが発揮されたのが、 つまり印刷業の、 安定した経営である。 数十年の永

てい るセンスに長けていた。 無類に広い。 この基盤があったればこその、 まず彼は、 文学的 た。 人の心の深層に迫ることもできた。 センスも豊かである。その上、 更にそれらの生活雑情報をまとめてイメージ化す 裸の人間として、 だから彼の蔭の渾名は 異常な程の感受性と人情 彼の特異な活動であっ 他人との 多読でもあ 情報局 つきあ を持 た ったか 総 裁 いが 2

彼のハートナイスさと骨身惜しまぬ出没自在の活動力。こうし て立ちあがりに最も必要とするも このような能力こそ、 AACK (京都大学学士 海外へ Ш 岳会 の登山隊・探検隊が、 のである。 は 毎度毎度どれだけ そこへもってきて、 まずもっ 彼の

> 反面、 少なくなかったろう。 ず、人脈をまとめる上でも隠然たる力を持っていた。 更に加えて、 あまりにも激しい好き嫌いのため、 彼のまとめる能力は、 今はそのすべてをこえて、 情報をまとめるに留 反撥を買っ この特異な友 た向 但しその まら

員会。 巻のことにふれたい 次に、 制作 彼を識る人びとにより出版された 株式会社土倉事務所)。 (編集発行人 土倉九三氏追悼文集編 『追悼土 倉九三二

というのは、ここには彼と交友関係のあった八十五人の人び

が登山 との、 配布され つまり一九九七年六月十二日に間にあうように、 もう底をついている程希望者が多かった。 たいへん生なましい追悼文が盛られている。 探検の ている。 関係者である。 この追悼集は数百名の方がたに配布され しかも彼の死のちょうど一年 多くの知人に その大部

面 論である。 京都を中心とする岳人たちの、 これは彼の交友関係の広さと大きな影響力を物語ることは が、 らずも露呈されていることである。 それと共に、 読して改めて痛 たいへんユニー 感す るの 7 な昭和史の は

川喜 田 郎

略 歴

九二一年 京都 に生 まれる

九四 九四 年 年 大興安嶺探検隊に参加 京都高等蚕糸学校 (現・京都工 芸繊維大学)入学

九四三年 高等蚕糸学校中退 入隊

九四六年 日本山岳会入会。 会員番号二四〇〇。 紹介者今西

九五〇年 司·加藤泰安。一九七三年復活 同志社大学二部入学

錦

九六七年 京都大学サハラ学術調査隊に参加

九八七年 日中ナムナニ会・モンゴルトレッキングに参加

六月十二日 死去。享年七十五歳

(佐藤正雄)

簿をみると、会長をはじめ数人のメンバーが私にも

判る。

創立のメンバーで理事を務めている。そして二十三名の会員名

(昭和二十二)年十月に亀田山岳会の前身である亀田郷山岳会

## 小 泉 喜 重 氏 (一九二六~一九九六)

長の五十嵐氏から原稿依頼が一枚の葉書で届いた。さて、どう したものか 泉さんとは山に関しては殆ど付き合いのなかった私に支部

を伝え、資料を集めることとした。 困って亀田山岳会前会長に相談に行くが、 とにかく小泉氏の長男にこれこれの訳で写真を頂きたい旨 おまえ書けとのこ

> していたため泊まりの山行には必ず小泉石油店に行き白ガソリ しかご一緒しなかったと思うが、会では永年ホエーブスを愛用 又一氏の紹介で入会し、会員番号は二七六四だった。 輩である私に話しかけ、昔話をよくされたものだった。 ンを買いに出かけたため店で会うと、どこの山だね? さて、同氏の山行を種々の資料から探ってみると、一九四七 日本山岳会には一九四七(昭和二十二)年、藤島玄・小早川

七十歳を過ぎてもまだまだ元気な方、 思い起こすと、想像に絶する。 もと、意外な人々が思いおこされるが、とうに他界された方、 懐かしさが込み上げてくる。この方も山をやったのか、この方 以前勤めた職場で世話になった方々、町で話しかけられた人々、 先人の奮闘された時代を

れ、 たことなども伺える会報である。何よりも戦後の混乱期に山を 違い謄写版印刷ではあるが、当時の苦労も偲ばれ、 ごされたこと、そして、記録をまとめることの大切さ、 愛してやまなかった、当時の会員の皆さんにはただ唯感心させ 亀田郷山岳会の会報『ケルン』一号を見ると、山に対する憧 闘志、今より装備・交通などを考えるとき大変な時 反面楽しかっ 現在と 代を過

小泉氏とは先に述べたとおり山行ではおそらく一~二回程度

悼

られる。

氏の「山の経験」と題する仙之倉山行が載せられている。そして『ケルン』二号には私の尊敬してやまない、故藤島玄

た様になって」とある。とある。との一部を紹介すると、「さて寝る段になった二枚の携天を被ず、着物は濡れ切っている、三人がかたまって二枚の携天を被ず、着物は濡れ切っている、三人がかたまって二枚の携天を被

とってまさに脱帽ものである。当時の携天といっても、おそらく油紙であろうことは想像で当時の携天といっても、おそらく油紙であろうことは想像で

られた。

会長の方針は、県外の山には目もくれずにもっぱら飯豊と川への山々に通い数々の記録を残した。なかでも厳を期飯豊連峰内の山々に通い数々の記録を残した。なかでもず、先人の歩いたり、後に続く我々はそれをこえることができず、先人の歩いたり、後に続く我々はそれをこえることができず、先人の歩いたけで勝ちとった快挙といってよい。あまりにも立派な記録であり、後に続く我々はそれをこえることができず、先人の歩いたり、後に続く我々はそれをこえることができず、先人の歩いたり、後に続く我々はそれが先輩へのもっとも良い供養になることと思う。

白ガソリンを買いにいっても今は姿はないが、ご冥福を祈る

のみである。

(本間一人)

# 千谷 壮之助 氏 (一九一七~一九九六)

歳。第三次マナスル登山隊員十二名の中で六人目の物故者とな市立医療センターで、心筋梗塞により逝去された。享年七十九之助氏が、一九九六(平成八)年八月八日早朝、入院先の川口めの輸送指揮を担当、裏方として登頂成功に寄与された千谷壮めの輸送指揮を担当、裏方として登頂成功に寄与された千谷壮

千谷さんは、一九一七(大正六)年一月二十七日、仙台市で千谷さんは、一九一七(大正六)年一月二十七日、仙台市の旧制第二高等学校の地質学の教授として仙台に赴任されている時であった。その後幼少時代を東京・大森で育ち、港区にあった日本大学第三中学校を経て、一九三四(昭和九)年四にあった日本大学第三中学校を経て、一九三九(昭和十四)年三月、日本大学予科理科に入学、一九三九(昭和十四)年三月、仙台市で千谷さんは、一九一七(大正六)年一月二十七日、仙台市で千谷さんは、一九一七(大正六)年一月二十七日、仙台市で

この間日大在学中は山岳部に籍をおき、神山勉氏を中心とす

\$ 旅館 会の一 る山 かけており、 知られてい 岳 員として活躍された。 部の黄金時代の山登りを楽しみ、卒業時には、 0 出であることもあって、 Ш 岳 部 0 B 仲間 の間 故人の叔父が草津 山岳部時代には草津によくで では、 スキーの上手なことで 温泉の リー 「ての字 ダー

山のあるところへ出張させて貰うなど大変お世話になったとのが、たまたま上官に稲門山岳会の石沢六郎氏がおられたので、で海軍技師として、鎭海海軍施設部に所属して朝鮮に滞在した大学卒業と同時に海軍省建築局に入省、同年十月より終戦ま

務し、戦災に遭った駅舎再建の設計等で活躍された。戦後復員と同時に運輸技官として運輸省、運輸建設本部に勤

ことである

スチャンで、 た と次の15 に入会(会員番号二七六九番)され、 ある株式会社暁組 昭和二十三) 山 山 その頃、一九四七(昭和二十二)年十月、 日記 村利男氏 頃 輯の編集に携わった。 、晩組という会社は、 H 編集に携わることになり、同氏のすすめで、 年五月には、 本キリスト教団の教会復興委員会の委員でもあ ① 日 (十電舎の建築部門)に移籍することに 大山 岳 部同 運輸省を辞し、津村氏の勤 たまたま、 社長の伊藤立夫氏が熱心なクリ 期 にすすめられ、 戦後の第一輯である14 同じ編集委員であ 神山勉氏が、 九四 務 本会 本会 な 先 輯 7 1

> らは、 践部門を担当、 補佐し、 九 引き受け、一九五一(昭和二十六)年度には谷口現吉理事長 その実務は東京支部が担当していた。故人はその支部の理事 ACは国体部門を引き受けたこともあり、 九~三十一、三十四の計七年間理事をつとめた)。 ますますJACにのめりこみ、一九五〇 クラブ・ルームが出来ると、地の利を得ていることもあって、 n 時 た、 慎さんが社長で、 しか (昭 J A C の 和二十 佐倉飼料㈱や西村工業㈱の事務所があり、 Ļ 角田明、 会社の仕事はともかく、故人にとっては、 应 東京支部報第九号(昭和二十六年六月) 理事に選任された(昭和二十五~二十七、二十 年に山 杉本義信氏等と共に総務担当 慶応の谷口さんや北大の林和夫さん 日記 14 輯 0 印税で、 (昭和二十五) 会務は多忙をきわ お茶の水に待望 理 その 事として、 その頃のJ 近くに 後 年度か がお 九 実 を \$ 85 0 74

である。

本年度事業への抱負」という記事も執筆されている。

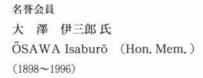
熱がにわかに高まり、その年の秋にでかけるマナスル踏査隊のスルの登山許可をとってこられたので、日本山岳会のヒマラヤー九五二(昭和二十七)年になると、西堀栄三郎氏が、マナ

た関係で、

全国各地

の同教団所属の教会再建に尽力されていた。

#### 追悼







名誉会員 クリシュナ・B・バルマ 氏 KRISHNA BAHADUR VERMA (Hon, Mem.)

 $(1925 \sim 1997)$ 



名誉会員 H・C・サリン 氏 HARISH CHANDRA SARIN (Hon, Mem.)

 $(1914 \sim 1997)$ 



渡辺正臣氏 WATANABE Masaomi (1918~1996)



奥 田 五 郎氏 OKUDA Gorō (1914~1995)



小泉喜重氏 KOIZUMI Yoshishige (1926~1996)



土 倉 九 三氏 DOKURA Kuzō (1921~1996)



▼末 松 大 助氏 SUEMATSU Daisuke (1912~1996)



▲千 谷 壮之助氏 CHITANI Sōnosuke (1917~1996)

春田俊郎氏► HARUTA Toshirō (1922~1996)



■泉 亮氏 IZUMI Makoto (1927~1996)



各務良幸氏► KAGAMI Yoshiyuki (1904~1997)

(各務氏に関する 記事は20ページ)





◀小 西 政 継氏 KONISHI Masatsugu (1938~1996)



▲徳 島 和 夫氏 TOKUSHIMA Kazuo (1945~1997)





◀林 田 正 幹氏 HAYASHIDA Masamiki (1933~1996)



大久保 五 郎氏▶ ŌKUBO Gorō (1933~1996)



よいことにもよるが、

H

頃

から人一倍勉強されていた努力の

賜

ていた。

ると思わ

n

3

して語られる博識ぶりには誰もが驚かされた。これは記憶力が

の様な質問に対しても直ちに適切な回答がなされ、

その滔々と

包を担当することになった。 準備が開始された。千谷さんもその準備委員に名を連らね、

梱

りしておられた。 リストをもとに、 こからか入手されたスイスのエベレスト登山 今でもその頃のことは鮮明に思い 私がヒマラヤとの係わりをもったのも、 梱包の内容を分析したり、 出されるが、 梱包材料を調べた 隊のパッキング・ 千谷さんがど この

梱包作業のお手伝いからであった。

専門家になられ の後のマナスル登山隊のすべての梱包に携わられ、 登山隊、 千谷さんは、 五四年の第二次登山隊、五五年の第三次先遣隊と、 このようにして、 てい た 踏査隊、 九五 三年 その方面 0 第 そ 次 0

を楽しまれていたようであ

現地 して縁の下の力持ちとし として実践され、多くを語らない千谷さんの こうして迎えた一九五六年の第三次登山隊では、 槙さんの絶大な信頼を得ることになり、 頃寡黙な千谷さんではあったが、 へ出かけてからも、 て行 槙隊長の期待に応え、 動され登山を成功に 誰かに質問されると、 隊員に選ばれた。 人柄が認めら 終始、 導 地道 か れ 裏方に徹 た に 默々 れ y 7

ナスル登頂に成功した年は千谷さんにとっては両手に華の

号参照)。 をあげられたからである(JAC東京支部報一九五六年十二月 年 まことに幸せな年になった。 ·越しに愛を育んでこられた中山雅子さんと目出たく華燭の典 その年の秋、十一月二十二日、五

最後 る。日本山 地建設ブームの尖兵として多くの団地建設業務を担当されてい そして翌一九五七 に後進にゆずり、 以後二十年間東京支所工事監督部に籍をお 岳会の方は、 (昭和三十二) それ以降は専らおしどり夫婦で山やスキ 九五九 年には、 昭 和 迦 H かれ、 本住 年度の 宅 戦後の 公団 理事 に を 入 可

り

装飾古墳に興味を持たれ、 先の印象をスケッチして送って下さった。 の尖塔建築等)やケルト族の研究等に費やされ 海外旅行は専らスペインを中心とするヨー 務所に籍をおき、 や海軍の時の戦友会(石沢六郎氏を中心とする は必ず参加され、 L 住宅公団を定年退職されてからの十年間は、 かしマナスル登山隊員が毎年五月に集まる「マナスル 好きな建築の設計をしながら晩年をおくられ、 仲間を大切にすることは忘れ 九州などにもよく出かけて楽しまれ ・ロッパ 方国 早川 て、 なかった。 鎭施会」 内に の建築 毎 建築設計 お 回必ず旅 11 会 ては に 事

年の日本大学エベレスト北東稜登山 千谷さんに登山のことで最後にお世話になっ の時である。 た この時 0 は 九九 Ŧi.

ず、重要な委員会 たことを私達は忘れることができない。 村実行委員長を補佐 に千谷さんの身体を苦しめていた筈である。それにも イスをされていたことが思い出される。 (会議) 親身になって実行部 には、 必ず出 その頃には病魔は除々 席され、 隊を支えて下さっ 適切なアド かかわら

で、六月十八日に入院されたとの話を伺ってもそれ程切迫して たマナスル会にも出席され、 のお見舞いを兼ねて大宮公園の清水園別館 いるとは思ってもいなかった。 千谷さんが亡くなられる三ヶ月前の五月十九日 盆栽村を案内されたりしていたの (くるまや) で行 には依 田さん

が、 わすことができ、 面会謝絶とのことで愕然とした。それでも僅かの時間であった 病院を探して地元の山本晃弘君をさそってお訪ねした時 かし七月下旬になって、 面会のお許しを得てお目に П 復を祈ってお別れ 虫の知らせか思いたって入院先 かかり、二言、 したのだった。 三言 お話を交 には、 0

山

心よりご冥福をお祈りして追悼の言葉とさせていただきます。 それから数日後のことであっ 「今朝主人が息を引きとりました」との電話を戴い た。

松田雄

#### 末 松 大 助 氏 (一九一二~一九九六)

九四八 六十二 指導に当たって戴きました。 く私達後輩にその役を譲られ、 したが、一九八七(昭和六十二)年福岡支部再起の 久島登山 八先輩方々と九州地方の登山の再建に参加されて来ました。 直後のまだ国内事情が安定していなかったこの頃から故橋本三 九九六(平成八) 入会されました(会員番号三一一八)。 末松さんは、一九四七 元福岡支部長の末松大助氏が、 北アルプスの山々に登られております。又一九八六 (昭和二十三) 年までの長い間福岡支部長として多くの苦労をされま 隊に参加されました。 年四月十一日、 年の九州山岳連盟主体で行われた冬期屋 (昭和二十二) その その後は支部顧問として後 八十四歳で永眠されました。 福岡の桜が散ってしまった一 後九州の山 第二 年十一月日 一次世 をはじめ 界 大戦 本山 時には心よ の終 伯耆大 岳会 (昭和

隊を送り出され自ら隊長としてパキスタンへ行かれました。 福岡県 の登山発展に貢献されました。 (昭和六十二) なお、末松さんは一九六二 Ш 岳連盟創立二十周年行事としてティリチ・ミー 年までの間福岡県山 (昭和三十 特に一九六九 岳連盟副会長として福 Ė (昭 年 から一 和 四 九 ル登 四 岡県 1 年 t 現 Ш

まで一 地 と決まり上 スキーを若い私達におみやげとして戴いたことや、北 ルフの腕を日 ワルピンディー滞在となりました。 緒に登 いて登攀ルートのことで英国隊と話がつかず 部ティリチ氷河上のベースキャンプからキャ 一った時 本大使館職 の大変な喜びようは忘れられません。 員の方々に教授され、 その間末松隊長ご自 そのお礼 一ケ 面 のウィ ンプ 11 月ラ 1 0 П 1 ゴ

このようなことで一九八三(昭和五十八) を兼任され福岡県のスポーツ界に多くの業績を残され を受けられました。 八(昭和五十三) 毎年伯耆大山に行かれました。こう云うことでスキーの仲間 末松さんはスキーが堪能で若い頃から体調を悪くされるまで 一九六五 年から九年間 (昭和四十) 年から二十四年間福岡県体操競技連盟の会長 福岡県スキー 年から五年間、一九七八 連盟の会長をされ、又一九七 年西日本スポー ました。 (昭 ツ賞 和 Ŧi. \$

に連れて行かれた。

残念でなりません。 られました。 された人でした。太腹であって気持の優しい人でした。 登山だけでなく日常の生 た。ズングリした体格に何時も日焼された健康な顔に細い目を 末松さんは日頃から私達に このような末松さんと二度とお会い出来ないの 目がまん丸くなり口 活に も心掛けるよう指導され "山岳人" をとがらし泡を飛ば として恥じない て来ま L ĭ て叱 動 が を

### (深田泰三)

# 春田俊郎氏(一九二二~一九九六)

六郎氏とも山行を共にされ、父となってからも息子達をよく山たが、山好きでもあって、旧制一高在学中は、同学年の日高信生まれた。父君の能爲氏は探偵小説家甲賀三郎として有名であっ春田氏は一九二二(大正十一)年十二月十三日、東京渋谷に

験し、合格を待っていた彼に大きなショックを与えたようであい、合格を待っていた彼に大きなショックを与えたようであ年の春山合宿の際、前穂で墜死された。この悲報は、同校を受し、日刊三九(昭和十四)年、旧制松高に入学した彼の兄上は翌

に対しては、特別の思いを持つようになった。しかし、彼は入学と同時に山岳部に入った。そして山の遭難

つづいて高校の生物の教諭を勤めることになった。 あった山や 学系大学院に進んだが、 燕―大天井間のラッセルに挑んだ。 キー山岳部に入部、 九四二 蝶との生活を謳歌すべ (昭和十七) その冬には厳冬期の燕~槍縦走に 修士課程を終えた時点で、 年東大農学部林学科入学と共に東大ス < 大学卒業後は、 時 間 の比較的自由な中学、 引き続き農 参加し、

たしてい る生徒の評判 る。 きもの』、『昆虫―採集と標本』(日本文芸社) 書くことと同様、 (産報出版) 間 た 然界99の謎』、 共著で『父と子の 日本山岳会への入会は一九五七 は勿論良く、 とか、 話すことにも長けていた彼の講義に対す 子供向けで評判の良か 「富士 中学や高校教諭としての責も十分果 Щ 中 Ш 99の謎」、 央公論社) つった (昭和三十二) を書 など出 海の科学9 『水辺 き、 版して 著 90 書と 0 年 4:

15

査隊 えるネパ 調査を本格的に 機に、これまで比較的西欧の専門家の入らなかった穴場とも云 き、五四〇〇以まで登って採集や生態調査に当 の隊長として六名の隊員と共にカンチェンジュンガに赴 · 六三 ールを屢々訪れ、 年には 行うことになり、 H 本鱗翅学会から派遣の 蝶や蛾の分布、 日本ネパ 1 分類、 E ル協会の理事とし たった。 マラヤの蝶蛾 発生期などの これ を 調 会報編集委員 会員番号

など務め、 八五番

昭和四十七年

度には『山』に

Щ

と蝶

で

四四四

(紹介者は沼井鉄太郎・松丸秀夫両氏)

のものがたり」

の連載も行っている。

反対し **S**三回 īE. 究を続けると共に、 に天衣無縫 九 八三年都立北 1 ネパ の活躍が続く。 ル に # 1 ルに地 アルン川造成計 園高校校長を定年退職してからは、 か け、 ゴ 震が起 ネパ タパリ台地をベ ールの良き協力者リンブー氏 こると救援活動を行っ 画Ⅲが発表になるとこれ 1 スとする調 たり、 毎 年二 查研

ても活躍した

手元にあるが、 たタマコシ川 畔 誠に春風駘蕩と云った感じであ の野営地で、 リンブー氏撮影になる彼 の写

蛾の幼虫の作物に対する害の研究などを行

やタバ氏と共に、

やアイベックスまでやって来るという別天地で、 河BCに着いて見ると、 員 夕など記録して欲しいとかいろいろ注文を付けて来た。 が 登 角包紙を渡し、 いを捕えて来て欲しいとか、 Ш 達も余り熱心でなかっ 九八 隊を送った。この時彼は、 、四年、 東大スキー 貴重種でないことを確認した上で、 そこは一 たが、 山岳部では 場所・日時・花の様子・気象デー 遠征総隊長である私 標高四四〇〇はのチャラクサ氷 面のお花畠で、 カラコル ٨ K 昆 蝶の採集はむ に捕 7 虫 数組 0 峰 当初隊 虫網 他 に学術 鳥 40

なった。 を具えた明るい水銀灯をつけ、 へと変えて行った。 田 君はこの そこで研究の主題を昼間飛ぶ蝶から、 頃から左脚血 すなわち山麓の林縁の斜面 行不全で山登りは テントで待っ 7 に、 夜間活動する 十分楽し ると、 自家発電 85 なく

しろリクリエーションになる有り様で、

二ヶ月の

間

お蔭で

共は大いにBC生活を楽しむことができた。

『ネパール全域の蛾』と題する四冊 ズメガ」(日本鱗翅学会) これらの (日本蛾類学会) 研究成果は などの論文にもなっ 「百年振りに再発見され とか「ネパ 0 ール 研究書にまとめられ、 のヤママユ たが、 たネ 最 18 終的 ガ 1 に ル 0 0 11 は ス

くらでも向うからやって来るという次第だ。

種の蛾についての世界でも初めての報告となった。て」は、標高三三○○~五四○○㍍の高所に生活する二百十三になった。特に第四冊の「ネパールの高山蛾及び小蛾類についになった。特に第四冊の「ネパールの高山蛾及び小蛾類につい

学術賞が授与されたことは御承知の通りである。この業績に対し、一九九六年三月四日、第三二回秩父宮記念

ない。 祈りするばかりである。 けるような駘蕩たる姿で、 を感ずるのは私共だけであろうか。今は唯、ゴタパリ台地にお 研究が一 が、九月十七日、 は、 その後もネパールに出かけ蛾の研究を続けるつもりの春 同年の九月下旬にもネパールに向け出発の準備中であ 応の大成を見た上での急逝であった点に、 趣味と研究が一致した幸せな生涯であり、 心筋梗塞のため急逝された。誠に残念でなら 安らかに眠り給わんことを心からお 僅かに慰め 蝶と蛾の 2 田君 た

会員がほぼ同時に日本山岳会に入会した。

(中村純二)

泉 亮氏(一九二七~一九九六)

八日深夜、ラサのホテルで亡くなった。カトマンズからバスで先輩、泉亮さんこと「泉のトッツァン」は一九九六年九月十

一九六二年、私達五十数名はえぞ山岳会を創立したが、泉さ六日目のツアー途上の高山病(急性肺水腫)であった。

に登山実践団体でなかった事から、会の団体入会と共に数人のや日高山脈を好み、中央アジアの古き佳き時代の探検にこだわっていたようであった。ヘディン全集や西域探検全集を座右に置いて愛でていたのもその頃であったように思う。 この会は会員の技術指導にも熱心で、他の山岳会への入会をが止していたが、私達は日本山岳会の情報価値を認めるとともに登山実践団体でなかった事から、会の団体入会と共に数人のとは三番目の年長者で、岩や氷のクライミングよりは大雪山系

泉さんは六七年入会(六三二三番、紹介者は深田久弥・酒巻泉さんは六七年入会(六三二三番、紹介者は深田久弥・酒巻は「東京」を出張ついでに訪問するなど、意欲的な活動をして、「東京」を出張ついでに訪問するなど、意欲的な活動をして、「東京」を出張ついでに訪問するなど、意欲的な活動をしていたのもこの頃であったと思う。

えぞ山岳会の海外登山計画を巡って若い会員と対立して譲らた。それを泉さんはむしろ自慢にさえしていた。た。それを泉さんはむしろ自慢にさえしていた。がとすぐに赤くなり、若い会員にはよく説教していた事から、ガとすぐに赤くなり、若い会員にはよく説教していた事から、ガ

なかったのも、未登の難峰を試みようとする尖鋭会員と中央アなかったのも、未登の難峰を試みようとする尖鋭会員と対立して譲ら

てきてくださいよ、歓迎しますよ」と言うと「いやぁ、今更、せていったのであろう。日本山岳会支部の忘年会で「タマに出と今思う。それを機会に集会にもあまり姿を見せなくなったが、ジア探検の精神に憧れる泉さんの葛藤の末ではなかったろうか、ジア探検の精神に憧れる泉さんの葛藤の末ではなかったろうか、

おっかなくて……」と笑っていた。

舗装 ラ峠 た。が、既に多くは簡易舗装道路、タクラマカン砂漠にも縦断 でを続けた。ウルムチからパキスタン(中パ公路)、ウルムチ プルナ地方、 検物語を夢見る泉さんはどう感じ、何を思ったろうか。それが チからカシュガル~ホータン(西域北南道) からホータン モランマ北面BCを往復した。 同じ年の、今回のチベットへの誘いになったのではなかろうか。 まにシャッターを押し続けた姿は想像に余りある。 泉さんの海外の足跡は、 今回のチベット行はカトマンズからのバスツアーで、 (五二〇〇\\\) を経てまずシェカールからはジープでチョ (石油) 道路が完成した観光シルクロードを、 · ラ 峠 退職後は九三年から四年間、 (西域北道)、蘭州から敦煌 (五二二〇注) やツォー・ラ峠 七二年のランタン・ツアーとアンナ 写真歴の長い泉さんが興奮の 毎年シルクロード詣 (河西回廊)、ウル の四コースを終え (四五〇〇計) その後、 百年前の探 カロ カ ま

がなかったと言う(ツアー会社の旅行業法抵触・安全確保責任揚げた事も知らず、その後も同室者が緊急連絡するまでフォローきりで、泉さんが不調のため遅い夕食を遠慮してルームへ引きスである。このツアーでは先に不調者がいたため添乗員が付き

が問われるべきであるが本題ではない)。

ちゃん」(いつも溜飲をさげていた)であった泉さんが見て たが故に、チベットの山懐に帰って幕を閉じたのであろうか。 あろうに……。我が儘な位に頑固に意思を通した泉さんであっ これから気軽に世界の山にカメラを向けて楽しむ事もできたで 当に最後の旅立ちにしてしまうなんて性急過ぎる事であった。 う存分、大鼾をかいて眠って欲しいと願うのだが……。 囲まれた暖かい茶の間であろうか。 る夢は、 トッツァン」、古手の会員からは 優しいオジサン」そしてお孫さん達からは「ニコニコおじ 「これが最後の高所ツアー」と言っていたそうであるが、 説明より先に叱り言葉が出るが故に若い会員からは 垣間みたチョモランマ北壁であろうか、或いは孫達 「頑固親父」、女性会員からは せめて今こそ、遠慮 「こわい なく思 に 15 11

本当に、寂しい事である。古き佳き時代の頑固な「北の山屋」が、また一人いなくなっ

た。

(阿部 淳)

越えてシ

ガツェ

(三九〇〇㍍) 二泊の後、

ラサ

三六五〇計

着くものであった。慎重な行程のようで高山病事故の多いコ

#### 追

#### 徳 島 和 男 氏 (一九四五~一九九七)

本格的に動き出した一九六八 の支部ルームがあった原病院の地下室である。 私が 初め て徳島和男と出会ったのは、 (昭和四十三) 支部の 年であった。 マカルー計 当時 画が

支部を離れた。 受けた。暫くルームに出入りしていたが、花井さんの率いる母 どちらかといえば、 校のバウダーピーク登山隊に参加することになったために で、同じ大学の先輩にあたる花井さんに連れてこられてきた。 徳島は、 愛知学芸大学 引っ込み思案のおとなしい男という印象を (現在の愛知教育大学)の山 岳部出身 時

戻した。

らず、支部活動から遠ざかったので徳島ともしばらく疎遠になっ 方私も、マカルーを終えた後は、家業に専念しなければな

1 ルの大きな登山隊が派遣された。 コンカグア南壁、 登山の実践にあっ 東海支部設立の動機は、 ク、パミールと続く。 の名を内外に轟かせた。 一九七○年のマカルー南東稜と次々にスケー たという。 組織にとらわれない自由闊達な海外 それを示すように一九六六年 その後も東海支部の海外登山はラ 両隊とも登頂に成功し、 東海 のア

> る。 人々の呼び掛けで支部の再興がはかられた。 ンリⅡ峰から帰ったばかりの徳島和男の姿もあ 道男さんなどのかつての支部を支えた人達であった。 に議論されるまでに至ってしまった。東海支部存亡の危機であ ルームも転々と所在地を変え、ついには支部廃止論までが真剣 であった。とうとうパミールの後は、支部報の発行もままならず、 ようやく支部活動は、 この現状を憂い、心を痛めたのが、中世古隆司さんや湯浅 活発な海外登山とは裏腹に、 軌道に乗り、 かつての東海支部を取 支部の運営は、 その中にサセル った。 これらの n カ

れ 私を詰問したりすることもあった。 として無くてはならない存在となった。更に温和で篤実な性格 は、言いたいだけ言ってしまうと後は根に持たず、 来事や不誠実な仲間の言動には、非を鳴らし、時には支部長の れ慕われた。 が加わり、支部員の間では、トクさんとかトクちゃんとか呼ば 長けていた徳島は、 段と陽気になり、 てしまうことである。 それでいながら、 徳島は、一貫して総務関係を担当した。元々デスクワ 徳島は、 付き合いの良さでも人後に落ちなかった。 実力を発揮してたちまちにして支部 潔癖な面も持っていて、支部内の不快な出 大の酒好きであった。その酒が しかし、 徳島の いいところ 入れば、 中 クに

支部機能が順調に回復してくると、 東海支部の本領である海

外登 てから今日 並 0 気運が まで、 海外に送った登山隊は、 気に盛り上がってくる。 十五を越す。 私が支部長 に 就

長として隊を引っ張ったばかりでなく、 度のK2である。 その支部 第四次の天山雪蓮峰、 の海外遠征でも徳島は、 そのうちの第四次の雪蓮峰とクラウンは、 クラウン、マッキンリー、そして今 大活躍した。 先頭に立ってルートを 第一 次、 第二 隊

開拓し、 11 の登山には、 徳島は、 かんなく発揮され この二つの登山隊を成功させたことで、登山家とし 徳島の手固くて、それでいて思い切りの良さが た。 "徳島登山 術 の開眼といえた。

自ら頂を踏んで初登頂の栄冠を勝ち得ている。この二

登山家の一人として名を連ねることになっ そしてリーダーとして高い評価を得、 東海地区を代表する た

るが、 登攀意欲には、 らなかった。 徳島は、 リバリの若い連中にひけを取らぬ強靱な体力と旺盛な 常々自分で登らない登山隊には加わらないと広言憚 事実このことを二つ Œ 直驚 かされる。 の登山 隊で立 証したわけであ

てきたつもりである。 いう幽霊隊員とし 私 派遣してきた登山隊の全てに責任を負ってきたし、 員と同じ視点で悩み、 従って登山隊では、 様々な制約 て参加してきた。 からマカルー以後、 言い替えれば私の果たし得ない海外登山 苦しみ、そして喜びを分かちあ もっぱら総指揮とか総隊長などと しかし、 厳し 私は、 登山 から足を洗 これ までの 物心

> の夢を、 仲間に託しているのである。

徳島とは、

年

が二つ違う。私の方が上である。

私は、

徳島

0

やる海外登山をいつも、 11 る。 徳島は、 私の海外登山 私自身に置き替えてバックアッ 部門の分身だとも言ってもよ プして

従 って私は、 私の夢の実現を徳島に次々とぶつけ

ンをやろうと話し合っていた。こんな折に冬のエベレ ば意見を交わした。 クラウンから帰ってから徳島とは、 次のステップとして八千日 次の遠征のことでしば 峰のバリ レスト I 西 3

ながらクラウンを登攀していた徳島は、 壁を終えた田辺治が、 徳島の瞳が輝いた。 K2計画を持ち込んできた。 毎日K2の壮 大な夕日に染まる姿を眺 いつの日かK2と相 85

誕生である。 勿論徳島が隊長である。

みえることを心に誓っていたからである。

東海

支部

0

K

2

月二 こった。五月五 悲劇 K2の全ての準備を終え、全隊荷を運送会社 日の連休の前日であった。 は、 その直 H の子 後に起きた。 供 の日に 本隊出発の二 涸 およそ信じられ 沢のザイテングラー 调 間 it 渡し 前 出 0 来事 たの ドで あ 徳島 から が 起 Ŧi.

携帯電話の が雪崩に巻き込まれて死亡したというのである。 報 は たちまちにして私を混乱の坩 出先の 堝 の中 私 叩き 0

して、 私が支部 私の片腕として、分身として、 0 中で最も信 頼していた男の死である。 私の信頼に全て応えてく

悼

島

との

永久の別れである。

れ こうした時のことをいうのであろう。 として衆目の認める存在だけに尚更である。 ても徳島 てい の狼 た男の 狽 0 死は痛 振り は 10 情無い程私自身で自覚できた。 将来支部を間違いなく背負ってくれる男 痛恨の極みとは、 支部にとっ

死である。

支部総会、 支部の臨時役員会の開催、 情に時は過ぎて行く。この間の一ケ月は、 徳島が急逝してから一ケ月経 K2壮行会、 本隊の出発とあわただしく事がはこぶ。 K2隊員会議の招集、 つ。 徳島の死とは 極めて忙しかっ 通夜、 お構いなく無 葬儀、

通

夜も葬儀も、

悲しみに溢れる中で、

厳粛の内にも盛大に営

いた。 私が代表して弔辞を奉読した。 島の御霊に香華をたむけた。 まれた。 を読もうなどということは夢想だにしなかった。 Ш 一仲間も大勢馳せ参じた。 名物先生として親しまれていた人気の高さを知らされた。 徳島の勤務先である南山中学、 あちこちですすり泣く輪ができて 徳島の死を悼む列は延々と続いた。 まさか、 私が、 高校の女生徒全員が徳 あ の徳島の弔辞

を胸 出 棺の時がきた。 デュプラの 山仲間 5 が整列して、 0 かある日 を歌って見送った。 皆が徳島 0 万感の 徳 思

徳島は、 私にそして支部の仲間 に一言の言葉も 残さず黄泉路

、旅立っ 私は、 夜が更けると家人の寝静まったダイニングルームで、 た もっと話したい事が 杯あった。

> する。 陰膳ならぬ陰杯を据えてスコッチをやりながら二人で時々話を うしてお前死んだんだ、恥ずかしくないのか、 取り留めのないことばかりである。 話がとぎれると「ど この馬鹿」 つい

本音と愚痴が出てしまう。

ではとても得心できる出来事ではない。 んな時に死ななければならなかったの りであろう。 徳島 の死を人は、運命だとか寿命だとかいう。 しかし、 何故あの男が、 か。 何故あんな処で、 いつの日にか、 私には、 確かにそ そんな言葉 何故こ 0 通

死を冷静に受け止められる時がくるのであろうか 徳島和男 享年五十二歳。余りにも若過ぎる死であっ

九六九年 九六八年 日本山岳会入会(会員番号六七二九、 愛知学芸大学 同 山岳部) 卒業 (現愛知教育大学) 紹介者花井

俊彦・熊沢正夫

九七 年 ネパールヒマラヤ バ ウダーピーク (愛知学芸大

九八五年 東部カラ コ ル 4 ++ セ ル カンリ Í 峰 日 日 本ヒマラ

ヤ協会

九 九八八年 八八六年 第 一次天山雪 次天山 連峰 連 峰 東海支部 海

九九〇年 第四次天山 雪蓮峰 (東海支部

九九 カラコ ル 4 クラウ 峰 東海

九九六年 マッ キンリー 東海支部

九九七年 カラコル 4 K2峰 (東海支部

九九七年 五月 崩 五日 に巻き込まれ死亡 穂高岳涸沢ザイテングラー ド上部にて雪

(尾上 昇

小 西 政 継 氏 (一九三八~一九九六)

重要な山行だっ

たと私は思う。

うとしている。 11 西さんが マナスルで行方を絶ってから、 はや一 年が過ぎよ

すれば、「なぜ小西さんが? 十分の覚悟ができていたのかもしれないが、 ことと思う。 で倒れ してい なかの「山を続けていればいつか…」の言葉の重さを十分理解 んのような登山 厳しい登山を続けながらも、 たが、 るし、 経験の だから今度の 自分だけは違う」という幻想も抱いていなか 家は、 浅い 大島亮吉の 登山 出 者のように、 来事においても、 なぜマナスルのような山で?」 還暦近くまで生き延びた小 「涸沢の岩小屋での一 仲 私達後輩の立場と 間 11 や先輩 西さん ん自身は 夜 達 べった は山 西さ 0

> う疑問や未練は、 それでもなお残るのである。

Į; Ш 三大北壁の日本人初登攀や第二登にしのぎを削っ クライミングにおける平山裕示の活躍とともに、 後輩の遠藤 小西さんは、 は、 登山技術の水準を国際的な 九六七年、 九二五年の慶応大学のアルバータ初登頂、 郎 目標をいきなり冬のマッターホルン北壁に設定し、 日本の名だたるクライ 星野隆男とともに第三登に成功する。 レベルに引き上げた点で、 マー 達が、 夏のアルプス 日本の登 近年の ていたとき この登 フリー Ш 史

察隊隊 ている ンのレリ め、 トだけに終わったが、 敗に終わる。 ん達が登頂に成功したものの、 た。だから山岳会への入会も偵察隊出発直前の六九年八月となっ 偵察隊、七○年の本隊の登攀リーダーとして招かれることになっ ○年のエベレストは、 を買われ、 東京の 終生の友誼をかわす人たちと知り合った。 長の宮下さん、 (会員番号六七八五。 1 山学同志会の会員だった小 H フの制作者で㈱キャラバン社の創業者として知られ 日本山岳会会員としてのヒマラヤ登山 本山岳会のエベレ 副隊長 この二回の遠征を通じて小西さんは、 東南稜からは植村直巳さん、 0 紹介者槙有恒·佐藤久一朗 田辺さん、 本来の目標であっ スト南西壁登山隊に、 西さんは、 隊員 また、 の植村・ やがてこの た は 南 松浦輝夫さ 六九年 西壁は ウェスト さん エベレ 実績 七 偵 ス 失

る、 慶応〇Bの故佐藤久一郎さんにもかわいがられた。

遂げたのも、本人の強い意志と努力は勿論だが、佐藤さんを始 チェンジュンガ、八二年日山協隊のチョゴリ、八三年のエベレ はあったのではないだろうか。小西さんはエベレスト以降、 めとする山岳会の人々の、 十一本を切り落とし、 の活動の場を山学同志会に戻し、七六年ジャヌー、八〇年カン ストの隊長を務め、ことごとく登頂に導いている。 一年厳冬のグランドジョラス北壁で凍傷を負い、手足の指 その五年後ジャヌー北壁で奇跡の復活を 精神的なサポートに負うことも幾分 そ

とがないので、直接の比較はできないのだが、小西流とでも呼 ト遠征を通じて、宮下さん達日本山岳会のベテランから遠征の になっていたように思えるのである。 べるその遠征スタイルも、 ノウハウをきっちり学んでいたのだろう。私は山学同志会以外、 頭脳明晰、 年のチョゴリをのぞいて他の組織による遠征に参加したこ 学習能力の高い小西さんのこと、二回のエベレス やはり日本山 岳会のやり方がベース

かし、 力や気力の衰えを感じつつ、自分に残された時間は少ないと感 がら登頂できなか 実業の世界で活躍され山からしばらく離れることになった。 の後小西さんは、 カンチェンジュンガ、エベレストと頂上近くまで迫りな 2 た思いが強かったのだろうか、 八四年㈱クリエーター9000を起こし、 それとも体 L

> シャパンマを計画し、チベット情勢が緊迫したため中止になっ じ始めたのだろうか、九二年頃、 ており「おやおや小西さん本気で八〇〇〇に峰全部登るつもり 九六年マナスル、そして翌九七年はガッシャーブルムを予定し ル隊のダウラギリI峰を皮切りに、 たこともあったが、それからまもなく九四年のシルバータート に毎年行こうと思っている」と語っていたこともあったし、 11 なんだな」と私達は思っていた。 から、 仕事は二の次にして、かみさんと二人で八〇〇〇に峰 「俺もそろそろ定年の年に近 九五年シシャパンマも登頂、

葉が、 達に多大の影響を与えたことである。 みならず、その登山思想を著作を通じて発表し、若いクライ 小西さんの偉大さは、三十数年にわたる輝かしい登山活動 ぴったりする人であった。 不世出の登山家という言 0

#### 石 Ш 治 郎氏 (一九〇八~一九九六)

の再発作のため、享年八十八歳で亡くなりました。 石川治郎さんは一九九六年(平成八年)六月二日、 心筋梗塞

本会には、一九七五年(昭和五十年)、藤島敏男さん、

今西

かし 錦 に会歴が ri] さん である Ш 0 岳会の会員』という意味では 堀 紹 井 介で入会されています が 書くように 0 仰 追 悼文を せつかりました。 (会員 横 面 浜山 Ш 岳 番号七 会にお 岳会の方がはる ただ、 九 かける 七〇)。 私 故 が横 人の か

スの

山

に足

跡をしるし

てい

柱であ によるところも 山岳会に入会した学生 私に あることをおことわ は 遥 か遠い存在 頃、 石川さ でありまし りしておきま h は既に事実上 たので、 以下、 会の 伝聞 大黒

浜

0

ングなど、 募っては、 が 前 Ш として勤 わ 後の数年を除 かる。 JII てい さんと山 務した昭 台湾 六十歲 海外の また、 との 0 き、 玉 Ш から 和 15 单 会報 に PU 関 一季を通 も 年 昭 わ 雪山 中山 和六 -頃に始 7 1) いは、 歳 かけ 代に 年には U 歴表 キナバ ての ておられ まっ 石 川さ か を見ると、 it Ш 創 7 ル 7 行を重 立間 お h は n から ネ 会 \$ 現 ない 第 18 0 同校の 横 ね 1 同 てこられ 浜 一次大戦 横浜 年 国 ル 配 Ш 大に . 1 0 岳 Ш たこと 仲 V 0 岳 部 事 " 間 終 会に 員 務 戦 E + を 職

てい

る。

には 長をお に六十三 の寄付 浜 か Ш カ ıİı ガ 集めと労力奉 な 岳 イド 4 いり 会は 岳 П 部以 の例会を丹沢 運営をし イエクウチ ーブッ 外 九三〇 に 仕 て 足 カ 丹 跡 15 11 ウ 沢 ょ 山塊に集中し る。 昭 0 な 2 和 て丹 岳の登山を行 を発行した。 五年) 11 一九三九 厳 冬期 沢 いの尊仏 0 創立 0 て、 中 昭 また、 和十 な 部 11 以 H 九 屋 来、 高 Ŧi. を 四 建 さらに、 Ш Ŧi. Ŧi. 六年 系 年 貫 ペテ 昭 には L 和 7 月 年. 会 ガ 会

H

を計 年 画 に は、 グ ル 創立 ジア 干五. 共 和 周年 16 の岳人と交換登 記念として「日 Ш を行な 本グルジア友好 コ 1 力

てみて、 時は夢中 こうい サス登山 って力強 石川 で、 0 た横浜 の隊員として参加させ さんの まわりを見る余裕などな 推し 進 Ш 力がいかに大きかっ 80 岳会の記念行事 てきた 0 が てい 石 JII ただい さん か お ったが、 たかを身にしみて感じ い で て、 た あ 常にそ 2 後年 人であ た。 思い返し 私 0 る 中 は 心 J 14 1

力 あ

でもお 生まれ ユ T \$ 1 月 運営を行 Ĭi. モアの 年 一間編 た山 Ш П の大将だが、 0 集に 会報 t なっ 岳会が続い スも が四 携 てきた わ 抜群 0 〇〇号に 会の 良 た てきたの であ 識 石 運営には Ш 0 達 2 お さんは は、 した時 か げ お 会長をお と回 2 Ш 0 ょ 大将は 顧 h 九 かず、 な 六 L は Ŧi. す Ш 年. 衆議 3 5 に 0 登 月 横浜 れ に ょ ば 白 誰 に 6

月に る横 錦 念誌 とは るところで、 可 石川 会長 本会に入会された。 浜 昭 『丹水』 和四 さん Ш 0 岳 丹 + 0 会の奥野幸道 沢 Ш 年 H 登山 本山 岳古 から 岳会の 書の蒐 に の中でうか 4 交遊 この 氏と共に同 九八二年六月の第 図書 集と読書量、 から あっ お二人、 委員、 がえる。 たことが 行 そし Ш これを縁 造 崎安治氏、 て丹沢 丹水会 九 詣 七五 0 深さ 丹 に 0 年. 0 は定 2 主 近 + 74 五周 藤信 0 月 i 年 評 今西 行氏 IF. 0 b 年 0 n あ 記

には 号)。そして石川さんは翌八三年二 思い出話をしたのであっ なって下さっ たので、 でヤゲン沢を遡行し けなく亡くなってしまわれた。 から遠ざかり、 て下山する途中、 この 折井さんの下りの速いことに驚嘆している た その後元気になられ 時 の桧洞丸登 は た方であるが、 奇しくも折井さんはその年の夏、 まだ て行者か 筋梗塞の発作に見舞われて、 小" Ш ·田急沿 た。 に 参加、 その後、 た石川さんと二人で、 ら塔へとご一 最後の山 折井さんはまた、 線会員 折井 月 健一 山には登らなくて 行となった第 0 蛭 親睦 ヶ岳の 緒したば 氏とツツジ新 Ш 行 心臓発作であ (『丹水』 以来、 小 私の紹 折井 とい 屋 74 かりであ 上に滞 う名 つさん 丹水会 介者と Ш 道 第 を登 登 在 丹 0 0 n L

Ti. 11 展覧会には案内をい 6 て丹沢のブナと比較したけど、 知られてい 周年と、 作品が そうい るの 川さんの丹 てい は氷の 甦れ丹沢 る う 横浜山岳会六十 た 時 丹 ν''. 沢のブナに対する思い 山と荒島岳だけ 0 沢 石 派なブナがあると言われる全国 と題し ただい 0 川さんはまるで青年のようであっ フ + を水墨 て絵 て何 周年を記念して作られたものである。 丹沢に匹敵するブナの古 だよ 度か観に ハガキに 画 12 描 入れ という話をして下さ なってい 行 いり ておら が 0 たが、 強い ことは、 る の山を歩い そ 横 た。 丹水会十 の懐かし 木が見 浜 よく での 2

> 円 石

石川さんが海で活 Ш に は 関係なく、 躍 した話を紹介しま お叱りを受けそうであ るが、

後に、

Ш

男

ぱい 遥か南 で約 いうも 板とし 三六度 携わったのである。 掲載されてもいる。 残した仕 九七〇年十月七日の 開発などに生か んも福岡に転勤となっ までに進展したところで工 かかか 八から 川さん、 石川さんは気象庁に入った一九三九年か 四百坪の 0 て、 2 のであった。 0 ″洋上の土 "陸地" たと計 分の、 事 算盤 対空監視および通信装置設置 沖の鳥島 足場は三十 血をは "庁舎基礎" を拡張させて、 周囲十 算、 して欲し 地 これ その H 銀座 戦 U 本経 に が健在と聞 た。 争 11 \*。の珊瑚礁の北端、 仕: 年 軍 はご本人に直 いり のど真ん中 て 0 三十年 事とは、 事は中止 が満潮時 済新聞朝刊の文化欄 色濃くな 0 事 2 風浪に耐 施設を作る仕 気象観測所 この文章 0 後 いて、 士: 並み 北緯二〇度四五 地 0 0 に 2 た昭 えて 接聞い の造 昭 止 \$ 十は結 の軍 数十十八水面 0 そこは 和四十五 むなきに至 たら三年 不 和 事 成 兼灯台の設置を表看 人が三人乗ればい 石川 た話で 動 十六 事施設を作ろうと んであ に 経 産 坪 に 事 務 間 を、 当 理に 年に気 年七月、 治 に顔 あるが 分、 郎 を太平洋 り ì た "竜 任 是 n 明 宮城 とし を出 東経 # 石 Ŧi. か 円 3 JII 3 7 F:

水会や横浜山

岳会の牛

鍋会、

中トル会には奥様

同

伴でよく

参加

私もご一

緒する機会が

何

かあ

0

た

されたばかりでしたので、 事 亡くなる一 牛鍋会 に元気な姿をお見せにな 間 前の Ŧi. 月十 治郎さんが亡くなったという電話は、 九日、 も横 浜 n Ш 岳会の 丹 11 沢 H で 年

信じ 石川さんには という 信じたくない訃報でした。"心筋梗 "医学の常識。 例外であって欲 は、 頭の中では分かっ しかったのです。 塞 0 再 7 発作は 15 まし 致 た

月

さんの山に対するすべてがこめられていると思っています。 簡 の中 冥福をお祈り致します。 0 石川さんが尊仏小 脚力尽くるとき、 屋 山更によし」とい の山守り、 山岸猛男氏に宛てた書 う言葉に、 石川

堀井昌子

Ш

闊達で面倒見のよい人柄で、

誰からも頼りにされ

てい

#### 大 久 保 Ŧi. 郎 氏 (一九三三~一九九六)

く回 たそうだ。 夕刻にはもう息を引き取 の公園に散歩に行ったりしていたのに、 口ちゃ J 本人は死に至る病とは最後まで知らなかったという。 口ちゃ AC北海道支部の山行委員であった大久保五郎氏、 岳会に んの 小須田喜夫 また山 入会してきた時は、 Ш 九九六年十月二十九日、 歴は長い。 へ行くのだと、 (現評議員) ってしまった。 九五二年、 まだ学生 をリー つい 午後、 入院中急逝され 実は胆のうガンだった 前日も寒風の中を近く ダーとする五四年 服 創立されたばかりの 0 突然意識が薄れ、 初々しい 姿だ 愛称 た。

> だった。九〇年から亡くなるまで山行担当の支部委員を務め あった。 の腕もなかなかのものだった。 の知 バランス感覚に優れてい 行はもっぱらスキー 稜の登攀に成功するなど、若き日 の熱意も蘇ってきて、 会員番号は九三〇二番。 床縦走のメンバーであっ 家業の木材店を継いで第一 ・登山などの軽いものに止めていたようだ。 日本山岳会には一九八三年四月に入 たため、 紹介者は酒巻吟一、 息子さんが成人されてからは、 たし、 線の スキー 0 足跡 Ŧī. 登山 九年三月には芦別岳 には輝 は 大変上手、 から退いてからは、 大塚武の かし 11 第

Ш

間は に現れた姿は、 う。 なる年の一月には若い仲間に伍して、 すぐ追うことになろうとは、 術を受け、 なかったであろう。 た。六十歳を越えた身には、 北尾根~一八線川を、 古巣の札幌山岳会でも一九九○年から会長を引き受け、亡く その後二月頃から体調を崩し、 苦しげな息づかいが遥か下の方から聞こえていた」とい 経 過 ひどく消耗していた。 は良好と聞 キャンプ到着が大幅に遅れ、 幕営二泊で踏破したのが最後の山 1) 厳冬のこのルートは楽なものでは てい 誰一人思いもしなかっ たが、 黄ダンが出て北大病院で手 だが、 芦別岳の冬尾根~頂上~ 九月 まさか泉氏の後 0 泉亮会員 迎えに出 たの の通 た仲

翌年一九四六

0 0

Ш

岳部に入部

生まれ、

父君の勤務の関係で少年時代を京都で過ごした。

(昭和二十一)年四月には、

名門京都府立一中

先輩今西錦司氏等の提唱された「山城三十山

田さんは、

(昭和八)

年八月四日、

東京滝野

川 0

終戦

きっと大喜びで、 頂上の雪に彼の遺影を埋めてきたという。 好きだっ た日本酒で祝杯をあげていることだ 地下のゴロちゃんも

安田成男

#### 林 田 ΙĖ 幹氏 (一九三三~一九九六)

不帰の客になられて、 うに思い出され ら林田さんの悲報を知らされて愕然としたこと、 でかけ、 近いアイランド・ピークの山麓で、心臓発作のため六十三歳で II たまたま本会のマナスル登頂四十周年記念のトレッキングに 僧院の境内で茶毘に立ち合った日のことが、 石田喜八・松田雄一)が、昨年十月八日朝、 曲 正幹氏 サマよりカトマンズに戻っ (会員番号一○三七五番、一九八八年入会。 早くも一周忌を迎えようとしてい た日の翌朝、 エベレストに そしてタンボ 宮原巍さんか つい先日 紹介 ロのよ

> の登山に熱中。中学三年に進学する直前、 長として活躍され、 入られ、 片時も忘れられず、 高校〜大学時代には健康を損ねたので山岳部には入っていなかっ 立六中に編入、 しかし京都の北山で影響を受けた自然に親しむ心は、 以後富士銀行を退職されるまで、山岳部幹事 以後新宿高校から成蹊大学経済学部に学んだが、 後進の指導に当たられていた。 卒業後富士銀行に入ると、すぐに山 再び東京に戻り、都 岳部 Ш 山を

れることになった。 した日でもあり、これを機に本会への入会を思い立ち、 の日は、 に出かけ、五月五日に無事玉山に登頂されたが、奇しくもこ 一九八八年には、 本会の三国 富士銀行山岳部のOBやOG六名と台湾 友好登山隊がエベレストの交差縦走に成功

Ш

加して以降は、 に参加され、 Bの酒井明徳会員等と、本会自然保護委員会の主催する山 会員になってからは、 九八九年十月に戸隠での自然保護全国集会に参 毎年この行事に参加していた。 前記石田喜八会員や同じく富力 行 0

参加された他、 登山や国際交流青少年環境体験登山等にも委員として率先して も積極的に手伝って下さった。そして全国各地で行われ びかけにより、 れてからは、 一九九〇年に、 その趣旨に賛同されて入会され、 ボランティアとしてHAT―Jの事務局 田部井代表を大変尊敬されており、 田部井さんの提唱によりHAT― 入会後は Jが 田部井さん 設立 た清 私 0 仕 0

惜しまなか h 0 0 講演会が 本やテレホン あると、 力 時 間 K の許すかぎり会場に出 H A Jグッ ズの かけ、 販売に も協 田部 力を 井 3

力を得て完成を見たことは、 の中心として文字通り献身的に協 受けて実施した事業であった。 環境事業団地球環境基金から、 プロジ く要請 スト街 か 道の I 0 L クト あ 何と言っても特筆すべきことは、 清 2 は一九 たルクラ村の 掃 トレッ 九三年 キングを行っ から 焼却炉建設への協力であった。 記憶に新しい。 合計千二百万円に達する助 九 林田さんは、 力され、 五年にかけて三ヶ た際に、 多く 田部井 この 現地の 0 スタッ プロジ さんがエベ 年に亘 人々 フの エクト から強 この 成を り

あり、 境保全に協力するという意味が込められ として登山+アルファのアルファは、 ト役に甘 心の知れた六人の仲間とでかけたのが、 そしてこうしたH んじて参加 田さんは最年長の隊員ではあったが、 L A T J その名も での協力を通して知り合っ ープラスアル この てい アイランド 山 の清 ファ もっぱらサポー 掃を行い、 Ш ・ピークで 岳同 た 気 環

関係 ては知る人ぞ知るところであった。 したが 田さんは、 のことにも、 て山 その 謙 多くの業績を残しながら、 0 成果につい 虚な方で何時も笑顔で人の嫌がることを率 環境保全に ては、 関することをはじめ、 多くを語ろうとはしな これらのことに 社 公福 か 祉 先 0

> 3 0

15

は 成蹊 まし てや 大学新聞 林田 の名編集長であったことなど、亡くなられるま さんが、 文筆をよくする人であり、 大学時

で知っている人は少なか 2 た

V

11

ド・ピークを目 に出 て就任され とカラパ 十歳代にはエベレスト周辺の五○○○≧級のゴーキョ た。 代には虹芝寮の関係で谷川岳が、 ストの標高と同じであることから、 日午前八時であり、 は世界最高峰であると同時に、 山は日本の最高峰であると同時に、 登頂 林田 ハネ学園 そしてそのためにリンデン・エイジシューター 尾瀬の自然になっており、 そしてそれと同 そのため毎 かけてい さん は 無理 タールを登り、 0 0 ることになってい 福 たが、 ハイ な ので、 年 祉関係のこと等に参画されることになってい 指していた。 時に本会の自然保護委員会の マートは中学時代には京都 この数字を並べると八八四八になりエベ 富士山とエベレ 回はかならず登っておられ ひとまずこれで区切をつけ、 六十歳代には、六一九〇以のアイラン しかし七十歳代での七〇〇〇二級 それぞれ時季がくると毎年のよう たそうで ご自身の誕生が昭和 社会人になってから 大変にこだわっておられ 勤務先の銀 ストは別格であ の北 委員に た 行の名でもあ を名のり、五 山 エベ 後は富士聖 1 2 が、 も招かれ は 年八月四 V 大学時 ピーク スト た た。 V

協

それだけに志半ばでの挫折は残念なことであっ たと思われる。

しかし考えてみれば、

"エベレストの申し子"

を自認

情熱

松田雄

しい鎧以前の、もっと情念的な底流があったように感ずる。そういう御縁が生じたのかもしれない。学問などといういかめ民族学的なものを追い求めるもともとの指向性があったから、

とも、その原因だったかもしれない。

しかしその逆に、彼女に

は、本会事務室にお問い合わせください。 | 日末に、林田正幹遺稿・追悼集』(A5版 | 三五〇頁)が上 | の路―林田正幹遺稿・追悼集』(A5版 | 三五〇頁)が上 | に、林田正幹遺稿・追悼集編集委員会より、『富岳へ | に、林田正幹遺稿・追悼集編集委員会より、『富岳へ | に、本会事務室にお問い合わせください。

# 村 眞 知 子 氏 (一九四二~一九九五)

田

心に空洞を覚えるショックであった。た登山の事故で失ったことは、私たち昔からの関係者の間では、草創期の大切な「縁の下の力持ち」だった。その彼女をふとし田村眞知子さんは、日本ネパール協会同人にとっては、その

教学の堀一郎さんや民族学の石田英一郎さんと御縁のあったこは、物理や化学のような自然科学ではなく、民族学だった。宗てお育ちだったようである。しかし彼女が終生追い求めた分野の父君が東北大学教授の学者で、初めから学問的な空気を吸っ

追

悼

な声が何人かの火つけ役によってあげられた。 な声が何人かの火つけ役によってあげられた。 なのをの研究室がまた協会の事務室をも兼ねたのである。 東京オリンピックを機に、ネパールからも選手団が来日する。 東京オリンピックを機に、ネパールからも選手団が来日する。 で、この機を掴んで「日本ネパールな会の事務長役(といっても事務 彼女が、草創期のネパール協会の事務長役(といっても事務

り立ち替わりでやって下さった。そうして真知子さんがこの大事務長役は松沢憲夫さんが去ったあと、二、三人が入れ替わか。これらの方がたの会費を頼りに、この貧乏協会は何とか細ぼそと出発した。

彼女がこの時期の困苦に耐えられたのは、日高さん以来のこのさんが最も親愛感を抱いて信頼したのが日高会長である。また重要な時期に重要な役割を担ったのだった。そうして、眞知子真知子さんは、協会のボランティア的伝統を築く上で、最も

役を引きうけてくれる順番になったのである。

れていたからであ ボランテ 1 ア 0 気風とネパ 1 ル ~ の愛が、 協会の会員たちに 流

辞表を提出して「移動大学」という事業を同志的結束のもとに 東京工大をも襲ってきたことである。 かしひとつの災厄がふりかかってきた。 私は大学紛争に 大学紛争 の世 憤慨 相 が

始めざるを得なくなったのである。

ある。 会の仕 を得 ネパ 私は彼女を孤軍奮闘で苦しめる結果に追いやってしまっ 誰もこの窮状を助けにはきてくれなかった。こんな状況の中で、 そもそもが協会の事務だけの そのため、 ール なかった。 私は今でも、 事 のことなら、 は殆んど眞知子さん任せになってしまった。そうして、 協会の事務室は転々と宿借りのように変わらざる その上、その移動大学をめぐる激務のため、 本当に申しわけないと思ってい 共感をもってつきあう同じ会員仲間 ためのおつきあいではなかった。 たので でも 協

何カ月もネパールへ出かけても、 あった。 な の世界に対 るどころか、 私たち二人には、 彼女が西北ネパ だから彼女が西北ネパール民族文化調査隊に加わって イオニア・ する憧 むしろ共 n 民族学的愛好があっただけではなく、 ないし共感のようなも ール ワークを求める共感すらあ 、感して励ますぐらい 0 トルボ地方のポンモ村に 自分の事務的都合 だっ 0 が あっ た 2 12 たかもしれ やめ 黒ボン教 もっと 未知 させ

> るものではなかっ たの である。

門家にも殆んど無視されてきたも 同 様な意味で、 ネパ ールにつ ったものがあ 15 のに、 ての民 人族学的 河川 沿 11 研 究で、

数民族マジ族・ボテ族とい

私は、

ネパールの亜熱帯圏が、この国

の健全な将来のため

賢

る

地の脅威だったマラリアが殆ど撲滅されたため、 明に開発されるべきだと思っている。 これら山間渓流 うとして、「河沿いプロジェクト」というものを構想し で、 え始めた。 その無視され こで私に河沿い少数民族の起用という考えが登場したのである。 進した。それも私たち仲間の協力で順調に軌道に乗りつつある。 めてきた。 むこの国のため、 そこで自然力ボ その第一歩として、 独特の簡易な まず大きな山間渓流の渡河で人びとが困っ それがうまくいったので、 てきた少数民族の実態を把握すべきでは 域 開発 1 の生態に最も詳し 自然力ボ トの推進を核に更に包括的な開発を進め 私は学者のくせに技術協 への見直しが必要だからであ ート」という適正技術 41 なぜなら、 亜熱帯低地の問 のは 彼らの 力にまで手を染 このような低 はずである。 0 П てい 開 題をも考 過 な た。こ 11 発を るの か ょ 悩

0

まず第一の受益者にした

それを基盤に彼ら

0

能

力を活用

す

か

n

時

に

彼ら

を開

を探るなどということが、

単なる風がわりな好事家趣味に尽き

従来専

沿い少数民族の研究を始めたいと望んでいた時点だった。こう沿い少数民族の研究を始めたいと望んでいた時点だった。この貴重なパイ女は、きちょうめんな調査報告書を下さった。この貴重なパイオニア・ワークをもとに、河沿い民族についてのガッチリとした研究書が発刊される日を、私は心待ちにしていた。その矢先の遭難の知らせである。ああ。

たかったという後悔がある。目しなかったような地味な生活者への注目と共感がある。この目しなかったような地味な生活者への注目と共感がある。このであたりの感覚には、私も深い共感があり、もっと深く語りあいるとう に、彼女にはタクラマカン砂この一例にも滲みでているように、彼女にはタクラマカン砂

た生活者への愛の致すところであったろう。田村善次郎さんや二人のお子さんと共に二度にわたって住みこの調査を行なって、報告書もだしている。これも彼女の徹底しい。これの山地民族ライ族の住むアイセルカルカ村に、夫君のスト教大学教授)と協力して企てたのもそれであろう。また東スト教大学教授)と協力して企てたのもそれであろう。また東スト教大学教授)と協力して企てたのもそれであろう。また東スト教大学教授)と協力して企ったろう。

時おり私の意見と食いちがっても。彼女はその役割を果たしてしい発言が、協会にとって必要だと考えたからである。たとえとして協力してほしいと頼んだ。彼女の率直な、しばしば手厳事務局長役を終えた後も、私は彼女に、今度は理事のひとり

くれた。

ル」と共に、連綿と今日に至っている。 完学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパー ので学会」というものを始めようと提案し、「そいつは名案だ」 といって私が取りあげたのである。以来今までこのネパール研 ので学会」というものを始めようと提案し、「そいつは名案だ」 といって私が取りあげたのである。すなわち彼女が「ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール ので学会は、毎年一回開かれ、その年報「シンポジウム・ネパール のできる。以来今までこのネパール研 のできる。は、日高会長と

叢書」みたいなもの。である。私が監修者の名義人になっているが、実質上「眞知子実上の協会の事業として「ネパール叢書」数巻を刊行したこと

彼女のもうひとつの大きな貢献は、古今書院に働きかけ、

から私も識っていたが、彼は彼女の良心的な努力をとても喜んが、真知子さんの手で訳されて入っている。ビスタさんを早く類学者ドル・バハドゥール・ビスタ博士(Dor Bahadur類学者ドル・バハドゥール・ビスタ博士(Dor Bahadur類の上、この叢書の中には、ネパール最初の本格的な文化人

ス第二号に寄稿したものを、多少添削した一文である。しかしを中心に作られた旧知の方がたによる「眞知子基金」のニュー以上は、彼女の死を限りなく悲しまれた御母堂木村正子さん

で私に語

ったっ

で、以下すこし書き加えるに留めた。同一人をめぐってまた書きおろすのも気のぬけた追悼になるの

年で、前年西北ネパールの学術調査で同行された田村善次郎さ大学第二文学部で東洋史専攻。御結婚は一九六八(昭和四十三)あるが、小学校から高校までは仙台で過ごした。大学は早稲田眞知子さんは一九四二(昭和十七)年九月九日東京生まれで

死亡されたもの。享年五十三歳であった。郡栄村(秋山郷)から苗場山登山の途中、凍結した雪面で滑落郡や村(秋山郷)から苗場山登山の途中、凍結した雪面で滑落

んが夫君である。

も入会されたのである(一九九四年入会、会員番号一一六六五。きはしていた。晩年ますます山好きになり、遂に日本山岳会に本格的な登山訓練は受けていなかったが、学生時代から山歩

紹介者武田満子·

佐々保雄

うしてあくまでも一生活者としての姿勢を失わなかった。をめぐり、彼女の貢献は特に山の民をめぐっての交流と研究にをめぐり、彼女の貢献は特に山の民をめぐっての交流と研究に面を広く深く味わおうというのなら、特にネパール・ヒマラヤ面を広く深く味わおうというのなら、特にネパール・ヒマラヤーのででは、近のようは、

### (川喜田二郎)

そして一九九六年六月三日、日本を出発、十四日からハッサ

## 山崎彰人氏(一九六七~一九九六)

## ウルタルⅡ峰に逝った山崎彰人君

ラム単位だからな」と笑ったものである。 崎君を知る者は皆、「おまえがグラム単位と云ったら本当にグ 席上、「グラム単位で装備を検討しました」と語 としての承認を得た。 稜、上部での岩壁攻略のための綿密な計画をたて、 な山である。二人はルート下部での雪崩と落石、 のクライマーの「生」を語ることができると思うからである。 の最も濃縮された時を持った筈であり、 敢えてこの初登頂の様子をここに書き記しておきたい。終始冷 で亡くなった。 見事に耐え抜き、 とともにウルタルⅡ峰の初登頂を果たし、すさまじい悪天候を まるでアイガー北壁を登っているようだ」と云わしめた困 Ш ウルタルⅡ峰 沈着にしかも果敢に行動したこの登攀において、彼は人生 临彰人君 (当時二十八歳)は、 私は彼の二十八年間のその短すぎた生涯を想い、 (七三八八紀) は、あの長谷川恒男さんをして 怪我ひとつなく元気にABCに帰還し、 山崎君は、岐阜大学山岳部での壮行会の 松岡清 百万言にもまして一人 司君 (同 中間部での岩 ていた。 東 海支部隊

の記した「行動記録」を以下に要約する。(四五○○㍍)入り。二十六日から二十九日にかけてABC(三三○○㍍)を設営した。二日間BCで休養をとった後、七(四五○○㍍)を設営した。二日間BCで休養をとった後、七

三日午後二時~午後八時(ABC~五二○○㍍、晴):ひたっている。ここに下山時のために食料と燃料をデポ。とに達した。ここに下山時のために食料と燃料をデポ。「月光の中を出発。雪の下はブルーアイスで、予想よりも遥かに難しい。ルートファインディングに苦労し、予定より下の五に難しい。ルートファインディングに苦労し、予定より下の五○○㍍地点で幕営。

み、なんとか氷河の上に出て、安全な場所を見付けてキャンプ。面にわたってオーバーハングしている。クレバスの中に入り込:雪による停滞後、懸垂氷河に挑む。崩壊が激しく、しかも全五日午後八時~六日午後十時(五五○○≦~五八○○≦、晴)

河だけで三十二時間を要した難関であった。

「世紀年前四時~午後四時(五八○○は~六○○○は、晴):

「世紀年前四時~午後四時(五八○○は~六○○○は、晴):

南稜との合流点を越した所から氷と岩の岩稜が始まる。きつい八日午前四時~午後八時(六○○○㍍~六三○○㍍、晴):

部まで進んだ。 の残置ハーケンがあり、ヘッドウォールの一つ前の岩峰の基にこれを降っているフィックスロープを発見。ルート上には多での退却を考え始めた。ところが、幸か不幸か、足元のルンゼアップ、ダウンの繰り返しで、常にスタッカート、ついにここ

九日午前四時~午後八時(六三○○≒~六八○○≒、晴): 九日午前四時~午後八時(六三○○≒~六八○○≒、晴): 九日午前四時~午後八時(六三○○≒~六八○○≒、晴):

まり言葉を交わすこともなく、ただ握手。風が強く、寒気が厳「おい、ここ頂上じゃん」。午前六時四十五分だった。お互いありと思っていた所で休憩し、数歩歩き出したところで山崎が、りと思っていた所で休憩し、数歩歩き出したところで山崎が、十一日午前五時~午後八時(六八○○☆~七三八八片、頂上十一日午前五時~午後八時(六八○○☆~七三八八片、頂上

ンプサイトに至った。(この報は十三日に東海支部に伝えられ、翌日の新聞で報道さ(この報は十三日に東海支部に伝えられ、翌日の新聞で報道さ下り始めた。少し下ってから、リエゾンに登頂成功を伝えたしかった。下山の厳しさが予想されたので、写真を撮ってすぐ

のことを考えて何も食べない。 十三日 (六〇〇〇)は、風雪):強い風雪のため動けない。後

十四日(六〇〇〇㍍、風雪):前日と同じ。

生きてるか」と声を掛け合った。喉を湿らせた。相手のガタガタという震えが止まると、「おい、味を湿らせた。相手のガタガタという震えが止まると、「おい、トが破れ、雪が入り、寝袋を濡らす。ライターで雪を融かして十五日(六○○▷、風雪):前日と同じ。強風のためテン

る。ずっと寝ていたので立つことを忘れ、何度も転びながら懸あるので、最後のビスケットを各自三枚、お湯と共に腹に入れいやっと天気が回復。五二○○㍍地点には食料と燃料を置いて十七日午前十時~午後八時(六○○△㍍~五五○○㍍、晴)

て上がってきてくれたポーターとコックに起こされた。松岡は

二十日(ABC、

晴):午後九時頃、

BCからご馳走を作

十六日 (六〇〇〇)(、風雪):前日と同

垂氷河帯を下降。氷河の崩壊が激しく、難しいルートファイン 上体力が続かず、氷河末端から少し下ったところでキャンプ。 十八日午前四時~午後八時(五五〇〇ぷ~五二〇〇ぷ、晴) ・待望のデポ地に着いたが、セラックの崩壊で食料、燃料とも ・待望のデポ地に着いたが、セラックの崩壊で食料、燃料とも ・でではないかと情報集めを始めた。)

言っています。良かったですね」。)

十九日午前四時~午後一時(五二○○24~ABC、晴):午後には確実にABCにおりられると考え、BCに居るポーターにABCまで食料を上げるように指示。ここ六日間ろくに食べていないが二人とも元気で、ABCに帰着。BCから届けられたオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずつ飲み干し、お互いの無事生たオレンジジュースを各自一はずっていまでは、一次によっています。といるようによっています。といったでする」。)

ませたがすぐ吐いた。 といってテントの中で寝ていた。胃腸薬が欲しいというので飲 たので、紅茶とフルーツを食べた。 普通に食べたが、 子 悪いといって嘔吐を繰り返した。 山崎は食べた後すぐ吐いた。山崎はその後も 腹痛を訴えだし、 しかし、午後も調子が悪い 昼頃少し具合が 夕方からは相当激しい 良くなっ

七五。

ぐ吐いた。夜に入っても痛みは治まらず、 その後も痛みは続き、 ないので、BCのリエゾンにヘリコプターによる搬出 きとった。 十一日(ABC、 鎮痛剤を欲しがるので与えたがそれもす 晴):朝になっても一 午後十一時に息をひ 向に痛み が を依頼 和 らが

痛みを訴えた。一晩中苦しそうであった。

隣にいた僕は、 二十一日の夜、 の死が実感できないのだ。さらにその時、 その夜のことを松岡君は後に次のように書い 山崎さんはABCのシュラーフの中で死んだ。 頭の中が空っぽになった。どうしても山崎さん 自分が何をすれば良 ている。 七月

レディースフィンガーに山崎君の慰霊碑を埋めに登り、 そして翌年の一九九七年六月、 翌朝 『早く起きろ』などと怒鳴ったりもしてみた」。 松岡君はウルタルⅡ峰を望む 滑落、

のかも解らなかった。

朝になれば起きるのじゃないかと思

体となって発見された。 て絶頂に立った二人の若者の歓喜を知る者は居なくなった。 II 初登頂の事実だけが残り、 いまやそこにはウル その厳しく美しい山稜を攀 タルⅡ峰とウル

> 闘志を賛え、永遠の命が与えられるよう祈ることだけである。 私達にできることは、ザイルに結ばれた君達二人の類い稀なる (山崎彰人氏は一九九五年日本山岳会入会。 紹介者徳島和男・尾上昇。) 会員番号一二〇

会報「山」

訃報·追悼文一覧

九九六年七月号(六一

四号

大澤伊三郎先輩を偲ぶ (岩間弘雄

九九六年九月号(六一六号

田雄一) マナスル登山隊などで活躍の千谷壮之助会員逝去 (松

九九六年十一月号(六一八号

春田俊郎先生を偲んで (岸

九九六年十二月号(六一九号

林田正幹さん(石田喜八)

九九七年一月号(六二〇号

小西政継さんを想う 田 邊

壽

九九七年四月号(六二三号

名誉会員サリーンさん (梶

正彦

#### 支 部 だ ょ IJ

#### 北 海 道 支 部

マラ山 五月 愛で、ビールを飲む者、 チングルマ、白花コマクサ、 シュペ、ムリ岳、 山脈ラッコ岳、 ¥. 途中ガスだったが、雲の上に出て大雪の山々やニセイカウ 成 ・平山、 八年 会報 度 『ヌプリ』二七号発行。 参加十六名。 参加二十名。 四月二十日 ムカ岳などの展望を楽しむ。 昼寝する者と、ゆっくり過ごす。 七月二十日~二十一日 昨冬の大雪の残る雪渓を踏んで登 アオノツガザクラなど高山植物を 支部総会・懇親会、 五月十八日~十九日 タカネシオガマ、 出席四十五名。 北大雪ヒ H 高

ダケカンバなど赤や黄に色づいた秋の山を楽しむ。支部長はス 思いがけず京都から河村皆子会員が来ていた。 が、黄色く枯れ 分骨のため、 海に沈むのを、 十月五日~六日 狩場 翌朝皆と別れて羊蹄山へ向かった。 冷 山 たお花畑とハイ 0 たい潮風に吹かれながら眺める。 頂 狩場山、 1: 一はや がて厚い雲に覆われて展望はない 参加十三名。 マツの緑、 ウラジロナナカマド、 真っ赤な太陽が 今西錦 昨日とは変わ 宿に戻ると 司先生 2日本 0

> の内二名は別 ケッチをしながら皆の下山を待った。 行動になってしまった。 自然観察会、 西岡 公園。 ようやく色づ 連絡の不手際で

山と湿原の遷移の様子を観察する。

征、 これは非常に好評だった。 日に行 報告会は従来別の日だったが、札幌以外の会員のため晩餐会当 十二月十四 ヌン峰スキー滑降。 その後しばらくの H 海外登山報告会·支部晚餐会、 報告はロー 間飲みながら自 ルワリンのタンナ・リ遠 由に歓談をする。 出 席五十四名。

が、 の間にスケッチをする会員もいた。 る。頂上ではゆっくりできず、 参加十三名。 二月二十二日~二十三日 数日来の降雪のためラッセルに苦しみながら強風の中を登 東京から参加した原会員を交え、よい天気だった 雪洞に泊まり白井岳へスキー登山、 風蔭まで下って昼食を取る。そ

はピパイロ岳 支部創立三十 Ŧi. 月十七日 一周年に備え新しい支部委員を補強する。 から東に分かれる出尾根の上の千八百以近くの ~十八日 日高山 脈伏美岳 参加十五 名。 伏美岳

平成九年度

四月五日

支部総会·懇親会、

加四

がさしはじめ、 雨の中、 六月七日 藪に濡れ 小樽· 和会員の指導のもと真っ青な日本海を見下ろ ながら岩の取り付きへとたどる。 赤岩で岩登り講習会、 参加 九 やがて薄日 生. 僧 0 霧

晴天に恵まれ日高山脈の雄大な眺めを満喫した。

Ш

参加

Ŧi.

いた秋

里

急病のため、予定を変更して藻岩山に登っ しながら岩を登る。六月八日の自然観察会は、 た。 参加四 解説の支部 長

岩登りとともに、 と称して歓談しているが、その店で展覧会を開くことにした。 五点前後。『つる』では毎月第三水曜日に『三水会 『つる』で展覧会。 (以下予定) 七月十六日~八月二十日 今年から始めた行事である 出品予定は絵画・版画・写真・彫金など十 会員がよく集まる (山酔会)』

七月十二日~十三日 大雪山 出赤岳

十月四日~五日 雄阿寒岳

二月中旬 月十三日 ここ数年冬期山行は雪中露営とスキ 海外登山報告会·支部晚餐会。 登山のため、

気楽に参加できるニセコ・スキーを復活させた。

支部創立三十周年をひかえ、 三月十四日~十五日 これらが今後定着し発展することを望んでいる。 大雪山黒岳で雪中露営とスキー登 いくつかの新しい試みを実施 山

手 支 部

野田四

郎

岩

支部 を目指してい 独 自の行 事に 11 て要望が多くなって来て、 月一 П 0 実

74 月七日 平成八年度委員会 (七名) ・総会 (十三名) を盛

> 岡市上田公民館で開催。 決算、 予算、 行事予定等を決定。

後懇親会。

が

見える一等三角点の山である。 て下山した。十二名・幹事菊池・近藤・小 が遅れ車道の除雪が終わっていないで、 秋田支部主管)六名。 六月二十二日~二十三日 五月二十五日~二十六日 春の例会山行・ひめかゆうほっと 四月二十九日 (胆沢町)と焼石岳。 日帰り山 三界山に登る予定であっ 行·東根山 東北ブロック集会参加 十三名 • 幹事中谷 横岳経由、 (紫波町 野寺。 たが、雪融け · 高橋 盛岡からよく 焼石岳に回 . 太平 Ш

館

頂上を回り、 雪がまだ融けず、大深岳の水場の湿原で花を楽しみ、 事中谷・立花。 松川温泉から源太岳の斜面 七月十四日 源太岳の斜面の雪渓を降って解散した。 日帰り山行・大深岳、 のお花畑で花見の予定であ 源太岳 (裏岩手 大深岳の ったが、 Ш

千点の 散した。 PL すべり経由で北岳に登り北岳山荘に入る。三日目はガスの 日は正午に広河原に集合、 H 八月二十四日~二十七日 七月十四日 は奈良田温泉の銭湯で汗を流し、バ 間 十三名 ノ岳、 西農鳥岳、 「JAC岩手支部通 IJ í ダー 白根御池小屋に泊まる。二日目 農鳥岳を通って大門沢小屋に泊 菊池・サブ音石 夏の例会山 信 第七号発行。 スで身延駅に出 松田 白根三山 縦走。 は草 初

こ界、申告。平義量で日幸によって、資家でおどばえり負え九月二十八日~二十九日 秋の例会山行 かむら旅館(岩泉

美味。翌日は堺の神岳に登り、下山ではしばらくぶりの藪こぎ物の後、かむら旅館へ。松茸が不作年であったが山海の珍味が田さんが参加した。岩泉町安家の氷渡洞に集合し、鍾乳洞を見町)と堺ノ神岳。評議員穴田幸江さんと、青森支部で会友の須々町

をした。十五名、

幹事山崎 •

諏

事音石 けがひっそりと残っている古き露天風呂を楽しんだ。八名、 訪れる人も少ない一等三角点の山である。 ついてはいる。帰りには南本内沢から桧之沢に入って、 月十三日 · 諏訪 H 帰 b 山 行 黒森 (補点名和 道は途切れながらも 黒森 . 湯 H 浴槽だ 町 0

泉を楽しんで解散。七名、幹事中谷・松田。風の秋山を満喫し、例によって松川温泉高橋会員の峡雲荘の温十一月三日 日帰り山行 三ツ石山(松川温泉口)。快晴無

夫さんを講師に、 会を開いた。 成九年二月十 立花会員の経営する安比の七時 十名、 Ш 日~十一 幹事中谷 スキー に馴染みの H 菊池 スキー 講習会 少ない会員のため 一雨山荘に集まり、 前 森 山 佐藤英 七時 0 講習 雨

スの下降を楽しんだ。 初日は 日~二日 スキ 場 スキー IJ 周辺。 4 ツアー 1 日目は茶臼からもみやま山荘コー 菊池・五名。 八幡平茶臼岳。 中谷 天候に恵 充 ま

## 秋田支部

四弾としては台湾の玉山と雪山に登り、 は、 山·天上倉山、 を選び、 らぬ事業内容となっ を迎えた年でもあり、その祝山行として七月二十八日に岡 てしまった以外は、さらに充実した組織内容とな また、 当 支部山行については、 忘れ去られていた県内の秘峰・東山 一支部における平成八年度の活動状況は、 併せて沼沢山と太平山、更に、十月十九日~二十日に 語呂合わせの山として、 毎年実施している小さな海外友好登山 たが、 岡田支部長と進藤副支部 組織拡大に繋る会員増 八月八日には八八八八八のヤブ それぞれ会員多数の に登って共に祝福した。 例年 長が 2 が とあまり変わ ゼ 共に古希 ・その第 ロとな 田 Ш

親会も併せて行った。 名の出席者のもとに開催。事業、決算、予算案などを審議、懇名の出席者のもとに開催。事業、決算、予算案などを審議、懇

加を得て共に楽しい山行となった。

三日 会の年次晩餐会には七名が出席し、 ど、これまで以上に幅広く交流する機会に恵まれた。 岳人と鳥 東北 秋田 地区集会は、当支部が主管となり、六月二十二日~二十 海 市の太平山に六十八名が集った。また、 Ш に登り、 韓国 Ш 岳会会員とも懇親会を開 それぞれ親交を深めあった。 秋には さらに本 催するな

いる。 なり、 支部報 支部 秋田山 関連の全てを登載し、 岳 は、 本年も三回発行、 支部 の足跡作りに力を入れて 通算第三十五号と

ことは例年の通りである。 支部会員が中心となって地域 その他、 関連 団体 の各種会議や事業などに参加 Ш 岳界発展のために貢献している 佐々木民秀 それ それ

山 形 支 部

10 を組んでいる。 の会員が参加できることを心掛けて、 支部 参加するのは、 の総員は、 十五名~十六名前後であるが、なるべく多く 六十名を越える。この中で、常時支部 山行をはじめ行 事 0 0 行事 計 间

内の 予算決算と八年度の事業計画を話し合った。 マラヤ・トレッキング』の準備会を兼ね四月 平成八年度は、 教育会館」で二十八名の出席を得て開かれた。 支部総会ではじまる。 この年の目玉事業 二十四 H 事業報告、 Ш 形市 こと

た楽しい 名が参加し、まずまずの好天も幸いし ナ・ダウラギリ・パ 支部事業は、 海外トレッ 四月二十五日から五月六日までの キングとなった。 ノラマトレッキング』から始まった。 て、 中高年の意気を示し 『アンナプル

同 じ五月十五日 には、 摩耶山周辺で清掃登山を行った。 清掃

> 登山 断然綺麗 0 参加があっ は、 支部行事に毎年組み入れられてはいるが、最近の になったというのが実感である。 この行事 には、 山

は

に泊まり、 わった。これには、 六月八日~九日 翌日は には、 朝日山麓を歩き、 十二名の参加があった。 『長井葉山』 手打ちそばを心ゆくまで味 に登っ た。 小 K 町 0 施

名が登りきっ 山には、 六月二十二 雨模様にもかかわらず、 た 日から一 秋田支部に感謝申し上げる。 泊で行われた、 秋田の名山 東北ブロ 『太平山』を十五 0 集会と登

"

ク

五名が堪能した。 雄国沼』まで足をのばし、水辺とニッコウキ 七月十四日は、 日帰りで隣り福島県 0 -猫 スゲの 魔 岳』に登 群落を十 n

から乳 かけながら花が咲き乱れており、 の年は残雪が多く沢を埋め尽くしていたが、雪の消えるのを追っ 岳』へ出かけた。天候も幸いして楽しい登山と湿原を満喫した。 石転び沢を中心とした『飯豊山を満喫しよう』が行われ 九月には、 七月二十日~二十一日には、九名の参加で飯豊山荘に一泊し、 月に入り、二十三日から二泊で、七名が 頭 山山 これも二泊で十四日から十六日まで『秋田駒ヶ岳 までの縦走を行っ た。 参加者を満足させてくれた。 秘湯を巡りながらの 『尾瀬と会津駒ヶ た。こ

十日から十三日までは、 北アルプスの 。唐松岳と白馬

七名の参加者の心を和ませるものがあった。

池』に五名が向 プス景観を満喫した かった。 連 H 好天に恵まれ、 東北の山と違った

これには二名が参加して交流を深めた。 十月十八日~十九日の本部集会委員会が摩耶山で行われたが、

に遭遇して途中下山した。 山清吉新道の散策山行と、 れ、二十三名が参加した。ここ二~三年恒例となっている鳥海 -月二十六日~二十七日は、『鳥海山よくばり山 頂上登頂が試みられたが、新雪と風 行 が 行 わ

三名の参加で行われた。本格的な冬の訪れる前の山の一日を過 十一月十日、 初冬の一日、 神室連峰『小又山』 の登山が、 +

持つ杉とのめぐり逢いは、 に七名が渡り、 十一月の末、二十三日から二十七日まで、 雨の 『宮之浦岳』を登った。 参加者の心をとらえた。 千年を越える命を まだ暖かい屋久島

気炎を上げた。 行われた。この時 十名が参加し会員と交流した。 十二月十四日~十五日には、 「山形支部晩餐会」が日本海の波打ち際に建つホテル八乙女で 十二月に入り、七日に行われた東京の『年次晩餐会』 は 会員の約半数三十三名が出席し、大いに に は

「ヒマラヤ・トレッキング」の説明会が山形市内の「教育会館 が変わり、 月十 九 日には、 九年度事業として組み入れ

で十六名の出席を得て開かれた。

日帰りで六名が雪と親 二月八日は、 山形市内から望見される『笹谷峠と蛤山』 しんだ。

会』に二十名が集まり、モンスターの中を華麗に舞っ 二月十五日~十六日には、支部 三月には、最後の行事として、『安達太良スキー』 恒例の蔵王山 が三 た 月

と違った雪の感触を味わった。 日~二日に行われた。福島県沼 尻高原に十一名が集まり、

度出席をしている。

そのほか、本部主

催の支部長会議、

各種委員会には、その都

これからという矢先のことで惜しまれる。会員番号は一二一一 九である。ご冥福を祈る。 故者は、 後とも進めて行かなければならないのが現状と踏まえてい 若い層に期待しなければならないが、 く、山への意欲が感じられる。 る。しかし、行事に参加するのは、これら二重加入の会員に多 の二重加入が多く、これらとの調整が一つの課題とはなってい この年は、三名の入会があり、一名の物故会員があった。 6 ずれにしても、 佐藤俊一氏で鳥海山を始め山の写真で名を知られたが、 当支部( の構 会員も暫時多くなりつ 成員ほとんどが、 年配者なりの山行も、 他 0 つあり、 Ш 岳会と

樹氷原を滑

る

0

3

が山に反映され

7

興味深かっ

たりで、

お

互い

に有意義

7

#### 宮 城 支 部

ケ に

城支部は、 八名)で構成され、 柴崎部 長をはじめとする総数六十二 年間活動を続けてい 名 內 女

だっ

た。

悲しい報せがあった。 があった反面 昨年度 (平成 樋渡順 八年度) 改め には、 会員が思いもよらず逝去され て御冥福をお祈りしたい。 新入会員三名の新たな仲 ると 門間入り う

選定等は全て、 月々の行事には予め、受持ちの担当者が決められており、 ところで当支部では、 担当者に一任されてい 概 ね月 の年 間行事をこなしている。

Ш

0

行と兼ねた。

他会員としては新たな山との出会いに期待したり、 が近付くにつれ、 たところだが、 近在の、 最近の 山行先をみてみると、 多くの会員が参加できる人っ気のない良い山、 実は探すとなると、 担当者は山の詮索選定作業に頭をひねる一方、 山 0 高低は これが意外に あ まり 難 問 担当者個人 しい。 わ ず、 とい 行事 Ì. 2 に

11 てみよう。 Ш その担当会員の選んだ山を中 行とな 各行事には、 季節を表わす名称がつけら 心に、 昨年度の行事を振 れ て

DU 月は移動 総会で鹿蝗山 あい にくの雨天につき、 蔵王 Ш 麓

> 岳 0 七月、 峰、 大倉 夏山山行は梅雨時に晴 Щ 六月は自然 深護 n 間のみえた秋 Ш 行 稜 0 H 連 なる夫婦 高松岳

ある吉野先輩の別荘に場を移して開

催。

Ŧi.

月の春

Ш

Ш

行は泉

行 山で鍋を囲んだ。 参加。さらに 八月に入ると仙台市内でビールパーティ 十二支の山ともなる牛形山。 同 月 の芋煮会山 月は晩秋山 行は、 十月は台湾、 行となるが事 紅 葉と初雪 10  $\pm$ 九月 情により芋 0 交っ Ш Ш に た後 行 は 秋 白 九 山 Ш

た。 そして三月、 橋一会員へ。 師走十二月は仙台市内で支部晩餐会、 の三方倉山と、 山形蔵王スキー 月の 蔵王の不忘山 厳冬期山行と二月の雪山 山行で昨年の年間行事を締めくくっ で、 共に全員 慣例 Ш 0 行は、 赤 セ それぞれ 7 1 は 板

集会等、 第九号が発行された 田 支部 以上 È 0 県外 催 他 0 集会へ 六月のウェ 東北ブロ 0 出 " 席。 ク集会、 ストン祭、 月には支部会報、 九月、 同じく太平 小谷温泉での Ш 「で行わ 宫 城 Ш れ 岳 た秋

席者数十 最 も多く、 昨 昭 和三十三年といえば、 年度の年間行事出席者数は、 174 山行では芋煮山行の十六名が多か 名。 ビー ル パー ティ 筆者などはまだ中学生でしか 1 延べ百六十六 と支部 晚 発会が 2 各 な か 0 出

を築きあげ、今日まで支えてこられた多くの諸先輩の努力に対 迎えることになる。 この年に創立された当宮城支部も、 この年月は決して短いものではなく、 来年には四十周年を 支部

る。 んだ山のいくつかの行事が、 今年度も、 四月の総会を皮切りに、 既に計画され、 担当者が精根を込めて選 実行に移されてい

し、改めて敬服の思いを新たにしたい。

#### 福 島 支 部

郡山温泉」にて開催した定時総会に提出し承認された、 支部の事業実施状況については、去る五月二十四日、 郡 平成 Ill 市

八年度事業報告書に基づき簡単に報告します。 事業の骨子は前年度実績の踏襲を繰り返しており、特に付け

一、役員会(平成八年六月十日)

加えることはない。

実施した行事を暦日順に列記する。

福島市内はりまや (会員大谷司氏経営) において開催、 総会

提出議案を審議した。 出席者十名。

二、定時総会 (平成八年六月十五日

新年度事業計画·予算、 福島市内杉妻会館において開催し、 出席者二十一名。 支部創立五十周年記念事業計画等につ 前年度事業報告 · 決算、

しり

て審議した。

十三日 秋田市. 東北ブロック集会「太平山の集い」(八年六月二十二日 仁別「森林学習会館」にて開かれ、二日目 は太平山

の記念登山が催された。支部からの参加者七名。

夏山小集会(八年七月七日

微湯温泉から姥滝沢遡行を実施した。 参加者七名。

Ŧį, 会津地区担当にて開催した。一日目・東松 秋山小集会(八年十月十九日~二十日 (たばねまつ)峠

翌日は西会津町鳥屋山へ登る。参加者十四名。

散策、三島町糸屋旅館

(会員志田正美氏経営)

に宿泊し懇親会。

六、第十二回そばを食う会(八年十月二十七日) 山都町宮古・唐橋克己氏宅にて開催した。参加者十一名。

t 新年会(九年二月八日

八、安達太良スキーツアー 福島市内はりまやにて開催した。 (九年二月二十三日

参加者二十名。

通称振り子沢~五葉松平~ 実施コース・奥岳からゴンドラを利用して山頂へ、 奥岳への滑降コースを楽しんだ。参 Ш 頂から

加者十一名。

西吾妻スキーツアー(九年三月二十三日

場への滑降を楽しんだ。 **鎭~西吾妻小舎~西吾妻山頂~二十日平を経てグランデコスキー** 実施コース・グランデコスキー場からリフトを利用して西大 参加者十二名。

5

#### 十、その他

を開催した (三回出席人員延べ十九名)。 五十周年記念事業に関わる実行委員会・記念誌編集委員会等

十一、本部諸会議への出席

した。計七名。

席

懇親会となる。

翌日の親睦登山は焼峰

Ш

(一〇八五公)

である。

寒

い朝で小

#### 所記

部の方々にお けてほしいものです。 総会や季節ごとに計画されている山行行事への すが、ここ数年参加人員の大きな増減はありませんでした。 それぞれの行事に参加した人員は、 度ぐらい とは言っても日本山岳会の会員であるからには、 世 願 はお付き合い下さるように、 の中ですから、 毎回毎度はとても困難でも、 お暇な方は皆無にひとしいと思 総数で百十数人になりま この誌面を借りて支 参加を是非心掛 せめて、 支部の 治 年 H 11

越

後

支

部

婦 任百六十二名、 等承認され、 人の家で開 成 八年度、 催した。 形通りの総会が終る。 平成七年度会計、 越後支部総会は四月二十日新発田 会員 一百六十八 事業報告、 、名中、 平成 出席者十七名、 市滝谷、 八年度事業計 農村 委

> 会津の山を中心にした蘊蓄のあるスライド映写があり、 は万場一致で承認された。 きたが平成八年度は支部創立五十周年にあたり記念事業の提案 代茲島支部 後支部は新潟県山岳協会と事業は一緒である 長が組織 を作っ 総会終了後、 た 立て前は、 支部会員小荒井実氏の しない 支部を通 (県山協 ì は初

め断念して引返し流れ解散となった。だったが、今冬は異状な積雪で、残雪の状態が悪く、荒天のたは村頭までガスに被われて何も見えない。山に入ったのは十名雨が降っていた。会場から焼峰山は一望できるはずだが、今朝

七月二十五日 第三十九回高頭祭。

り浄財を募り修復を行った。 傷していた。 田 建設して以来高頭祭を続けてきた。 一久吉先生の寿像碑名文版が、 して初登拝された弥彦山山頂に、 日本山岳会創立発起人の一人である高頭仁兵衛翁が、 そこで越後支部 創立 心なき者の悪戯により著しく損 Ŧi. 昭和二十 昭和二十五年、 周年に当 -四年当 n 時 翁の寿像を 支部会員 の会長武

会場は大湯温泉村上屋旅館、県内外含め七十三名の会員が集っ九月二十八日~二十九日、越後駒記念山行。の神宮による御祓いを受け盛大な式典を行う。参加者五十一名。第三十九回高頭祭は本部から村木会長をお招きし、弥彦神社

七江 絶好 越後支部章の そろそろ紅葉のはじまりかけた越路の山を堪能した。 形 0 五十 谷 通 Ш りの開会式を終え懇親会に入る。翌二十九日は快晴、 四名、 H 裏面に五十周年記念と年号を刻印したループタイ 和であ ゆっくり った。 組 健 脚組 は銀の道 は越後駒ヶ岳 (1111022) (110011) 十六名、 記念品は

t

0

会場、 高い力作六十三点の展示で大好評であった。 十一月十九 東北電 力新潟支店グリ 日~二十三日 ĺ 創立 プラザ。 五十 ·周年記念山 越後 0 Ш 岳写真 を中心に格 展 調

0

仲間との山行に任せているのが現状である。

I 章受賞祝賀会を行い、 重広恒夫氏による記念講演はスライドを交え「マカルー東稜登 広恒夫常任 ホテル。 について」であった。 十一月二十三日 越後支部創立 評 職員。 三十年 越後支部年次晚餐会。 支部名誉会員望月力氏の乾杯の音頭で祝 五十周年記念式典を行う。 続いて支部委員、 以 上の在籍者八十七名の表彰を行い、 平田大六氏の藍綬褒 会場、 本部来賓、 新 温 市 重 映

質パーティー

となる。

出席者九十二名、

会友六名。

五

十嵐

篤

雄

信 支 部

支部員数百六十七名 成 八年創立五 (長野県外在住者を含む)を数える。 十周年を迎えた当支部は、 本年四月現在、

昨

五回にすぎず、 の立山における夏山 地域的、 H S 泊 支部行事 女性交流日帰り登山、 八日 年齡的 0 は例年通 第 後は会員相互の個人的山行、 五十 構 り、 成上、 山行と順調にこなしてきている。 回ウェ 四月二十日の通常総会に始 支部主催の山 スキー ストン 例会 祭、 七月十九 行は、 泊 および他の山 夏山 春 Ш 日~二十 まり、 Ш 泊 行 支部会員 泊 秋山 岳 0 H

時、 という事を思うと少々複雑な思いをしている。 減少気味なのが気掛かりで、 ただ、この五 徳本峠越え組が三十人以上、 回の山行でも会員数の増加のわりに参加者が年 ウェストン祭のこの何年かを見る 総参加者数六十 余名を数える k

平均 Ш それなりの山の登り方があるのではないか。 0 満足度の高 行は、 登山 増加傾向 一年齢五十八歳という構成だったが、 界の全体的流れとして、 九名の参加 い登山ができたと思っている。 は顕著であり、 で、 最高が六十五歳、 支部だけの問題ではなく、 若者の山 年 離れと、 最年少 齢のわりには高度で この度の支部夏山 が四 中 高 干四四 それなら 年登 Ш

冬山また海外の山でも結構、 Ш 行を行ってきた人達なので、 幸いに、 それなりの登山 過信 支部会員の大多数は、 は危 ができるのではないだろうか。 険だが、 原点に帰って人それぞれの山を大 客観 その 若い時なんらか 的 知識と技術の貯えを上手に に自己を分析することによ 0 里 形で高度な Ш でも、

いに登る事を呼びかけて行きたいと思う。

春山山行が、 としての山 については 日~二十九日、 t: PU H 日~八 女性会員交流山行、 りに平成八年後半の支部関係行事として、七月十 H 華民国山 行 「山」No六二二にて塚原総務報告参照)。 悪天候のため中 支部五十 然保護全国集会(小谷温泉) 岳協会隊を、 月二十二日 三月一日~二日スキー例会、 - 周年祝賀会および記 止になったのが残念であった。 槍 から予定してい 奥穂高岳へ案内協力。 参加。 念山行。 た、 唐松岳 九月二十八 十月十三 等が支部 (この事 日~十 での 九月

多くの支部会員諸氏の協力による、 演集一パトニー お、 および会員名簿の刊行を行うことができた。 支部 Ŧi. ヴェイルからの風」 十周年 行事 0 環として、 の出 五十周年記念特集号の支部 版と、三十六名という ウェ ストン祭記念講 (金子丞二)

## 山梨支部

しておい 中村純二 新春懇親会から 点から話を進 新入会員 ての 副会長御夫妻と、 の紹 牧潤 8 始 支部の年明けは、 介が続いた。 ま 会員を迎えた。 自 た。 然にやさし 世界の山 中 余名 二月二日の古名屋ホテル 11 ・村副会長からは、 古屋学而支部長 ヤシ油を原料とし 々をユニー の支部員 なに加え、 クな 自然保護 0 描 た洗剤、 年 间 本 一で紹介 部 頭 の抱 か で 0 6 0

に鈴木勝彦会員手作りのフルーツケーキが供された。り口で笑いを誘い、プロ級のハーモニカ独奏を披露。デザー

四月二十日、

支部協賛行事の、

深田久弥先生をしの

3:

 $\mathbb{H}$ 

セッケンのサンプル

から

配られた。

牧会員

は、

例により軽妙な語

身地、 茅ヶ岳 韮崎市 へ記念登山を行 石川県加賀市から七十名もの参加があ の深田公園の文学碑前 0 た で開 かれた。 り 本年は 約百 Ŧi. 先 0 が 出

た。
の年にあたり、古屋支部長が再任。長年事務局を担当した遠の年にあたり、古屋支部長が再任。長年事務局を担当した遠

定期総会を四月二十六日、

甲府市

民会館

に

て開

催

役員

改

選

数の支部員を送り込んでい 近く山梨県に対して提言すべく準備中である。 護に役立っていこうと改めて誓い合ったところである。 任命を受けている自然監視員、 岳人としてできること」 内藤順造• 0 Ш これに先だって行われた一昨年から続い 岳環境と登山の将来像」 深沢健三·中 「行政施策への提言」としてまとめ 島雄三 る。 のシンポジウムも五 これらを通じて少しでも自 山岳レインジャーなどに の三会員が中心となり、 ている また、 П 南アルプス 目となっ Ш 元

会が、 有井琢麿会員も姿を見せた。 Ŧi. 月二十四~二十五 金山平で行われた。 日は、 今年も常連 五十名をこえる参加者で大盛会。 第三十五 0 П 他 木暮理 地 太郎 元須 翁碑 1 町 出 前

月 イワ 少なくなった。 頂した。木暮元会長が亡くなり既に五十三年、 宴会に花をそえた。 人の会員にお願いした。 万晴れ。 ナ・アユなどは、 H のため堀口丈夫・今井洋地 山本稔会員 今年の記念閑話を、 翌日は、 の先導のもと、 遠火で焼きあげ骨酒として、 前日のどしゃぶり 両会員が釣ってきたヤ 黒富士に三 川崎精雄、 十五. 会長を知る方も 0 神谷恭平 雨 Ш 名が記 にか 菜 わり五 0 料 お二 念登 理 0

7

x

行を予定している。 員も九十名を越えると、 勝沼町ぶどうの丘を会場として開くことを計画している。 イフを楽しみたいと願っている。 本年は、 さきのシンポジウム 山梨支部発足五十 本部・近隣支部とも連 また記念集会を、 日頃の交流に欠ける 0 討 周年記念の年。 論·経 携 十一月十五日 過をまとめ、 より濃密なクラブラ 記念事 面がでる。 子業の一 一十六日、 資料集の発 この機 桂 支部 環と

#### 東 海 支 部

0

事業計

画である。

の主管、 された。 一度の 成 九年度の支部総会が、 登山 伊吹山 事 主なものを上げてみると、 業報告並 教室、 播隆祭の主催など大きな行事が続い 笠ヶ岳の夏山山行、 びに決算報告が上 五月十日開 春、 程され、 秋には全国支部 催された。 秋の中高年を対象とし 万場一致で承認 先ず、 た 懇談会 平成

> 初登頂の栄冠を勝ち得 もう一つのウルタルⅡ峰は、 山記録と環境調査結果が、 環太平洋一 出 海外 版事業では、 登 周環境調査登山 山 は 昨年度 支部報を四回発行、 たが、 伞 本にまとめられてこの秋発刊される。 が終了し、 -成七年) 下山後のA 山崎、 松岡の両名によって、 東海 から 十七ヶ国、 BCで山 山 の継続事 岳の七号を発 三十三山 崎が急な病 業であ 見事 0 0 谷

命を陥すとい

う

悲し

41

結

末になっ

た

岩登攀五十周年を記念する集い、 た。 の伊吹山 でもいえる自然保護全国 回の登山教室の開催、 続いて、 平成九年度の主な事業計画は、 播隆祭、 平成九年度の事業計 第六回東海岳人写真展の開催など盛り沢 支部創始者の一人である石岡先生の屏 集会の主管、 画 日本山 次の通りである。 予算案が提出され承認され 今年 岳会の で 自然保護大会と 目を迎える秋 春、 Ш 風

年恒例 れ その 発行を予定してい 四十名程 他 の行事も行われる。 毎月 0 参加 行 わ が見込まれてい n る。 る月 例 今年の夏山は、 Ш 行 る。 新年会、 また、 V. Ш スキ 支部 0 大日岳が選 報 は 会など例 年

年 稜 インドヒマラヤ・ 開 今年度の支部の海外登山は、 から西壁へ 放され た地域 抜ける新 チ で未踏 + ルン ル 1 である。 峰 1 登山 二つ計 0 もう 隊 挑戦である。 であ 画されて 0 る は、 チ K2である t る。 ル つ は、 近 西

めにも是非 13 まった。 で支部の副支部長であっ 誠に残念なことに、 が飛び込み、 登山 面を見 昨 隊は、 年 K2を陥してもらいたかっ せ 0 のウル けら 幸なことに、 功の報告ができることを喜びた れる思 タルⅡの K 2隊出 た徳島和男を穂高で雪崩で失くし 11 発直 この がし 山崎に続く た。 原 前 0 稿の たが、 五月五 なおさら 夕切 事故で、 その思いは 日 直 Ш に、 前に 崎 山登りの厳し K 登 徳島 20 しかし、 頂 通じ、 成 てし 隊長 功の 0 た

(小川 繁

た。

見事新ル

1

1

からの

登頂を果たし、

やっと支部内に笑顔が戻

0

### 岐阜支部

会山 となって、支部活動 行など高木碕男支部長をチーフに、 次の通りであ 年間 平成八年度末の岐阜支部会員は、 事業計 Ш 品講 画や事業を具体的に企画し、 n演会、 である。 を運営している。 新年会、 委員会を年八回ほど開催し、 そして、 百五十五名 委員十六名がサブリ 平成八年度の主な事業は、 会報 懇親山 岐阜 (会員八十九名 行 Ш 支部活 現地小 岳 ĺ ダー の発 集

0 和なて Ш 月 小 屋 所属していた科学委員会と合同で、有志六十六名が集い、 で雪崩に 成七年十 あ 1 月に、 遭難 死 エベレスト山 L た石井恵美子会員を偲んで、 系ゴー + 峰近く

> 福を祈った。 は、彼女のおはこ「坊がづる讃歌」を全員で合唱し、故人の冥は、彼女のおはこ「坊がづる讃歌」を全員で合唱し、故人の冥久瀬村小津権現山(一一五七㍍)へ追悼登山を行った。頂上で

ある。 り承認した。 強化した、こうして、平成八年度事業計画など六議案を原 あった。そして、文化会、 記念式典が開催された。 めに、 平成八年度支部総会を会員五十五人が出席 、自然のままの山を残し、 六月 支部組織 高木支部長から、 支部 総会 の強化と活動の充実を図ると共に、 奥飛騨 今年は、 昨年 よい山登りを伝えたい」と、 会報の係などを新しく設けて組織を . 神岡町の夕焼けの宿 は 百周年に向けてその初年 日本山 岳会創立 して開催 宋五郎 九十 私達の後輩 した。 挨拶が 周 案通 年 で

できた。 上からは、 から、六十八人の大所帯で、 九六は)へ、神岡町役場職 六月 春季懇親山行 北 ノ俣岳、 薬師 今年の年号と同じ 員 岳など四 残雪の春山を堪能して登った。 中 野正 方の景色を眺望することが さんの案内で、 標高の の寺 地 飛越新 Ш 道

1. 岐阜支部主催の歓迎レ 11 ただ ち寄っ 七月 41 へ登山された。 てい た。 中華民国 そして、 ただき、 Ш 岳協会訪日友好登山隊四 その後、 セプシ 友好の 岐阜支部会員と乗鞍岳 3 深い小倉大垣市長を表敬訪問 蔡禮樂会長ら五名が岐阜支部 ンに関係者五 十名が来日 親善登 が参加 山 0

国 の友好と親善を深めた。

モンゴルへ 八月 (岐阜・山梨支部合同)は、 オトゴンテンゲル峰 遠征し、オトゴンテンゲル峰(四〇三一〇)へ登山 海外遠征登山 二日から十一日にかけて、 高木碕男隊長以下

を水面 八一〇年)へ、四十六名が登山した。 いっぱいに映し静まりかえっていた。 秋季懇親 沿行 裏木曽県立自然公園内の奥三界山 頂上近くの鏡池は、 紅葉

れ

部長が会長に就任されたこともあって、大幅な役員改選が行

わ

Ш 長者の里から、 センターにおい を招いて、「第一・第三の極地」をテーマに、 の方々も交え、百余名が聴講し盛会であった。翌日、 山岳講演会と山行 四点)へ登山 神崎講師と共に会員二十六名が参加して、 て講演会を開催した。 した。 講師に常任評議員神崎忠男会員 会場へは、会員の他一般 岐阜メモリアル 春日村の 貝月

い懇親した。 岐阜長良川 会館において、会員二十六名が参加し新年

今年度の主な事業を終た。 間機関誌「岐阜山岳 第三十六号・第三十七号を発刊し、

京 支 部

京都支部は、

昭和六十一年三月に第十二代会長の故今西錦

ri

八十 先生のお声掛 十八名を数え、今や越後支部に並ぶ大所帯の支部に成長した。 平成九年度は、長年当支部を統括されてこられた斎藤惇生支 数名であった会員数は、平成九年五月十七日現在で二 かりで呱呱の声を挙げたものであるが、 発足当 百五

満場一致で承認を得た。酒井新支部長から「豊かな山登りをし、 は、 月第一水曜日に委員会を開催している。 予算案の審議等がなされた後、支部長交代の案件が提出され、 の事業報告・会計報告・会計監査報告および今年度の事業計画 顧問として、適宜アドバイスをお願いしている。第十二回総会 現在支部役員は、酒井敏明支部長を筆頭に二十九名で、毎 四月十六日夕刻、京大会館で行われた。 因みに斎藤前支部長 例年通 り、 前年度

0 進氏に「創造される自然、そして人間・南極点スキー なお引き続き記念講演会が開催され、本年度は映像作家の中村 旅を終えて…」というテーマで話をして頂い さて支部の最近の活動状況について簡単に紹介しよう。

する」とのメッセージがあり、

新委員の紹介で閉会となった。

人でも多くの方々が山行や支部の事業に参加されるよう期待

山波が日本海まで続いている。それらの多くは人跡稀なヤブ山 こと欠かない。 ない。しかし京都市は三方が山 を成すのはやはり山 しかも北方には所謂 行 であるが、 に囲まれ、 京都府下には千足 京都北山 そのフィールドには の重畳とし を越す山 福

井支部の創立は平成三年十一月。

所謂 過去に ある。 れは来年 すなわち「城江国境」 作成中の 割して実施し、 都支部十周年記念事業の一環として、 楽しさが存在する。 度な読図 なおこのシリーズに続くものとして、山城・近江の国界 城丹国境 「山城三十山」登山に取り組んだ事があるが、 四月まで十二回に分けて実施され 力が要求される。 7 低山といっても正確に踏破するには慎重な判断 周年記念誌』 今年四月に終了した。この山 百世の踏破を、 「京都支部らしい山登りを」をモット 踏破に本年四月から取り組んでいる。こ に他の記事と共に掲載される予定で そこに京都支部ならではの、 毎月一回ずつ計十一回に分 山城・丹波の国界である 行の詳細 その後 は、 Ш 力と高 1 行 京

る 月見山行 キー山行 例会」を始め、 (岳沢) 八ヶ岳/宮田高原)、初夏の月と火星を見る会 その他、 などバラエティに富む企画が実施または予定されて (太鼓山~ (頭巾山)、 山行としては、 早春の花観賞山 依遅ケ尾山)、ワカン山行 岐阜支部との合同 年四回春夏秋冬に実施する 行 (藤原岳)、 山 行、 雪上 (皆子山)、 (霊仙 スケッチ 技術 河 州講習会 四季の 山 Ш ス お 行

福 井 支 部

間もなく六周年を迎えよ

うとしている。

でき、 情報を聞くことが出来る。 ゆりクラブ、福井岳連などの人達が何らかの形で集まり、 会員は気兼なく使用できる。 老夫婦の居室は、 現在、 コピー機で複写も可能。 私(宮本) 車庫の二 の自宅を事務局と例会場として運営。 階部分で玄関は専用となっ また、 支部 の他福 私の山の 井 蔵書も自由 Ш 岳会、 ており、 井くろ に関覧 山

参加を得て支部総会及び懇親会を開催。 四月十七日、 さて平成八年度の事業につき、 支部例会場で午後六時から支部会員三十三名 概要を記 なごやかな一 刻を過ご

した。

五月二十五日~二十六日、

をみて親子共々、 新聞社 · F. B. 主管のもと開催され、 八月十一日~十二日、九十六年度夏休み親子白山登 事業となった。 白山の大自然の中での触れあいとなり、 Cと共催し、支部会員共々百五 毎年開催してほしい旨参加者から依頼され 福井支部から十名の会員が参 北陸三県合同現地集会が富山 十七名の参加 加し Щ 福井

Щ で開催され支部から二名が参加 十月五日 他 1~六日 毎 年 回例会山行を行なっ (東海支部主管)、 全国 11 支部懇談会が る

な お北 海道 0 一一 毎年七月十五日前後に山行を計画し実行

てい ためのスキー 意味が大きい。 行してい ムラウシを縦走。 るが、 ただいた。 九十六年度は六名が参加 教室を開催し、 福井支部としては、冬の行事として山スキーの 黒岳で岐阜支部の藤井会員と逢いそのあと同 これは日本山岳会員というつながりとして 三月からの山スキーに備えている。 層雲峡 から大雪 Щ 1

#### 関 西 支 部

う存分戴いて、書庫

0

宮本数男

理し

た委員の努力によって、

まだ余力がある状態となりました。

支部委員 浅野支部 屋落成の後、 こととなり、 移転に伴い、 を ましたが、 従来、 図書室として使用させて戴いておりました。 評議 関西支部の蔵書は、 によって保管庫に収納することができ、 結論として、新今西組社屋に書庫を設置して下さる 八月九日、 保管の心配は無くなりました。七月十六日、 図書室を失うことになり、種々対策を考慮してき 員の自宅に保管してもらっていた蔵書を合わせて、 既に移動搬入していただいた蔵書と、 元会長今西寿雄氏の今西組 本年、 肩の荷が下り 今西組 0 新社 室

片側六面 キリし 書庫 容した蔵書は、 7 は 社 0 率 屋 一的で、 " 0 カー 八階にあ が並 関西支部創設当時からの種々の 収容能力の大きいもの り、 んでおり、 向かい 中段がガラス戸 合わせに床から天井 です。 の非常にスッ 書籍、 までの 部報

ました。

庫。 亡くなられた二木氏と梶本氏の提供による、二木文庫と梶本文 書庫の前に積み上げられた段ボール箱を見たとき、これ きるかと心配したのですが、 類を始めとして、今西氏個人の蔵書の一 それに関西支部報のバックナンバー類等々数千冊。 案外に収容能力が大きいのと、 部としての今西文庫 最初、 が入り

のお心遣いで用意して戴いた冷蔵庫のビールを、 書庫の横は、社員の方の休憩室兼食堂となっていて、 開設を祝いました。 われ 総務部長 われも思

この方々に捧げると共に、蔵書につい 会の皆様にご報告する次第です。 力によって実現したもので、支部として言い尽くせない て現今西社長のご理解と中村総務部長を始めとする皆様のご努 これらは元会長今西氏のご意向、 今西夫人のお力添え、 てご心配戴いた日本山 阿部 和 感謝 行 そし E を

カメラ紀行「私のブータン」が自費出版された。 本会永年会員 ・片山英一氏が、 十五年にわたっ て撮り続け

た

緑豊 な人柄など、 行くツアーに参加したの の訪問、 ヒマラヤ山脈を見たいとの夢が募り、 かな山麓と眼前 ブータン街道七百三十\*。を西から東へ旅を重 ブータンの貴重な風景と民族資料が千二百点の写 に広がる雄大な景色、 は 九 七九年春、 ブータン 美しい寺院・穏やか 以来、 へ蝶 九四 年 の採集に ねた。 まで七

П

真として納 められ てい

H 山氏がライフ・ 十五名の多数の方々が ホテルで出版記念祝賀会が 席 H 席 平成 ni 者 のこ 九年 同 ワー から、 理解あるご援助である。 七月六 クとされている 記念品としてブナの お祝いに駆け付け、 H 開 かれ、 神 戸 メリ 片山 「ブナを植える会」 ケンパ 氏所属の各会から百 苗 盛大な祝賀会とな 木が 1 クオリエ 贈られ ン への、 た。 結 7 片 iv

陰 支 部

山

亚. 成

九

年

- 度の第四十八回総会を四月十二日

 $\pm$ 

に米子国

際

から、 承認に **<山陰支部** ホテルにおいて盛大に開 引き続 次 年 0 後 創立五 記 0 念事 き、 九九九年に 今年 業の方針 + 周年記念の 度の事 催 を定め Ш 業計 陰支部創立五十周年を迎えること Ì 八年度の事業報告と会計 活動 な事業計 画について協議を行 を開 始し 画 た た 報告 結 0

記念登山 0 実施

Ш 海外登山 の選定、 支部会員全員で 研 究委員会を中 ポ 海 隊 外 を 登 か 心に五〇〇〇景級以上 Ш ね をヒマラヤ たト " 方 キング 面 で 展開 J 1 0 することとし、 登山を目標に ス 0 調 查研 究

記念誌と図書の発行

を行い具体化する

員会を中心に、 の眺 土地理院発行の 県の県境の山約七十座を選び、 せ、 -周年記· め、 Ш 陰 念事 歴史、 0 Ш 業で出版 鳥取県に隣接する島根県 研 地図に表示され 植物、 究委員 動物、 した 自 Ш 伝 然 Ш 、保護 てい 承、 陰 0 ない 0 委員 百 登山道での 想 Ш 広 未知の滝を調 13 に引 島 県 Ш 未 景 き 頂 知 色 岡 0 (県境) 0 山 滝 ほ 県·兵 調查委 查 义 か、 か

K 5 庫

わ

年ごとに支部

の記録をまとめ

た五十

周

年記

念誌

0

発

行と合

の展示会を開催するため、 記念展 支部会員 0 および 開 友の会員 作品 を中 心 準 にした山 備を進

0

かる。

0

写真

発行を予定して行動

を開

始

祝賀会の 開 催

用 創立五十周年記念祝賀会を行うこととし、 等の 記念登山 準 備に 終了後、 着手 する。 登山 基地となるカトマ 、ンズに 渡航手 続 お きお い て、 ょ U

を中心 取り Ш 落防止対策で行 麓 組みとし 0 のように平成九年度は、 に活 斉清 動を開始することとな て、 掃 わ 自然保護委員会を中心に、 れている。「一 0 参加 など行 支部創立 2 木一石運 てい た 寸. が、 Ŧi. 3 + 動 そ 周 大山 0 年 他 記 0 念事 Ш 自 協 伙 頂 力、 保 0 業 草地 護 0 大 準 Ш 崩 0

プス北部 ま た恒 例行 にそびえる白峰 事とな ってい る友の会との 三山の主峰 北 県外 岳と、 0 中 Ш 里 歩きを、 介 山 0 名 南

ル

ら札幌空港 PU くい込む笛 大菩薩 日間 の日程で実施したり、 吹川 0 0 直行 の西沢渓谷探訪を、 舞台となっ た深田 秋の紅葉狩り山行や、 一百名山の大菩薩嶺、 大型バスをチャー 近くなった北 米子空港か 海道 奥秋父に ターして 0

への個人山行など、積極的に支部活動を行っている。ら札幌空港への直行便の開設により、近くなった北海道の山々

支部活動を進めて行くうえでの今後の課題としては、全国への個人山行など、積極的に支部活動を行っている。

支

いる。 (中井俊一)の進む中にあって、会員の増加と若返りが大きな問題となっての進む中にあって、会員の増加と若返りが大きな問題となって部最小の会員数でまとまり良い反面、他支部同様会員の高齢化

集い、

所期の目的を果たすことが出来た。

を交わすもの

であ

る

当日は県内各地から百名を超える岳

福 岡 支 部

こ。

そ松本支部長を選任し、事務局を北九州市から福岡市に変更しく松本支部長を選任し、事務局を北九州市から福岡市に変更しく松本支部長の任期満了に伴い新し

度表明とそれに沿った八年度事業計画を次のように決定した。八月支部役員会を開催し、支部長から支部運営についての態

二、岳人の集いの開催

九州

四支部親睦

登山

と自

然保護集会を併せ

ての開

三、支部報の発行

こは、所属する山岳会等で、また会員同志で登山を行っており従来取り組んできた月例登山については、会員個々人につい

て実施しないことにした。

機関を越えて山に志す者が一堂に会し、旧交を温め、登山情報この集いは平成元年から取り組んでいるもので、所属する団体・テルで福岡県山岳連盟と共催して「岳人の集い」を開催した。

事業内容については、まず、

+

月

九日

 $\pm$ 

久留米市

0

木

北 四支部交流会)」を平成九年三月二十九日から三十日 地環境と植生 九州市小倉と平 九 州四支部親睦登山と自然保護集会につい (講演) 尾台で行った。 および平尾台の自然を考える集い ては、 九 に かけて 州 (九州 0 Ш

+ 御 に参考となるも かりやすい 分類し、それぞれ特徴ある植物についてスライドを交えたわ 講演をいただい 演会は、 お話は大変好評であり、 九州大学農学部助教授井上晋氏から前記 0 0 た あ 九州の海岸線から山頂までの植生環境を 2 た 今後の自然保護活動 テーマで に大い

激し、 るが、 は、 カルスト台地の平尾 近年の経 H カル また大草原 は風はや スト台地 済発展に伴ない p 強い 0 中に 特有の地形と自 台 to へ自然観測ハイキングを行った。 残る四輪駆動 のの晴天の 少しずつその姿が変貌してきて 中、 「然の造形の素晴らしさに」 車 玉 0 轍 の天然記念物である に 自 然保 平尾台 0 木 13

成九年六月現在の支部会員数は百六十六人である。

三日間を通して支部運営等々の意見交換ができ有意義なもので 年度末の多忙な時期であったため一支部の参加のみであっ 難さを痛感した一日であった。 九州四支部との交流については、 たが、

認された。 九年度の事業については五月十一日総会を行い次のように承 あった。

九州登山史編纂委員会の設 九州登山史年表」の改訂と戦後の の編纂委員会を設置するもの。 置 平成四 九州 登 年. 山史作成 八月発行 のた した

支部創立四十周年記念事業 月 8とカイラストレッキング ②中国雲南地域トレッキング ①ナムナニ峰登山隊199 期日、 期 平成十年四月から六 H 平成九年十一

を交えての報告をいただき、 トピーク登山」、 松本康司氏から 意見等出され楽しい講演会となった。 総会の 記念講演は、 「四姑娘山の高山植物」、中山健氏から「テン 太田五雄氏から「屋久島」 参加者から今後の山 「私の楽しい登山報告」として、 についてスライド 行のため の質

> 熊 本 支 部

に対し、改めて感謝申し上げたい。 位のご支援により、今日まで大過なく順調にやってこれたこと 記念登山を実施する予定で、目下その準備に追われている。 を迎える。これを記念して、十月には記念誌の 熊本支部は昭和三十一年十一月に設立され、 発刊、 今年で満四十年 祝賀会、

遠征など各分野での活躍も目立つ。 が多い割には個々の会員の山行意欲は盛んで、 によっては、今流行の中高年山の会ともいえるが、 小であり、 を考えるといささか厳しい現状にある。 現在の支部会員数は四十二名で、 会員の高齢化も年毎に少しずつ進んでい 相変わらず九州四支部中最 しかし、 国体準備や海外 中高年の会員 将来のこと る

えた地道な取り組みが大切で、少しでも支部活動の機会を増や りの長期にわたる努力が必要と思われる。先ずは、 考えている。 し、より活発な活動ができるよう支部運営を行ってゆきたい 会員の高齢化は、 高齢化対策がよくいわれるが、 昨年来の行事を振り返って支部の動きを報告する。 この一年は新入会員もなく、 他の山岳団 体からもよく聞かれ、 熊本厚生年金会館で十七名が参 会員の若返りには、 年 間 行事も 現状を踏ま 順調 会でも数 か

八月二十五日、

恒例 活躍ぶりがうかが 集して開 0 夏 山 か 報告は n た。 ビー わ 年 n 齡 能を感 た ルで喉を潤したあとビデオ作品を鑑賞、 U させない 山 行報告が続き、 H 頃

0

会も、 名が出 平成 Ш に短縮し に分かれ コースの本隊と難 白水鉱泉に集合、 系の黒岳で十七名が参加して行われ 秋季例会は、 九 すっ 席 年 て駆け上がり、 て出発、 L 月十二日 かり支部の行事として定着し、 て開かれ 71 山頂で合流した。 懇親会は大いに盛り上がった。 月十九日 た は新年晩餐会で、 スの青年部? 本部の年次晩餐会に倣って始めた新年 そのパワーぶりを見せつけた。 ~二十日、 青年部は標準タイムを大幅 (ただし平均年 熊本厚生 た 紅葉見物を兼ねて、 十九日は黒岳 恒 例の近況スピーチ 年金会館 翌朝は、 齢五十五歳 に十九 東麓 明けて 九 重

南 H 都城市郊外の安久温泉までマイカ つく山ということで、 は生活 麓 春季例会は、三月十五日~十六日、 のドライブを楽しんだ。 憎 の霧雨の中を一等三角点の 宮崎 県 0 午 1 ノ峠 Ш を連ねて十六名が参集。 頂に立 へ出 今年の干支「午」の名の かけた。 ち、 + Ш Ħ. 後は霧島 H は 翌

も交じえて新年の挨拶を交した。

に併 十月四 戦 中であ さて冒 せて記念誌も発行する予定で、 H る 頭 Ŧi. にも述べたように、 四十名余の小所帯ゆえ、 H に 阿 蘇で記念集会を開 今年は支部設立四十周年を迎え、 目下その準備で担当者は あまり立派なことは出 催する。 また、 記念集会 来 奮

撮影し、

今年

いっつ

ぱいに完成させる。

③刊行資金

見

積価

額

会員 評 る頃には、 そうにもない 価を受けているだろうか。 丸となって頑張りたい すでに記念行事は終 が、 小粒でもピリリと辛い記念行事となるよう、 と考えてい わ っているが、 る。この記 果たしてどんな 田上敏行 事 が読まれ

宮崎支部

<やっと七合目?>

けられてい ここに来て、発刊を祝うようなにぎやかな論争と波紋が投げ 悲願?「みやざき百山」 IJ さは計り知れなく、 の歩みに似て、 ただ今、みやざき百山百花論争中である。 る やっと九合目ならぬ七合目にたどり着 限られた誌 刊 行は支部創立 面では山を語ることは難しい。 から十三年、 Ш の内 蔵する深遠 カタツム 11 た。 to

ぎるのでは 0 山に 招集され 度まみえるチャンスしかない。 ①今年七月以降、 月例登山 限定登 た。 ない ・百山の集い 山し みやざき百山 かという緊急動議で、 情報収 月例登山 は 集を急ぐ。 は全員 百花論争の 今年度総会決定の年 多加が ② 花 臨時委員 0 スタートで Ш 原則 て 0 命は 会が で、 種 類以上 短 間 百 < あ 計 Ti. 山 月 闽 0 未執 は 花 年に 11. を 筆 H 過

どの花をどの山に掲載するか

0

論議が

渦巻いている。

的資金づくり計画を練る。 約五百万円・オールカラー)づくり事業班六名を指名し、具体

員会で決議された。以上の三項目が論議され、責任分担の明確化と意識確認が委

五十字以内。内容はガイドブック的ではなく、 選択プロセスもまた、 したひい かが大い の文章執筆が完了した時点で、 山に絞り込みまれランクが付けられた。従って、 百字以内、 伝説・歴史・文化遺跡・民俗・祭り・動植物・地質・名産 Ш は、 きの山が心の中に宿っているからである。 に論議されることだろう。なぜならば、 バリエーションルートを含めた参考コースタイム百 県内三百山から百六十八山をピックアップし、 楽しみである。文章は本文八百字から九 残りの五山をどう取捨選択する 山にかかわる神 九十五 郷土愛に根ざ この Ŧi. Ш 百 Ш ほ 0

〈山と論争に学ぶ〉

中心は山の花。 己啓発を試みさせられる。 合計三百点が必要。百二十点ほど撮影は完了した。 ライト・校正などワイワイガヤガヤの百山 る。 筆した文章をたたき台に討議 やざき百 例えば、 山に は 霧島連峰 山の写真は一山に二点、花は一点で 座 から 選ば ·検証 は盟主韓国岳を含め二十 れ文章は完了した。 ・表現 の集いは楽しく • 文章作法 IJ

> 以外に、どれも捨て難い花がなんと二百二十 花暦をひもとくと、キリシマの名を冠した花は十七 文句なしに決定。残る九山の花の選定は混迷している。 争も限りなく続く。 H 本では霧島山だけに 改めてふるさとの 自然の豊かさと山の花の豊富さに驚きなが Ш ある国の天然記念物 を自負したい。 「ノカイドウ」 種類もあるから 種類。これ 霧島 は

たい。 (大谷 優) たい。 (大谷 優) 高争を重ねながら、がっぷり四つに組んでふるさとの山に学びめたらよいと思う。「みやざき百山」刊行は目標の一つとして、めたらよいと思う。「みやざき百山」刊行は目標の一つとして、めたらよいと思う。「みやざき百山」刊行は目標の一つとして、発刊までのプロセスをじっくり味わいながら、支部員一

5

#### 会 務 報 告

九九六年度役員・評議員・支部長 九九六(平成八)年六月~一九九七 (平成九) 年五月

会 長 村木潤次郎

副 長 中村純二・斎藤惇生・宮下秀樹

常 務理 4 大屋悌二・中川 武・吉永英明・大谷 亮

事 溝口洋三・山本宗彦・田邊 松浦祥次郎·伊藤 敞·水野 壽・宇田川芳伸・熊崎和宏・大蔵喜福 勉・南井英弘・堀井昌子・渡邊雄二

理

盛 事 川崎 厳・石橋正美

議 貝 藤平正夫・小須田喜夫・松田雄一・穴田雪江・山口俊輔・長尾悌夫・

小倉茂暉・大森弘一郎・村井龍一・大倉昌身・神崎忠男・重廣恒夫

評

常任評議員

田中弘美・梅木秀徳・中村太郎・吉田 宏·長坂 博·竹内哲夫·

長 野田四郎 (秋田)・梅津 (北海道)・松島静吾 (青森)・中谷 博 (山形)・柴崎 徹 (宮城)・佐久間高男 (福 充(岩手)・岡田光

支

部

宮本数男

島)・五十嵐篤雄(越後)・田中弘美(信濃)・古谷学而(山梨)・大 惇(静岡)・尾上 昇 (東海)・髙木碕男 (岐阜)・斎藤惇生

(京都)・木戸繁良(富山)・増江俊三(石川)・中村 義 (福井)・

東九州)・本田誠也(熊本)・大谷 優(宮崎

阿部和行

(関西)・吉川暢一

(山陰)・松本徰夫

(福岡)・梅木秀徳

出席者 二十二名

◇六月理事会 一九九六年六月十三日

本会会議室

議事に先立ち、ネパールのパルテンバ・シェルパ氏から挨拶があった。

▽審議事項

一山の先達・一人展」名義共催依頼の件

ヒマラヤ保全協会一九九六年度理事会の件

助自然公園美化財団評議員会の件

四 長谷川CUP開催名義後援依頼の件

六 中華民国山岳協会訪日友好登山活動受入の件

株平凡社からのウエストンの写真借用要請の件

Ŧį,

九 ţ 栃木県山岳遭難防止対策協議会からの「マナスルに立つ」フィルム借用願 ルーム夏休みの件 一九九六年度年次晩餐会の件

報告事項

以上九議案承認

の件

福岡支部長交替の件

-全国支部懇談会の件

= K2登山隊一九九六の件

会報 14 委員会報告 山」六一五号参照 図書、遭難対策、 山岳研究所運営、 資料、 総務、

出席者 二十三名

◇七月理事会 一九九六年七月五日

本会会議室

>審議事項

一、中華民国山岳協会登山隊来日の件

脚結核予防会からの本会所蔵資料・写真撮影許可願の件 山の先達・二人展」記念講演講師依頼の件

14 立山博物館からの本会所蔵資料の写真撮影・掲載許可願の件 報告事項

財務の件

六 Ŧi. 14

新入会員オリエンテーションの件 信濃支部創立五十周年記念の件 自然保護全国集会の件

Ŧį. 「田部井淳子展」への本会所蔵資料貸出の件

六、東海支部の全国支部懇談会補助金支給要請及びフォーラムパネリスト派遣

日ネ外交樹立四十周年に関する件

八、故秩父宮妃殿下より日本山岳会へのご遺贈金の件

以上八議案承認

>審議事項

出席者 二十五名

◇十月理事会 一九九六年十月十七日 本会会議室

会報「山」六一八号参照

四、委員会報告 図書、百年史、総務、

集会、青年部

関連山岳団体行事の件

K2登山隊一九九六の件

山岳編集

一、駐日英国大使館広報部からのウエストンの写真借用許可願の件

二、中国新聞社松井総局からのウエストンの資料写真借用許可願の件

関東高体連登山部顧問研修会事務局からの「マナスルに立つ」フィルム借

用願の件

14

平成八年度年次晩餐会の件

◇九月理事会 一九九六年九月十三日

本会会議室

出席者 二十一名

事帰国の挨拶があった。

▽審議事項

、本会所蔵写真等の撮影許可願の件

記事に先立ち、K2登山隊一九九六・山本隊長、松原副隊長より登頂と全員無

◇八月理事会 休会

会報「山」六一六号参照

報告事項

一、委員会報告 青年部、学生部、自然保護、指導、図書、科学、

Ŧį, 会計(中間)報告の件

会計監査報告の件

ţ 越後支部、青森での行事に際しての講師派遣要請の件

報告事項

一、ネパール・マナスル四十周年記念行事の件

-

中華民国山岳協会登山隊会計の件 故秩父宮妃殿下ご遺贈金の件

マナスル登頂四十周年記念事業計画の件

K2登山隊一九九六の件

全国支部懇談会(主管東海支部)の件

評議員会議の件

導

Ti,

委員会報告 青年部、科学、自然保護、

山岳研究所運営、

総務、

指

以上七議案承認

会報 「山」六一九号参照

◇十一月理事会 一九九六年十一月十四日 本会会議室

出席者 二十一名

>審議事項

一、㈱小学館サライからの本会所蔵写真借用願の件

仙台市総務局からの『山岳』掲載写真転載許可願の件

株ベネッセ・コーポレーションからの本会所蔵資料撮影許可願の件 日山協からの「山」掲載論文・『山岳』掲載論文転載願の件

Ti, 委員会委員追加承認の件

ルーム・事務局年末年始休暇の件

以上六議案承認

報告事項

一、公益法人の件

二、委員会報告 財務、総務、 集会、 青年部、科学、 高所登山研究、 医療

会報「山」六二二号参照

◇二月理事会 一九九七年二月十三日 本会会議室

出席者 二十四名

◇十二月理事会 一九九六年十二月十二日

本会会議室

会報「山」六二〇号参昭

委員会報告

総務、図書、集会、医療、

図書管理、指導、海外連絡

一、平成八年度年次晩餐会の件

山岳団体傷害保険現況の件

報告事項

出席者 二十名

▽審議事項

一、
助埼玉県生態系保護協会からのウエストンレリーフ撮影許可願の件 承認

二、平成九年度事業計画及び収支予算案の件

秩父宮記念博物館からのマナスル登頂関係資料借用の件

三、国体及び高校総体山岳競技に関する文部省宛要望書(案)

の件

提案説明 見送り

以上四議案承認

四、平成八年度次晩餐会・支部長会議の件

一、会費未納の件 報告事項 二、株博品館からの本会会員の文章転載許可願の件

平成八年度事業報告と平成九年度予算概算要求の件

一、明治大学炉辺会からの登山申請用推薦状交付願の件

▽審議事項

議事に先立ち、虫垂炎で人院療養中の村木会長の病状が報告された。

委員会報告 総務、

指導、

山岳研究所運営、

本会一〇四号会議室

一、消耗品処分の件 報告事項

会報「山」六二三号参照

◇三月理事会 一九九七年三月十九日

二、委員会報告 指導、集会

会報「山」六二一号参照

◇一月理事会 一九九七年一月二十三日 本会会議室

出席者 二十四名

議事に先立ち、村木会長より、病気見舞いの御礼と、年頭の挨拶が述べられた。

一、㈱ぎょうせいからの本会所蔵資料・写真借用願の件

>審議事項

二、海外登山基金助成の件

以上二議案承認

206

十、事務局職員の永年勤続表彰の件

▽審議事項

出席者 二十五名

㈱平凡社からのウエストンの写真掲載許可願の件

「百名山写真コンテスト」後援依頼の件 「青少年尾瀬国際フォーラム」後援依頼の件

=;

14

平成九年度事業計画(案)

の件

六 t Ŧį, 新年度役員選任の件 ネパールの自然保護「キング・マヘンドラ・トラスト」の件 平成九年度収支予算(案)の件

会報「山」六二四号参照 、委員会報告 総務、集会、

報告事項

ネパール山岳協会からの書簡の件

◇四月理事会 一九九七年四月十七日 本会会議室

出席者 二十二名

▽審議事項

神奈川県立近代美術館からの本会所蔵本撮影許可願の件 日本民俗資料館からの本会所蔵資料借用の件

株小学館からの本会所蔵写真掲載及び借用願の件

㈱白水社からの宛名シール打ち出し依頼要請の件

Ŧį, 平成八年度事業報告の件

財務監査の件 平成八年度収支決算書、 財産目録の件

エベレストデーの件 役員及び評議員改選の件

報告事項

承認

一、委員会報告 図書管理、

総務、

集会、

、指導、

自然保護、

山岳研究所運営

山岳編集、海外連絡

条件付一部承認

◇五月理事会 一九九七年五月八日 会報「山」六二五号参照 本会会議室

出席者 二十四名

継続審議 継続審議 承認 承認

議事に先立ち、村木会長より、在任中の協力に対する謝辞が述べられた。

▽審議事項

継続審議

、石川支部・京都支部長交替の件

二、本会所有ビデオ作品貸出の件

三、上越市長からの寄託資料の報告と期間延長の件

以上三議題承認

了承

四、委員会名簿提出の件 報告事項

、六月からの理事会の件

二、全国支部懇談会日程変更の件

委員会報告 総務、集会、自然保護、 図書

三、ネパール国交修復・マナスル登頂四十周年記念切手の件

会報「山」六二六号参照

◇通常総会 一九九七年五月十七日

東京グリーンホテル水道橋

出席者 百七十名

▽審議事項 、平成八年度事業報告及び収支決算、財産目録承認の件

以上十議題承認

207

二、平成九年度事業計画(案)及び収支予算(案)承認の件

平成九年度役員改選の件

次のとおり決定

会 Ę 斎藤惇生 (新任)

副 会 小倉茂暉・大森薫雄・竹内哲夫(以上新任

理事(担当) 田邊壽 (山岳編集、百年史・再任)・大屋悌二 (総務・再任)・

吉永英明

熊崎和宏(指導、海外連絡・再任)・大蔵喜福(自然保護・再任)・

(財務・再任)・宇田川芳伸(青年部、遭難対策・再任)・

丹紹泰(高所登山研究・新任)・飯田 宮崎紘一 (学生部指導・新任)・村井 進(図書、図書管理・新 葵(会報編集・新任)・伊

勝山康雄(集会・新任)・増山 茂(医療・新任)・森 武昭(科 任)・坂本正智(山岳研究所運営・新任)・絹川祥夫(総務・新任)・

学・新任)・鰺坂青青(フィルムビデオ、資料・新任

事 石橋正美 (再任)・神崎忠男 (新任)

常任評議員 穴田雪江・長尾悌夫・中村太郎(以上再任)・平山善吉・中川 武・平野眞市(以上新任

Ц 大森弘一郎・山口俊輔・大倉昌身・吉田 任)·若林啓之助·村木潤次郎·中村純二·芳賀孝郎·山本健一 宏・長坂 博(以上再

評

議

郎・宮下秀樹・岩間弘雄・魚本定良・中谷 充 (以上新任)

四、平成九年度除籍者の件

その他

会報 「山」六二六号参照

◇登山の指導と奨励に必要な集会、 研修会、 講演会及び展覧会の開催(一九九六

(A) 集会

▽六月二日 上高地

第五十回上高地ウエストン祭(信濃支部)

▽六月八日 妻坂峠

▽六月八日~九日 菅平

▽六月十五日~十六日

小川山

小川山集会(学生部

鳥海山イヌワシ調査(自然保護)

▽六月二十五日~二十六日

酒田市

▽六月二十七日 ルーム

▽六月二十九日~三十日 **若葉会山行写真交換会(集会)** 谷川岳

谷川岳合宿(青年部)

▽六月三十日 谷川岳

初級岩登り技術講習会(指導、学生部

▽七月九日 ルーム

梶田アイゼン、ピッケル講習会(集会)

▽七月十日 日比谷

▽七月十日~十二日 岐阜

中華民国山岳協会訪日団歓迎会(海外連絡)

以上五議案承認

全国山岳遭難対策協議会(遭難対策

▽七月十四日

浅間嶺

写真撮影会(フィルムビデオ)

208

古道を歩く(図書)

探索山行(科学)

ネパール石楠花植林(自然保護 ▽七月十七日~二十三日 ネパール

>七月~八月 上高地

上高地インタープリテーション(自然保護)

▽七月二十六日~八月二十日 カナダ

カナダ山岳会との交流(海外連絡

>八月十四日 ルーム

>八月十六日~十七日 八幡町

名誉会員を囲む会(総務

▽九月七日 ルーム 鳥海山イヌワシ調査(自然保護

ビールパーティー(集会)

自然保護全国集会(自然保護 ▽九月七日~八日 小谷温泉

▽九月十七日 盛岡市

鳥海山イヌワシ調査(自然保護) >九月十九日 恵比寿

海外登山報告①ポベーダ峰②エベレスト峰(青年部

▽九月二十七日 明治大学

K 2 報告会(総務、青年部

▽十月四日~七日 カトマンズ マナスル登頂四十周年ネパール事業(総務、

>十月五日~六日 名古屋

▽十月十一日 ルーム 全国支部懇談会(総務、東海支部

> トリノ山岳博物館長招待の夕べ(図書) >十月十五日~十六日 北八ヶ岳

写真撮影会(フィルムビデオ)

>十月十九日~二十日 文部省登山研修所

▽十月十九日~二十日 摩耶山

ロッククラミング講習会(青年部、指導、遭難対策、学生部

キノコ山行(集会)

▽十月二十四日 恵比寿

K2報告会(青年部)

▽十月二十六日 ルーム

秋季オリエンテーション(総務)

▽十月二十六日~二十九日 青森市

白神山地調查(自然保護

▽十一月五日 原宿

UIAA会長来日歓迎会(海外連絡

>十一月十日 皇居外苑

マラソン大会 (学生部)

>十一月十六日 函南町

自然観察会(自然保護)

山岳図書を語る(図書) ▽十一月二十一日 ルーム

中国登山協会代表団歓迎会(高所登山研究) >十一月二十九日 新宿

▽十一月二十九日

中国登山協会、西藏登山協会首脳部懇談会(海外連絡)

▽十一月三十日

全国大学監督者会議(高所登山研究、青年部、

支部長会議(総務) ▽十二月七日 新高輪プリンスホテル

>十二月七日 新高輪プリンスホテル

年次晚餐会(総務)

▽十二月七日 新高輪プリンスホテル

マナスル登頂四十周年記念展(資料、総務)

▽十二月八日 御岳山

親睦山行(集会)

▽一月十日~十二日 八方尾根

スキー懇親山行(集会)

青年部懇談会(青年部) ▽一月二十四日 私学会館

▽二月一日~三日 八ヶ岳

▽二月十五日 ルーム

アイスクライミング講習会(青年部、

指導、学生部、遭難対策

高所登山研究会(高所登山研究

▽二月二十一日 ルーム

山岳史懇談会(図書)

▽二月二十二日~二十三日 グリーンホテル・ルーム

全国支部事務局担当者会議 (総務

▽二月二十二日~二十三日

宝剣岳

冬山登山技術研修会(指導

▽三月五日 ルーム

16ミリフィルム映写会(フィルムビデオ)

▽三月十五日 ルーム

▽三月二十一日~二十三日 新入会員オリエンテーション(総務

初中級山岳スキー研修会(指導

▽四月十日 鳥海山

鳥海山イヌワシ調査(自然保護

>四月十二日~十四日 谷川岳

中上級山岳スキー研修会(指導

·四月十三日 浅間嶺

サクラハイク(集会)

▽五月三日~五日 劔岳

雪上総合技術研修会(指導、 遭難対策

▽五月十一日 筑波山

古道を歩く(図書)

▽五月十五日 ルーム

▽五月二十二日 ルーム

連続講座夏山気象①(科学)

連続講座夏山気象②(科学

▽五月二十四日~二十五日 黒森山・天ケ台山・三ツ森山

若葉会山行(集会)

第三十五回木暮理太郎翁碑前懇親会(山梨支部 ▽五月二十四日~二十五日

山梨県須玉町

▽五月二十九日 ルーム

連続講座夏山気象③(科学)

210

▽七月三日 ルーム (B) 研究会・講演会

講演会「南極観測と地球環境」(科学)

▽九月十三日 ルーム 講演会「山を語る」(図書)

講演会「近代登山初期における測量技師たちの活躍と功績」(百年史)

>十月三日 ルーム

▽九月二十七日 ルーム

講演会「森林と環境」(科学)

講演会「凍傷の治療」(医療 ▽二月六日 ルーム

講演会「アンデスの遺跡を掘る」(科学) ▽三月十七日 ルーム

(C) シンポジウム

▽六月九日~十日 乗鞍青年の家

第十六回日本登山医学シンポジウム (医療

◇登山施設の運用、その他登山のための適切な事業

▽上高地山岳研究所の運用、資料室開設

▽受入資料保管

▽各博物館、美術館との提携強化

▽海外遠征の記録、会合・行事等の記録、フィルムのビデオテープ化による保

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

◇自然保護運動の推進

▽自然保護指導者の養成

▽自然保護委員会による年間山の自然学講座

◇機関紙等の発行

▽『山岳』第九十一年 (一九九六年) 号の発行

▽会報「山」第六一三号~第六二四号の発行

◇国内および外国山岳団体との情報交換 ▽国内関係団体(日山協、都岳連、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、

AT―J、その他)との密接な連絡

Н

◇海外登山 ▽一九九六年六月五日~三十日 マッキンリー気象観測隊の派遣、 ▽海外登山団体との機関紙の交換及び情報誌の購入

▽一九九六年五月二十八日~八月十八日 の設置(科学) K2登山隊派遣、

新ルート開拓

(青

気象観測器

# SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 92 No.150

Issued December 1997

### CONTENTS

Mountaineering as a Project and Leisure Trips in the Mountains  Koreo KINOSITA···A21(	7)
YOSHIYUKI KAGAMI—A Man in Climbing HistoryJiroh TAGUCHIA26 (Sherpas in the 20th Century	20)
EXPEDITIONS	
A Successful Ascent of K2: A Report of the Japanese Alpine Club, Young Members' Group 1996 ························Atsushi YAMAMOTO····A29 (Climbing K2 Alone and Without Oxygen: The Summit Where	38)
Thinking and a Sense of Time Disappear	53)
The Successful Ascent of Mt. Chomo Lhari: A Report of the 1996 Japan-China Joint Chomo Lhari Expedition	(67)
A Brief History of Publishing "ALP" Magagine, vol.1~300	71)
A Climbing History of Tateyama and Tsurugi-dake ·········Akira INOUE·····( Establishment of High School and College Mountaineering Clubs	
Junji NAKAMURA(1	04)
Book Reviews (1 In Memoriam (1 Reports from Branches (1	46)
Club Notes	04)
Catalogue of Mountain Books	.78)
ILLUSTRATIONS	
Expeditions	49) 61)

### The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: 5-4 Yonban-cho Chivoda-ku, Tokyo 102

Office Bearers and Committee 1997 (May 1997-April 1998)

President: SAITOH Atsuo

Vice Presidents: OGURA Shigeki

OHMORI Shigeo TAKEUCHI Tetsuo

Auditor: ISHIBASHI Masami, KANZAKI Tadao

Committee

A.JISAKA Seisei IIDA Susumu ITAMI Tsuguvasu KATSUYAMA Yasuo KINUGAWA Yoshio KUMASAKI Kazuhiro

MASUYAMA Shigeru MIYAZAKI Kohichi MORI Takeaki MURAI Aoi OHOKURA Yoshitomi OHOYA Teiji

SAKAMOTO Masachi TANABE Hisashi UDAGAWA Yoshinobu YOSHINAGA Hideaki

Council

ANADA Yukie HAGA Takaroh HIRANO Shinichi HIRAYAMA Zenkichi IWAMA Hirowo MIYASHITA Hideki MURAKI Junjiroh

NAGAO Yoshio NAGASAKA Hiroshi NAKAGAWA Takeshi NAKAMURA Junii NAKAMURA Taroh NAKAYA Mitsuru OHKURA Masami

OHMORI Kohichiroh UWOMOTO Sadayoshi WAKABAYASHI Keinosuke YAMAGUCHI Shunsuke YAMAMOTO Kenichiroh YOSHIDA Koh

### Chairmen of Branches

Hokkaido: NODA Shiroh Aomori: MATSUSHIMA Seigo Iwate: NAKAYA Mitsuru Akita: OKADA Mitsuyuki Yamagata: UMEZU Hiroshi Miyagi: SHIBAZAKI Tohru Fukushima: SAKUMA Takao Echigo: IGARASHI Tokuo Shinano: TANAKA Hiromi Yamanashi: FURUYA Gakuji Shizuoka: OHISHI Atsushi Toukai: ONOE Noboru

Gifu: TAKAGI Sakio Kyoto: SAKAI Toshiaki Toyama: KIDO Shigeyoshi Ishikawa: TSUDA Fumio Fukui: NAKAMURA Tadashi Kansai: ABE Kazuyuki San-in: KIKKAWA Yohichi Fukuoka: MATSUMOTO Yukio Higashi Kyushu: UMEKI Hidenori

Kumamoto: HONDA Seiya Miyazaki: OHTANI Masaru Hiroshima: IZUMIO Tadashi

# Mountaineering as a Project and

# Leisure

# Trips in the Mountains

### Koreo KINOSITA

I think the outdoor activity of our Club Members has two aspects: mountaineering as a project and leisure trips in the mountains. In the former, which I will call for short the mountaineering, you draw up a project, e.g., to climb a peak by such and such a route in such and such a season, and carry through it. In the latter, for short the leisure mountain trips, you walk in the mountains at leisure and enjoy what you find around yourself: genial sunshine, unsullied greenery, and so on.

In the present essay, I will first shed light on some characteristics of the *mountaineering*, or the mountaineering as a project, by comparing them with those of a scientific or technological research project. A mountaineering project does bear some parallels to an experimental research project.

I will then discuss the process of switching over from the *mountaineering* to *lei-sure mountain trips* that most people will spontaneously, or maybe relucantly, go through when they grow old.

Before treating these points, however, I will give a brief account of my background, which may help the reader to understand me.

### My Background-Three Lines of Avtivities

I will be eighty years old by the time the reader will receive this issue of SANGAKU.

I have hitherto been active, in the rough, in three lines: physics, mountaineering, and instruction in scientific communication.

My interest for mountaineering was stirred up in my teens. In my high school days I concentrated all my energies on mountaineering. When I became a university student, however, I decided to concentrate on physics. Later I devoted myself to physics as a professor at Gakushuin University until I retired in 1985 at the age of sixty-eight. On leaving the university I thought I should now work on another line, and decided to instruct young people in scientific writing and oral communication. (This I denoted above by instruction in scientific communication.)

Thus my main line has had a change from physics to instruction in scientific communication twelve years ago, but mountaineering continued to be a long lasting side line ever since I became a physics student down to these days.

There were two periods in my life when mountainereering or expedition was my main line. One was my high school days (see above) and the other was 1956~57 when I was with the US Weddell Sea Expedition as an observer from the Science Council of Japan. The network of overseas friends I got acquainted with in this expedition has supported me in physics circles as well as in mountaineering circles in Europe and America.

### The Mountaineering and Experimental Research Projects

As stated before, a mountaineering project bears some parallels to an experimental research project. Both will need the historical survey of the reconnaissance of the area (problem) in question; selection, trial and procurement of the equipment; development of new equipment needed for the climb (study); organization of the party (research team); finance; etc., etc. In some points, however, the two projects are definitely different.

Let us review below the similarities and dissimilarities between a mountaineering project and an experimental research project.

### Unknown Spot

I believe mountaineering was originally started to satisfy man's naïve wish to visit an unclimbed, or virgin, peak, stand on its top and enjoy the view no one has ever commanded. In this sense exploration is not much different in its motive from mountaineering.

An untouched problem attracts scientific workers as well as an unclimbed peak fascinates mountaineers.

### First Ascent

I stated above that I believe mountaineering started from man's naïve wish to reach a peak no one has yet been to. As an extension of this belief, I think the target of the *mountaineering* should intrinsically be an unclimbed peak. Unfortunately, however, unclimbed peaks are limited in number. All the eight thousanders have been climbed, and seven thousanders that remain unclimbed are not many. There are a lot of unclimbed six or five thousanders, but the attraction of unclimbed peaks diminish with the decrease in height. This, I think, is because lower peaks are easier to climb on the average. You will perhaps admit that the charm of a peak for mountaineers is heightened by the difficulty in climbing. This point will be discussed in the following section, Variation Routes.

If the intrinsic target of the *mountaineering* be the first ascent, the future of the *mountaineering* would not be bright because the number of unclimbed peaks is

limited.

Should we go out of the globe and try a space expedition? The report from the Marspathfinder 1997 on the Martian surface may excite a mountaineer, but the Marspathfinder's travel to the planet cost \$250 million!! (Time, Jul. 21, 1997)

The ascent of an unclimbed peak corresponds to a discovery in science. A great difference between the two lies in that in mountaineering one climbs a peak whose whereabouts one already knows, whereas in science one may recognize the location and shape of the peak (the significance of what one has discovered) only after the peak has been climbed (the discovery has been made).

I said the charm of a virgin peak depends on its height. What does the peak height correspond to in the realm of science? I believe it is the fundamentality of one's discovery.

I regretted that high virgin peaks are diminishing in number. In the realm of science we never have such a regret. Whenever an unclimbed peak is climbed (a new discovery is made), the mist in its vicinity will clear up and peaks unobserved by then (problems not known by then) will show themselves.

#### Variation Routes

After the first ascent of a peak, reconnaissance of variation routes will usually start. Now that most of the very high peaks have already been climbed, what the active mountaineers aim at nowadays are the climbs via variation routes of those peaks, via untraced routes if there were any.

On the other hand, scientists feel little interest in exploring variation routes. They regard the first ascent of a peak (a novel scientific discovery) very highly, but they will coolly disregard the later efforts to reach the same peak by other routes.

Mountaineers' attitude is different. They are sportsmen who tend to prefer more difficult routes to easier ones.

In my opinion, a sportsman often challenges a difficulty simply because it is difficult. According to a dictionary, sport is "1. an athletic activity requiring skill or prowess and often of a competitive nature", but it also says sport is "3. diversion; recreation; pleasant pastime". A mountaineer who prefers more difficult climbs is a sportsman in either meaning. I call him a "sports-mountaineer".

I have remarked that I think man was at first prompted to go to the mountains by the naïve wish to visit an unknown spot. Since the modern alpinism had its birth, however, a novel motive has been added to this: the sporting spirit that tempts man to confront difficulties.

# Switching over from the *Mountaineering* to *Leisure Mountain Trips*Decline in Physical Competence

Most people who have been active in the *Mountaineering* or the mountainceering as a project, switch over as they grow old to *leisure mountain trips*. This is due mainly to the decline in their physical competence.

About a quarter century ago, I expected that I would have to give up skiing earlier than rock climbing, because skiing seemed to require quicker movements. However, my later experience was to the contrary: I still enjoy skiing with my wife every year, but I know rock climbing is impracticable for me now.

The last time I enjoyed rock climbing was in 1971 when I was fifty-three years old. I climbed up the south-east ridge of Aiguille du Midi, an easy, general route, roped up with my friend André Maréchal, then the Head of l'Institut d'Optique, Paris, one year older than I. I led off most of the time taking a great pleasure in climbing. My body was supple, and I felt no fear at all.

After the lapse of some ten years during which I had been busily occupied, my heart sank on finding on a rocky hillside that my knee was apt to totter when I climbed up or down a big step say 50 cm high. On reflection, I was reminded of the fact that since a few years ago I had lost confidence in my ability to hurry down the mountain at a good speed.

These two symptoms meant that it had become difficult for me to regain the balance instantaneously. On a fuller investigation of the symptoms, I concluded that they had their roots not in the nervous system but in the muscles: my muscles could no longer contract so quickly as before.

It thus occurred to me that I had been wrong in assuming that skiing requires quicker movements than rock climbing. A climber standing on a foothold may seem to be standing still, but in reality he is keeping his balance by very short, extremely quick feedback movements for which instantaneous contraction of muscles is essential. Hence my experience that rock climbing became impracticable much earlier than skiing.

Another factor that urges the aged people to switch over from the mountaineering to leisure mountain trips is the physical stiffness caused by age.

I think there would be no need to refer to the general decline in physical strength or stamina. Nowadays I have to estimate the time required of me for climbing a mountain at 1.5~2 times the normal time.

### Switchover from the Mountaineering to Leisure Mountain Trips

You may find some psychological resistance to switching over from the

mountaineering to leisure mountain trips. I switched over involuntarily and spontaneously through a series of trekking with friends in the high mountain regions, in which we did not aim at the summits but enjoyed viewing the peaks.

My trekking experience was as follows. The numbers in the brackets show my age at that time.

Trek 1. Pokhara—Annapurna Sanctuary [69]

(Nepal, Dec. 1986)

Trek 2. Pokhara—Baglungpani—Marsyandi Valley [70]
(Nepal, Mar. 1988)

Trek 3. Kathmandu—Kodari—Zhangmu—Tingri Heigths [70]
(Nepal & Tibet, Mar. 1988)

Trek 4. Jomsom—Kali Gandaki—Herzog's route in his first ascent of
Annapurna, up to Sano Bugin 4,300 m —Kali Gandaki—Ghore
Pani—Pokhara [72]

(Nepal Nov. 1989)

Trek 5. Paro—Chomolhari BC [73]

(Bhutan, Apr. 1991)

Trek 6. Langtang Group up to Langsisa Karuka [74]

(Nepal, Nov. 1992)

Trek 7. Hunza: around Karim Abad and Gulmit [76]

(Pakistan, Apr. 1994)

Trek 8. Patagonia: Parque Nacional Torres del Paine, Parque Nacional los Glaciares and Tierra del Fuego [78]

(Chile & Argentina, Feb. 1996)

My companions were those from among a group of my friends who could spare time on the respective occasions. The parent group included a little more than twenty people, ladies commanding a majority. The size of the trekking team differed from case to case, but was between five and twelve or so. In Trek 1, we had with us my friends Gilbert Zinsmeister, physicist, and his wife Gisela from Liechtenstein. In Treks 2 to 8 my wife joined the team.

The parent group grew older year by year, the average age of the team reaching sixty-seven in Trek 8. The teams in Treks 2 and 3 were the youngest, fifty-five on the average. Because my companions were advanced in age, I decided to travel following the style of the early British Expeditions in Treks 1, 2, 4, 5 and 6, i.e. accompanied by some Sherpas and a good many porters (in Trek 5 a guide and some ponies).

As you see in the list, our trekking plans changed as time went by in the choice

of the area to visit as well as in the style of the travel. This was not what I had planned beforehand but what happened in the course of nature. The more advanced we were, the less laborious plans we adopted without realizing it.

In Treks 1 to 4, I was a confident leader with plenty of energy left over. In Trek 5 I felt that I did not have much energy to spare. In Trek 6 I realized that I was approaching the limits of my physical strength. In Trek 7 we encountered with bad weather and bad road conditions, which compelled us to make a difficult car trip; the only trekking on foot we could enjoy were short visits to two glaciers. Trek 8 was, roughly speaking, a car trip in a vast area plus some hikings.

In concert with the change of our trekking plans into less laborious ones, my own activities besides the overseas trekking were also changing from the mountaineering to leisure mountain trips. I still try to carry through some planned climbs—at an extremely slow speed—once or twice a year, but in other cases I walk in the mountains at leisure with my wife and friends to enjoy what I find around ourselves.

# YOSHIYUKI KAGAMI—A Man in Climbing History

### Jiroh TAGUCHI

The other day I received the news of Mr. Kagami's death. I was told that I was the only one who could tell the story of his life.

He was born in 1904, a shy man whom I met when I was young. He was about 13 years older than me. We didn't climb during the same years, he was climbing in the 1920's whereas I climbed in the 30's. So what I'll mention in this essay is more about Mr. Kagami as a mountaineer or as an important figure in the history of climbing.

I first came to know Mr. Kagami's name when I was a university student. The Kagamis' were a rich family and therefore it is understandable that he was able to go to Cambridge University (Selwyn College). There he joined the ski club and expanded his athletic talent. This was when he became involved in mountain climbing.

He enrolled in many ski tournaments in Müren and Wengen where he was involved with many speed freaks. In the 1920's there were young new styles of skiing. There's a photo showing Mr. Kagami with his ski up in the air looking very proud.

This was when he met Frank Smythe. Smythe was like a multipul person who could do anything. He was not the usual moutain climber who went to Cambridge or

Oxford. He became famous for his incredible climbing and in those days England wasn't famous for great climbers. He was the first to conquer Mont Blanc's Red Sentinel. At that time Germany's star Welzenbach was also climbing the Alps. Kagami was very fortunate to become friends with Smythe. Climbing requires a catalyst for encouragement. For Kagami, Smythe was the catalyst to make him challenge the difficult mountains. This is my personal point of view.

First 1 must mention the success of Kagami's on Mont Maudit, Italian side of Mont Blanc which later was renamed the Kagami Route. A writer for the London Times, Smythe, and Kagami planned the guideless climbing of Mont Maudit. Sadly, Smythe had to suddenly go back to England. Kagami couldn't give up and finally challenged the climb with a guide, Gottfried Perren from Zermatt. Eventually, after 30 years, this route was once again challenged, this time by Bonatti. This shows how difficult the climb was. Kagami's success was written up in the 43rd edition of the "Alpine Journal".

Secondly he challenged the long distance between Dent d'Hérens to Matterhorn. This course has a complicated feature and Kagami was able to complete it in only 18 hours. Moreover, he nearly conquired the North Wall of the Matterhorn 3 years before the Schmid brothers, but had to give up becaus of falling rocks from climbers in another area.

All these crazy climbings were done by Mr. Kagami because of Smythe. Mr. Kagami was enjoying himself so much that it meant little to him to pass on his experience to young Japanese or the press. For this reason he is not known to the Japanese. From my point of view, the star of the alpinism were Yuko Maki and Saburo Matsukata. If they are the head of the coin, Kagami is the tail.

This is a brief review of Mr. Kagami's life as a mountain climber. When seeing climbing history from another new point, many young Japanese went to Chamonix and built their experience in the Alps. From this growing population of young climbers, mountain climbing drew society's attention to this kind of climbing. Dangerous and wild challenges were called "the extreme alpinism" and opened a new door to climbing. If we say that Maki and Matsukata are the founder of the Japanese alpinism, then Kagami is the founder of the Japanese extreme alpinism.

### Sherpas in the 20th Century

### Katsuhiko KANO

Sherpas have been imagined as loyal, reliable, cheerful, pious but rather simple high altitude porters of mountaineering in the Himalayas by the westerners from the beginning of this century. Those images have been reproduced by various medias such as travel guide books, T. V. programs and advertishing leaflets of tourism industries even now. On the other hand, some people claim that 'old good Sherpas' have gone out, because they became too affluent and modernized. Images of Sherpas were originally formed in the 1920s and 1930s. In those days, most Himalayan expeditions employed high altitude porters through the Himalayan Club at Darjeeling. It meant that most of 'Sherpas' were immigrants from Solu-khumbu or surrounding hill areas of Nepal who aimed to get prospective jobs there. As Nepal was still closed to foreigners, activities of expeditions were nearly limited in the Himalayan under the British rule. Modes of their travel also followed those of colonial officers, and military personnel often accompanied with them. In such circumstance, 'Sherpas' who engagerd high altitude porters with expeditions occupied their seats on the ruling in the colonized area, even if they ranked there suborinately. Supposedly, the status of 'Sherpas' in the expedition corresponded to those of 'Gurkhas' who had been recruited by British army from the hill area of Nepal.

However, Nepal opened its door to foreign tourists in 1950, and then, Solu-Khunbu, the homeland of Sherpas became one of the most prosperous tourist area in the country. In the 1970s, Sherpas entered gradually to the sphere of various tourist bushiness such as management of tourist lodges, restaurants, travel agents and shops of trekking equipments and souvenirs. For young, ambitious Sherpas, high altitude porter and trekking guide are rather regarded as temporal jobs to accumulate capital for the future business. In the 1980s, many prosperous Sherpas shifted their residence to Kathmandu. Generally they are enthusiastic about modern high level education for their younger generation.

For the tourist business, old images on Sherpas, such as reliable and loyal servants for the sahib (master), are still valuable heritage. Sherpas belonged to old generation have performed their roles by 'traditional' manners to get favor with foreign tourists. However, for younger generation, especially who have received

education, such attitude is regarded as rather humiliation. Invention of new images, that is suitable for age of mass tourism in the next century, is requested and groped now.

# A Successful Ascent of K2: A Report of the Japanese Alpine Club, Young Members' Group 1996

### Atsushi YAMAMOTO

The weather in Karakoram had been unusually unstable this year. The adverse weather kept on annoying us throughout our expedition even before the construction of the base camp, Regarding the climbing route, we changed our original plan and decided to climb the south-south-eastern ridge to avoid competition with other parties. However, we found that the Chilean party was already challenging the SSE route. So, as soon as we settled in our base camp, we confirmed with Chilean party regarding the fixed rope (we decided that whichever party might climb first, the fixed rope should be prepared by themselves independently and not shared), a site for constructing tents and how to warn others in case of fallen rocks. On the day after our first summit team had successfully made the summit, four members of the Chilean party achieved it as well. As they had been friendly throughout the expedition, no trouble happened between us. It was good that we could maintain this good attitude throughout the climb.

We were afraid of some technical difficulty when we climbed the lower part of the route. However, as we actually climbed, it turned out to be not so difficult. Except for fallen rocks, we faced no big trouble. Though bad weather sometimes acted as a brake, thanks to the hard working of our party members in charge of making the route, everything proceeded almost as we planned. Transportation of loads also went well since we had more than a sufficient number of strong party members.

The biggest problem was that we couldn't find an appropriate place to pitch tents. We thought that such a big mountain would have more space to allow us to construct a few tents. But the fact was we couldn't find any such place. Both at Camp 1 (6,350m) and Camp 2 (7,050m), we could barely secure a tiny space far above the planned altitude. We had to fetch a pick used when we constructed the Base Camp, and crush the rock and shave the ice to secure a space for tents. Even after such efforts, a part of our tents hung in the air.

The bad weather was not always disadvantageous. Though the pace of our climbing the mountain had become slow, it gave us enough time to rest. We had to decrease the number of camps from four to three, which resulted in less transportation of loads and less time to stay at high altitudes. We had a plan to use oxygen at Camp 3 (7,400m) while we were sleeping. Instead, we used oxygen at Camp 2 while sleeping, but we limited the the use to the members who were going to work in higher altitude the next day. This contributed greatly to the health condition of our members. No one experienced bad physical conditions, and 16 out of 18 members were able to reach the final camp to challenge the summit at 7,850m.

At the end of July, all necessary supplies were carried into the final camp. Then all the party members descended to the Base Camp for rest. After two days' rest. we decided to increase the number of the summit team from nine to eleven. They left the Base Camp one after another. However, from August 3, the weather deteriorated for the third time, and we were forced to be in a long abeyance. More than fifty days passed since we started climbing. A heavy snow fell on the top of the mountain and the interval of the change in bad weather had become shorter and shorter, which clearly told us that autumn was just around the corner. Such a long abeyance and accumulated stress made it difficult for some party members to maintain a highly charged spirit, and discord arose among leaders. We were pushed to the brink of giving up this expedition. It was the strong, earnest wish of the party members to make the summit that finally made us decide to continue our challenge.

On August 10, the weather showed a faint sign of recovery. We made a firm determination not to make even a single mistake. The first party consisting of six members left the Base Camp. Next day on August 11, the second party also consisting of six members left the Base Camp. In order to cope with the shorter interval of the change in weather, both parties went straight up to Camp 2, and the first party reached the final camp on August 11. On August 12 at 3:00 A.M. the first party left the final camp and after plowing forward in the deep snow, at 11:00 A.M. Matsubara, Tanigawa and Murata summited K2. By 12:50 P.M. Yoshida, Shiina and Akasaka also made the summit in this order. Two days later, six party members of the second party who left the final camp on August 14 at 1:50 A.M. successfully made the summit between 7:30 A.M. and 11:20 A.M. in the order of Yamamoto, Takeuchi, Inaba, Takahashi, Sano and Nagakubo. The weather was perfectly fine with no winds.

It was the first K2 ascent made by a two digit number of party members (the previous record was eight by an Italian party in 1986). We set another record: Takahashi, at age 22, was the youngest climber ever to reach the summit of K2. All

of the party members returned to the base camp safely. We were lucky to be favored with such wonderful weather to make the summit. After August 15, the weather took for the worse again. We finished our caravan on August 24, but the adverse weather still continued, It was just good luck that we were able to climb K2 at the very last chance of 1996 season.

# Climbing K2 Alone and Without Oxygen: The Summit Where Thinking and a Sense of Time Disappear

### Masashi TODAKA

June 6, 1996

I reached the Base Camp at 5,200m. My small expedition party consists of only four members; myself, Masami (my wife), a liaison officer and a cook.

June 8.

I began to climb. For acclimatization exercise and also for finding a descent route, I headed for the south-eastern ridge. I crept across the crevasse, the beginning part of the route. Then, I climbed and descended the icy wall leading to C1 (6,250m) using double axes.

June 14.

I returned to the Base Camp after three days. It snowed and the south wind raged all through the night. Good judgement demanded that I climbed down. If stayed in up the mountain, I would have been unable to come down since I had no fixed rope. I reminded myself repeatedly to maintain this attitude toward climbing whenever I left anxious about weather conditions.

At the shoulder (7,900m) I gave up my first attempt to make the summit because I sensed deterioration in the weather. I returned to the Base Camp and took three days' rest. Snow continued to fall during the three days. Heavy, wet air has been blowing in from the south. The weather in Karakoram has been unstable this year. Only in early June, did we experience a long spell of perfectly fine days which lasted for two weeks. After that, however, fine days didn't last long at all. In addition, in the high sky (over 7,000m) there were always strong west winds. Because of the short spell of fine days, the snowy portions up in the mountain were too unstable for safe climbing. For my acclimatization practice, I climbed alone and made a route on the south-eastern ridge up to 7,300m. Deep snow made it a very hard work.

Because of the deep snow, strong winds and unstable weather at top, I

determined that climbing the south wall in the Alpine style was suicidal. If you want to stick to the Alpine style to climb Mt. K2, it is most criritical that you find a route with good snow conditions and climb through the deep snow above 8,000 meters as fast as possible. I kept on waiting for a chance to attempt the summit. July 26,

I reached the Camp 2. In the evening, I tried to climb further up to the Camp 3 (7,400m). However, because of strong winds and a snow shower, I had to give up at 7,200m. I returned to the Camp 2, arriving at midnight.

July 27,

After taking some rest to recover from the fatigue accumulated during the last night's climbing, I resumed climbing at 2:00 P.M. and pitched a tent on a ledge at the altitude of 7,100m.

July 28,

I reached the final camp before challenging the summit (7,900m). July 29,

I'd almost reached the summit area by 1:20 A.M. The summit of K2 was lit up blue like a pyramid under a great, shining full moon. I had been worried about the wind, but it was a very calm, beautiful night. The surface snow was tight enough and there was almost no need to walk forward plowing. It was the most ideal condition to climb without oxygen. My body and mind were still half asleep. I paid particular attention not to get frostbitten on my toes and fingers. I headed for the bottle-neck at the top. The snowy wall became increasingly steeper, and as I approached the bottle-neck, I had to walk forward plowing in the deeper snow. Sunddenly I noticed that dawn was approaching on the eastern horizon. The sun was just about to rise from the Chinese earth.

I went throught the bottle-neck, and began to traverse, when it began to snow. I was annoyed because traversing had become much harder. To secure the return route, I fixed the rope for 50 meters. It was 9:00 A.M. Deep snow required more time than I expected to take climbing from the bottle-neck to where I stood. All I had to do was to climb straight up to the summit. Whether I could make the summit or not depended on how quickly I could climb this extremely steep wall with deep snow. I began to walk forward plowing and headed for a triangular rock at the upper part.

My physical condition was very fine. I had to walk forward plowing the deep snow up to my waist. I tried to relax my body and maintain deep, smooth breathing as I plowed forward rhythmically at an appropriate speed. Still it would take seven or eight hours more at least to reach the top. I had to try some climbing method which would not accumulate fatigue in my body. Two hours later, I reached the triangular rock. So far, I had climbed at the pace I had planned. It took four hours to climb through the same part two years ago. Under the rock I found a red rope deposited. I guessed that it was the part of the remains left behind by the tragic party which attempted K2 last year. The red rope told me not to be too optimistic about K2 which was dangerous enough to take your life if you made even a slight mistake in judgement. From the triangular rock, the snowy wall became increasingly steeper and the snow softer. In the breast-deep snow, I had to use both arms and my whole body to walk forward plowing.

Plowing at this altitude required much more energy than I had imagined. I hadn't eaten enough for the last three days, so I was astonished that I could work so hard.

At noon, I climbed through the snowy wall. It took an hour. The altitude was 8,400m. From the traverse to here, I climbed through the steep slope covered with soft snow. Physical fatigue was intense. Now, I had to determine if it was possible for me to continue on to the summit and still return the way I had come. I had to begin my descent and reach the fixed rope at the traverse before dark. To begin later was too dangerous, Accidents at K2 happened mostly when climbers began to descend just after making the summit.

I stretched myself out of a ledge to communicate with Yumi who was at the Base Camp. She was looking at me from there. If the same conditions continued, I thought it would be difficult for me to make the summit. However, because it might be more windy at the upper part, snow condition could be better. If I could continue to climb without any trouble, I could be on the summit in four hours or so. I told Yumi that I could not make a decision yet.

The top of K2 above 8,400m is a world where death and life come close to each other. If you became less conscious of the fact that you were in a very dangerous situation and less capable of sensing danger, returning alive will become problematic.

Climbing at extreme altitudes without oxygen bottle requires the full exercise of our survival instinct.

I was, however, feeling great. I felt no hostility from the mountain on the surrounding world. I still felt fully charged with energy. I knew I could make a descent decision as soon as any adverse situation happened. Thus, I resumed climbing toward the summit. As I looked down, I could see the panoramic view of the south-south-western ridge.

I continued to climb as if the summit and I were attracting each other. I knew that I was always conscious that I had to descend. That meant I was still alright mentally. It seemed that there would be no problem of descending.

I crossed a peak and saw another peak about 8 meters higher in front of me. That

could be the top of K2. I came close to the snowy wall and climbed it using double-axes without a rest only to find another peak.

Disappointed a bit, I fell on my knees in the snow. It was a little past 4:00 P.M.

How much further would I had to climb? I called Yumi who must have been watching me at the Base Camp. She answered that I was very close to the summit. Because I had climbed up to this point without stopping, I was gasping for breath in the thin air. I needed a rest to restore normal breathing. As I began to breathe better and was calm again, I looked up ahead to find an extraodinarily beautiful finale awaiting me.

The snowy white ridge was pushing itself straight up into the sky. I stood up again and resumed my challenge to make the summit. As I climb up step by step, I relished the taste of each step. I had no thought or sense of time. Driven by instinct, I just kept on climbing up higher and higher. One after another, a new step was printed in the immaculate snowy ridge. What a calm, tranquil and profound world it is!

At 4:20 P.M. on July 29, 1996 I was standing at the highest point of the snow-covered summit of K2. The azure sky was clear and the air was gentle.

### Pasang Lhamu Chuli (Josamba) 7,350m

### Tamotsu OHNISHI, Osaka Alpine Club

Pasang Lhamu Chuli is one of five new peaks opened for foreign expedition in June 1995.

Location of this peak (28 04 24, 86 36 53) is about 5-kilometer west-soutwest of Cho Oyu and height of this peak is 7,350 m. It was not for us to identify the peak of this mysterious name. Soon we learned it was nothing but a peak that had been known as Cho Aui and already had been climbed from Tibetan side in 1986 by Himalayan Association of Japan's expedition.

In postmonsoon season of last year, a Korean expedition tried from Nepalese side but they were forced to retreat at the hight of 6900m. This peak also has other two different names; Josamba 1 and Nangai Gosum 1.

Our expedition in 1996, sponsored by Osaka Alpine Club aimed at this peak from the south or the east ridge. On September 6, the first flight, after irritated waiting in Kathmandu by prolonged mosnsoon weather of this year, brought us to Shangboche and we stayed for three days at Everset View Hotel which my friend Mr. Miyahara is managing., Then we proceeded to Thame village, where we spent 7 days at our sirder Ang Phurba's lodge for rest and acclimatization.

Started for Chhule on September 16, and settled our base camp (5400m) on the central moraine of Nampa La Glacier. Climbing gears and foods of about 1.5 tons had already been carried up to BC by a few Sherpas and local porters prior to our arrival.

As the nearest couloir, which directly lead to southern col (5720m), and Korean couloir up to 6650m col, were both washed by incessant big avlanches, we decided to change our route without hesitation to the west ridge. We placed advanced base camp at 5600m, foot of the west ridge near Nampa La.

On September 23, we began to make long route to get to 6730m peak. After a week October 1, we pitched Camp 1 (6700m) on the ridge just passed over this peak.

Then, a temporary Camp II was placed near the second col (6250m) on October 9.

Next 3 days were spent to put 7 pitches of fixed rope on knife-edged ridge, so called "cockscomb". It became the most difficult stage of the expedition.

On October 13, first summit push was done from the temporary CAMP II, but failed mainly by lack of fixed rope and snowbars. All six members including 4 climbing Sherpas got down to BC for rest and supply.

The second stage of climbing began on October 17. Next day, after struggling long traverse, we could place new Camp II on the snow hump just behind Triangular Rock Peak (7100m). As two climbing Sherpas returned in bad physical condition on the way, remaining three occupied Camp II.

October 19, it was splendidly cleared up and temprature fell to  $-20^{\circ}$ C. Proposed direct ridge route to the summit was abandoned because of its difficulty in passing through overhanging rocks. However, we could find an alternative route, traversing to right side. It seemed to be the most feasible route to avoid rock obstacles and get to summit ridge. Three members, M. Taniguchi, T. Kitamura and a Sherpa, left Camp II at 7.00 am. After a few pitches climbing up steep snow ridge, Sherpa got out of the party with too much fatigue. Then we traversed about 300 meters to the right and were lucky enough to get to the last summit ridge, from where direct climbing up more three pitches led us to the real summit. We reached the top at noon.

The highest point was so small an ice pyramid as we could only hold it with arms, not stand on it. We enjoyed unexpected close view of Mt. Everest and lot of high peaks around us.

Members: Tamotsu Ohnishi (Leader 54), Mamoru Taniguchi (48), Keiko Nishihira (44) Takehiko Yanagihara (35), Toshiyuki Kitamura (34)

Sherpas: Ang Phurba Sherpa (Sirder 36) and three others.

# The First Successful Ascent of Mt. Ratna Chuli: A Report of the Nepal Police-Shinshu University Joint Himalayan Expedition 1996

### Mitsunori WATABE

### 1. Approach

This expedition was organized by The Academic Alpine Club of Shinshu and Nepal Police Mountaineering & Adventure Foundation. Four members of the expedition team from Shinshu University left Kansai International Airport August 21, and another four on September 1. We landed at Kathmandu on the evening of the same day, where we were warmly greeted by the Nepalese Police. We passed through customs and immigration very easily, and we were able to use the Police Academy gym to pack our loads for the expedition. Muggy monsoon conditions kept us in a sweat as we worked on our packing. We also busied ourselves visiting local authorities and making appropriate greetings.

On September 6 at the Police Academy, the Chief and Officers of the Police gave us a send-off party to cheer up the members of the Joint Expedition Party. We left Kathmandu the next day in three buses (two of them for the porters) and two trucks. On the way we discovered that monsoon rains had flooded a river which washed out the highway, making it impossible to drive any further than Dhumre.

On September 7 we put together a caravan made up of 178 porters. We left Besi Sahar on September 10 and caravaned along the Marsyendi River in the rain. We arrived at Koto, the entrance to the Nar Khola, on Spetember 14. We were able to spend the nights in lodges located along the highway so far.

On September 15, we replaced some of the porters. As we passed through the Nar Khola, a steep path stretched below us. Landslides and the collapse of the rocky base of the road blocked our entrance to the gorge. Because falling rocks could be dangerous, we were all when we managed to pass through the gorge. On September 18, we arrived at Phugaon at the altitude of 4,000m. We were surprised to see homes standing at the very end of overhanging terrace. It was really unusual sight.

On elevated ground on the other side of the village stood a temple of the Nyingma sect called Tashi Gompa. We all worshipped at the temple, where the priest's family recalled the Gyaji Kang Expedition and welcomed us warmly. They gave us good-luck amulets and prayed for our safety and success.

On September 19, we passed Mt. Nemjung (7,139m), the largest peak in Himlung Himal. It was first successfully ascended by a party from Hirosaki University who

scaled its south-eastern end called Dudh Khola in autumn 1983. We traversed the end of the Panguri glacier which flows from Gyaji Kang River, reaching Panguri Kharka (4,600m), a plateau located at the left shore of Phu Khola (5,200m) where we set up our Base Camp (BC). On September 22, we asked a priest from Tashi Gompa to come up to our BC and conduct "Phuja" according to Lamaistic religious rituals.

We prayed for safe climbing. Most of the Japanese members set up relay bases Phu and Pangri Kharka where they made acclimatization exercises. On September 25, the Japanese members regathered in good health at the BC for climb.

### 2. Challenges to the Summit

On one side of the BC. we had a close view of Himlung Himal. A party from Hokkaido University accomplished the first ascent of this mountain. From the top of the moraine just above the BC (5,400m), we could see the entire figure of the graceful Ratna Chuli.

We followed the moraine and a valley on the right shore of the left-side glacier and established ABC (the Advance Base Camp) at a point where the glacier met the south ridge of the col on Ratna Chuli's western peak (5,500m). By September 26, we had almost completed carrying our loads up the ABC. On the next day, however, snow began to fall and it didn't stop until September 29, We utilized this forced 3-day stay for doing more acclimatization exercise. Meanwhile at the BC, Penba Tshering, our kitchen helper, became paralyzed on his right side. Although we called for a helicopter to rescue him down, adverse weather prevented his being picked up until October 1. Fortunately, he made a good recovery and came to see us in good health on our return to Kathmandu.

On September 30, we attempted our first climbing to the summit. The six climbers of the first summit team were L. Tanabe, Uchida, Ale, Nul, Dulga and Tulu.

Before returning to the ABC, they had climbed up the southern ridge of the glacier, creating a route through a vast snow field where we planned to construct C1.

It took 5 pitches of fixed rope between ABC and C1. Other members carried the loads up to ABC and C2.

On October 1, after setting up C1, the first summit party completed the rest of the route they had set up the day before along the southern ridge. This southern ridge required 19 pitches of fixed rope. When this work was completed, the party descended fixing 3 more pitches of rope from the western ridge pointing toward the main peak and reaching the spot where we had planned to set up C2. The party then returned to C1 using snow bars all through. Because the weather began to deteriorate on October 3, they decided to postpone the first attempt. They left C1 and returned to BC. Bad weather continued through October 5 with snow fall even at the

BC.

Although the storm ended on and weather recovered October 6, we refrained from doing any activity taking into consideration of fresh, heavy snow fall.

On October 7, the same party once again challenged the summit. They climbed up to C1 through ABC, and on the next day set up C2 (6,550m). October 9 looked fine despite strong winds. Still the party waited until 7:00 A.M. before leaving C2 to descend the steep slope leading to the main summit col (6,400m). At the steepest part, 3 pitches of rope had been fixed. The col itself was a wide plateau. Fixing ropes on a hard, crusted snow wall, the party ascended from the col toward the main summit.

When the party was within 100 m of the summit the physical condition of a member (Uchida) became bad and it was also out of ropes. The Nepalese members were reluctant to climb in staccato and insisted on returning. Thus, the second challenge was declined.

We knew the third attempt would be our last opportunity since time was running out for us. We could afford to make no mistakes on our last attempt. To this point we had divided into 3 parties, but we replaced the members of the first summit team to three (L. Tanabe, Ale and Tulu), and chose six members to act as support Sawada and Dulga were in charge of supporting the summiters above C2. Because no problems developed, these two members were able to join the first summit party.

The rest of the members gathered at C2, so each could join either the second or third team to make the summit.

The weather continued to be after October 6. On October 11, at C2, we watched the passage of migrating cranes. We were deeply moved by the cranes flying in various formations against the shining azure sky above.

On October 12, the first summit party and support party left the BC. They climbed up to C1 via ABC on October 13. On October 14 at 7:00 A.M., 5 members (Tanaka, Ale, Tul. Sawada and Durga) left C2 and successfully made the summit at 12:10 P.M. It took 3 pitches of rope from the spot where they had given up the ascent to the summit last time. Thus, they were standing on the top of Mt. Ratna Chuli, a jewel of a summit of which we had long dreamed. The summiters returned to C2 at 15:30, and returned to the BC on October 15.

On October 16, the second summit party (L. Watabe, Nomura, Hanatani, Joshi, Nuru, Ful) successfully ascended to the summit. The weather was in our favor; it was fine and the wind was mild. In the far north the view of Mt. Lunpokanri in the Trans Himalayas could be seen, and to the south four mountains of Himulung Himal on the other side of the valley of Phu Khola could be seen. Behind them were the majestic figures of the Great Himalayan Mountains including Mt. Manaslu, Mt. Annapurna, and Mt. Dhaulagiri.

On October 18, the third summit party (L. Uchida, Kaneko, Kobayashi, Sivakoti, Damber) succeeded in ascending the summit. With this ascent, all members had climbed up to the summit of Mt. Ratna Chuli.

On October 19, we demolished C2 and returned to the BC. The next day, C1 and ABC were demolished. We carried unused ropes, foods and garbage down to the BC and completed all the mountain climbing activities.

# The Successful Ascent of Mt. Chomo Lhari: A Report of the 1996 Japan-China Joint Chomo Lhari Expedition

### Yoshihiko MIYAMOTO, The Nagano Alpine Club

### 1. How the Japan-China Joint Party was formed:

For a decade from 1981 to 1990, the Nagano Alpine Club and the China Alpine Club had joint meeting to study the skills of joint mountain climbing. The two alpine clubs visited with each other to have those meetings. Such efforts had been continuing even today, and bore fruits in many ways.

In order to commemorate the past joint efforts and also with an expectation to further deepen the friendship and trust, the China Alpine Club proposed us a joint attack of Mt. Chomo Lhari.

Because the Indian border was in close proximity of Mr. Chomo Lhari, foreign climbers were not allowed to get into the area where Mt. Chomo Lhari stands. Due to this reason, the attack from the Tibetan side has never been attmpted before.

The attempt of the joint party to climb Mt. Chomo Lhari from the Tibetan side resulted in a great success with all participants (25 members including and cooperative members) successfully attaining to the summit.

#### 2. The Outline of the Joint Party

- i ) Name: The Japan-China Chomo Lhari Joint Attack Team 1996
- ii) Time: August-September, 1996
- iii) Sponsor: The Nagano Alpine Club, The China Alpine Club
- iv) Members:

Japan Party leader: Yoshihiko Miyamoto (52)

Assistant leader: Makoto Yamada (39)

Attacking members: Akira Hiratsuka (45), Yukihiko Kato (63),

Atsushi Mio (32), Dakao Doi (46), Shinsaku Tanaka (36),

Takuya Matsutani (24)

China The person responsible: Zhang Jiang Tuan (43)

Attacking leader: Luo Shen (33)

Members: Kun Sang (39), Kai Cun (32), Tenzin Dorji (36),

Jio Cuo (36), Jiji (25)

Press 9 people including NHK

Cooperative members and Official 18 people

v) Goal: To climb Mt. Chomo Lhari (7.325m)

### 3. The Outline of the Actions

- Aug. 17 BC was set up (at the altitude of 4,700m)
  - 19 C1 was set up (5,300m)
  - 26 C2 was set up (6,000m)
  - 31 Withdrawal to BC due to a heavy snow fall
- Sept. 4 Climbing resumed
  - 5 C3 was set up (6,850m)
  - 8 The first attack party consisting of 10 members successfully attacked the summit
  - The second attack party consisting of 15 members successfully attacked the summit
  - 21 BC strucken

#### 4. Notes

- Mt. Chomo Lhari is a very beautiful mountain, which local people call "A Fairy's Peak".
- 2. Mt. Chomo Lhari was said to be conquered twice in the past: in 1937 and 1970. No records of those two attacks were left. This time, we took the route of the southern edge from the Tibetan side. The edge is a border between Bhutan and China.
- 3. From BC to C1, we climbed a meadow and moraine beside a glacial lake, and then went up the glacier with lots of seracs.
- 4. From C1 to C2, we passed through an ice fall which was 200m high, climbed the snowy field and reached a col on the border line. It was very foggy at the col.
- 5. From C2 to C3, we had to climb a big wall covered with snow to reach the southern edge. We precisely followed the edge. We fixed the rope throughout the entire route. We set up C3 behind a serac.
- 6. From C3 to the summit, we climbed a steep edge. We had to traverse one spot which was just like the knife-edge. The summit was long and narrow, and was covered with new snow.

### Hkakabo Razi, Mysterious Mountain in Myanmar

### Takashi OZAKI

In the northern part of Myanmar, in the remote corner of Kachin State, a mysterious mountain, vigin and symbolic Hkakabo Razi (5881m). For the first time challenged in Joint Friendship Exploration-Expedition Myanmar/France/Japan, with Ozaki Family, and succeed to conquer the top on 15th September 1996. This mountain is the highest peak in Myanmar.

Takashi Ozaki, expedition leader did a recongition, with his son Makoto (10 years old) and two Myanmar members between January and March 1995, but could not even reach the Base Camp due to deep snow and bad waather. Almost no data could confirm its reality. This mountain was mysterious, like defended from the human invasion by subtropical rain forest, numerous tumultuous rivers and very steep valleys.

The same year, in August, the first endeavour is made by the north side of Hkakabo Razi during the heavy rainy season. From the Base Camp, they shape up the route by a "Grand Pilier d'Angle", and cross a pass to reach the upper glacier covered by seracs. They could reach 5100 meters high, near the submittal ridge, but finally had to retreat, and re-challenging again in 1996.

18th of July start from Yangon to walk from Putao about one month in the jungle and arrive to Base Camp on 20th August. Immediately, from the next day, they start to make the route to reach on 28th August, over 5 pitches rope to compare with 1995, and settle the Camp II on the Bergschrund. At first they thought, it would be easy, but the snow condition was very bad and difficult due to the high temperature. Snow ledge was very fragile and to escape, they had to trace alternating from left to right (South to North) on the submittal ridge. Gas stove troubles made them stop this expedition for days, but 10th of September they started again. On 12th September, leader Takashi Ozaki and Nyama Gyaltsen, Myanmar member, entered the final camp, where they were stocked by falling snow and bad weather for two days continue. Ultimately, they reached the summit of Hkakabo Razi at 3.12 pm on 15th September. After three years' effort to realise this challenge, Hkakabo Razi is no more a mysterious mountain.

# THE DEVELOPMENT AND NATURE PRESERVATION MOVEMENT OF MT. CHOKAI

# Focusing on the Investigative Documents Concerning the Habitat of the Inuwash (Golden Eagle). by the Committee of Nature Preservation

Mt. Chokai is a well-known mountain in the northeast region of Japan. The mountain covers a large area, spreading between the prefectures of Yamagata and Akita with its lower slopes being washed by the Sea of Japan.

At th coldest time of winter the seasonal wind blows and hits the mountain bringing heavy snowfalls which keep most people away. Even during the hottest time of summer the remains of the snow cap can still be seen, together with green marsh lands, ponds and a high-altitude lake. The beautiful mountain crest stretches along the coastline of the sea, with contrasting rocky peaks and deep green valleys providing a wonderful variety of scenic views which continue to allure and fascinate people year after year.

Many alpine plants, such as Chokai-fusuma, the forests, bird life and animals, are all representatives of a rich ecosystem and the wealth of nature. All these can be found on Chokai mountain.

In 1984 the local town of Yahata, Yamagata prefecture, began to plan a large scale ski resort on the southern slopes of the mountain. The following year a leading developer, Kokudo, KK, with governmental support of the prefecture, made preliminary plans for the resort.

However, the local "Mount Chokai Environmental Protection Society", represented by Mr. Shoji Ikeda, began a signature-collecting campaign opposing the resort development. The campaign faced an uphill fight because many local residents wanted economic progress through building a ski resort. The movement persevered and in 1990 at the Alpine Club nature preservation meeting held at Mishima, Shizuoka prefecture, Mr. Junji Sato (a member of the Yamagata branch) reported on the need for support from the Alpine Club.

On receiving this report, the Japanese Alpine Club issued a protest against the development to the Minister of Environment, the Governor of Yamagata prefecture and the mayor of Yahata. Obtaining the support of the Alpine Club's Nature Preservation Committee became the turning point for this whole movement.

The opposition against the proposed development plan was then taken up by the local T.V. and media. This in turn made local residents aware of the importance of environmental problems and greatly encouraged those who were actively involved in

the movement from the very start. When it was discovered that the proposed ski resort area was the habitat of the golden eagle, an endangered species from the Red Data book, this then became the main objective for those working on the issue.

A golden eagle investigation group was organized with Mr. Sato as the leader. As a result 268 days of research over a period of 3 years, including working in extreme hot and cold weather conditions, the group finally located a nest. This was important evidence to help their cause. Furthermore, the eagles were raising their young annually with success in propagation.

The excellent quality of the natural environment was further grounds for protection.

Once more the environmental assessment was questioned. Finally, after eleven years of hard work, in July 1997 Kokudo KK gave up their battle of developing the ski resort. The enforcement of the development plan for a resort then became even more difficult.

With the decline in the national economy, many similar development plans became impossible and together with the increasing concern over environmental issues, helped to save Chokai mountain. However, the long environmental battle succeeded because of the cooperation and hard work of the local environmental activist campingner, Mr. Jiro Yamada (then Alpine Club president), Mr. Masanobu Sawai (Alpine Club chairman), Mr. Tsunehiro Matsumoto (Alpine Club director) and Mr. Murakami, Mr. Ohashi and Mr. Umezu (successive heads of Yamagata branch).



# 鳥海山のスキー場開発と自然保護

イヌワシの生態調査記録を中心に

自然保護委員会

これは日本山岳会自然保護委員会の理想的な活動の記録である。始まりは 1984年(昭和59年)全国的なリゾート開発ブームにのって、鳥海山南麓の山 形県八幡町が大規模スキー場開発を計画し、翌年にはコクドの参加を得て国、 県の後援のもと、実現に向けて動きだしたことであった。

最初に反対に動きだしたのは、地元の鳥海山を愛する人たちで、署名運動を 展開したが、開発による町の発展に期待する声も強く、運動は孤立と苦戦を強 いられながら、粘り強く続けられた。

鳥海山の開発計画の情報が、山岳会自然保護委員会にもたらされたのは、遅く 1990年(平成 2 年)のことであったが、運動が全国的な問題になったことが、ひとつの転機になった。自然保護委員会の山形県、八幡町に対する開発変更の要望書提出を、地元のテレビ局などマスコミが採り上げ、地元住民が環境問題に関心を示したことが、孤立気味だった反対運動の人々を勇気づけたのである。

そして計画を白紙撤回させた決め手となったのは「絶滅危惧種」のイヌワシの営巣地発見だった。13年に亘る粘り強い地元の運動にもよるが、バブル経済が崩壊し、林立していた各地のリゾート計画の多くが挫折や中止に追い込まれていることも幸いした。当初からスキー場計画は採算的に疑問があった。この環境活動が八幡町を救ったといえよう。 (山岳編集委員会)

## スキー場計画から中止までの自然保護活動

1984年 (昭和59年) から1997年 (平成9年) までの経緯

松本恒廣

#### はじめに

鳥海山は名山である。山容は大きく山形、秋田両県にまたがり、長くたなびく裾野を 日本海が洗っている。厳冬期はシベリヤからの季節風をまともに受けて、積雪多く人を 寄せつけない。盛夏でも万年雪が残り、池塘を持った湿原、山上湖、海岸線まで続くの びやかな稜線、対照的な岩峰、深い谷など複雑な自然と、恵まれた景観は人を魅了して やまない。チョウカイフスマに代表される多種多様な高山植物や、豊かな生態系をもっ ている。

1984年(昭和59年)リゾート開発ブームにのって、南麓にある山形県八幡町が"町発展の起爆剤"として大規模スキー場計画の構想を打ち出した。第3セクター方式で計画されたが、うまく進まず、株式会社コクド(旧名 国土開発)に接触、当初は採算面で難色を示していたといわれるコクドを説得して、1985年11月に参加することが決定、計画が動き出した。その後、林野庁主導の森林空間総合利用整備事業と称するリゾート構想の導入が発表され、柱として「野外スポーツの森」ゾーンを設け、そこにスキー場がつくられることになった。

地元住民の大部分は無関心か、開発による町の発展を期待する人も多く、計画に反対する人は少数であったが、孤立に耐え粘り強く反対運動を展開した。鳥海山に 690 回以上登っている池田昭二会員など鳥海山を愛する人たちが計画反対の署名運動を展開しており、かつて鳥海山の主と称された故齋藤清吉さんに薫陶を受けた佐藤淳志会員などが協力していた。

そして、このスキー場計画地周辺で、天然記念物の猛禽類「イヌワシ」が発見された のである。イヌワシは国内最大級の鳥で、環境庁のレッドデータブックに絶滅危惧種と して指定されている。英語名ゴールデンイーグル、中国名「金鷲」と呼ばれている。

飛翔時は両翼2メートルにおよぶ大型のワシで、いまや全国に300羽足らずしかいない。近年の開発により生息地が狭められ、その繁殖成功率は危機的状況にある。しかも食物連鎖の頂点にあって「環境のバロメーター」として貴重な存在となっている。そこで自然保護委員会としてはスキー場開発の是非を論ずる前に、判断材料のひとつとしてイヌワシの生態を調査記録し、提供することにした。

とくに山形県には観察記録がない。しかも最重要な繁殖活動期の調査、すなわち産卵、 抱卵期が1~3月という厳冬期で、強風豪雪地帯の作業は困難が伴い、冬山経験豊富な 現役の山岳会会員が調査したことに意義があった。

佐藤淳志会員(酒田市在住、自然保護委員)をはじめとするグループ9人が、イヌワシ調査班を結成、93年10月から今日まで268日間にわたりイヌワシを追い続け、苦闘の結果、調査開始から127日目に営巣地を発見したのである。この間調査の指導を受けたこの道の第一人者、日本鳥類保護連盟学術専門委員で岩手県立博物館の関山房兵氏をして「ついにイヌワシの巣が発見された。偉大な素人集団の勝利だ。純粋な山男の賜物だ」といわしめた。そして、この粘り強い行動がスキー場開発を10年以上遅らせ、ついに1997年(平成9年)9月5日の八幡町長による中止声明につながったのである。

#### 八幡町のスキー場計画と反対運動

皮肉なことに、スキー場計画は故齋藤清吉さんが 1960 年(昭和 35 年)高松宮殿下と滑った通称「宮様コース」と呼ばれる南斜面を中心に計画された。即ち標高 1 200 メートルの滝の小屋付から標高 600 メートルの湯の台までのコースを拡大し、延べ 3 345 メートルのゲレンデにしてゴンドラリフトを設置、総工費 27 億円、面積 293 ヘクタールという大規模な開発計画である。

この時期、すでにコクドはスキー場のほかに「八幡鳥海ゴルフ場」と「八幡鳥海プリンスホテル」計画があることを、地元紙にスクープされ、スキー場を加えた3点セットを商標登録していることが判明した。この間、一握りの鳥海山を愛する人々による孤独な反対運動が続けられていた。日本山岳会自然保護委員会に情報がもたらされたのは1990年のことで、静岡県三島市で開かれた自然保護全国集会に出席した山形支部の佐藤淳志会員から現況の報告があり、いよいよ山岳会自然保護委員会としての運動が展開されることになった。以下は1990年以降の経過報告である。

## 1990年(平成2年)山岳会の反対要望

9月、第16回自然保護全国集会は静岡県三島市で開催された。山田二郎会長の開会 挨拶で始まった集会において各支部から報告が行われ、その中で、山形支部の佐藤淳志 会員から「鳥海八幡スキー場計画と環境問題」について報告があったのである。この問題提起が集会出席者の注目を集め、早速現状を調査して「山岳会として、どのような行動がとれるかを検討する」との緊急動議が採択された。

10月に入って、松本恒廣担当理事、澤井政信委員長、本多勝一、麦倉啓(山形支部担当)、斎藤かつら各委員と山形支部から村上勝太郎支部長、金森繁三郎、池田昭二、佐藤淳志会員の9人による合同調査が行われた。その調査で、すでに建設予定地には営林署の許可を得て、ところどころに杭打ちがされており、測量の邪魔になる支障木の除去が始まっているのが判った。

この調査の後、前記の9人に加え、自然保護委員会の伊藤 敞、中村純二両委員を加え、11人による小委員会を設置して、今後どのように対応すべきか、種々討議を重ねた結果、鳥海山の自然破壊につながるものとして、次の4点を趣旨とする要望書を提出することに決まった。

- ① 大規模な索道や付帯設備の建設は「鳥海山国定公園の保護および利用に関する基本方針」に反する。
- ② 日本有数の冬季豪雪強風地帯に属するため、スキー場には危険が伴う。
- ③ 南麓斜面は平均斜度9度でスキー場の魅力に欠け、営業が成り立たない懼れがある。
- ④ 地元住民の創意を活かし、貴重な自然を壊すことなく地場経済が発展を続けるような道を選ぶべきである。

#### 1991年(平成3年)山岳会が反対の要望

2月の理事会に「鳥海山南麓のスキー場開発方法の変更を求める要望書」を上程、原案は会長名であったが、地元山形支部の意見統一に時間がかかり、急を要するところから理事会の承認を得て委員長名で要望することとし、八幡町長へ、また写文を山形県知事、コクド社長へ提出することとした。地元八幡町へは2月23日、松本理事と澤井委員長が村上支部長等を同行のうえ役場を訪問。要望書を提出するとともに約1時間町長はじめ町役場関係者と懇談した。この時の模様はマスコミの取り上げところとなり、地

元に大きな関心を喚起させるに充分であった。ちなみにJAC が鳥海山の自然破壊に対して抗議したのはこれが初めてではない。昭和55年、秋田県企業局による北東斜面の開発構想に対し当時の西堀栄三郎会長、織内信彦委員長連名による要望書を秋田県知事等に提出したことがある。その後、この計画は実現しなかった。

## 1992年 (平成4年)

今回の開発行為計画予定地が国定公園の第三種特別地域にあたるところから自然環境 保全審議会の認可を必要とし、それには環境アセスメントの提出が義務づけられている ため八幡町側はその作成に努力していたこともあって、この間こう着状態が続いた。

#### 1993年(平成5年)イヌワシ調査班を結成

年が明け、表面的には顕著な動きは見られなかったところにイヌワシの存在がクローズアップされたことから急に慌しくなってきた。昔からこの山麓には"大きな鳥がいる"ことは知られていたが、それが何という鳥かは土地の人々は全く関心を示さなかったという。佐藤会員が、たまたまこの鳥に興味をいだき、何回かの予備調査の結果、それがイヌワシに間違いないと確信する。このことは後日合同調査を行った山形県委嘱の猛きん類専門の今井 正氏、関山房兵氏等専門家によって確認されたのである。従来から秋田側には生息していることは知られていたが、今回南麓で確認されたことによって、この営巣地が開発予定地域近くにあれば「絶滅危惧種」の存在をおびやかすことにもなる。しかもその繁殖行動期間はスキー場の営業期間と重なるものであり、より慎重な対応が求められる。そこで我々としては「大規模スキー場開発の是非」を問う前に純粋な学術的立場からイヌワシの生息調査をしてみようと思いたったのである。

他方、県側でもイヌワシの存在を無視できなくなり、生息状況や営巣地を探る現地調査に乗り出す旨公表した。今までオオタカ、ハヤブサの生息は県総合学術調査等で確認されていたがイヌワシについては未確認だったものである。その後「自然を守る会」と県自然保護課との話し合いで県側が「営巣地調査等の結果が出ないかぎり建設の許可はしない」と言明したことから、平成6年オープンを目指し、是非とも11月中にと希望していた審議会開催は難しくなった。一方、八幡町は計画の一部手直し案を発表。スキー場の当初の標高1,200メートルを1,170メートルに下げ、ゴンドラをリフトに改めるなどして植生上、景観上考慮したと云う姿勢をみせた。

この年の全国集会は尾瀬の玄関戸倉の「ロッジ長蔵」に藤平正夫会長をはじめ全国 11 支部 57 名の会員を集めて開かれ、「日本山岳会の自然保護はどうあるべきか」をメインテーマに熱心な討議を重ねたが、分科会における「自然破壊に対する反対運動」の中で佐藤会員より鳥海山でイヌワシの飛翔が確認され、独立峰で生息しているとすれば非常に珍しい事例であり、この観察をしてみたい旨提案があり、これを委員会活動の一つとして認めることも決議した。そして佐藤委員を中心に地元 JAC 会員や他山岳会員有志による調査班を組織し、取り敢えず 10 月中旬から 11 月下旬まで毎日泊りこみで飛行時間や経路、飛翔範囲、場所、数などを記録すべく一連の調査をスタートさせた。そ

の後この我々の調査計画を知った県から合同調査の申し入れがあり、県側から 3 名、八幡町から 5 名、守る会から 2 名による調査が 10 月 14 日に行われた。この時に一度に 4 羽のイヌワシが確認されたのである。場所もなんとスキー場開発予定地点、番(つがい)とみられる成島 2 羽と亜成島 1 羽。今年巣立ったと思われる幼島 1 羽。日本自然保護協会の横山保護部長によると 4 羽を同時に確認したのは全国的にも非常に貴重な報告であるとのことであった。以後この生息調査は JAC と県側(調査専門業者に委託)各々独自で続行することになる。何よりもこの調査の最重点目標は営巣地を特定することにある。そうすれば必然的に個体の行動範囲が決定される。

一般的には半径約6~14 キロが捕食行動等を行う "行動圏"、その内側の半径約3~5 キロが求愛営巣行動を始め年間を通じてイヌワシに利用される "高頻度利用域" と大別される、そのほぼ中心に営巣地があるとされている。そして我々は、これまでの飛翔観測データから、高頻度利用域内にかかるスキー場計画地から1~3 キロの地点に営巣地があるのではないかというところまでしぼりこんだ。しかしこの地点でも町側は相変わらず7~8 キロ離れた行動圏の外、秋田県側に営巣地があるのではないかと云う見解をくずしていなかった。また、当初 JAC が要望書を提出した直後は「どうせ一過性のもの、時間が経てばほとぼりも冷めるのでは」とみていた節があり、その後イヌワシの調査を始めたことから俄然我々の行動に注目するようになった。一方、高橋県知事は当初の年度内事業決定は調査結果が出るまで待つという慎重な姿勢を示した。

11月27日、調査班による中間報告会を開き、10月13日から11月24日までの調査結果をまとめ県自然保護課へ提出、東京では澤井委員長が環境庁自然保護局を訪問、このデータを報告するとともに今後の調査方法につき助言を求めたのに対し、鳥獣保護業務室の小林 光室長(JAC会員)も「飛翔の観察も重要だが、やはり営巣地や採餌地を特定させないと保護対策をたてにくくなる」と、特に営巣地の発見が急務であると力説された。

## 1994年 (平成6年)

1月9日付の全国・地方紙は一斉に「イヌワシ保護か、スキー場開発か」「国天然記念物イヌワシ霊峰に編隊飛行」「反対派に援軍」等の見出しで共同通信の配信によるスキー場計画関連記事を写真入りで報道した。前年末にはフジテレビ系からも放映され、これらマスコミによる影響からか我々のイヌワシ調査も広く理解されるようになった。3月26日、澤井、松本両委員が現地視察。この時成鳥1羽の飛翔を認めた。その後の報告会では週末によくみかけるスノーモビルや航空自衛隊による救助訓練や東北電力による送電線架設予備調査の際のヘリコプター騒音問題が取り上げられ、この対策を協議した。

6月10日、八幡町側はイヌワシ以外の環境アセスメントの作成がほぼ完成し、県自 然環境保全審議会に提出する時期が間近であるとことを公表した。

10月28日、第131回国会衆議院環境委員会に於て岩佐恵美委員(共)は鳥海山スキー 場開発計画を取り上げ、宮下環境庁長官、奥村自然保護局長に政府側の意向を問い質し ているが、県の方でしかるべく判断するであろうという通り一遍の答弁に終始した。

イヌワシの観察を続けている佐藤委員によると時として思ってもみない現象も眼につくと云う。その一はクマタカの番の飛翔を確認したこと。この鳥も国内希少野生動植物種に指定されている。またイヌワシが自分の縄張りに入って来たオジロワシを追い出す様の撮影に成功。海に生息するオジロワシが山に生息するイヌワシの縄張りに入りこむ種間干渉している貴重な写真と専門家から太鼓判を押された由。これらの事実はこの山域の自然環境が如何に豊かであるかを証明しているともいえる。

## 1995年 (平成7年) イヌワシの営巣地発見

この年の3月、調査班として過ぐる93年(平成5年)10月13日から1年5ヶ月間 延べ117日にわたった観察結果を取り敢えず報告書としてまとめた。未だ営巣地を特定 するまでにはいたらなかったが、①間違いなくこの南麓にイヌワシが生息していること、 ②従来から知られている秋田県側のそれとは異なる個体らしいこと、③営巣地が近くに あるらしいこと、④子育てを行っていること、等がこのデータから推測された。時に同 じくして事業主側が作成していたスキー場予定地とその周辺の環境影響調査 (環境アセ スメント) が完成、自然環境保全審議会自然公園部会(国定公園での開発行為などの可 否を問う知事の諮問機関)が3月17日に開催されるとの報に接したのである。当委員会 としては、これまでの観察結果からスキー場予定地周辺に営巣地がある可能性が極めて 高い、くれぐれも慎重に審議して欲しい旨を、理事名の文書で審議会大津会長、県自然 保護課宛に発送した。重大な関心をもって、迎えたこの審議会はコクド側から提出され た「開発による影響は極めて少ない」とするアセスについて討議されたが、焦点はイヌ ワシと希少種のワイ性ブナで議論百出、結論に至らず次回へ持越しとなった。これまで 審議会開催は単なる通過儀礼にすぎず、ほぼ一度の議決で答申するのが慣例となってい ると言われるにしては全く異例の結果となった。結論持越しとなったことで更に審議会 メンバー全員に前述文書を送付した。そして28日県庁内で再開された審議会は「イヌ ワシは貴重な生物でもあり、今後着工までの約一年にわたって営巣地確認のための調査 を慎重に行うべき」との意見を付して事業決定を可とする答申を議決した。更に「調査 の結果、イヌワシの生息に大きな影響を与える場合は事業決定の取消しもありうる。」 との部会長発言もあり、このスキー場開発の鍵を握るのは営巣地を含むイヌワシの生息 状況次第となったのである。とにかく着工認可をここまで引き伸ばし得たこと、更に一 年間の猶予が生じたことは我々の努力が実ったものである。審議会の決定事項にあるよ うに、この開発の可否はすべて調査結果にかかっているので山岳会員としての開発云々 以前の立場にたって事にあたることも再認識し、これまで通り調査を続行し鳥海山全体 のイヌワシ生息体系を明らかにしようとの方針を再確認した。

この審議会答申から1ヶ月足らず、知事による条件付事業決定の4月19日から僅か4日後の4月22日、佐藤淳志、大西重紀両会員等調査班のメンバーは遂にイヌワシの営巣地と幼鳥を発見したのである。数日後、関山氏もこれを確認した。場所は鳥海山南麓の日向川上流、標高500~550メートルのスキー場開発予定地から僅か1.45キロ、岩

場の中腹に直径約3メートル、高さ1.5メートルの、関山氏によれば2~30年も前から使われていたのではないかと云う巣であった。ここまで2シーズン、育難期間を含む20ヶ月、入山日数127日、その都度営林署への入林許可を取付け、イヌワシを刺激しないよう少人数のメンバーで山に入り、各地に設けた観測ステーションから観察を続け、飛翔の軌跡を地図上に記録し、それらを解析して季節毎の高頻度飛翔域や採餌場の確認とその餌を運ぶ方向を見定め、また冬場には一日中同一場所で風と寒さに耐え、辛抱強く集中力を持続させながら、ほんの数秒、数分間の瞬間を見逃さぬように粘り続ける。小さな沢の崖地一つ一つを雪崩の危険をおかしてつぶしていく、山岳人でなければ出来ぬ調査であった。勿論ここまでくるには鳥類の調査にはズブの素人であった佐藤委員自らが調査方法を会得した努力と関山氏の指導によるところが大きかった。

4月25日午後、酒田市役所記者クラブに於て、澤井、佐藤両委員と金森副支部長の三人は記者会見し営巣地発見の経過説明を行った。ただし正確な位置は発表しなかった。関山氏によるとイヌワシの繁殖率は年々低下し、全国で93年5羽、94年17羽しか巣立っていない。鳥海の営巣地は一昨年も繁殖に成功しており、この営巣地確認は全国的にも貴重で意義深いものがあるとのことであった。

5月11日、山形県環境保健部自然保護課の鈴木 隆課長と小松清秀主査が、イヌワシ調査につき協力を依頼に JAC ルームを訪問。大森担当理事が所用欠席のため澤井、松本両委員が対応した。趣旨は県として生態系の調査をして、それを基に環境保全を考える資料とするだけでなく、最終目標はスキー場開発のあり方につき利害関係者を排除した中で広く専門家の意見を聞く場をつくりたい、ついては具体的に営巣地を教えて欲しいこと、また JAC として参画してもらえないかと云う協力申し入れであった。 当委員会の基本姿勢としてはあくまでも「スキー場問題と切り離した形での学術的調査であり、スキー場の開発云々は行政の判断である。」と云う立場をとっていることから若干抵抗があったが、担当理事、委員会の了承を得て全面的に協力することとした。 6月5日、審議会、県、町、守る会の代表を佐藤委員が案内すると云う形で最少人数6名による合同の現地調査が行われ、初めて JAC 以外の関係者はその眼で営巣地を確認したのである。

そして6月21日、山形市に於て第1回鳥海山イヌワシ生息調査検討委員会が開催された。メンバーは、大津 高東北芸術工芸大教授を座長に、小笠原暠秋田大教授、由井正敏農林省森林総研東北支所保護部長、関山房兵岩手県立博物館主任専門学芸員、大沢八州男日本野鳥の会山形支部副支部長、角田 分山形県野鳥愛護会委員、佐藤淳志日本山岳会自然保護委員の7名である。以後その検討内容は非公開で行われた。いずれにしろ、これにより山岳団体としてのJACが県知事の諮問機関に組みこまれ、意見を述べることになる。検討委員会としては次年度3月までに生息調査を行い中間報告をまとめ、引き続き8年度も調査を続行、会合を随時開催し平成9年3月を目途に最終報告書を提出するというスケジュールとなった。今後は県側の委託調査機関とJACの調査が並行する形で進められることになったわけである。

第21回自然保護全国集会は山岳会創立90周年記念式典の翌日、10月15日山岳会ルー

ムで開催した。前日は大森弘一郎委員の主催する自然保護フォーラムに皇太子殿下、雅子妃殿下をお迎えして盛況だったが、全国集会も宮下秀樹、中村純二両副会長を始め 11 支部 14 名の各支部保護委員、一般会員など 40 余名が参加。メインテーマに「鳥海山の自然保護」を取りあげ、佐藤委員がこれまでの経過説明を行った。4 月にイヌワシの営巣地が発見されたことにより県の検討委員会が発足し、開発計画に再度ブレーキがかかったこと、やみくもに開発反対を叫ぶのではなく、このような機会をとらえて生息調査等を行い、そのデータを活用して訴えかければ望ましい方向へ導びけるのではないか、他の自然保護活動の参考になれば、と云うのが我々の思いであった。

## 1996年(平成8年)調査記録作成と営巣地の崩落

その後検討委員会は現地調査等を折り込み繁殖活動を確認しながら進められていたが、 我々としては委員会の結論が出ぬうちにインパクトを与えておいた方が得策と判断し、 93年10月から開始した調査結果を96年3月で一区切りつけ、この間の観察記録を中 間報告書としてまとめるべく作業に入った。項目は①調査方法、②観察結果、③考察、 の3章からなり、観察期間中の全出現記録、推定された行動圏、観察地点、飛翔トレー ス等を図表をまじえて編纂し若干の写真を添付した。当方のデータによるイヌワシが交 尾、抱卵を行う12~2月はスキー場予定地の一部及び西側の地域が主要な狩り場であ り、半分以上が高頻度飛翔領域にあたり、雛を育てる3~5月、幼鳥が親鳥と行動する 9~11 月もほぼ同様となっている。そして予定地上空での飛翔は年間を通じて確認さ れた。一方県側は委託している調査会社からの報告として、予定地を飛ぶ頻度は少ない と聞いているとの見解をとっていた。県は前年12月からの繁殖期における調査は始め てはいるものの、11月で終る予定であり、翌年3月にまとめる報告書は肝心の冬場ス キー場開業と重なるデータが殆どないまま完成させることになり、いずれにしろ今後県 と JAC データとの整合性が問われることになった。環境庁がこの8月に出した「猛禽 類保護の進め方 | によると、狩り場の減少などにつながる大規模に係わる影響調査は周 年行うべきではない、とし、調査期間は、「2期の繁殖期を含む1.5年以上とする」と あるところから、県側の調査は短いことになる。結局は後日、我々のデータが優秀なも のであることが検討委員会で認められることになったのである。他方イヌワシの生態を 記録するには何といっても映像でとらえておくことが一番である。たまたま取材に訪れ たフジテレビ富沢弘行ディレクターの協力が得られ、1000ミリの超遠望レンズにより 個体識別や場所を特定出来る飛翔シーン、営巣地やそこに育つ雛の姿等の撮影に成功し た。富沢氏は別途我々との調査活動を中心にノンフィクション 50 分番組「イヌワシの 棲む山」を制作、後日フジテレビ系で全国に放映された。9月下旬、当方の中間報告書 は編纂を終り、県文化環境部環境保護課、環境庁自然保護局等へ提出した。

11月24日、いつものようにイヌワシを追跡していた佐藤淳志、志田郁夫両会員は思いがけない出来事を目の当りにして衝撃をうけたのである。それは"営巣地の崩落"であった。取り敢えず県にのみ連絡、他には当分の間極秘とした。巣がある岩棚の左側が一部欠落し巣材が崩れ落ちており、自然現象と思われるが勿論イヌワシの姿はなかった。

## 1997年 (平成9年) コクドの撤退で計画中止へ

1月31日、第5回の検討委員会が半年振りに開かれ、前年11月に終了した県の調査に基づく最終段階の検討となった。議論は飛翔領域における営巣期、非営巣期区分と狩り場に集中、特に12~3月間における県のデータ不足が一部委員から指摘され、県、および県の調査コンサルタント会社もこれを認めている。そして大方の委員はスキー場開発がイヌワシに重要な影響を与えることを確認し、この旨提言した。巣の崩落については、同じような例が秋田県田沢湖町の駒ヶ岳山麓で発生した際、県が人工巣を設置して雛の巣立ちを確認した例があるが、再び自力で営巣する可能性もあり、しばらく静観することとなった。

3月、八幡町はスキー場とイヌワシは充分共生出来るとしたうえで全部で9項目からなる全国初と云うイヌワシ保護条例並びに自然環境保全基金の制定創設を柱とする共生策を町議会で明らかにした。

3月10日の第6回検討委員会は県側が、ひたすら影響が少ないことを強調。一部委 員からは既にスキー場をつくることを前提にして討議しようとしているのではないか、 と県側の態度を激しく非難し、調査の解釈は平行線のままとなった。県が開発の影響に ついて結論を出す期限としていた第7回会合は21日開催されたが、前回から尾を引いて いる県側に対する不信感は"開発は生息に影響大"とする委員の意見を無視して作成さ れた県の報告書案で更に増幅され、7人中5人が欠席又は途中退席すると云う異常事態 となった。但し、佐藤委員は仕事の都合で止むを得ず欠席せざるを得なかった。結局、 審議出来ないまま結論は持ち越しとなる。その後、県側は報告書の手直しと委員全員を 出席させるため次回開催日の調整を念入りに行った結果、やっと5月29日第8回会合 が開かれた。これには7人の委員全員が出席。事務局の県側は意見集約のために審議に 提供した「開発によるイヌワシの影響はない」とする素案を撤回、委員の指摘を受けて 修正した新たな素案を示して実質審議を再開。この日は意見交換のみで結論を出さなかっ た。巣の崩落については佐藤委員を含む県調査担当者が今年は営巣しなかったことを確 認。今後は飛翔状況、他に営巣地があるか否か、巣の補修等を含め引き続き検討するこ とになった。7月5日、検討委員会としての最終審議である第9回会合が開催され、イ ヌワシ保護策とスキー場との共存の可能性について7人の委員全員が「開発は生息に何 らかの影響がある」ことで意見が一致した。7月14日、高橋県知事は記者会見で現在の 計画では事業許可は難しいとの認識を示した。そして、7月26日第10回最終の生息調 査検討委員会が開かれ「予定地の約半分がイヌワシの生活に重要な高利用地域にあたり、 影響を回避する必要がある」との事実上計画の見直しを迫る提言を盛り込んだ報告書が まとめられた。

しかし、実際は計画の見直しといっても予定地は東西を沢に挟まれた地形の制約を受け、スキー場上部の標高を下げれば緩斜面となってスキー場の魅力が失われる。このため計画実現を困難視する向きが多くなった。7月28日、報告書は大津座長より高橋県知事へ提出された。これを受けた県知事は「計画の白紙撤回もあり得る」と、また八幡町長は「現計画の縮小は止むを得ないとしても建設は進める」と各々の見解を述べた。

7月30日夕刻、コクドより報道各社に対し次の様なコメントが送信された。「八幡町スキー場計画について」7月28日、鳥海山イヌワシ生息調査検討委員会より、県知事宛に提出された報告書に関する情報、また報道等、非公式ながら拝見させていただいた結果、現在当社としては下記の見解を持つに至っておりますのでお知らせいたします。

記一このスキー場計画は、山形県および八幡町からの要請に基づいて調査をすすめていたものです。自然保護は大切なことであり、支障があればスキー場はつくるべきではないと思います。コクド広報課(発表の全文)。

コクドの事実上の撤退声明のあとも、山形県、八幡町は直ぐには開発をあきらめなかった。8月4日に県からの鳥獣保護部会に保護区拡大案が諮問されたが、スキー場開発計画地域は保護区に含まれていない、など不自然なものであった。山形県の姿勢転換が明らかにされたのは8月20日の県と町の協議会の席上であった。県は「イヌワシの高利用域での開発は認められない」との方針が初めて示された。八幡町は計画縮小など生き残りの道を模索したが、ついに9月5日に八幡町長は「開発計画は中止する」との撤退声明を出し、落着した。

#### おわりに

イヌワシ生息調査報告書最終版の作成をもって、当委員会鳥海部会(澤井政信、佐藤淳志、松本恒廣)の役目も終ろうとしている。今回の一連の調査活動の成果は初登頂の記録にも等しいのであると思うのは自画自賛過ぎるであろうか。「山における真の自然保護とは原生林の伐採、道路工事など大量破壊にこそ目を向けなければならない。松方さんなどの諸先輩はずっと前から提唱してきたことでもある。また自然保護はJACの定款に謳われていること。」(本多勝一会員、新発田市での全国集会にて)

「この  $2\sim30$  年の間にどれだけの自然破壊が行われたか。問題はそのような事例について、日本山岳会が余り発言をしてこなったことだ。ヒマラヤも大事だが、同時に足元の自然保護について、もう少し心を砕いてもよかったのではないか」(岡島成行会員「山」586 号)。いま残された我が国土の美しい山々を守るべく JAC の自然保護活動は、ますます重要性を増していくものと信じている。

最後に、今回の鳥海山の件に関し、現地責任者としてこの問題を取りあげるべく決断された村上勝太郎、支部内の意見統一に尽力された大橋克也、これを現段階までフォローされた梅津 博の歴代支部長はじめ、ご支援頂いた会員の皆様に心より感謝申し上げます。

## 鳥海山南麓イヌワシ調査報告書

(1997年 自然保護委員会) 抜粋

澤 井 政 信

これは自然保護の基礎資料として自然保護委員会が作成した調査報告書からの抜粋である。

## 1) 概要

この報告書は、1993年(平成5年)10月から約3年8ヶ月にわたって鳥海山南山麓 で行ったイヌワシの生息調査をまとめたものである。

以前から秋田県側の奈曽渓谷にはイヌワシの生息が知られていたが、今回の調査によって別の番(つがい)がここ南麓に生息すること、その営巣地を発見してこの番が旺盛な繁殖力を持ち、ほとんど毎年繁殖に成功していることなどを確認した。さらに全調査範囲についても検討し、鳥海山南麓にはこの他に遊佐町管内にも別な番が生息していることも確認した。

## 2)調査区域

調査区域は主として山形県八幡町および遊佐町管内の日向川上流域で、図1の実線で 囲まれる範囲のおよそ8,715 ヘクタールを対象とした。まず営巣地探索のために重点的 調査区域をその中の斜線で囲まれるおよそ3,750 ヘクタール範囲として集中的に行った。 (参照 図1 鳥海山南麓での調査区域)

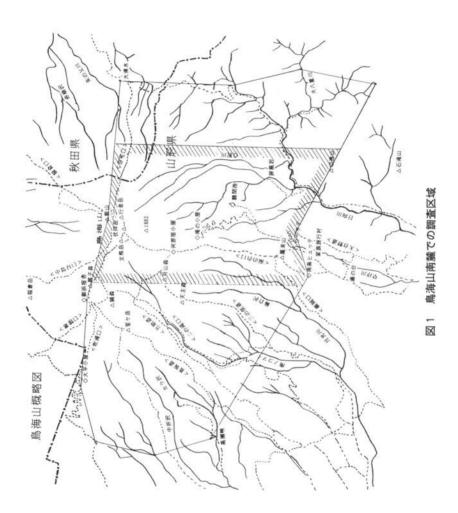
#### 3) 調查方法

図1に示した全調査範囲が見渡せる観察ステーションを合計 32 箇所設置し、必要ならば幕営して早朝よりイヌワシの出現、飛翔状況を観察した。

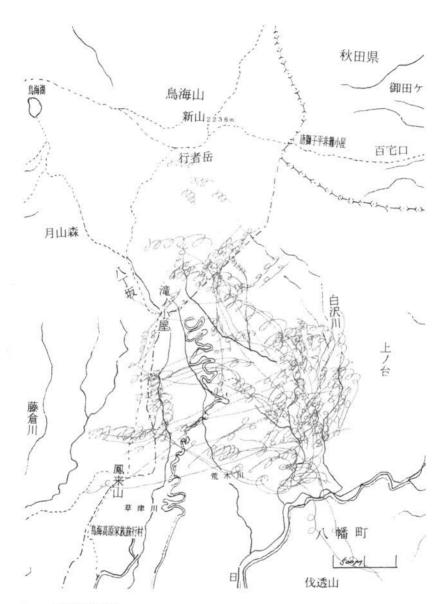
1993年10月に調査を開始して以来、ほとんど毎月入山して調査を行った。約3年半の間で調査日数の合計は268日、そのうち天候その他の事情で有効に観察できた有効調査日数は165日であった。冬期は天候の関係で有効な調査ができないことが多かった。有効調査日のなかで実際に観察できた有効観察時間の合計は1,015時間30分に及び、そのうち97時間35分にわたってイヌワシの飛翔を観察することが出来た。これは平均確認率として9.61%になる。

また、この間に観察に当たった延べ観察人数は 461 人であり、1 日当たり 1.72 人で 観察したことになった。

観察と記録は主として双眼鏡 (倍率 7 倍~20 倍)、フィールドスコープ (倍率 20 倍~60 倍)、カメラ (レンズ焦点距離最大 1,000 mm) およびビデオカメラ (焦点距離最



A 55



## イヌワシ調査班名簿

佐藤淳志 (代表) 大西重紀 志田郁夫 金森繁三郎 佐藤 力 佐藤俊一 (以上6人日本山岳会々員) 加藤 清 伊藤智樹 佐藤俊明 佐藤幸喜 三浦 誠 (以上5人酒田勤労者山岳会々員) (東京) 自然保護委員会 澤井政信 松本恒廣

大1,000 mm) を用いて行った。

毎日の観察の記録は、個体識別、時間、位置および行動内容を基にフィールドノートに記録したほか、その飛翔トレースを地形図に重ねた透明フィルム上に時間と共に書き込んで毎日の飛翔記録とした。 1 例として繁殖期(10 月から 5 月)の 3 年間(1993~1996)の飛翔トレースを図 2 に示す。図のループ状のトレースはイヌワシが上昇気流を捕らえて旋回しながら上昇しているところであり、鳥海山南麓は地形的にこのような上昇気流が発達するソアリングポイントである。

この飛翔記録を基に、観測地域を 500 メートル毎に区切ったメッシュ図の座標番号で 出現場所とその頻度を整理した。(参照 図 2 1993 年 10 月から 1996 年 5 月までの繁 殖期における飛翔トレース)

## 4) 八幡町の番についての観察結果と考察

#### 4.1 個体の識別と各個体の飛翔確認の記録

図3は1993年10月に観察を開始してから1997年5月までの全観察期間について八幡町で観察されるイヌワシの番(つがい)について個体別に飛翔の確認をした状況である。個体の識別については、成鳥の雌雄、亜成鳥および幼鳥をそれぞれの特徴にもとづいて識別し観察・記録した。幼鳥はその紋様から、成鳥の雌雄はその大きさ(雌が大きい)や風切り羽根の形状や欠損状態から区別がつけられる。また、幼鳥は羽根の紋様で巣立ち年度も区別できた。(参照 図3 八幡町地域内の個体別確認状況)

1993 年に巣立ちした幼鳥は、93 年 10 月から 94 年 1 月中旬までは確認され、さらに 94 年にも 6 月から11 月まで確認されている。これは親鳥が育雛に失敗したため前年の 幼鳥を伴ったためであろう。そのあと、幼鳥は 95 年 4 月 8 日に一度姿を見せたが、その後は不明である。1994 年にも同様に産卵、抱卵に入ったと思われる行動が観察されたが、育雛期にヘリコプターが営巣地の真上で長時間のホバーリングを繰り返したために繁殖活動を中断した。1995 年には雛の巣立ちがみられ、次の産卵期まで幼鳥を伴っての飛翔がみられた。1996 年には巣立ちした幼鳥は同年 8 月 20 日までは確認されたが、その後、何らかの事故で落鳥したと思われ、確認されなかった。この時には幼鳥が姿を消した直後に亜成鳥がこのテリトリーに入り、1996 年 12 月までペアーと一緒に飛翔していた。

1997年の繁殖期には、後述のように 1996年に巣を支える岩盤の一部が崩壊したのに も関わらず、成鳥のペアーは例年の如く繁殖活動を示したので何処か別の場所での繁殖 活動が推定されたが、その後、幼鳥の姿は確認されていない。

## 4.2 行動圈

重点調査地域ではイヌワシの行動を繁殖期や育雛期などに分けて詳細に記録し、その 行動から営巣地の推定や狩り場の探索を行った。

図4は1993年10月から1996年1月までの八幡町の番の重点調査地域での出現頻度図である。1つのメッシュでの出現頻度の平均値以上の頻度の所は高頻度飛翔域として、

2000年

図3 八幡町地域内の個体別確認状況

網をかけ区別してある。(参照 図4 重点調査地域での全出現記録および推定された 行動圏)

## 4.3 営巣地

上述の重点調査地域の調査によって、ほぼ営巣地の存在が確実となり、またその場所の推定が可能となった。しかしながら、この場所は冬期間は雪崩の発生が多いところであり、数回の探索を試みたがなかなか確認には至らなかった。そして1995年4月22日、調査を開始してから1年6ヶ月後、観察日数にして127日目になってようやく営巣地を発見することができた。

営巣地は、日向川上流の標高 650 メートル地点で、谷底から約 80 メートルの切り立った断崖の中程にある 3 段オーバーハング状の岩棚上にあり、容易には人が近づけない。 イヌワシの巣は沢の右岸、南東向きで垂直岸壁のほぼ中間地点にあたる沢下部から約

30メートルの高さの安山岩からなる岩棚にあった。

巣の大きさは、外径約3メートル、厚さ約1.5メートルの大きさに達するもので、巣 材はクロヅルやブナなどが使われ、この巣は約30年以上使用されているものと推定さ れた。巣の素材には他の地域で見られるような針葉樹の枝などは確認できなかった。

営巣地は南東に面した強固な安山岩の大オーバーハングの岩棚にあり、周辺は急峻な 断崖に囲まれていた。この地方特有の冬季の北西の季節風が直接あたることもなく、ま た降雪の影響も受けにくい所であった。地形的にみると、この付近は上昇気流の最も発 生しやすい地形であり、また営巣地は霧の発生しやすい標高 700~900 メートルよりも わずかに下部に位置している。行動圏は上に述べたように 450~1, 200 メートル位ある ので、その下限域から約7分の1くらい上方ということになる。

これまでに報告された国内のイヌワシの巣については、必ずアカマツなどの針葉樹の 生葉付きの小枝が入っていることが知られている。今回発見した巣では、巣材は自生の クロヅルに支えられ、そこにブナの小枝を敷き詰めた構造であって、針葉樹の小枝のよ うなものは見つからなかった。新緑の頃になるとこれにヨモギとオオイタドリが加わる。 松などの針葉樹の役目は、その殺菌作用を利用した巣の清潔さを保持するためであると いう説を考えると、その代役をヨモギがしていることも考えられる。これはイヌワシの 巣材についての知見に新たな資料を提供することになるであろう。

#### 4.4 採餌行動および狩り場

観察期間中、餌のノウサギやヤマドリを捕獲して運んでいるのを何回か目撃することができ、餌を掴んでいる明瞭な写真の撮影にも成功した。餌を運ぶときイヌワシは捕獲した場所から営巣地までなるべく直線的に移動するため、その飛翔方向は営巣地の方向を示すことになり、これも営巣地の発見に有効であった。

イヌワシの採餌行動範囲は、巣外雛期から幼鳥期の6月から11月にかけては標高1,000~1,800メートルの沢筋の雪田が狩り場となっている。営巣地を中心として西側は外輪山伏拝岳から月山森および登山道、湯の台口の標高600メートル地点を結ぶ範囲、

	А	В	С	D	Е	F	G	Н	I	J
1			1	1	5	4	2			
					Δ1.882	M				
2			1	1	6	5				
3	<ul><li>月止</li></ul>	森	2	7	17	11	7	2	2	
4			1	6	26	38	21	8	5	1
5				4 滝ノ小屋	15	39	27	10	8	9
6				5	3	15	38	33	₹ 20	9
7			8	14	12	16	41 - 鶴問池	46	33	13
8			5	14	9	11	26	45	36	14
9		3	5	12	12	14	11	42	43	10
10		4	9	16	12	11	12	21	30	9
11		4	- 鳳:	≹山 8	10	7	11	20	18	7
12							3	9	6	1
13								3	3	1
14		湯の台							3	4
15						В	向川		1	4
0			1		2km		93・10月	~96· 記録	1月)	

注: は高頻度飛翔域

東側は外輪山行者岳から白沢川左岸の上の台尾根の線を結ぶ範囲である。この山域は特に雪崩の起きやすい斜面の草地や雪田が多く、イヌワシは鳥海山の地形に対して縦型 (垂直型)の狩り行動を示す。

冬期の12月から繁殖期、育雛期にかけての狩り場は森林限界の標高1,200メートル地点を最上部とし標高450メートル地点を最下部とするブナ林で、比較的樹間の広い沢筋も多く使われている。そして鳥海山の地形に対して横型(水平型)の狩り場形態をとる。鳥海山のイヌワシの旺盛な繁殖力を支えているものは、繁殖期および育雛期の餌の豊富さにあると言ってよいと思われる。わが国のイヌワシが九州地方では繁殖力が衰え、北陸から東北地方にかけてはまだ繁殖力を保っているのは、冬の豪雪にあると言われている。これは冬期の雪で覆われた山林は、そこに姿をあらわす餌の小動物を発見しやすいためである。この点に関してここは有名な強風雪地帯であり、とくに営巣地の西に広がる地帯は強風雪で曲げられた奇形ブナがあることでも知られている。これは通常のブ

ナ林と異なって強風に耐えて地上低く這うような姿となっているのが特徴であるが、夏 はノウサギなどの小動物が繁殖するのに適し、冬はイヌワシからみると容易に近づいて

## 4.5 繁殖活動

各年の繁殖活動の概要はつぎのようである。

餌を捜せる絶好の狩り場となっているものと思われる。

- (1) 観察を開始した1993年は既にその年に誕生した幼鳥を伴っており、さらに前年に生まれたと推定れる亜成鳥も一緒に行動を共にしている。
- (2) 1994年は繁殖前期までは順調であったが育雛期の4月8日にヘリコプターが 巣の真上で長時間ホバーリングしたため、この影響と見られる原因で育雛を放棄し、繁殖に失敗している。
- (3) 1995年は着実に産卵、抱卵および育雛と進み、5月末には元気な若鳥が巣立ちしている。
- (4) 1996年も例年どおりの順調な繁殖行動が見られ、4月22日に雛を確認している。しかし、この年に生まれた幼鳥は1995年生まれの幼鳥と違って飛翔範囲が極端に狭く、観察中の確認率も非常に低かった。そして8月20日以降は確認できなかった。

このように 1994 年の外的要因と推定される育雛の放棄による失敗を除いて、この地のイヌワシはほとんど毎年繁殖に成功している。全国的にみてイヌワシの繁殖率(確認された番が繁殖に成功する比率)は、1980 年~1990 年は 35.6% であったものが 1991 年からの 5 年間は 20% 台に減少していると報告 (イヌワシ研究会、1995) されている。それに対して鳥海山南麓のイヌワシは、外的要因と考えられる 1 回を除いても 4 年間に少なくとも 3 回、75% の高率で繁殖に成功しており、極めて旺盛な繁殖率と言えよう。

## 4.6 種間干渉

イヌワシの観察中に他のイヌワシ・タカ類との種間干渉を度々観察した。この中で特

œ 0 11 L O I ¥ Σ z O œ S 百宅大秦 33 34 大清水山荘 m 24 25 43 10 33 13 26 45 36 14 12 12 14 11 42 œ 38 33 11 12 21 7 11 3 38 Ξ 4 15 38 = 18 19 14 12 6 OL œ 15 16 湯の台 9 10 @ @ 三少展 œ 9 0 (2) 0 0 0 m ш I × Σ z Ø œ

www 営巣地確認個体の行動圏 調査全域におけるイヌワシの行動圏 X

営巣地

2) 

個体識別不可能な個体 イタリック数字は 3) ①数字は遊佐町側個体

通常数字は八幡町側個体

注:1)

に記しておきたいことはオジロワシとの種間干渉である。オジロワシは 12 月になると シベリアから飛来してくるが、もともと海岸で餌を捕るワシである。それが鳥海山では イヌワシのテリトリーに侵入してきたのを目撃した。

## 4.7 営巣地の崩落

1996年11月24日の調査で巣を支えている安山岩の岩棚の崩落を確認した。同年の8月の調査では異常がなかったのでこの間に崩落が起こったものと思われる。落盤の痕跡は赤茶けて比較的新しかった。崩落は巣の3分の2ほどでかなり大きかった。しかし北側には一部巣を支えて残っていたので、この場所で繁殖活動を期待したが、1997年4月20日の調査で使用されていないことを確認した。崩落の原因は不明である。

## 5) 調査全域におけるイヌワシの行動圏

全調査範囲について八幡町以外の番も個体識別することが出来たので、遊佐町側の個体の行動も含めた出現頻度を、番を区別して示したのが図5である。この図では営巣地の位置が判明した八幡町側の個体についてのみ行動圏の推定が可能であったが、この図によるとそれは約5,480ヘクタールであり、一般にイヌワシの行動圏として知られている広さよりやや狭い。これは自然環境のよさを証明するものである。

鳥海山には4番のイヌワシが生息すると言われており、黒色数字で示した個体はこのほかの2番と思われる。(参照 図5 調査全域におけるイヌワシの行動圏)

#### 6) まとめ

日本山岳会自然保護委員会は鳥海山の自然環境調査の一環として、これまでに報告されていない南麓のイヌワシの調査を3年8カ月にわたって行ってきた。その結果をまとめると次のようになる。

- (1) これまでに確認されていた奈曽渓谷の番以外に別の番が南麓の八幡町管内に生息していることを発見した。
- (2) この番の営巣地を発見し、巣の構造を明らかにし、雛の確認とその巣立ちまで を詳細に観察・記録した。
- (3) この番はたいへん旺盛な繁殖力を持つ番であり、1993年から1996年までの3 年間ほとんど毎年繁殖行動をしていることを確認した。
- (4) 鳥海山南麓の全域についても観察・記録を行い、八幡町、遊佐町のそれぞれの 番の行動圏を推定した。
- (5) これらの番は旺盛な繁殖力を持ち、日本全国のイヌワシの繁殖力が低下している現在、貴重な存在であることを示すと共に、この鳥海山が自然環境にたいへん優れている場所であることを示した。

終わりに、懇切丁寧なご指導を賜わった岩手県立博物館・関山房兵氏、写真をもとに 分かりやすい挿し絵を描いて下さった北村義男氏、および厳冬期を含めて大変なご努力 を重ねられたイヌワシ調査班の皆様に厚くお礼申し上げ、謝意を表します。

## イヌワシ生態調査班の活動

佐藤淳志

## 村の信仰登山今昔

鳥海山は村の北にそびえている。だから何百年来「お北山」であり信仰の対象なので「お北講」がある。近づき難く偉大なものにこそ「神います」と考えるのも自然のなりゆきだ。かつて、鳥海山の主と称賛され、その名を馳せた日本山岳会会員故齋藤清吉氏(会員番号 2295 番)の著書「山男のひとりごと」(1983 年一昭和 58 年発行)の一文です。

また、齋藤清吉氏は著書の中の宮様とスキー大会の項で、高松宮殿下の鳥海山春山スキー行5回のうち4回をご案内されたと述べている。昭和35年には吹浦口から仙ケ洞、そして湯ノ台へと滑降されたとあり、昭和43年には満60歳になられた殿下から、志賀高原の発哺温泉にお招きをうけ、岩菅山で殿下とスキーを楽しまれたことを、我々後輩に盃を傾けながら、当時を偲びよく聞かせてくれた。

宮様を案内したこのルートの、滝ノ小屋から長野台を抜けて、草津川を越え、湯ノ谷へのコース、殿下がただ一度だけ滑ったルートを、後に宮様コースと皆は呼ぶようになったのである。

#### 異常な環境アセスメント

1993年(平成5年)秋、この宮様ルートにおける開発計画の「環境アセスメント」を見たとき、私はその内容の異常さに疑問を抱いた。そのひとつは「気象条件調査結果」で、私の通常山行で体験する気象の感覚とは全く異なるデータがあった。次に驚いたのは「自然環境の保全に関する調査」であった。イヌワシが飛翔しているのにもかかわらず、イヌワシの営巣地はなかったと結論づけ、よって計画地周辺はイヌワシの営巣地の可能性は少ない。また、イヌワシの生息環境に対する影響は極めて少ない、と結ばれていた。さらに驚くべきことは、このイヌワシ調査や営巣地探しを、こともあろうに地元山岳会や猟友会の組織、町役場のメンバーで、雪上車やスノーモビル、ヘリコプターを駆使して行われていたことである。

このため「絶滅危惧種」と言われるイヌワシを、全くの素人の我々が調査しなければならない事態になったわけで、この観光開発への取り組みの異常さがにじみ出ている感じがするのである。私たちの調査方法は、季節毎に飛翔トレースを分類し、それを基に営巣地を絞り出す方法で、巣が見つかるまでが登山そのものであった。調査の重要な時期は積雪期で、尾根や岸壁や沢筋をくまなく探しまわり127日目で営巣地発見に辿り着くまで、雪崩にもあい、墜落も経験した。

#### イヌワシとの戯れと苦しみ

その後の調査観察はまさにイヌワシとの戯れで、僅かな期間でも姿が見えないと、不 安でたまらず山に入ってしまう毎日であった。登山とイヌワシ調査では同じ山に入って も全く異なる面がある。イヌワシ調査は観察目的地に着いたら、いくら風が強く寒くと もテントの外で一日中双眼鏡やプロミナーで観察しなければならない、全く未確認の日 は決して珍しくはない。むしろそのような状況に感覚を慣らしていかなければならない のである。

冬はゴーゴーと木枯らしが鳴り響き、風が止んだと思えばシンシンと降るボタン雪、全てが灰色の世界を一瞬にして眼前を横切るイヌワシに驚き、その感激は寒さをも忘れさせてくれる。春の日差しを背中に受け、一日中ただ一カ所でじっとしていると、いろいろなものが見えてくる。いつものカラスは餌をねだりにつきまとい、のんびりやのカモシカは興味深げにすぐ側まで、冬眠から覚めた母熊は二頭の可愛い子熊を連れて芽吹いたばかりの草木をあさる。イヌワシはせっせと幼鳥に餌を運ぶ、それを狙ってトビやカラスがチョッカイを出す。

やがてイヌワシの幼鳥が大空を舞うとき初夏を迎える。夏の調査は草いきれの中で、 蚊取り線香を燻らせ、幼鳥が次第に飛翔範囲を広げていく様子を見る。秋の観察は山登 りをするものにとってはとても楽しい。錦織りなす山なみを親子で狩りの模擬飛翔する 姿もこの頃で、調査の帰りにキノコや山ブドウがいっぱい採れる喜びがある。

頂に新雪が降る頃は巣づくりが始まり、根雪の頃には可愛い幼鳥も親から追い出され、 やがては厳冬に向けて自ら餌を狩り独り立ちしていかなければならない。調査中でいち ばん感動と悲しみを味わう時節である。このようなサイクルを4年間経験して思ったこ とは、鳥海山は、未知の部分が沢山あり、私一人では対応しきれないということだ。

気象にしても前述の通り、猛禽類にしてもイヌワシだけがクローズアップされ、同じ テリトリーの中にクマタカの生息飛翔を確認し、オオタカも生息、渡りのハチクマ、オ ジロワシまで確認を報告をしても、ここでは何故かイヌワシだけなのです。

## 生涯のフィールドワーク

たとえ中立的立場での調査といえども、狭いしがらみの多い地域にあって、批判や目に見えない障害が多々あって、何度も挫折しかけたわけで、今日まですべてを支えたのが日本山岳会自然保護委員会の組織であり、組織人として行動してきた成果でもある。それだけに方向性を見極め、決して見失うことのないように常に心掛けてきた。

この調査結果は目先の開発行為に警鐘をならすだけのものではなく、将来に向けて今後起こりうる開発行為への赤信号となるべき調査資料である。調査はこれで終了したのではなく、むしろ、これを契機に麓の山岳人として生涯のフィールドワークとして取り組むつもりです。山は中央都心部にはありません。諸問題を抱えるのは全て地方の静かな山岳地帯です。しかし自然保護の理念、これらの恩恵は平等であるはずで、この度の日本山岳会自然保護委員会による「鳥海山イヌワシ生息調査」は、これに関わった山岳人として一石を投じたものと思っています。

# 秩父宮記念学術賞の記録

## 1963年から32年間に13団体、22人を表彰

秩父宮記念学術賞は、故秩父宮雍仁親王殿下(1902年~1953年)が、ご生涯を通じて、学術とスポーツの振興に尽くされたことを記念して制定された。 賞の特徴は、殿下がご経験が豊かで、ご造詣が深かった「山」に関する科学研究から、人文、社会、自然科学など、広い分野にわたる科学の領域で、自ら山に入り、現地研究で顕著な業績を挙げた人々を授賞の対象とした点にある。

秩父宮記念学術賞の第1回表彰は1963年(昭和38年)に行われ、以後1996年(平成8年)まで32回にわたって13団体、22人が受賞した。

この賞の制定は、殿下が、1932年(昭和7年)12月に創設された(財)日本学術振興会の総裁に、翌1933年(昭和8年)5月から1948年(昭和23年)7月まで、15年にわたって就任されて、学術振興に尽力されたこと、またスポーツではラグビーのほか、スキー、登山に深い関心を寄せられ、精進されたことに関わっている。殿下の登山では1926年(大正15年)8月12日から9月9日までの28日間に、マッターホルンをはじめ欧州アルプス14峰に登頂されたことが際立っているが、この登山を西欧登山界が注目、英国山岳会は殿下を名誉会員に推挙し、1950年(昭和25年)に日本山岳会の名誉会員になられたことは周知のことである。

殿下は1953年(昭和28年)1月4日に薨去され、ご事跡を記念して同年10月に(財)秩父宮記念会が設置され、節子妃殿下は殿下のご遺志を継がれて、国際親善・福祉・医療・芸術・文化・スポーツ等の分野で活躍された。秩父宮記念会は、1960年(昭和35年)4月に日本学術振興会と協議して秩父宮学術記念賞を制定、3年後の1963年(昭和38年)6月に第一回表彰を行ったのは前述のとおりである。

妃殿下には第1回表彰式からご臨席になられ、第2回表彰式以降も、受賞者の研究発表、および祝賀会、出席者との懇談、受賞者、関係者との会話を楽しみにしておられた。妃殿下は、1986年(昭和61年)、1987年(同62年)に心臓発作を起こされてから、主治医の忠告によって公務を絞られたが、秩父宮記念学術賞の表彰、懇談会は、必ずご出席され、受賞者、関係者は大きな感銘を得た。

残念ながら、この賞に限りない慈愛を賜った妃殿下は、1995年(平成7年) 8月25日に薨去され、翌年3月4日(平成7年度)の第32回の表彰をもって 終了することとなった。この賞の果たした役割の重さを省みるとき、将来にわ たって山を対象とした現場の研究活動がいよいよ活発になるように、後継制度 の復活を期待したい。

## 山を愛し、実地研究が授賞の最低条件

この賞の授賞者は、第1回、第2回は日本山岳会が選考し、第3回は学術振興会の理事会が選考にあたり、受賞者は山岳会会長の同意を得て決定した。第4回以降は学術振興会に審査委員会が設置され、関係学会、協会、日本山岳会から推薦された候補者を選考して決定した。授賞の最低必要条件として第4回から第30回まで、第10回を除き26回も審査委員長をつとめた和達清夫日本学士院長は、「山を愛し、自ら山に入って行なった研究」であることを毎回のように述べた(河野 長審査委員=記念誌から)という。また、宮脇 昭審査委員は「この賞は一般に地味で、あまり評価を受ける機会に恵まれない研究を取り上げて、国内、国際的にも、社会一般に評価されるようになった功績が大きい」ことをあげている。

また、受賞者には朝日新聞社から副賞が出たが、同社の文化企画担当の富岡隆夫取締役は「表彰式に集う方々の面構えの良さ、受賞者の品の良さ、を眺めるのは楽しみだった」と言い、現世的見返りが少ない根気強い研究の授賞が多い一面を語っているように思われる。

富岡氏は、こうした研究を暖かく見守ってこられた妃殿下に、表彰式の翌日に招かれ、「美しいお庭を拝見しながら、おいしいご馳走をいただき、若い日のこと、国際的な活動のことなどを、おっとりお話し下さった妃殿下の面影は、いつまでも心に残る」と語っているが、こうした思い出は、受賞者、記念賞関係者に共通の想いであろう。

日本学術振興会は、秩父宮記念学術賞が32回で終了したため、賞の成果や受賞者の業績を永く記録するため、1997年(平成9年)3月に記念誌を発刊した。この記録は、この記念誌をもとに、第1回(1963年)から第32回(1996年)までの受賞者の研究成果、業績等を要約したものである。

(①授賞対象業績 ②受賞者 ③表彰式年月日 表彰式会場)

#### 第1回(1963年=昭和38年度)

- ①「ネパール・ヒマラヤにおける学術的調査研究」
- ②「京都大学生物誌研究会」(会長 芦田譲治ほか22名)
- ③「1963年6月1日 日本海運倶楽部」

日本のマナスル登山隊員であった会員の中尾佐助、川喜田二郎が 1952~53 年にもたらした資料に基づく研究を発表したもので、授賞対象は木原均教授編「ネパール・ヒマラヤにおける学術的調査研究」は、動植物、土地、農産物、住民について全 3 巻に集大成され、44 編の報告、790 枚の写真、図版を加え、1,344 ページにおよんだ。久しく鎖国政策をとってきたネパールを、科学的に世界に紹介した最初の報告書として国際的に高く賞賛された。

## 第2回(1964年=昭和39年度)

- ①「山に関する科学の進歩についての著しい貢献」
- ②「長野県大町市立大町山岳博物館」(館長 藤巻厚美)
- ③「1965年3月1日 国立教育会館」

大町山岳博物館は1951年11月1日、日本で最初の山岳博物館として誕生した。博物館は地道に調査研究を続けてきた職員や調査員、それを支え励まし、協力してきた多くの人々の善意と協力があった。設備や展示物も特色があり、訪れる人たちによい参考となるものが多い。また十数年にわたって行われてきた山岳を中心とした野外の調査活動と自然保護運動という動的な内容にこそ活動する博物館としての真価が認められた。

## 第3回 (1966年=昭和41年度)

- ①「第一次南極地域観測越冬隊の業績」
- ②「第1次南極地域観測越冬隊」(隊長 西堀栄三郎ほか10人)
- ③「1966年12月1日 東京銀行協会銀行倶楽部」

西堀博士を隊長とする 11 人の越冬隊員によって、二次以降現在に至る越冬の基礎が築かれ、継続して越冬観測が行われるようになった。厳しい気象条件のもとで、すべて未知の状態で自然をより深く探求し、隊長ほか全員一致協力し、努力し、奮闘し続けてきた隊員たちの業績は、世界に誇れるものである。

#### 第4回(1967年=昭和42年度)

- ①「北アルプスの自然」
- ②「富山大学学術調査団」(団長 小笠原和夫ほか9名)
- ③「1968年3月1日 東京銀行協会銀行俱楽部」

立山、黒部、有峰地域の開発に先立ち、その自然保護を図る方途を探る目的で、立山 称名滝の調査を皮切りに、黒部川源流地域におよぶ総合調査を行った。調査項目は降雪 と融雪、降雨、地形、植生など広範囲に及んだ。調査団員 10 人による、この地域に関 わる論文・報告は、深井三郎教授の北アルプスの高位侵食面の形成期と、その地形発達、 鈴木時夫教授の奥黒部の植物社会、中川正之教授の高山融雪機構の研究など、すでに授 賞時点で四十を超えていた。

#### 第4回 特別賞(1967年=昭和42年度)

- ①「カラコラム・ヒンヅークシ学術探検隊報告」
- ②「京都大学生物誌研究会」(会長 芦田譲治ほか22名)
- ③「前項と同時・同場所」

1955 年夏に国費により派遣された学術探検隊(木原 均隊長)による成果である。 調査は、大きく動植物学、地質学、人類学の分野にわたり、英文で8巻の報告書にまと められた\*植物学では小麦の発祥地をアゼルバイジャンとその付近である可能性を証左 した\*地質学では西カラコラム山脈の岩石は中新生の初期2,800万年前に誕生したと推 定している\*人類学では、アフガニスタン奥地に赴いた調査隊が、モンゴル族の言語についてペルシャ文字に転写したモンゴル語写本を発見する大成果をあげた。

報告書8巻は、1山下孝介 2北村四郎 3北村四郎 4上野益三 5 今西錦司 6 岩村忍・長田夏樹・故山崎忠 7松下進・藤田和夫 8北村四郎・吉井良三、が編集した。

## 第5回 (1968年=昭和43年度)

- ①「富士山における山岳気象の観測研究」
- ②「藤村郁雄」(元富士山測候所長)
- ③「1969年3月1日 東京銀行協会銀行倶楽部」

1929 年(昭和4年)中央気象台測候掛に勤務以来、山岳気象の究明にあたり、1929~31年の富士山頂の気象観測に参加したのをはじめ、各地の山岳測候所設置のための実地調査に参加した。旺盛な研究心で富士山を、あらゆる角度から究明にあたり、多くの論文を発表した。1944年(昭和19年)に山岳雨量計を考案し、降水量のデータを収集、山岳気象の実態を克明に記録した。また山岳測候所の保全、維持の研究にも大きく寄与し、登山技術に長けていたため一般登山者への技術指導、遭難防止にも一役買った。1963年(昭和38年)6月に着工した世界最高、最大規模の富士山頂気象レーダー測候所の設置では責任者として工事を監督、完成させた。関係論文は「天気・気象」「山岳と降水の関係」「山岳(岩石、地形)」「気圧の変化と気温の変化」などがあり、山岳気象の観測研究に大きく寄与した。

## 第6回(1969年=昭和44年度)

- ①「多年にわたる高山植物の生態に関する研究」
- ②「武田久吉」(元日本山岳会会長、元九州帝大講師、元白百合学園教員)
- ③「1970年3月5日 東京銀行協会銀行倶楽部」

1905年(明治38年)有志とともに山岳会を設立、日本における近代登山術発展の端緒を開くとともに、広く日本各地の山地を跋渉して、専門とする植物学の研究をすすめ発表、日本アルプスをはじめ各地の高山植物の生態調査、とくに写真技術を駆使して精細、正確な観察を行い、多くの図版、著作をあらわし、天然記念物の保護、とくに尾瀬沼一帯の学術的価値とその保護の必要を説き、自然保護思想の普及に努めた。

## 第7回(1970年=昭和45年度)

- ①「南極点往復内陸調査の業績」
- ②「第9次南極地域観測越冬隊内陸調査旅行隊」(隊長 村山雅美ほか10名)
- ③「1971年3月9日 東京銀行協会銀行俱楽部」

第9次南極地域観測越冬隊内陸調査旅行隊11名は1968年(昭和38年)9月28日昭和基地を出発、翌年2月15日無事南極点までの往復を終え帰還した。走向距離5,182 \* 55. 所要日数141日。観測調査項目は位置、高度、気象、地形、雪氷、氷厚、地磁気、重力、自然電波、生態学と広範囲にわたった。気温零下60度、気圧600 (高度3, 700 (元)、低温下の軟雪地帯の車両運行などヒマラヤとは異質の困難があった。 南極点 到着は 1968 年 12 月 19 日。

## 第8回(1971年=昭和46年度)

- ①「1970年エベレスト登山隊の業績」
- (2)「1970 年エベレスト登山隊」(隊長 松方三郎ほか54名)
- ③「1972年3月3日 東京銀行協会銀行倶楽部」

授賞対象は、本隊 39 名のほか第 1 次債察隊 4 名、第 2 次債察隊 12 名を含んでおり、登山隊は 22 名の登攀隊のほか、7 名の科学調査班が参加。登山の安全のほか、高所医学、地球物理学、気象の各部門で科学調査を行ない、その成果は「第 1 部登山班報告」「第 2 部学術班報告」として刊行された。

高所医学部門でも「血液粘度の上昇は赤血球増加による」「高度が上がると血圧が上昇する」などの新発見があった。

## 第9回 (1972年=昭和47年度)

- ①「多年にわたる日本の山地地形に関する研究」
- ②「辻村太郎」(東京大学名誉教授)
- ③「1973年3月2日 東京銀行協会銀行倶楽部」

辻村博士は、創立したばかりの山岳会に中学在学中に入会(会員番号 21)、日本アルプスをはじめ各地の山を数多く登り、発足したばかりの山岳会の基礎を築いた一人であり、日本における地形学の創始者である。研究は断層地形、氷河地形、火山地形など広範囲にわたり、貴重な研究成果を発表、地形研究を国際水準に高めるのに大きく貢献した。日本山岳会名誉会員、理学博士、日本地理学協会名誉会員、国立公園中央委員会委員、ウィーン地理学会名誉会員。

#### 第10回(1973年=昭和48年度)

- ①「ネパール・ヒマラヤの地質研究」
- ②「北海道大学ヒマラヤ委員会ネパール・ヒマラヤ地質研究会」

(代表 橋本誠二北海道大学教授ほか15名)

③「1974年3月5日 東京銀行協会銀行倶楽部」

橋本北大教授は1955年のマナスル偵察隊に参加、ヒマラヤの山谷でハンマーを振るった。この成果は北大の日高山脈の生成についての研究に結びついた。この調査結果が北大の地質グループを刺激し、1962年アルン地区、1965年ラムチャ・プリオカルジュンガ地区、1970年チャンタラ地区、1965年ダウラギリ地区、1963年カルナリ地区などネパール、チベットの低地から高地におよび「GEOLOGY OF THE NEPAL HIMALA-YA」として総括され刊行された。

## 第11回(1974年=昭和49年度)

- ①「ネパールの医療事情に関する研究」
- ②「久留米大学ネパール医学調査診療隊」(脇坂順一久留米大学教授ほか9名)
- ③「1975年3月14日 東京銀行協会銀行倶楽部」

診療隊は1973年8月から4ヶ月にわたり深刻な医療不足に悩む西部地区を中心に、 困苦に耐え、延べ5,000人の患者を内科、外科、皮膚科、眼科、寄生虫病など広範囲の 診療を行った。1生活歴、家族歴の調査分析 2上下水および屎尿処理調査 3 学童検 診調査 4 結核検診調査 5 寄生虫、衛生害虫調査 6 頭髪および食品中の水銀調査 7 疾病統計調査、などで大きな成果を上げた。

## 第12回(1975年=昭和50年度)

- ①「東部ヒマラヤの植物相 |
- ②「原 寛」(東京大学名誉教授)
- ③ [1976年3月23日 東京銀行協会銀行俱楽部]

ヒマラヤの秘境、シンガリラ山脈、シッキム、東部ネパール、ブータンなどを 1960 年以来十数年にわたって植物調査を行い、収集した資料は十数万点、東大総合研究資料 館で整理研究を行い、さらに国外の植物標本研究所で比較検討を加えた。研究の成果は 数十編の研究論文として学術雑誌に発表、また「東部ヒマラヤの植物相」3巻および写 真集として刊行された。

### 第13回(1976年=昭和51年度)

- ①「高所医学の研究」
- ②「万木良平」(航空自衛隊医学実験隊第3部長)
- ③「1977年3月10日 東京銀行協会銀行倶楽部」

戦後ヒマラヤの高峰は果敢な登山家によって輝かしい成果を収めつつあるが、高所医学の研究は十分ではない。実際の高山環境では多くの困難と制約があり、十分な研究活動が行えなかった。万木博士は航空医学実験隊に勤務していたので、隊に設置されている大型低圧タンクを有効に活用して、高所と同じ低圧環境を作り出し、共同研究者とともに十数年にわたって、高所医学の不備を補う実験研究を進めてきた。研究論文は55編におよび、多大な貢献をした。

#### 第14回(1977年=昭和52年度)

- ①「ネパール山地における民族地理学的研究」
- ②「川喜田二郎」(川喜田研究所所長)
- ③「1978年3月20日 東京銀行協会銀行倶楽部」

1953 年マナスル登山隊科学班として先駆的な民族地理学的調査を行って以来 1958 年の西北ネパール学術探検隊長として、また 1963~64 年には東南アジア稲作民族文化総合調査(第3次)団長として、アンナプルナ山群南面のシーカー谷を中心に調査を行った。これらの成果を博士は KJ 法によりまとめた報告書が授賞対象となった「The Hill

Magars and ther Neighbours」である。

本書は亜熱帯のヒンドゥ文化と亜高山帯のチベット文化が交錯する地域を対象として 生態学的方法が有効に取りいれられている。

## 第15回(1978年=昭和53年度)

- ①「富士山の地質学的・岩石学的研究」
- ②「津屋弘達」(東京大学名誉教授)
- ③ [1979年3月9日 東京銀行協会銀行倶楽部]
- 30年にわたる富士山の地質学的・岩石学的研究により、単一な成層円錐体ではなく、上下に重なる3体の火山からなることが確実にわかった。この研究に伴って、富士山の全域を含む5万分の1の精彩な地質図が完成され、工業技術院地質調査所から刊行された。これは火山地図として、国の内外を通じ、稀少で最も優れたものの一つである。

## 第16回(1979年=昭和54年度)

- ①「東南アジア山地民族に関する調査研究」―ヤオとその隣接諸種族―
- ②「白鳥芳郎」(上智大学教授)
- ③「1980年3月5日 東京銀行協会銀行俱楽部」

1967年(昭和42年)の予備調査の後、「メナム河上流地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査」を1969年から延べ5年、3次にわたり主としてタイ西北部の山地諸民族を中心に実施した。これらの調査活動の成果は極めて顕著であり、博士の指導でまとめられた「東南アジア山地民族誌」が、授賞の対象となった代表的労作である。

## 第17回(1980年=昭和55年度)

- ①「ネパール・ヒマラヤの氷河と気候に関する研究」
- ②「ネパール・ヒマラヤ氷河学術調査隊」

(隊長 樋口敬二名古屋大学水圏科学研究所教授ほか33名)

③「1981年3月5日 東京銀行協会銀行俱楽部」

1973年に予備調査、翌年から補助金を受けて1次から3次まで4年間にわたってヒマラヤ高地地域で氷河と気候に関する研究調査を行い、顕著な成果をあげた。過去の調査は断片的で、広く組織的な調査研究は同隊が世界で最初である。

同隊を構成する研究者は1963年以来、毎年のごとく登山隊の学術班に参加、あるいは単独、小規模の調査を続けてきており、「比較氷河研究会」を組織、その成果をまとめて「ヒマラヤ山脈、特にネパール・ヒマラヤの氷河研究における諸問題」(日本氷雪学会氷河情報センター,1973年)として刊行している。またこの隊にはネパール国権 漑水文気象局部長、大学教授などネパール人8名が参加し、両国の国際交流、世界初の研究調査の世界への貢献は大きい。

## 第18回(1981年=昭和56年度)

- ①「日本の山地地形の研究」
- ②「岡山俊雄」(明治大学名誉教授)
- ③「1982年3月11日 東京銀行協会銀行倡楽部」

侵食によって生じた谷を山頂すれすれまで埋め立てたと仮定し、現れる曲面を接峰面 と称する。日本の急峻な山谷、山襞の接峰面を想定した場合に高さの食い違う筋が現れ ることに着目、断層や傾動が行われたと解釈した。その方向と配列は山地の形成に与え た地盤運動の動きを示し、接峰面高度の大小は地盤運動量の大小を反映する、との説を たてた。現地調査をして、一国の山地を地形構造を接峰面図に基づいて解明したのは世 界にも類例がない貴重な研究である。

## 第19回 (1982年=昭和57年度)

- ①「日本アルプスおよびヒマラヤ山脈における氷河地形および地誌の研究」
- ②「五百沢智也」(愛媛大学講師)
- ③「1983年3月8日 東京銀行協会銀行俱楽部」

今西錦司博士がいわれた「山岳学」の実践者で、著しい成果を上げた人は五百沢氏である。即ち、山岳を地形、地質、生物、民族あるいは登山といった分化的な立場からだけでなく、これを全体としてとらえ、かつ各個性を描き出す研究調査は抜群である。第17回秩父宮記念学術賞における氷河研究調査においても、氏はヒマラヤに特異の再生的錐状氷河型を認めるなど、功績は大きかった。

## 第20回 (1983年=昭和58年度)

- ①「日本における狩猟伝承の研究 |
- ②「千葉徳爾」(明治大学教授)
- ③「1984年3月5日 東京銀行協会銀行倡楽部」

狩猟文化の伝承を記した文献資料は、時代をさかのぼっても少ない。狩猟は人類と野 獣との間に成立している交渉形式の一つで、なかでも人類の経済生活を支える上でもっ とも早く、基礎的な行為であった。昔から意義ありと信じて伝承してきた狩猟文化の習 慣や儀礼の意味、野外調査と資料収集をもとに考察した。

#### 第21回(1984年=昭和59年度)

- ①「東部ネパール・ヒマラヤにおける生態学的研究」
- ②「沼田 真」(千葉大学名誉教授、淑徳大学教授)
- ③「1985年2月20日 東京銀行協会銀行俱楽部」

数多いヒマラヤ研究のうち、東部ネパール・ヒマラヤに限ると森林、草地などの植生に関する研究は少なく、長い間植物生態学上の空白部であった。自然植生と放牧、農耕などの人的活動を受けた地域の植生等、長年にわたる幅広い生態学的研究の成果は山に関する科学の業績として顕著なものがある。

## 第22回 (1985年=昭和60年度)

- ①「日本の山地形成に関する地質学的・地形学的研究」
- ②「藤田和夫」(大阪市立大学名誉教授,帝塚山大学教授)
- ③ [1986年3月5日 東京銀行協会銀行倶楽部]

山の研究は多いが、「山はなぜ高くなったか」「山は何時頃から高くなってきたか」という基本的な問題を取上げたものは殆どない。博士は40年にわたるライフワークで、この問題に真正面から取り組み、「日本の山地形成論―地質学と地形学の間―」がまとめられ、その要約的なものに「日本列島砂山論」「変動する日本列島」が出版された。とくに専門の断層問題、土石流、地滑り、など自然災害との関係の調査研究の成果は業績として顕著なものがある。

## 第23回(1986年=昭和61年度)

- ①「修験道の研究」
- ②「宮家 準」(慶応義塾大学教授)
- ③「1987年3月3日 東京銀行協会銀行倶楽部」

修験道は、外来の仏教、道教、儒教、シャーマニズムや神道の影響のもとに平安末期 頃に成立したが、明治5年の廃止で組織、儀礼、思想、秘儀の多くが失われた。日本庶 民宗教史や登山史は修験道を抜きにしては語れない。博士は大峰、羽黒などで峰入修行 をし、その修法や験術を学び、研究を進め、山に重点を置いた日本人の宗教観を探り、 また修験道の根底にひそむ世界観の解明におき、修験集落、里修行、修験系新宗教、山 の祭りと芸能など、従来未開拓であった分野の調査報告を刊行した。「修験道辞典」の 編修、啓蒙的な書物、論文の発表、講演、欧米諸大学での講演を含む外国人学者などと の共同研究も続けている。

### 第23回特別賞

- ①「庄川上流山村の変貌に関する研究」
- ②「小寺廉吉」(元富山大学教授、元桃山学院大学教授、元八代学院大学教授)
- ③「1987年 前項と同日同所」

若き日のフランス碩学の教えに触れフランス社会形態学を取り入れた独特な地理学の 学風を形成する。庄川上流に生涯の調査地を求め、上流部に点在する山村集落に焦点を あて、合掌造りと大家族制で知られた白川村、平村、上平村の調査に没頭した。これら 独立的な山村が水資源開発に伴う水没村落の命運に心をいため、近代化による変貌を詳 しく記録、94歳を迎えて「山村民とその居住地(ふるさと)の問題」と題する書は、 氏の80年にわたる思索の結実である。

#### 第 24 回 (1987 年 = 昭和 62 年度)

- ①「妙高火山群―その地質と活動史―の研究」
- ②「早津腎二」(群馬大学講師)

## ③「1988年3月9日 日本工業俱楽部」

妙高火山群(妙高・新潟焼山・黒姫・飯縄・斑尾火山などで構成)の各火山体とその山麓に分布する火山灰層の徹底した野外調査を行い、構成諸火山の形成過程と各火山相互の関係を、絶対年代を付して詳細に解明した。博士の20年にわたる徹底した実地踏査は火山地質学や岩石学のさらなる大発展に寄与できる可能性を内包している。

## 第25回(1988年=昭和63年度)

- ①「信州伊那山村における民俗学研究」
- ②「向山雅重」(元南箕輪村立南箕輪中学校長)
- ③「1989年3月13日 日本工業倶楽部」

山間部の民俗は、高地がもつ特有の環境によって、平野部の民俗とは異なった特色を伝えているが、氏は郷里の長野県伊那谷を中心として、山間部の民俗、氏の言葉によれば「自然の恵みと恐ろしさを知り尽くし、心素直に自然と立ち向かい、自然から我が身を守り、自然の荒廃を防ぐといった山の国の民」の生活ぶりや人々の智恵、さらには村の変貌する姿を明らかにした。氏の研究と著作は「村の生活の長所も短所も知り尽くしながら、それに共感をもって描いているところが、だれにも書けない点」と奥深い微妙な点まで明らかにした独自性にある。

## 第26回(1989年=平成元年度)

- ①「栽培植物と農耕の起源に関する文化複合の民俗植物学的研究」
- ②「中尾佐助」(大阪府立大学名誉教授)
- (3) 「1990年3月12日 日本工業倶楽部 |

1本のムギ、1茎のイネはその有用性のゆえに現在でも価値がある。祖先の手で多くの改良が重ねられ、野生時代のものとはまったく違ってしまった「イネ、ムギ、イモ、雑穀、マメ、茶など」人間と切り離せない栽培植物の起源を探るうち、その姿勢は農耕文化の起源、発達や変遷、伝播の解明に移り、その結果、世界の農耕文化を根栽農耕文化、サバンナ農耕文化、地中海農耕文化、新大陸農耕文化の四つの類型に大別する説にたどりついた。

また熱帯降雨林の中で起こった根栽農耕文化が、北方に伝播していくうちに温帯林である照葉樹林帯に到達、文化的複合を図り高度に成長し、一つの文化の形成を類推した。中国、日本、東南アジアの文化・文明の母体が照葉樹林文化であること、また古代オリエントから続く西欧文化、文明が照葉樹林文化にあることを推察し、現代文明につながる起源を探った。

#### 第27回(1990年=平成2年度)

- ①「登山に関する気象学の研究」
- ②「大井正一」(山の気象研究会会長)
- (3)「1991 年 3 月 13 日 日本工業俱楽部 |

富士山の笠雲、吊るし雲は山岳波によるものであるが、西風が高さと共に減少し、その減率が風上の南アルプスで、富士山頂より上と下で急変することにより生じる、など笠雲、吊るし雲発生のメカニズムを明らかにすると共に、富士山の雲を12種に分類、それが北ア、南アの雲にも適用できることを明らかにした。

山の遭難気象、またヒマラヤの気象も研究し、多くの登山隊を援助した。

## 第28回(1991年=平成3年度)

- ①「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊 1989・1990 年の業績」
- ②「京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊」(戸部隆吉隊長ほか31名)
- ③「1992年3月13日 日本工業倶楽部」

1989年に第1次隊を中国西部ムスターグアタ峰に登頂するとともに、高所医学学術研究の予備的な検討、第2次隊をネパール・クーンブ地域高所住民の医学学術調査を行い、この成果を踏まえて、1990年の第3次隊はチベット自治区のシシャパンマ峰(8,027

(元) の登頂過程における人体の生理学的研究と、周辺住民の疫学的調査を展開した。

研究者自身が 8,000 気峰に登頂し、その過程で自ら被験者となって医学的研究を行った隊は世界で初めてであり、また副隊長の斎藤惇生 (60歳) 中島道郎 (59歳) の熟年 2人が登頂して話題となった。

## 第29回(1992年=平成4年度)

- ①「古代山岳信仰遺跡の研究―日光山地を中心とする山頂遺跡の一考察」
- ②「大和久震平」(帝京短期大学講師)
- ③「1993年3月17日 日本工業倶楽部 |

山頂遺跡は古墳時代に発生し、近世まで継続したもので、日本人の生活・宗教・民俗などと深い関係がある。男体山の山頂遺跡は6,000点に及ぶ出土品が発掘され、古式の法具、仏具や古印の研究に不可欠の資料となった。全国に男体山の匹敵する山頂遺跡があるかなどの疑問解明のため、日光連山だけでなく、全国の古い信仰の山の頂部を踏査した。男体山のほか、福岡県宝満山、奈良県山上ヶ岳遺跡などは当代の政治、軍事上の国家的危機に際し、国家鎮護のための山岳信仰遺跡と位置づけた。博士の研究は考古学本来の成果である点に最大の意義がある。

## 第30回(1993年=平成5年度)

- ①「ヒマラヤの隠花植物相の調査研究」
- ② 「ヒマラヤとその周辺の隠花植物調査隊 |

(隊長 国立科学博物館植物研究部室長 渡辺真之ほか11名)

③「1994年3月9日 日本工業倶楽部」

隠花植物は花や種子を生じない、主に胞子で繁殖する植物や菌類の総称である。日本列島の隠花植物の起源を知る上で、ヒマラヤ山地との比較研究を行った。1986 年にカトマンズ周辺を現地調査、1988 年にテライ地域から 5,000 気を超える山地での調査、

その研究成果を「ヒマラヤの隠花植物相」第1巻1988年、次いで第2巻1990年にまとめて刊行した。将来ヒマラヤの植物相が人間活動によって変えられる危険が憂えられるとき、貴重な機能を果たすものである。

## 第31回(1994年=平成6年度)

- ①「山岳地域における自然エネルギー利用の実用化研究」
- ②「神奈川工科大学 自然エネルギー利用研究グループ」

(代表者 鳥居 亮、森 武昭、木村茂雄)

③「1995年3月15日 日本工業俱楽部」

1982年以来、山岳地域で風力・太陽光・小規模水力などの自然エネルギーを利用した発電を実用化するための実験・研究を行ってきた。その代表例が北ア・穂高岳山荘における風力、太陽光発電の実用化で、山岳地域の気象条件に適合するように工夫し、風力と太陽光発電を併用したハイブリッドシステムの有効性を実証した。これらの成果は、現在130を超える山小屋に普及している。また自然エネルギーを利用した発電は、ヒマラヤ登山隊、南極基地などで使われている。

## 第32回(1996年=平成7年度)

- I ①「ネパールの蛾の分類、分布、発生期等に関する研究」
  - ②「春田俊郎」(元都立北園高校校長)
- Ⅱ①「中央アンデス文明形成の先史学研究」
  - ②「大貫良夫」(東京大学教授)
  - ③ 1. Ⅱとも「1986年3月4日 日本工業俱楽部」

I ネパールの位置、地形、気候を総合して考えた場合、その植物相は水平的にも垂直的にも複雑多岐にわたっており、昆虫の種類もきわめて多いことが予想されるが、調査は殆ど行われていない。春田氏はその中で研究対象を蛾に限定し、調査地域を数箇所に固定し、完全なリスト作成を目標とした。蛾の戸籍を作ったもので、英文でまとめられた。農林業における害虫の生態解明につながっている。

II アンデス文明は標高 400 伝あたりから山麓にいたる山地斜面を舞台に展開した文明で、古代文明で、唯一の山地に栄えた文明といえる。大貫氏は 1960 年から発掘に参加し、特に 1989 年のクントウル・ワシの発掘では、長方形基壇の下から未盗掘の四つの墓を発掘、精巧な金冠や胸飾り、耳飾り、ビーズの装身具、その他数多くの貴重な資料を発見し、文明形成のプロセス解明に多大の貢献をした。さらに大きな貢献は、発掘現地に考古学博物館を建設、この募金や交渉などさまざまな困難を克服して、1994 年に開館にこぎつけ、アンデスの人々との国際交流に果たした功績は、極めて大きい。

(関塚貞亨)

# 山岳図書目録

## 「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」を本年も継続掲載します。この種の目録は、いまのところ各種山岳・アウトドア関係の刊行物でも整理・記録の対象とされていないので、この「山岳」掲載のものだけがわが国でのただ一つの資料です。山の本以外に自然環境のものも拾ってありますし、昨年分でもれていたものも収録してあります。また締切り時間の都合で、一部に収録できなかったものがありますが、多種多様な本が出版されていることがわかります。どうか有効にご利用ください。

- \*記載は、日本で出版された日本語(または外国語)の図書と、外国で出版された英語、 ドイツ語、フランス語の図書です。紙面の都合で改訂版は省略してあります。
- \*日本語のものは発行年月日が1996年のもの、英、独、仏語のものは1995年と1996年 のものです。
- \*記載は整理番号、書名、著者名、発行所、定価、判型、発行地の順です。
- \*定価, 判型は日本語図書のみ掲載しました。判型が数字で表示されているものの単位は mm, 定価は税なしと税込みの二通りになっています。
- \*記載の配列は、和書が書名の五十音順、洋書はアルファベット順です。
- \*整理番号のうち、Nは日本語、Eは英語、Dはドイツ語、Fはフランス語です。N96 とは、日本語図書1996年発行の意味です。
- \*このリスト作成は図書委員会の有志が担当しました。

## 山岳図書目録——日本語 1996 年

No.	書 名	著 者	発行所	定価	判型
N 96-001	アウトドア お天気ハンド ブック―いつでもどこでも 役立つ	二宮洸三・林 宏典	池田書店	¥1200	A5
N 96-002	阿寒国立公園を歩く―フィ ールドガイド	片岡秀郎	コモンサイエン ス・インスティ テュート	¥1797	В6
N 96-003	朝日連峰の四季	佐竹伸一	無明舎出版	¥2718	210×230 *写真集
N 96-004	アジア回廊	甲斐巳八郎•甲斐大策	石風社	¥2000	A5
N 96-005	安曇野―アルプス山麓の四 季	穂刈貞雄	山と溪谷社	¥2060	$190\!\times\!250$
N 96-006	安曇野光彩	赤沼淳夫	東京新聞出版局	¥3800	240×250

N 96-007	安曇野の自然	土田勝義/編・著	信濃毎日新聞社	¥2621	A5
N 96-008	阿蘇ありがとう一With	内野 望	西日本新聞社	¥4078	$254\times285$
	Thanks to Aso		novelencing		107521
N 96-009	アフリカ大陸を歩くために	曾我裕子	旅行人	¥1700	A5
N 96-010	アフリカ・カバ探検	宮嶋康彦	偕成社	¥1500	per Lodel
N 96-011	アフリカを歩く―大陸縦断 徒歩の旅	フィオナ・キャンベル /著 中俣真知子/訳	パルコ出版	¥2400	四六判
N 96-012	アマゾン自然探検記―女性 画家の花に捧げた生涯	マーガレット・ミー/ 著 トニ・モリソン/ 編 南日康夫/訳	八坂書房	¥7573	В5
N 96-013	アメリカ文学の<自然>を 読む―ネイチャーライティ ングの世界へ	スコット・スロヴィック、野田研一/編・著	ミネルヴァ書房	¥3605	A5
N 96-014	歩いてしか行けない秘湯	大崎紀夫	マガジンハウス	¥1400	四六判
N 96-015	アルパインクライミングー ヤマケイ登山学校 18	保科雅則	山と溪谷社	¥1500	A5
N 96-016	アルピニストの手記	小島烏水	平凡社	¥ 980	HL判
N 96-017	アンデスの抱擁-海抜 4000mの生活誌	高野 潤	平凡社	¥2300	四六判
N 96-018	飯豊・朝日連峰を歩く	高橋金雄/写・文	山と溪谷社	¥1800	A5
N 96-019	石川県の山一分県登山ガイ ド 18	林 正一・古源良三・ 中村和男・舟田節子	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-020	伊豆半島西北部から眺めた 富士山	小林信夫	近代文芸社	¥1456	A5
N 96-021	いたどり一はくの山行画文 集	山岡 遵	飛鳥	¥1800	A5
N 96-022	一等三角点の名山と秘境一 日本全国一等三角点配置図 総覧	安藤正義・多摩雪雄・ 冨田弘平・松本 浩	新ハイキング社	¥1800	A5
N 96-023	いで湯の山旅―関西周辺	中村圭志/編	山と溪谷社	¥1600	A5
N 96-024	いまからはじめる中高年の 山歩き	川村匡由·秋本敬子	ミネルヴァ書房	¥1854	A5
N 96-025	岩手の山名ものがたり	小島俊一	熊谷印刷出版部	¥1748	四六判
N 96-026	イワナとヤマメ	今西錦司	平凡社	¥1200	HL判
N 96-027	インドヒマラヤ・ガングス タン峰海外合宿報告書 1995	明治大学山岳部/編	明治大学山岳部		B5
N 96-028	ウェストンの見た明治・大 正の日本-L'incanto del Giappone 日本語解説書	ウェストン展実行委員 会	ウェストン展実 行委員会		B5
N 96-029	ウェストンの森―上高地・ 島々谷の朝と夜	高田 宏/文 細川 剛/写真	日本テレビ放送 網	¥1500	A5
N 96-030	ウォーキングマップ九州	法研/編	法研	¥1068	A5
N 96-031	ウォーキングマップ東海・ 中部	法研/編	法研	¥1068	A5
N 96-032	失われた動物たち-20世 紀絶滅動物の記録	WWF Japan/監	広葉書林	¥ 2200	A5
N 96-033	碓氷峠の四季―信越本線	若林賢治	光村印刷	¥1942	A4変

N 96-034	内なる崑崙を訪ねて―イン ド・ヒマラヤ巡礼と遊行	田上一彦	崑崙舎 松本工 房/発売	¥1748	四六判
N 96-035	美しい富士	フォト・セッションク ラブ/編・著	桂書房	¥1922	297×210 *写真集
N 96-036	美ガ原―アルプスの見える 高原で	佐々木信一	山と溪谷社	¥2060	190×250 *写真集
N 96-037	美しき大渓谷―1 億年の旅	横山良哲	風媒社	¥1550	A5
N 96-038	英国式自然の楽しみ方	中川裕二	求龍堂	¥1900	
N 96-039	江上波夫の蒙古高原横断記	江上波夫/著 池内 紀/編・解説	五月書房	¥1700	В6
N 96-040	駅前登山 55 コース―東京 周辺	紀村朋子/編	山と溪谷社	¥1717	A5
N 96-041	越後国雪物語―鈴木牧之と 「北越雪譜」	山岡 敬	恒文社	¥ 800	新書判
N 96-042	エプロンはずして夢の山	田部井淳子	東京新聞出版局	¥1650	四六判
N 96-043	エベレスト北東稜―登山報 告書・学術調査報告書	日本大学エベレスト登 山実行委員会/編	日本大学エベレ スト登山実行委 員会		В5
N 96-044	エマージェンシー・リベア ・ブック	Be-Pal 編	小学館	¥ 580	A5変
N 96-045	黄土高原	南 良和	日本経済評論社	¥8500	270×370 *写真集
N 96-046	御池岳春夏秋冬―やぶこぎ 讃歌	近藤郁夫	近藤郁夫	¥1500	四六判
N 96-047	OHTE '95 登山報告書	1995 年大阪府高校生 日中友好登山隊/編	大阪府高校生日 中友好登山隊		B5
N 96-048	横断山脈 ミニヤ・コンカ 峰一登山と遺難の記録	日本ヒマラヤ協会/編	日本ヒマラヤ協 会	¥3000	B5
N 96-049	岡山県の山一分県登山ガイ ド 32	岡山県山岳連盟	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-050	奥只見物語―イヌワシ舞う 溪谷	足立倫行/文 秋月岩 魚/写真	世界文化社	¥2540	A5
N 96-051	奥多摩・大菩薩・高尾の谷 123 ルートー全踏査!ルー ト図収録	奥多摩渓谷調査団	山と溪谷社	¥2000	A5
N 96-052	奥秩父	野瀬和紀	日地出版	¥1100	В6
N 96-053	尾瀬と鬼怒沼	武田久吉	平凡社	¥1000	HL 判
N 96-054	尾瀬パークボランティア十 周年記念誌	尾瀬沼ビジターセンタ -運営協議会/編	尾瀬沼ビジター センター運営協 議会		B5
N 96-055	尾瀬はぼくらの自然塾	須藤澄夫	あさを社	¥ 971	四六判
N 96-056	尾瀬 ひびきあう生命	百武 充	立風書房	¥1500	四六判
N 96-057	尾瀬 100 年―登山と自然	宮澤邦一	煥乎堂	¥2600	A5
N 96-058	想いで	永尾氏追悼文集委員会 /編	永尾氏追悼文集 委員会		A5
N 96-059	海外登山とトレッキング― ヤマケイ登山学校 21	敷島悦郎	山と溪谷社	¥1500	A5

N 96-060	甲斐名所圖會—甲斐叢記 前•後輯 復刻	大森快庵	臨川書店	¥12566	A5
N 96-061	返らぬ山びこ	河辺リツ	近代文芸社	¥1500	四六判
N 96-062	輝ける白き峰―ニンチンカ ンサ西稜初登頂の記録	栃木県高体連登山部/ 編	栃木県高体連	¥3000	B5
N 96-063	鹿島槍幻影	中原行夫	近代文芸社	¥1400	四六判
N 96-064	風の足跡	謝 孝浩	福音館書店	¥1300	В6
N 96-065	月山 花物語	鹿間広治	無明舎出版	¥2718	208×226 *写真集
N 96-066	ガッシャーブルム II 峰一 1988・夏 日本女子登山隊 の記録	日本女子登攀クラブ/ 編	日本女子登攀ク ラブ	非売品	B5
N 96-067	神々の降りた杜―霧島の四 季	徳森 繁	南日本新聞開発 センター	¥1942	200×224
N 96-068	神々の大地アフリカ	篠田雅人	古今書院	¥2678	四六判
N 96-069	上高地 1―神河内絵画き宿	上條 武	岩田書院	¥3689	A5
N 96-070	上高地「超楽しむ」雑学	藤井哲士	近代文芸社	¥1800	四六判
N 96-071	上高地の常さん―山に生き た男の物語	牛丸 工	信濃毎日新聞社	¥1456	B6
N 96-072	上高地・松本・黒部・白山 麓	日地出版	日地出版	¥ 810	四六判
N 96-073	上高地・槍・穂高	青野恭典	日本カメラ社	¥4800	A4変 * 写真集
N 96-074	カムイの森	水越 武	北海道新聞社	¥3000	A4横 * 写真集
N 96-075	カモシカの森から一白神・ 津軽 北の自然誌	工藤樹一	NTT 出版	¥1500	四六判
N 96-076	ガラパゴス―魔法の島・ガ ラパゴスの動物たち	辻丸純一	青菁社	¥1500	180×200 *写真集
N 96-077	川喜田二郎著作集 2一地域 の生態史	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-078	川喜田二郎著作集3一野外 科学の思想と方法	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-079	川喜田二郎著作集 5-KJ 法 混沌をして語らしめる	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-080	川喜田二郎著作集 6-KJ 法と未来学	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-081	川喜田二郎著作集7一組織 開発論	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-082	川喜田二郎著作集 8一移動 大学の実験	喜田田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-083	川喜田二郎著作集 12ーア ジア文明論	川喜田二郎	中央公論社	¥8540	A5
N 96-084	カワセミの四季	中川雄三	平凡社	¥2000	$180\!\times\!230$
N 96-085	関西周辺 山と地酒の旅	坂倉登喜子·小川清美	新潮社	¥1500	B5変
N 96-086	関西の秘境 芦生の森から	芦生の自然を守り生か す会/編	かもがわ出版	¥1262	A5

N 96-087	関西ハイキングガイド 130 コース	創元社編集部/編	創元社	¥1500 四六判
N 96-088	関西 山越の古道 下	中庄谷直	ナカニシヤ出版	¥2000 四六判
N 96-089	KANGCHENJUNGA— Without Oxygen	ガイア・アルパインク ラブ/編	ガイア・アルパ インクラブ	非売品 A4
N 96-090	関東近郊―名山の旅 100	野瀬和紀	山海堂	¥1250 A5
N 96-091	関東周辺の巨樹を歩く	水瀬嘉平	書苑新社	¥1600 四六判
N 96-092	雁峠だより―はみ出し役人 の山小屋再建記	加藤司郎	白山書房	¥1600 四六判
N 96-093	傷だらけの神々の山一立 山、白山の自然は今	近藤泰年	山と溪谷社	¥1600 四六判
N 96-094	木曽路・御岳―旧中山道の 宿場・御岳とその周辺	山岳観光社/編	ブルーガイドセンター/刊 実 業之日本社/発 売	¥1300 200×230
N 96-095	北アルプス―四季の彩り	日本山岳写真協会松本 支部/編	信濃毎日新聞社	¥3000 A5
N 96-096	北アルプス常念刻々…	小口和利	郷土出版社	¥4369 250×250 *写真集
N 96-097	北の花旅	山田知明	NOVA 出版	¥1800 A5 *写真集
N 96-098	気になる樹一出会い	吉村真里	光村印刷	¥1456 170×181
N 96-099	キネシオテーピング完全マ ニュアル	加藤健造	双葉社	¥1165 A5
N 96-100	ギフチョウ	渡辺康之	北海道大学図書 刊行会	¥20600 A4
N 96-101	岐阜のベストハイキング	塚本真博	風媒社	¥1505 A5
N 96-102	キャラバン 東ネパールを 行く	川村明夫	北海道新聞社	¥1553 A5
N 96-103	九州の峠	甲斐素純・前山光則・ 溝辺浩司・桃坂 豊	葦書房	¥2330 四六判
N 96-104	'94 カラコルム冒険学術隊 報告書	遊び塾ありギリス	遊び塾ありギリ ス	B5
N 96-105	極域科学への招待	神沼克伊	新潮社	¥1100 四六判
N 96-106	極限に挑む男の遺書―北極 海横断に生命を燃やして	大場満郎	エモーチオ 21	¥1100 B6
N 96-107	巨樹と樹齢―立ち木を測っ て年輪を知る樹齢測定法	渡辺新一郎	新風舎	¥1600 B6
N 96-108	空撮登山ガイド 2 (新版) 一東北北部の山々	石橋睦美・藤原優太郎 ・瀬尾 央	山と溪谷社	¥1700 250×190
N 96-109	空撮登山ガイド3(新版) 一東北南部の山々	岩沢正平・瀬尾 央	山と溪谷社	¥1700 250×190
N 96-110	空撮登山ガイド 6 (新版) 一上信越の山々	磯貝 猛・瀬尾 央	山と溪谷社	¥1700 250×190
N 96-111	空撮登山ガイド 13 (新版) 一四国・九州の山々	足利武三・瀬尾 央	山と溪谷社	¥2000 250×190
N 96-112	空撮登山ガイド別冊 (新 版)―空撮 日本百名山	内田 修・瀬尾 央/ 撮影 佐古清隆/編	山と溪谷社	¥2000 250×190

N 96-113	雲取山よもやま話	新井信太郎	さきたま出版会	¥1748	A5変
N 96-114	雲の平・双六岳を歩く	三宅 岳	山と溪谷社	¥1800	A5
N 96-115	グレートジャーニー 2一南 米編Ⅱ	関野吉晴	毎日新聞社	¥3800	A4
N 96-116	黒部渓谷	冠松次郎	平凡社	¥1400	HL判
N 96-117	渓山季樹	上杉満生	求龍堂	¥4944	300×300 * 写真集
N 96-118	京阪神から行くいで湯の山 旅	友保深雪/編·著	七賢出版	¥1500	四六判
N 96-119	京阪神 峠の山旅	大阪府社会体育研究所 /編	七賢出版	¥1500	В6
N 96-120	決定版! キネシオテーピ ング一原因から探る対処法	全国キネシオテーピン グ協会/編	スキージャーナ ル	¥1500	B5
N 96-121	原始温泉-全国手掘り・露 天 52 湯探検	野口悦男·原始温泉探 検隊	ワールドマガジ 社 青人社/発 売	¥1600	A5
N 96-122	検証・リゾート開発―東日 本編	リゾート・ゴルフ場問 題全国連絡会/編	緑風出版	¥2472	四六判
N 96-123	原色野草検索図鑑一合弁花 編	池田健蔵・遠藤 博	北隆館	¥4944	A5
N 96-124	原色野草検索図鑑一離弁花 編	池田健蔵・遠藤 博	北隆館	¥4944	A5
N 96-125	原生林に風がふく	森崎和江 • 簾内敬司	岩波書店	¥2136	四六判
N 96-126	現代に活きる山の神伝承	佐藤芝明	佐藤芝明	¥2000	B6
N 96-127	源流のイワナ釣りガイド	豊野則夫	山と溪谷社	¥1800	A5
N 96-128	高原へそして森へ	西村元一	近代文芸社	¥1456	四六判
N 96-129	高地生物学	柴田 治/編	内田老鶴圃	¥7210	A5
N 96-130	古街道を歩く	小山 和/写真·文	講談社	¥1500	A5
N 96-131	午後三時の山	柏瀬祐之	白山書房	¥1800	四六判
N 96-132	心の山旅	信濃毎日新聞社編集局 /編	信濃毎日新聞社	¥1942	A5
N 96-133	心やさしきネパール	中沢正夫	山と溪谷社	¥1700	四六判
N 96-134	五十歳からのヒマラヤ―四 つの八千メートル峰登頂	石川富康	山と溪谷社	¥1600	四六判
N 96-135	50 センチの山スキー	坂根正一	坂根さよみ	¥6000	B4
N 96-136	湖沼賛歌	山口贅治	ARTBOX イン ターナショナル	¥3000	200×210
N 96-137	こだわりの山 DAS―山歩 きデータバンク	石井光造	白山書房	¥1800	A5
N 96-138	後方羊蹄山登攀記	早川禎治	北の野帳社	¥5000	四六判
N 96-139	紺碧のヒマラヤへ	好山会	好山会		B5
N 96-140	最新 カムチャツカの旅全 ガイド	北海道新聞情報研究所 /編	北海道新聞社	¥2136	B5変
N 96-141	最新雪崩学入門―雪山最大 の危険から身を守るために	北海道雪崩事故防止研 究会/編	山と溪谷社	¥1854	A5
N 96-142	再生の雑木林から	中川重年	創森社	¥1600	В6

N 96-143	ザイルを結ぶ男たち―山岳 同志会 40 周年記念誌	山岳同志会/編	山岳同志会	非売品	A5
N 96-144	サバイバル・スキルズ3	ホビージャパン/編	ホビージャパン	¥2718	B5
N 96-145	サハラ 20 年	野町和嘉	講談社	¥5800	280×290 *写真集
N 96-146	サバンナが輝く瞬間	井上冬彦	アリアドネ企画 三修社/発売	¥3900	250×260 *写真集
N 96-147	ザマを見ろ!―世界おたお た秘境紀行	丹羽基二	無明舎出版	¥2427	四六判
N 96-148	さらなる山をめざして一 KR4峰遠征報告	栃木県庁谷峰会/編	栃木県庁谷峰会	非売品	A4
N 96-149	山岳 第91年	日本山岳会/編	日本山岳会	¥3500	A5
N 96-150	山岳警備隊出動せよ!	富山県警察山岳警備隊 /編	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N 96-151	山岳写真の四季	三宅 修・三宅 岳	東京新聞出版局	¥1300	四六判
N 96-152	山岳年鑑 '95	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥3600	B5
N 96-153	山岳文献目録	富山県立山博物館	富山県立山博物 館	¥1000	B5
N 96-154	山岳霊場御利益旅	久保田展弘	小学館	¥1500	A5
N 96-155	山菜入門―野山でおいしい 山菜を採り、食べるための マニュアル集	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥1600	260×220
N 96-156	山頂に向かう想像力―西欧 文学と日本文学の自然観	河村民部	英宝社	¥4944	四六判
N 96-157	散歩の気分で山歩き	平野恵理子	山と溪谷社	¥1854	A5
N 96-158	山稜 '96—全日本山岳写真 展作品集	全日本山岳写真協会/ 編	全日本山岳写真 協会	¥2100	220×220 *写真集
N 96-159	志賀高原	岩菅山自然観察会	日地出版	¥1100	B6
N 96-160	四季丹沢	白井源三	クレオ	¥1000	150×150 *写真集
N 96-161	四季鳥海山	青野恭典	日本カメラ社	¥2200	260×220 *写真集
N 96-162	シシャパンマー '95 年秋シ シャパンマ峰登山隊報告書	YMS タートル倶楽部	YMS タートル 倶楽部	非売品	B5
N 96-163	静岡県の山一分県登山ガイ ド 21	加田勝利	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-164	自然ガイド屋久島―屋久杉 の森と山と海	太田五雄/編	八重岳書房	¥1000	四六判
N 96-165	自然と親しむはじめての山 歩き	新星出版社/編	新星出版社	¥1200	A5
N 96-166	自然になじむ山岳道路	国土開発技術研究セン ター/編	山海堂	¥3981	B5
N 96-167	自然保護年鑑 平成7-8年版 第4巻-自然と共に生きる時代を目指して	自然保護年鑑編集委員 会	日正社	¥7767	B5
N 96-168	C.W. ニコルの黒姫通信	ニコル・C.W.	講談社	¥ 460	文庫判

N 96-169	シッキムヒマラヤ学術登山 報告書 1995―シニオルチュー登頂	シッキムヒマラヤ登山 実行委員会/編	東北大学良峻山 の会		B5
N 96-170	湿原	新井幸人	グラフィック社	¥2990	250×260 *写真集
N 96-171	詩のある山行き―詩とエッセイと写真	斉藤静子・斉藤 誠	けやき書房	¥2400	A5
N 96-172	島根県の山一分県登山ガイ ド 21	平井 充·長野 至· 田中幾太郎他	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-173	10年天気図―明日の天気 がひと目でわかる!	森田正光	小学館	¥2718	B5
N 96-174	修験道と日本宗教	宮家 準	春秋社	¥3090	四六判
N 96-175	首都圏ウォーキング1日1 万歩ガイド50	日本歩け歩け協会/編	実業之日本社	¥1262	四六判
N 96-176	首都圏 温泉ハイキング	野口冬人/編	自由国民社	¥1200	新書判
N 96-177	樹氷幻想―美しき蔵王	川田勘四郎	みちのく書房	¥2427	200×220 *写真集
N 96-178	小宇宙としての湖・仁科三 湖を観る一第4回山小舎カ ルチャー報告書	早稲田大学岳友会/編	早稲田大学岳友 会		A4
N 96-179	白神山地 修験の源流行― 縄文の奥深い森・ブナ原生 林	北川山人	北の街社	¥2300	A5 *写真集
N 96-180	白神山地と青秋林道	井上孝夫	東信堂	¥1320	A5
N 96-181	絲綢之路 (シルクロード) の高峰に立つ―日本木斯塔 格阿塔 (ムスターグ・アタ) 山群登山隊 1995 報告書	日本山岳会青年部/編	日本山岳会青年 部	非売品	B5
N 96-182	知床連峰	北海道地図株式会社	北海道地図株式 会社		
N 96-183	新アニマルトラック・ハンドブック一動物たちの足跡 を読む	今泉忠明	自由国民社	¥1030	B6変
N 96-184	新 狩野川紀行	静岡新聞社/編	静岡新聞社	¥1942	A5
N 96-185	信仰の山歩き14 関東霊山 紀行	浅野孝一	自由国民社	¥1339	В6
N 96-186	信州山岳日帰り紀行	山崎浩希	龍鳳書房	¥1748	四六判
N 96-187	信州の里山を歩く一東北信 編	里山を歩く編集委員会 /編	信濃毎日新聞社	¥1650	四六判
N 96-188	信州の蝶	栗田貞多男/写真·解 説·編	信濃毎日新聞社	¥2718	四六判
N 96-189	信州の秘湯・名湯	信濃毎日新聞社/編	信濃毎日新聞社	¥1800	A5
N 96-190	新・テーピングの実際	栗山節郎	南江堂	¥4500	B5
N 96-191	神秘な雲貴高原一誇り高き 少数民族を訪ねて	三村隆茂	光村印刷	¥1848	200×220 *写真集
N 96-192	森林一日本文化としての	菅原 聡/編	地人書館	¥3000	A5
N 96-193	森林生態学―現代の林学 第12巻	岩坪五郎/編	文永堂出版	¥4120	A5

N 06-104					
IN 30 134	森林の百科事典	太田猛彦・北村・熊崎 ・鈴木・須藤・只木・ 藤森/編	丸善	¥18540	A5
N 96-195	スイス鉄道紀行―美しきア ルプスの国を巡る	池田光雅	光人社	¥2000	四六判
N 96-196	スキーの原点を探る―レル ヒに始まるスキー歴史紀行	長岡忠一	長岡忠一 スキ ージャーナル/ 発売	¥1800	В6
N 96-197	図説大百科 世界の地理1 アメリカ合衆国1	田辺 裕/監 田辺 裕他/訳	朝倉書店	¥7828	A4変
N 96-198	図説大百科 世界の地理12 ドイツ・オーストリア・ス イス	田辺 裕/監 東廉/訳	朝倉書店	¥7828	A4変
N 96-199	図説大百科 世界の地理17 西・中央・東アフリカ	田辺 裕/監 千葉立 也/訳	朝倉書店	¥7828	A4変
N 96-200	図説大百科 世界の地理20 中国・台湾・香港	田辺 裕/監 諏訪哲郎/訳	朝倉書店	¥7828	A4変
N 96-201	素晴らしき絶景 100	旅の情報サークル「ゆ うほうむ」/編	風媒社	¥1505	A5
N 96-202	素晴らしき富士	深見重利	けやき出版		245×260 *写真集
N 96-203	生と死の分岐点―山の遭難 に学ぶ安全と危険	ビット・シューベルト /著 黒沢孝夫/訳	山と溪谷社	¥2678	A5
N 96-204	ZEUS	竹下光士	青菁社		159×195 *写真集
N 96-205	世界大地図鑑	正井泰夫/監	小学館	¥14800	B4変
N 96-206	世界の山草・野草―ポケッ	冨山 稔・森 和男	日本放送出版協会	¥2800	
	ト事典		25		
N 96-207		谷崎 竜	亜紀書房	¥1700	四六判
	赤道の万年雪―パナマ地峡	E 2 2 2		¥1700 ¥1500	四六判四六判
	赤道の万年雪―パナマ地峡 ・北アンデスを行く	E 2 2 2	亜紀書房		
N 96-208 N 96-209	赤道の万年雪―パナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎―富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議	井ノ部康之 日本山岳会青年部/編	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部		四六判
N 96-208 N 96-209 N 96-210	赤道の万年雪ーパナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎一富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995 年度 仙台が誇る「山の先達・二	井ノ部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員		四六判 A5
N 96-208 N 96-209 N 96-210 N 96-211	赤道の万年雪―パナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎―富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995 年度 仙台が誇る「山の先達・二 人展」報告書	井/部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/ 編	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員 会 リベルタ出版	¥1500	四六判 A5 B5
N 96-208 N 96-209 N 96-210 N 96-211 N 96-212	赤道の万年雪ーパナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎一富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995 年度 仙台が誇る「山の先達・二 人展」報告書 続 傷だらけの百名山 続・名古屋周辺山旅徹底ガイドー裏本曽・東濃・奥三	井/部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/ 編 加藤久晴 日本山岳会東海支部/	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員 会 リベルタ出版 新興出版/発売 中日新聞本社	¥1500 ¥1957	四六判 A5 B5 四六判
N 96-208 N 96-209 N 96-210 N 96-211 N 96-212	赤道の万年雪ーパナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎一富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995 年度 仙台が誇る「山の先達・二 人展」報告書 続 傷だらけの百名山 続・名古屋周辺山旅徹底ガイドー裏本曽・東濃・奥三 河 続 北海道の植物一野の花・山の花	井/部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/ 編 加藤久晴 日本山岳会東海支部/ 編 谷口弘一・三上日出夫	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員 会 リベルタ出版 新興出版/発売 中日新聞本社	¥1500 ¥1957 ¥1600	四六判 A5 B5 四六判
N 96-208 N 96-209 N 96-210 N 96-211 N 96-212 N 96-213 N 96-214	赤道の万年雪ーパナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎一富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995 年度 仙台が誇る「山の先達・二 人展」報告書 続 傷だらけの百名山 続・名古屋周辺山旅徹底ガイドー裏木曽・東濃・奥三 河 続 北海道の植物一野の花 ・山の花	井/部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/ 編 加藤久晴 日本山岳会東海支部/ 編 谷口弘一・三上日出夫/編	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員 会 リベルタ出版 新興出版/発売 中日新聞本社 北海道新聞社	¥1500 ¥1957 ¥1600 ¥1942	四六判 A5 B5 四六判 A5
N 96-208 N 96-209 N 96-210 N 96-211 N 96-212 N 96-213 N 96-214	赤道の万年雪ーパナマ地峡 ・北アンデスを行く 雪炎一富士山最後の強力伝 全国大学山岳部監督会議 1995年度 仙台が誇る「山の先達・二 人展」報告書 続 傷だらけの百名山 続・名古屋周辺山旅徹底ガイドー裏本曽・東濃・奥三 続 北海道の植物一野の花 ・山の花 ・山の花 統・山で死なないために 太古ペーニュージランドそ	井/部康之 日本山岳会青年部/編 大友幸一・八嶋 寛/ 編 加藤久晴 日本山岳会東海支部/ 編 谷口弘一・三上日出夫 /編 武田文男 辰濃和男	亜紀書房 山と溪谷社 日本山岳会青年 部 「山の先達・二 人展」実行委員 会 リベルタ出版 新興出版/発売 中日新聞本社 北海道新聞社 朝日新聞社	¥1500 ¥1957 ¥1600 ¥1942 ¥ 520	四六判 A5 B5 四六判 A5 B6 文庫判

	大山 文学散步	川上廸彦·谷野允則	山陽新聞社	¥1553 四六判
N 96-219	第8回 白族史朗賞―日本 山岳写真コンテスト入選作 品集	山梨県早川町役場/編	山梨県早川町役 場	¥2000 250×240
N 96-220	大旅行記	イブン・バットゥータ /著 家島彦一/訳	平凡社	¥3000 B6
N 96-221	ダウラギリ I 峰一ベルニナ 山岳会・横浜ダウラギリ I 峰登山隊 '93	古関正雄/編	ベルニナ山岳会 横浜ダウラギリ I 峰登山隊	B5
N 96-222	高いばかりが山じゃない― 追悼 羽賀正太郎	東京雲稜会/編	東京雲稜会	A5
N 96-223	高尾山の花―高尾山・陣馬 山・景信山・南浅川・その 周辺	近藤篤弘	けやき出版	¥1456 新書判
N 96-224	高嶺に咲く―北アルプスの 名花たち	中村至伸	銀河書房	¥1262 165×190
N 96-225	宝の館チベット	カトリーナ・バス/著古川 修/訳	中央公論社	¥2718 四六判
N 96-226	立山神殿御遷宮	高橋敬一/写真 岡田 順一/文	たてやま山岳出 版会	¥5000 255×260
N 96-227	谷川岳一光と風の楽章	高橋茂雄	ぎょうせい	¥15000 A4
N 96-228	渓と魚の履歴書	鈴野藤夫	栄光教育文化研 究所	¥4300 四六判
N 96-229	誰でも行ける意外な水源・ 不思議な分水	堀 淳一/文・写真	東京書籍	¥2500 A5
N 96-230	丹沢アウトドア・ライフを 考える— '95 丹沢シンポジ ウム	丹沢ドン会/編	夢工房	¥ 486 A5
N 96-231	丹沢にトンネルを掘るな! ストップ! 水無堀山林道 工事	片桐 務/編	夢工房	¥ 486 A5
N 96-232	探訪ひょうごの滝	須田京介/文 北村泰 生/写真	神戸新聞総合出 版センター	¥1500 A5
N 96-233	地球 100 自然	川口邦雄	日本写真企画	¥3000 AB判 *写真集
N 96-234	地平線の旅人たち	地平線会議/編・著	窓社	¥2200 A5
N 96-235	チベット―中国・ネパール インド・ブータン	旅行人編集室	旅行人	¥1900 A5
N 96-236	チベット―マンダラの国	松本栄一/写真 奥山 直司/文	小学館	¥1500 A5
N 96-237	チベット・チャンタン高原 一遥かなる悠久の世界	河合康夫	近代文芸社	¥1300 四六判
N 96-238	中高年からの山歩き	主婦と生活社/編	主婦と生活社	¥1100 260×210
N 96-239	中高年のための登山学 Q & A―岩崎元郎の登山教室	岩崎元郎	日本放送出版協 会	¥1068 B5
N 96-240	中高年のやさしい山歩き一 山の楽しみ方からおすすめ コースまで	石田弘行	土屋書店	¥1200 A5

N 96-241	中高年の山歩き一山を楽し む	越谷英雄/監	ナツメ社	¥1200	A5
N 96-242	中高年の山歩き・山登り	主婦の友社/編	主婦の友社	¥ 980	B5
N 96-243	中高齢者のための登山教室	西 愛人	西 愛人 朝日 新聞社出版局書 籍販売部/発売	¥1200	В6
N 96-244	中国国境 8000 km — 来た、 見た、撮った!	田島 正	徳間書店	¥ 880	文庫判
N 96-245	中国天山の植物	近田文弘•清水建美	トンボ出版	¥24272	A4
N 96-246	中国・パキスタン砂漠の旅 一おじさんシルクロードを 行く	巴比典憧	近代文芸社	¥2000	В6
N 96-247	鳥海山・ブナの森の物語	斎藤政広	無明舎出版	¥2718	210×230 *写真集
N 96-248	鳥海山紀行	淡路利行	秋田魁新報社	¥1457	B6変 * 写真集
N 96-249	ちょっと山へ行ってきます	みなみらんぼう	リヨン社 二見 書房/発売	¥1400	В6
N 96-250	定年後は山歩きを愉しみな さい	小倉 厚	明日香出版社	¥1300	В6
N 96-251	テレマークスキー・テクニック	深町計彦・D. Shefchik ・川上 敦・栃内 譲	山と溪谷社	¥1236	A4変
N 96-252	出羽三山	伊藤 武	みちのく書房	¥7000	A4
N 96-253	出羽三山の文化と民俗	岩鼻通明	岩田書院	¥2300	B6
N 96-254	天山山脈トムール峰登山隊 報告書	田村康一•他/編	天山登攀俱楽部		B5
N 96-255	天山北路の旅	金子民雄	連合出版	¥2500	四六判
N 96-256	天と地の民―パプアニュー ギニアの人々と生活	三沢和子	光村印刷	¥3800	200×230 *写真集
N 96-257	東海山岳 第7号 1996	安藤忠夫/編	日本山岳会東海 支部		A5
N 96-258	東海自然歩道―日帰りハイ キング 奥三河・鈴鹿峠	武村岳男	山と溪谷社	¥1500	A5
N 96-259	党河南山—大分県日中友好 登山隊 '94 報告書	大分県山岳連盟/編	大分県山岳連盟	¥2000	B5
N 96-260	東京近郊日帰りハイキング	日地出版/編	日地出版	¥ 786	В6
N 96-261	東京したまち山岳会―戦中 ・戦後六十年	寺田甲子男	東京新聞出版局	¥1000	四六判
N 96-262	東京の水源林	堀越弘司	けやき出版	¥ 800	A5
N 96-263	凍風―震える野性の記憶	岡田 昇	ダイヤモンド社	¥4800	260×260 *写真集
N 96-264	登山研修 VOL.11 1996	文部省登山研修所/編	文部省登山研修 所		B5
N 96-265	登山日記 その他紀行	春山六郎	近代文芸社	¥1800	四六判
N 96-266	栃木の日帰り名瀑ガイド	下野新聞社/編	下野新聞社	¥1800	A5
N 96-267	鳥取県の山一分県登山ガイ ド 30	藤原道弘	山と溪谷社	¥1750	A5

N 96-268	富山県の山一分県登山ガイ ド 17	佐伯郁夫•佐伯克美	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-269	とやま山ガイド―10 ジャ ンル 100 コース	佐伯郁夫·佐伯邦夫/ 編	CAP	¥1942	A5
N 96-270	とやま山紀行	橋本 廣/編	桂書房	¥2400	A5変
N 96-271	トレッキング スイス・ア ルプス一私たちの歩いた 山とむら	上瀧陸生・上瀧タツ子	文理閣	¥1500	四六判
N 96-272		野町和嘉	新潮社	¥1600	B5変
N 96-273	ナイル自転車大旅行記―女 ひとりアフリカ砂漠を行く	ベッティナ・セルビー /著 小林泰子/訳	新宿書房	¥2400	四六判
N 96-274	鳴けない山鳥の詩―山に祈 り神々と暮らす信州・黒姫 郷山窩民族哀話	竹内彦司	ほおずき書籍	¥1700	四六判
N 96-275	名古屋周辺山旅徹底ガイド 一台高・鈴鹿・奥美濃	日本山岳会東海支部/ 編	中日新聞本社	¥1600	A5
N 96-276	ナチュラリスト・上	E.O. ウィルソン/著 荒木正純/訳	法政大学出版局	¥1600	四六判
N 96-277	ナチュラリスト・下	E.O. ウィルソン/著 荒木正純/訳	法政大学出版局	¥2400	四六判
N 96-278	ナチュラル・ステップース ウェーデンにおける人と企 業の環境教育	カール=ヘンリク・ロ ベール/著 市河俊男 /訳	新評論	¥2500	四六判
N 95-279	夏山の気象観測表―平成 8年	日本気象協会/編	日本気象協会		B5
N 96-280	南極・北極	バーナード・ストーン /著 神沼克伊・三方 洋子/訳	朝倉書店	¥9991	A4
N 96-281	南北アメリカ徒歩縦横断日 記	池田 拓	無明舎出版	¥3495	A5
N 96-282	日光山志 影印	植田孟縉	臨川書店	¥8755	A5
N 96-283	日本アルプス再訪	W. ウェストン/著 水野 勉/訳	平凡社	¥1400	HL判
N 96-284	日本大学エベレスト登山隊 1995―北東稜登山報告書	日本大学登山隊/編	日本大学		270
N 96-285	日本大学エベレスト登山隊 1995―学術調査報告書	日本大学実行委員会/ 編	日本大学		270
N 96-286	日本 滝めぐり―名瀑から 隠れ滝まで 386	加藤庸二	日本交通公社出 版事業局	¥ 1545	A5
N 96-287	日本地名大百科	小学館/編	小学館	¥14600	AB判
N 96-288	日本チョーオユー学術登山 1995 隊報告書	山本正嘉	山本正嘉	非売品	B5
N 96-289	日本の自然一天・山・森・ 水・大地・海	水越 武・三好和義・ 野町和嘉/編	クレオ	¥2800	A4
N 96-290	日本の自然 '96 年版	朝日新聞社/編	朝日新聞社	¥3700	В5
N 96-291	日本のスミレー写真検索	いがりまさし/写真・ 解説	山と溪谷社	¥2000	A5
N 96-292	日本の溪谷 '96	白山書房編集部/編	白山書房	¥2060	A5
N 96-293	日本の名山・花彩彩	白簇史朗	新日本出版社	¥3800	AB判

N 96-294	日本野鳥大鑑 上一アビ目 〜キツツキ目	蒲谷鶴彦•松田道生	小学館	¥8800	270
N 96-295	日本野鳥大鑑 下一スズメ 目	蒲谷鶴彦•松田道生	小学館	¥8800	270
N 96-296	日本雪山登山ルート集	中村成勝/編	山と溪谷社	¥2845	B5
N 96-297	ニューイングランド讃歌	フランクリン・バロー ズ/著 橘 雅子/訳	晶文社	¥2300	四六判
N 96-298	NUMBUR EXP '90 ヌン ブール峰登山報告書	福島功夫/編	奥多摩山岳会		B5
N 96-299	熱帯雨林の減少	中央法規出版/編	中央法規出版	¥3090	B5
N 96-300	熱帯雨林の世界1 森林彷 徨	伊谷純一郎·大塚柳太郎/編	東京大学出版会	¥2266	四六判
N 96-301	熱帯雨林の世界 2 トーテムのすむ森	伊谷純一郎•大塚柳太郎/編	東京大学出版会	¥2266	四六判
N 96-302	熱帯雨林の世界 3 森を語 る男	伊谷純一郎 · 大塚柳太郎/編	東京大学出版会	¥2266	四六判
N 96-303	熱帯雨林の世界 5 森の食 ベ方	伊谷純一郎 · 大塚柳太郎/編	東京大学出版会	¥2266	四六判
N 96-304	熱帯雨林の世界7 水の国 の歌	伊谷純一郎 · 大塚柳太郎/編	東京大学出版会	¥2266	四六判
N 96-305	ネパールからナマステ!	西野孝枝	筑摩書房	¥1500	四六判
N 96-306	ネパール旅の雑学ノート	平尾和雄	ダイヤモンド社	¥1600	四六判
N 96-307	NEPAL HIMALAYA '94 ーギャジカン遠征	信州大学・ネパール警察合同ヒマラヤ遠征隊 /編	信州大学山岳会 • 学士山岳会	¥3000	B5
N 96-308	野の花に親しむ4	高橋勝雄/文・写真	毎日新聞社	¥1700	A5
N 96-309	野の花に親しむ5	高橋勝雄/文・写真	毎日新聞社	¥1700	A5
N 96-310	白山眺望登山―泰澄大師ゆ かりの地をたずねて	金沢ナカオ山岳会『白 山眺望登山』実行委員 会/編	高島出版印刷	¥1500	A5
N 96-311	白山のニホンザル家族	戸谷和郎	平凡社	¥2233	四六判
N 96-312	白山花ガイド	栂 典雅/文・写真	橋本確文堂	¥ 971	A6変
N 96-313	白山麓覚書き	春木敏男	北國新聞社	¥1748	A5
N 96-314	パタゴニアー希望の大地	藤井正夫	丸善	¥1800	四六判
N 96-315	八幡平百景	関 励	無明舎出版	¥2718	210×230 * 写真集
N 96-316	初登頂―花嫁の峰から天帝 の峰へ	平井一正	ナカニシヤ出版	¥2816	四六判
N 96-317	パトニーヴェイルからの風 一山脈に語る	日本山岳会信濃支部/ 編	日本山岳会信濃 部	¥1800	В6
N 96-318	花の百名山・登山ガイド上	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥1700	A5
N 96-319	花の百名山・登山ガイド下	山と溪谷社/編	山と溪谷社	¥1700	A5
N 96-320	花ひらく神戸―六甲山とそ の周辺に咲く花	安原修次	ほおずき書籍	¥2800	A5
N 96-321	パノラマ武蔵野	行田哲夫	平凡社	¥2163	B5変 * 写真集

N 96-322	パプアニューギニア探訪記 一多忙なビジネスマンの自 己啓発旅行	川口 築	花伝社 共栄書 房/発売	¥1500 B6
N 96-323	はるかインカを訪ねて	関野吉晴/文•写真	小蜂書店	¥1300 A5
N 96-324	春山―ヤマケイ登山学校7	酒井国光	山と溪谷社	¥1500 A5
N 96-325	東崑崙の山一玉虚峰(ユイ シュフェン)に登る日中友 好女性合同登山隊の記録	日本ヒマラヤ協会/編	日本ヒマラヤ協 会	¥1000 B5
N 96-326	東と西 海と山	大林太良	小学館	¥ 840 SL判
N 96-327	秘境 ガネッシュヒマール の植物―調査隊、道なき道 を行く	塚谷裕一	研成社	¥1854 四六判
N 96-328	羆 吼ゆる山	今野 保	中央公論社	¥ 777 文庫判
N 96-329	日高に燃えて一日高山脈六 十五座踏破の軌跡	神原照子	神原照子	¥1000 A5
N 96-330	飛騨の山スキールート	木下喜代男	木下喜代男	B5
N 96-331	人と自然の素顔を訪ねて― 熱帯アフリカ・マダガスカ ル	嘉納秀郎	平凡社	¥4738 270×310 *写真集
N 96-332	独りだけのウィルダーネス ―アラスカ・森の生活	リチャード・プローン ネク/著 サム・キー ス/編 吉川竣二/訳	東京創元社	¥1200 A6
N 96-333	ひとりぼっちの叛乱―とう ちゃん、巻機山に生きろ	豊田和弘	山と溪谷社	¥1600 四六判
N 96-334	桧原村紀聞―その風土と人 間	瓜生卓造	平凡社	¥1200 HL判
N 96-335	ヒマラヤ・アルバイン・ス タイル―最も魅力的なルー トからの高峰登山	アンディ・ファンショ ウ、スティーヴン・ヴェナブルズ/著 手塚 勲・池田常道/訳	山と溪谷社	¥4800 290×300
N 96-336	ヒマラヤ学誌 第6号	京都大学ヒマラヤ研究 会/編	京都大学ヒマラ ヤ研究会	¥1500 B5
N 96-337	ヒマラヤの東一雲南・四 川、東南チベット、ミャン マー北部の山と谷	中村 保	山と溪谷社	¥3000 A5
N 96-338	ヒマラヤ名峰事典	薬師義美・雁部貞夫/編 藤田弘基/写真	平凡社	¥10300 四六倍 判
N 96-339	ヒマラヤ・ランタン花紀行	高橋佳晴	誠文堂新光社	¥3200 B5変
N 96-340	ビヨンド・リスク―世界の クライマー 17 人が語る冒 険の思想	ニコラス・オコネル/ 著 手塚 勲/訳	山と溪谷社	¥1800 B4
N 96-341	琵琶湖源流 野洲川紀行	吉村仙二郎	サンライズ印刷	¥3500 A4 *写真集
N 96-342	フィールドワーク最前線 一見る・聞く・歩く	山田 勇/編	弘文堂	¥2884 A5
N 96-343	風光剱岳 Mindful scenery	高橋敬市	光村印刷	$\Upsilon$ 1456 170×185
N 96-344	ブータン・風の祈り	田淵 曉/写真 今枝 由郎/文	平河出版社	¥5800 270

N 96-345	深田久弥の山さまざま―池 内紀のちいさな図書館	池内 紀/編・解説	五月書房	¥1700	В6
N 96-346	福井の山一分県登山ガイド 19	宮本数男	山と溪谷社	¥1750	A5
N 96-347	Fuji 1	絹谷幸二	日経 BP 社	¥6500	310
N 96-348	富士異彩	東京新聞編集局/編	東京新聞出版局	¥2900	
					*写真集
N 96-349	富士遠望	藁品 実・串田孫一・ 江國 滋・風見武秀	グラフィック社	¥2990	250×260 *写真集
N 96-350	富士頌彩	紅陽会	文一総合出版	¥2500	$210 \times 240$
N 96-351	富士山	日本交通公社出版事業 局/編	日本交通公社出 版事業局	¥1545	A5
N 96-352	富士山	三好和義	講談社	¥5800	B4 * 写真集
N 96-353	富士山	草野心平・棟方志功	岩崎美術社	¥12336	0 350
N 96-354	富士山雲の変幻	竹内トキ子	文一総合出版	¥2200	200×230 *写真集
N 96-355	富士山歷史散步	遠藤秀男	羽衣出版	¥1553	A5
N 96-356	富士と遊ぶ・登る―日本一 の山を裸にする百科	婦人画報社/編	婦人画報社	¥1600	A5
N 96-357	ふじの里	伊志井桃雲/写真・詩	アトリエ桃雲 静岡新聞社/発 売	¥5000	260×270
N 96-358	富士を見る山歩き	工藤隆雄	小学館	¥1600	A5
N 96-359	ふたりの山遊び―妻と歩く 低山紀行	高橋惇夫	山と溪谷社	¥1500	В6
N 96-360	ブナ・いのちの賦	梶谷 泉/絵・文	夢工房	¥1456	B5
N 96-361	ブナの森を楽しむ	西口親雄	岩波書店	¥ 680	新書判
N 96-362	ブナ林の自然誌	原 正利	平凡社	¥2200	四六判
N 96-363	冬のデナリ	西前四郎	福音館書店	¥1751	四六判
N 96-364	プラブーツ突然破壊問題シ ンポジウム資料集	山岳 4 団体懇談会/編	山岳 4 団体懇談 会		300
N 96-365	フリークライミングーヤマ ケイ登山学校 17	北山 真	山と溪谷社	¥1500	A5
N 96-366	フリークライミング・テク ニック	杉野 保・杉守千晶・ /著 飯山健治/写真	山と溪谷社	¥1236	A5
N 96-367	ふるさと富士百名山	川村匡由•秋本敬子	山と溪谷社	¥2500	250
N 96-368	ふるさとの富士 200 名山 一写真紀行	吉野晴朗/写真・文	東方出版	¥2427	A5
N 96-369	辺境の星	雁部貞夫	短歌新聞社	¥2500	A5
N 96-370	北西辺境州の顔―写真紀行	十字和子	日本アジア文学 協会 めこん/ 発売	¥2060	210×210
N 96-371	星になった康樹へ	スピダーニエ同人日本 教員登山隊/編	スピダーニエ同 人日本教員登山 隊	¥4000	B5
N 96-372	北海道動物記	竹田津実	平凡社	¥ 980	HL判
N 96-373	北海道山の花図鑑 大雪山	梅沢 俊	北海道新聞社	¥2233	B6変

B5		日本山岳会秋田 支部	々木民秀他/編	ボルネオ・キナバル登山報 告書-1996.01/10-18	N 96-374
A5	¥2781	文一総合出版	安 均・浅間 茂	ボルネオ島キナバル山の鳥 一海外バードウォッチング 1	N 96-375
四六判	¥3900	朝日新聞社	多勝一	本多勝一集5 ヒンズーラ ージー探検記	N 96-376
四六判	¥3900	朝日新聞社	多勝一	本多勝一集 25 日本環境 報告	N 96-377
A5	¥1854	山と溪谷社	森久雄	本のある山旅	N 96-378
A5	¥1200	主婦と生活社	出正一	マイカーで行く 100 低山ハ イキング―東京周辺	N 96-379
A5	¥1600	山と溪谷社	と溪谷社大阪編集室 [編	マイカー登山ベストコース 一関西周辺	N 96-380
四六判	¥2000	蝸牛社	丸弥平	またきの風土	N 96-381
A5		SKARLOEY CLUB 事務局	KARLOEY CLUB 「務局/編	松井登 1981 年~1995 年	N 96-382
A5変	¥ 563	小学館	塚晶人	マップ・ブック	N 96-383
四六判	¥1545	東方出版	、谷萌苺	幻の「東突厥斯担共和国」 を行く	N 96-384
110×210	¥ 900	高知営林局	知営林局	三嶺 MIUNE 一森林散策 ガイド	N 96-385
A5	¥1300	伊勢山岳会	勞山岳会	三重県境踏破の記録	N 96-386
A5	¥1750	山と溪谷社	r住友一·岩出好晃	三重県の山一分県登山ガイ ド 23	N 96-387
A4横変 *写真集	¥3900	NTT 出版	1下大明	水の果実―もうひとつの尾 瀬へ	N 96-388
171×186 *写真集	¥1500	たたら書房	「野利晴	魅せられて大山	N 96-389
四六判	¥1500	読売新聞社	1村 進	未知への旅 南極点スキー マラソン	N 96-390
文庫判	¥ 640	小池書院	球	緑の迷宮―マヤ文明―ユカ タン半島幻想紀行	N 96-391
A5	¥1800	随想含	・ルペン・ペンクラブ /編	南会津・鬼怒の山 50	N 96-392
四六判	¥1400	小学館	<b>予田知佑</b>	南の川まで	N 96-393
A4	¥1200	主婦と生活社	なみらんぽう/監修	みなみらんぼうの花登山の すすめ	N 96-394
四六判	¥2266	ナカニシヤ出版	<b>、垣山岳協会/編</b>	美濃の山 第1巻―揖斐川 水系の山	N 96-395
A5	¥1359	東京新聞出版局	祖 博	宮沢賢治の山旅―イーハト ーブの山を訪ねて	N 96-396
四六判	¥1500	山と溪谷社	時 博	妙高山・高谷池ヒュッテ通 信	N 96-397
四六判	¥2000	楓工房	士 齐	魅惑のヒマラヤー山麓への いざない	N 96-398
四六判	¥1250	山海堂	予瀬和紀	名山への旅 100	N 96-399

N 96-400	明治日本旅行案内 上巻一 カルチャー編	アーネスト・サトウ, A.G. ホーズ/著 庄 田元男/訳	平凡社	¥2500	A5
N 96-401	名水一黒部の流れ	岩橋崇至	光村印刷	¥1500	170×183 * 写真集
N 96-402	女神の山 チョモラリ一日 中合同チョモラリ蜂登山隊 報告書	長野山岳協会	長野山岳協会	非売品	A4
N 96-403	盲導犬ポル モンブランの 風を聴け	原久美子	実業之日本社	¥1400	B6
N 96-404	もっと知りたい日本の山	石井光造	日本実業出版社	¥1300	四六判
N 96-405	森と人との対話―熱帯から みる世界	山田 勇/編	人文書院	¥2600	四六判
N 96-406	森と氷河と鯨-ワタリガラ スノ伝説を求めて	星野道夫	世界文化社	¥2800	A5
N 96-407	森に蘇る日本文化	青木宏一郎	三一書房	¥1700	四六判
N 96-408	森の癒し―いのちの瞑想の 世界	久保田展弘	PHP 研究所	¥1456	四六判
N 96-409	森の記憶	ロバート・P. ハリス ン/著 金 利光/訳	工作舎	¥3914	A5
N 96-410	森のシナリオー写真物語・ 森の生態系	西口親雄	八坂書房	¥2427	В5
N 96-411	森の旅一山里の釣りから	内山 節	日本経済評論社	¥1854	В6
N 96-412	森の中へ	堀 勝彦	信濃毎日新聞社	¥4369	B5 * 写真集
N 9f-413	森への旅	水越 武/写真・文	小学館	¥2200	290 * 写真集
N 96-414	森へ行く日	高田 宏	マインドカル チャーセンター	¥1068	B6変
N 96-415	森へゆこう一大学の森への いざない	全国大学演習林協議会 /編	丸善	¥1650	四六判
N 96-416	「森を守れ」が森を殺す!	田中淳夫	洋泉社	¥1600	四六判
N 96-417	モンゴル草原の生活世界	小長谷有紀	朝日新聞社	¥1165	四六判
N 96-418	モンゴルの空の下一私の定 年旅行	安尾慎一	連合出版	¥1700	四六判
	焼石連峰の四季	高橋亭夫	岩手日報社	¥2136	B5変 * 写真集
N 96-420	八ケ岳の子ギツネ	西村 豊	講談社	¥1500	180×200 *写真集
N 96-421	山歩き読本―山に遊ぶ山に 学ぶ	川辺柳一•日向野克巳	上毛新聞社	¥1200	В6
N 96-422	山おちこち	松崎中正	楽山斎	¥2500	四六判
N 96-423	山からの言葉	辻まこと	平凡社	¥ 760	HL判
N 96-424	山翡翠	田中雅美	クレオ	¥2990	260×260 *写真集
N 96-425	ヤマセミ―里山の清流に翔 ぶ	飯村茂樹	講談社	¥1500	180×200 *写真集

N 96-426	山釣り―はるかなる憧憬の 谿から	山本素石	立風書房	¥2000	В6
N 96-427	山釣り放浪記	山本素石/著 草野 雷/編	筑摩書房	¥2330	四六判
N 96-428	山でクマに会う方法	米田一彦	山と溪谷社	¥1275	四六判
N 96-429	山と海の詩―我が心の山岳 遍歴	高橋サブロー	東京新聞出版局	¥1800	В6
N 96-430	山と空と放射線	野口邦和	リベルタ出版	¥2060	四六判
N 96-431	山と旅と思い出と	右川清夫	右川清夫	非売品	A5
N 96-432	山と蜂-10 ミクロン、雌 だけの世界	宮本 泉	光陽出版社	¥1457	四六判
N 96-433	山と森のフォークロア:付 富士山を語るシンポジウム 全記録	静岡県環境民俗研究会 /編	羽衣出版	¥1942	A5
N 96-434	山に生きる	草野延孝/講演	夢工房	¥ 486	A5
N 96-435	山に咲く花一写真検索	永田芳男/写真 畦上 能力/編	山と溪谷社	¥2884	A5
N 96-436	山に彷徨う心	古井由吉	アリアドネ企画 三修社/発売	¥1700	四六判
N 96-437	山に花が咲くとき―花と山 のスケッチ文集	遠山若枝	ぎょうせい	¥2427	B5変
N 96-438	山の安全を守って一北ア南 部地区遭対協 40 周年記念 誌	北アルプス南部地区山 岳遭難防止対策協会/ 編	北アルプス南部 地区山岳遭難防 止対策協会	非売品	A4
N 96-439	山の歳月	岡村 直	桂書房	¥2400	$208\!\times\!182$
N 96-440	山の四季―CD-ROM 付写 真集	山岳写真同人四季	日経 BP 出版セ ンター	¥2427	A5
N 96-441	山の常識・非常識―山のマ ナーブック	森田秀巳・松倉一夫	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N 96-442	山の精神史 柳田国男の発 生	赤坂憲雄	小学館	¥ 932	SL判
N 96-443	山の地図と地形―ヤマケイ 登山学校 15	田代 博・藤本一美・ 清水長正・高田将志	山と溪谷社	¥1500	A5
N 96-444	山の動物民俗記	長沢 武	ほおずき書籍	¥1553	四六判
N 96-445	山の花幽幻	白籏史朗	日本カメラ社	¥2200	250×210 * 写真集
N 96-446	山登りってもっと素敵―ワ ンランク上の楽しみ方教え ます	小田由理/文 中村み つお/編	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N 96-447	山の本屋の手帖	小林靜生	鹿鳴在		四六判
N 96-448	山のワザ―未公開登山技術 のすべて	長野県山岳協会	長野県山岳協会 企画広報部	¥ 400	B6変
N 96-449	やま ひと スキー一木下 是雄集 2	木下是雄	晶文社	¥3800	四六判
N 96-450	山日和	諏訪 弘	自湧社	¥3398	A4
N 96-451	山守りの記	柏樹直樹	桂書房	¥2000	A5
N 96-452	山を歩く―ヤマケイ登山学 校1	福島正明•羽根田治	山と溪谷社	¥1500	A5

N 96-453	雪と岩から、混沌から	ヘイデン・カルース/ 著 沢崎順之助/ 訳	田山粗書	¥4500	A5変
N 96-454	湯けむり極楽紀行	美坂哲男	トラベルジャー ナル	¥1545	В6
N 96-455	横山宏のネイチャーフォト 講座	横山 宏	山と溪谷社	¥1800	B5
N 96-456	ルボ・東北の山と森―自然 破壊の現場から	山を考えるジャーナリ ストの会/編	緑風出版	¥2472	四六判
N 96-457	烈風の頂きに立ちて―ラン タン・リルン南東稜	札幌山岳連盟/編	札幌山岳連盟		270
N 96-458	老人エベレスト街道をゆく 一心に残るネパールトレッ キング	田中 均	近代文芸社	¥1500	В6
N 96-459	楼蘭王国史の研究	長澤和俊	雄山閣	¥19417	A5
N 96-460	六甲山の野鳥	日本野鳥の会兵庫県支 部/編	神戸新聞総合出 版センター	¥1942	В6
N 96-461	炉辺 第9号	明治大学山岳部炉辺会	明治大学山岳部 炉辺会	¥4000	A5
N 96-462	わが愛する北の山	神山 健	神山 健	送料¥240	) A5
N 96-463	わが回想の谿々一大イワナ の泳ぐ谿へ	白石勝彦	山と溪谷社	¥1800	A5
N 96-464	わが山路一松崎中正山行譜	松崎中正	楽山斎	¥5000	AB判
N 96-465	わが山旅五十年	田部重治	平凡社	¥1400	HL判
N 96-466	わが山旅、まちだ文学散歩	寺田和雄	町田ジャーナル 社	¥1845	A5
N 96-467	私の逢った富士山	大成健二	光村印刷	¥3690	A4変
N 96-468	私のネパール―PHOTO 紀 行	岡本 忍	かもがわ出版	¥2136	В5
N 96-469	私のウエストン追跡記―細 部からその実像に迫る	田畑真一	田畑真一 山と 溪谷社/発売	¥1600	四六判

#### 山岳図書目録——英語 1995年

No.	書 名	著 者	発行所	発行地
E 95-049	Cho Oyu Himalandkyajori Himal	Jan Kielkowski	Explo Publishers	Poland
E 95-050	Climber's Guide to the Teton Range	Leigh N.Ortenbur- ger and Reynold G. Jackson	The Mountain- eers	Seattle
E 95-051	K2 Challenging the Sky	Roberto Mantovani and Kurt Diember- ger	Swan Hill Press	Shrewsbury, England
E 95-052	Landmarks—An Exploration of Great Rocks	David Craig	Jonathan Cape	London
E 95-053	May the Fire be Always Lit  —A Biography of Jock  Nimlin	IDS Thomson	The Ernest Press	Holyhead Wales
E 95-054	Mountain of Happiness (A)	Brig. D.K. Khullar	Interprint	New Delhi

E 95-055	Ochre Border (The)—A Journey Through the Tibetan Frontierlands	Justine Hardy	Constable and co.,	London
E 95-056	Pembroke—Parts 1 & 2	John Harwood, Dave Viggers et al	Climbers' Club	
E 95-057	Speleological Bibliography of South Asia Including the Himalayan Regions	H.D. Gebauer, R. Mansfield, C. Chabert, and H. Kusch	Armchair Adventure Press	Germany
E 95-058	Story of the White Crystal (The)	Maria Antonia Sironi, Hildegard Diemberger and Others	Ferrari Edit- rice	Italy
E 95-059	Where Warriors Met—The Story of Leeva Downs, Kenya	Edward Paice	Tasker Publication	
E 95-060	Younghusband—The Last Great Imperial Adventurer	Patrick French	Flamingo, Har- per Collins	London
山岳図	書目録──英語 1996 年			
E 96-001	Alaska Ascents	Edited by Bill Sherwonit	Alaska North- west Books	Seattle
E 96-002	Around the Roof of the World	Edited by Nicholas and Nina Shoumat- off	The University of Michigan Press	Ann Arbor
E 96-003	Best of Poucher's Scotland (The)	W.A. Poucher	Constable	
E 96-004	Best Walks in Ireland	David Marshall	Constable	
E 96-005	Britain's Alpine Ridges— Snowdonia and the Lake District	Robin Ashcroft	Crowood Press	London
$\to 96\text{-}006$	Chatsworth	Compiled by Geoff Radcliffe	BMC	
E 96-007	East of Ireland—Walk Guide	David Herman & Miriam McCarthy Gen Ed Joss Lynam	Gill & Macmi- llan	
E 96-008	Gentle Expeditions—A Guide to Ethical Mountain Adventure	Bob McConnell	AAC Press	Golden Colorado
E 96-009	High Altitude Medicine Handbook (The)	Andrew J Pollard and David R Mur- doch	Radcliff Medi- cal Press	Oxford & New York
E 96-010	Himalaya Alpine Style—The Most Challenging Routes on the Highest Peaks	Andy Fanshawe and Stephen Venables	The Mountain- eers	Seattle
E 96-011		Geeta Kapadia	Indus Pub Co.	New Delhi
E 96-012	Icefields	Thomas Wharton	Washington Square Press	Washington

E 96-013	Ice World—Techniques and Experiences of Modern Ice Climbing	Jeff Lowe	The Mountain- eers	Seattle
E 96-014	I May Be Some Time Ice and the English Imagination	Francis Spufford	Faber	London
E 96-015	In the Himalayas—Journeys through Nepal, Tibet and Bhutan	Jeremy Bernstien	Swan Hill Press	Shrewsbury, England
E 96-016	Into the Blue—A Climbers' Club Guide to Deep Water Soloing in Dorset	Cook, Robertson & Taylor	Climbers' Club	London
E 96-017	John Muir—His Life and Letters and Other Writings	Edited and intro- duced by Terry Gifford	Bâton-Wicks The Mountain- eers	London Seattle
E 96-018	Karakoram—Graphic Index of Maps	Servei General d'Informaticio de Muntanya	S.G.d'I. de Muntanya	Spain
E 96-019	Lakeland Fells (The)—The Fell and Rock Climbing Club's complete illustrated guide for walkers	Ed. June Parker & Tim Pickles	The Ernest Press	Holyhead
E 96-020	Langtang with Gosainkund & Helambu	Kev Reynolds	Cicerone	London
E 96-021	Lost Tribe (The)—A Search through the Jungles of Papua New Guinea	Edward Marriott	Picador	
E 96-022	Magic Mountains	Rennie McOwan	Mainstream	Edinburgh
E 96-023	Masino, Bregaglia, Disgrazia —Montagne per Quattro Stagioni	Gianluca Maspes and Giuseppe Miotti	Ramponi Arti Grafiche	Sondrio
E 96-024	Mountain Footfalls—A Calendar of the Scottish Hills	Ian Mitchell	Mercat Press	
E 96-025	Mountain Holidays	Janet Adam Smith	The Ernest Press	Holyhead Wales
E 96-026	Mountains of Central Spain (The)	Jacqueline Oglesby	Cicerone Press	London
E 96-027	Mont Blanc Massif (The)— The 100 Finest Routes	Gaston Rébuffat	Bâton Wicks	London
E 96-028	Night on the Ground, a Day in the Open (A)	Doug Robinson	Mountain N'Air Books	California
E 96-029	Over the Hills and Far Away	Rob Collister	The Ernest Press	Holyhead Wales
E 96-030	Portrait of Leni Riefenstahl (A)	Audrey Salkeld	Jonathan Cape	London
E 96-031	Quest for Kim—In Search of Kipling's Great Game	Peter Hopkirk	John Murray	London
E 96-032	Return of John Macnab (The)	Andrew Greig	Headline Review	

E 96-033	Right Mountain (The)— Lessons from Everest on the Real Meaning of Success	Jim Hayhurst	Sr. John Wiley & Sons	New York
E 96-034	Rope (The)	Terry Gifford	Red Beck Press	
E 96-035	Ruwenzori Discovery (The)— Luigi Amedeo de Savoia Duca Degli Abruzzi	Roberto Mantovani	CAI	
E 96-036	Scottish Winter Climbs	Andy Nisbet and Rab Anderson	Scottish Mountaineer- ing Club	
$\to 96-037$	SPITI—Adventures in the Trans-Himalaya	Harish Kapadia	Indus Publish- ing	New Delhi
${ m E}96\text{-}038$	Spy on the Roof of the World	Sydney Wignall	Canongate	Edinburgh
E 96-039	Storms of Silence	Joe Simpson	Jonathan Cape The Mountain- eers	London Seattle
E 96-040	Terra Incognita—Travels in Antarctica	Sara Wheeler	Jonathan Cape	London
E 96-041	Trekkers' Handbook (The)	Thomas R Gilchrist	Cicerone	London
E 96-042	View from the Edge (The)— Life and Landscapes of Bever- ly Johnson	Gabriela Zim	Moutain N'Air Books	California
E 96-043	Walking in the Haute Savoie	Janette Norton	Cicerone	London
E 96-044	Walking to the Mountain—A Pilgrimage to Tibet's Holy Mountain, Kailash	Wendy Teasdill	Asia 2000	Hong Kong
E 96-045	Wonders of the Karakorum	Pervez A. Khan	Ferozsons	Rawalpindi
山岳図書	書目録──ドイツ語 1995	年		
G 95-026	Abenteuer Trekking—Nepal	Banzhaf, Bernhard; Brunner, Armin	Bruckmann Verlag	München
G 95-027	Abenteuer Trekking— Neuseeland	Banzhaf, Bernhard; Brunner, Armin	Bruckmann Verlag	München
G 95-028	Abenteuer Trekking— Pyrenäen	Banzhaf, Bernhard; Brunner, Armin	Bruckmann Verlag	München
G 95-029	Abenteuer Trekking—Irland	Banzhaf, Bernhard; Brunner, Armin	Bruckmann Verlag	München
G 95-030	Abenteuer Trekking—USA- West mit Rocky Mountains	Banzhaf, Bernhard; Brunner, Armin	Bruckmann Verlag	München
G 95-031	Alles im Griff—Kletter- stories	Pasold, Achim; Mailänder, Nicholas	Panico Alpin- verlag	Köngen
G 95-032	Alpen (Die)—Andersent- decken. Nachhaltig gestalten (Magazin der Universität Zürich Nr.2/95)	Degonda, Lucia	Unipresssedi- enst	Zürich
G 95-033	Baumzeit—Magier, Mythen und Mirakel	Eggmann, Verena; Steiner, Bernd	Werd Verlag	Zürich

G 95-034	Berner Oberland und seine Photografen (Das)	Hugger, Paul	Verlag Krebser	Thun
G 95-035	Gehlüste	Steiner, Gertraud	Otto Müller Verlag	Salzburg
G 95-036	Geschichten	Innerschweizer Schriftsteller- verband	Raeber Verlag	Luzern
G 95-037	Karten Iesen—Ein Handbuch zu den Landeskarten	Gurtner, Martin	SAC-Verlag und Bundesant für Landestopo- graphie	Bern
G 95-038	Klettereien in den Gastlo- sen—Escalades dans les Gastlosen	Clément-Gobet- Philipona	Verlag EDIGAST	Rossens
G 95-039	Lot (Im)—Grenzgänge in Fels und Eis	Jourdan, Frank	Panico Alpinverlag	Köngen
G 95-040	Ossola-Täler—Zwischen Lago Maggiore und Monte Rosa	Schmid, Hans	Bergverlag Rother	München
G 95-041	Rätikon Kletterführer	Lietha, Andres	Panico Alpinverlag	Köngen
G 95-042	Senkrecht gegen die Zeit— Die Eroberung des Unsichtbaren	Bubendorfer, Thomas	Herbig	München
G 95-043	Slowenien entdecken	Strigl, Egmont	Trescher Verlag	Berlin
G 95-044	Spiel der Geister	Simpson, Joe	Schweizer Verlagshaus	Zürich
G 95-045	Südtirol—Dolomiten	Tappeiner, Jakob	Verlag Tappeiner	Lana
G 95-046	Verreiste Berge—Kultur und Tourismus im Hochgebirge	Luger, Kurt und Inman, Karin	Studien Verlag	Innsbruck
G 95-047	Wanderführer durch den Schweizerischen Nationalpark	Robin, Klaus	Edition Cratschla Zernez	Chur
G 95-048	Zlatorog—Eine Sage aus den Julischen Alpen	Baumbach, Rudolf	Slavica Verlag	München
山岳図書	書目録──ドイツ語 1996	年		
G 96-001	Alpen (Die)—Nach Gebrauch wegwerfen	Bodini, Gianni	Edition Löhwenzahn	Innsbruck
G 96-002	AVF Sella—Langkofel extrem	Goedeke, Richard	Bergverlag Rother	München
G 96-003	Berg '97, Alpenvereinsjahr- buch von DAV, OeAV, AVS	Landes, Marianne und Elmar	Bergverlag Rudolf Rother	München
G 96-004	Bündner Bergführer	Philipp, Hans; Matossi, René	Verlag E. Sutter-Lehmenn	Grindelwald

G 96-005	Clubführer—Zentralschweiz- erische Voralpen	Auf der Maur, Willy	SAC-Verlag	Bern
G 96-006	Erhard Loretan—Den Bergen verfallen (14 Achttausender erobert)	Loretan, Erhard; Ammann, Jean	Paulus Verlag	Freiburg
G 96-007	Flora Helvetica	Lauber, K. und Wagner, G.	Verlag Haupt	Bern, Stuttgart, Wien
G 96-008	Ich bin so alt wie das Jahrhundert	Lanz, Heidi; De Meester, Liliane; Ulrich Inderbinen	Rothen Verlag	Visp
G 96-009	Jungfrau—Zauberberg der Männer	Anker, Daniel	AS Verlag	Zürich
G 96-010	Kanada—der Westen	Raach, Karl-Heinz; Teuschl, Karl	Stürtz-Verlag	München
G 96-011	Klettersteigatlas Alpen	Hüsler, Eugen E.	J. Berg bei Bruckmann	München
G 96-012	Kongressband Psyche & Berg	Ladenbauer Wolfgang	Dr. W. Laden- bauer	Wien
G 96-013	Landwirtschaft im Alpenraum —unverzichtbar, aber zukunftslos?	Bätzing, Werner	Blackwell Verlag	Berlin, Wien
G 96-014	Lärche, ein intimes Baumporträt (Die)	Schloeth, Robert	AT Verlag	Aarau
G 96-015	Schweizer plaisir (全2巻)	Von Känel, Jürg	Edition Fili- dor	Reichenbach
G 96-016	Sportklettern in den Alpen	Mathis, Peter; Roeper, Malte	Kompass- Verlag	München
G 96-017	Sternenhimmel 1997 (Der)	Hügli, Ernst; Hans Roth u. Karl Städeli	Verlag Birk- häuser	Basel
G 96-018	Wildspitz-Buet-Osorno(Alpen, Anden, Atlas—Bergsteigeri- sche Höhepunkte	Horber, Ruedi	Eigenverlag Ruedi Horber	Nieder- scherli
G 96-019	Zurück (Nie)—Nordpol- Mount Everest-Südpol-3 Fluchtpunkte	Messner, Reinhold	BLV Verlags- gesellschaft	München
山岳図書	書目録──フランス語 19	95年		
F 95-018	Arène Blanche (L')	Marie Chalon	Éditions Glénat	Grenoble
F 95-019	Citadelles d'altitude—ran- données vers les forts des Alpes	Patrick Gendey et Pascal Kober	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-020	50 randonnées à ski autour de Briançon	René Kehres	Éd. R. Kehres	Briançon
F 95-021	Curios pader (II)	Pater Placidus a Spescha	Verlag Bündner Monatsblatt	Chur

F 95-022	Encantats	Rob Day et Didier Sorbé	Éd. De Fau- compret	
F 95-023	Entre alpages et glaciers— 120 sommets pour randon- neurs Vanoise-Beaufortain	Marie-Claire et James Merel	Éd. J. Merel	Bourg- Saint- Maurice
F 95-024	Grandes aventures de l'Hima- laya (Les)—Tome 1 (Anna- purna, Nanga Parbat, K2)	Maurice Herzog	Éd. Glénat	Grenoble
F 95-025	Grandes aventures de l'Hima- laya (Les)—Tome 2 (Everest, Cho Oyu, Dhaulagiri, Ogre)	Maurice Herzog	Éd. Glénat	Grenoble
F 95-026	Grandes Pyrénées (Les)	Alain Bourneton	Éd. Glénat	Grenoble
F 95-027	Himalaya	Nicholas Luard	Éditions du Rocher	
F 95-028	Image de montagne, 52 secrets pour réussir vos photos (L')	Christophe Daylat et Philippe Royer	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-029	Lacs de montagne en Haute- Savoie/Mont-Blanc	M. Gonthier et JM. Lamory	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-030	Lacs de montagne—Savoie et Haute-Savoie	Serge Coupé et Jean-Pierre Martinot	Éd. Glénat	Grenoble
F 95-031	Lexique multilingue—alpi- nisme, escalade, ski-alpi- nisme, randonnée en haute montagne, raquette à neige, descente de torrents	Christiane Tetet		
F 95-032	Mémoires d'en haut	Paul-Louis Rousset	Éd. PL. Rousset	Meylan
F 95-033	Métiers des pays de Savoie	Gilles Lansard et Bruno Auboiron	Éd. Edisud	Aix-en- Provence
F 95-034	Montagnes Rocheuses (Les)	Iwahashi Takashi	Éditions Solar	
F 95-035	Mustang	Phillippe Montillier	Éditions de la Boussole	
F 95-036	Plus belles ascensions dans le monde (Les)	Chris Bonington et Audrey Salkeld	Éd. Arthaud	Grenoble
F 95-037	Randonnée—30 balades en famille dans le Beaufortain	Jean-Marie Jeudy	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-038	Randonnée—30 balades en famille autour de Tignes- Val-d'Isère	Hervé Ruffinati	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-039	Randonnée—30 balades en famille dans le Val d'Arly	Roger Hémon	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-040	Randonnée—30 balades en famille autuor de Morzine, Les Gets et vallée d'Aulps	Jean-Marc Lamory	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-041	Raquette à neige (La)	Jean-Marc Lamory	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-042	Refuges des Alpes du Léman à Grenoble	Agnès Couzy et Claude de Merville	Éd. Glénat	Grenoble

F 95-043	Vanoise (La)	Jean-Marie Jeudy	Éd. Didier Richard	Grenoble
山岳図	書目録──フランス語 19	96年		
F 96-001	ABCdaire du Mercantour (L')	D. Canestrier, N. Loury, JP. Potron, R. Settimo	Éd. Flamma- rion	Paris
F 96-002	Autour de l'Andorre en skis			
F 96-003	Aventuriers de la montagne	Gilles Modica	Éditions MF	
F 96-004	Belledonne. Toponeige—Alpes du Dauphiné 1	Volodia Shahshahani	Éditions Volopress	Grenoble
F 96-005	Camp 4. Chroniques du Yosemite	Steve Roper	Éd. Guérin	Chamonix
F 96-006	Carnets du Vertige	Louis Lachenal	Éd. Guérin	Chamonix
F 96-007	Dans les montagnes de Grèce  —Randonnée et trekking, Grèce continentale, Crète, îles, Péloponnèse	Constantin Tsipiras	Éd. Olizane	Genève
F 96-008	Deux Savoies (Les)—75 sites pour grimper	Pierre Faivre et Christophe Billon	Éd. Franck Mercier	Annecy
F 96-009	Envers des cimes (L')	Marc Batard et Françoise Skot- nicka	Éd. Donoël	Paris
F 96-010	Escalade	Monique Rebiffé		
F 96-011	Escalade dans les Alpes- Maritimes	Jean-Claude Raibaud	Éd. Alticoop	Nice
F 96-012	Gens de Montagne—Des Alpes à l'Himalaya	Intro. by Bernard Pierre	Omnibus	Paris
F 96-013	Grimpe en Haut-Giffre	Brenas, D. Condevaux et P. Duverney	Éd. À compte d'auteurs	
F 96-014	Guide de l'Himalaya—Népal, Tibet, Bhoutan, Sikkim		Éd. Nouvelles Éditions de l'Université	Paris
F 96-015	Guide du Haut-Dauphiné— Tome 2	François Labande	Éd. de l'Envol	
F 96-016	Guide neige-avalanches	Christophe Ancey	Éd. Edisud	Aix-en- Provence
F 96-017	Histoire de l'alpinisme	Roger Frison-Roche et Sylvain Jouty	Éditions Arthaud	Paris
F 96-018	Histoire de l'alpinisme— Les Alpes	Michel Mestre	Éditions Edisud	Aix-en- Provence
F 96-019	Homme debout (Un)	Jean-Marie Choffat	Éditions Volopress	Grenoble
F 96-020	Homme et la neige autrefois (L')	Véronique Place	Éd. Bibliothéque de travail	
F 96-021	Lentement l'Amérique	Daniel François	Éd. AM. François	Bagneux

F 96-022	Mots du Champsaur —Hautes-Alpes	Claudette Germi	Éditions Ellug	Grenoble
F 96-023	Paysan sans terre	Roger Canac	Éd. Glénat	Grenoble
F 96-024	Plus belles randonnées des Cévennes (Les)	Chantal Chivas	Éd. Glénat	Grenoble
F 96-025	Randonnées insolite—Alpes- Provence-Ardèche-Corse	Pierre Millon	Éd. Glénat	Grenoble
F 96-026	Randonnée mode d'emploi	Hugh Mac Manners	Éd. Éditions du Sport	Paris
F 96-027	Récits et nouvelles des montagnes		Éd. MF	
F 96-028	Refuges des Alpes—de l'Oisans à la Méditerranée	Agnès Couzy et Claude de Merville	Éd. Glénat	Grenoble
F 96-029	Ski de montagne en Dauphiné	Jean-Pierre Bonfort	Diffusion Didier- Richard	Grenoble
F 96-030	Ski de randonnée. 134 itiné- raires de ski-alpinisme (en) Savoie	Emmanuel Cabau	Éditions Olizane	Genève
F 96-031	Ski de randonnée pour tous— Séjours dans les Alpes	Bruno Auboiron	Éd. Edisud	Aix-en- Provence
F 96-032	Sommets du Mont-Blanc—Les plus belles courses, de facile à difficile	Jean-Louis Laroche et Florence Lelong	Éd. Glénat	Grenoble
F 96-033	Suisse plaisir-Tome 1 Ouest	Jürg von känel	Éd. Filidor	Reichenbach
F 96-034	Suisse plaisir-Tome 2 Est	Jürg von känel	Éd. Filidor	Reichenbach
F 96-035	Tambours de Katmandu (Les)	Gérard Toffin	Éd. Payot	Paris
F 96-036	30 traces gourmandes sur les sentiers dauphinois	Eric Merlen et Thomas Lemot	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 96-037	Vie de guide	Albert Tobey	Éd. Claude Alzieu	Grenoble
F 96-038	Voyage au coeur du Mont Blanc	Pierre Tairraz et Mario Colonel	Éd. Frank Mercier	Annecy



#### トレッキングからエクスペディションまで。



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、 ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、 アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、 アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への 主催ツアーやインフォメーションを用意しております。 もちろん日本国内の山旅も企画しております。 トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための

\_\_\_\_\_\_\_\_

航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録旅行業第490号 日本旅行業協会正会員

#### アルパイン ツア・サービス 株式会社

東 京/〒105 東京都港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル2階) 大 阪/〒550 大阪市西区靱本町1-10-22(ポロロッカビル4階) 名古屋/〒450 名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階) 福 岡/〒810 福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル5階)

広島/広島サービスステーション(大阪支店転送電話)

仙 台/仙台サービスステーション(東京本社転送電話) 村、幌/〒060 札幌市東区北9条東2丁目 北海道地区総代理店(株)りんゆう観光 ☎03(3503)1911

☎06 (444) 3033 ☎052(581)3211

☎092(715)1557

☎082(542)1660

☎022(265)4611

2011(711)7106



#### Grandking

## ディルゴルGTX



あなたを最高峰まで導く、全天候対応モデル。

グランド・キングシリーズの最高峰。

「ゴアテックス®ブーティ」使用のGK-40ディルゴルGTX。





#### GK-40 ディルゴルGTX ¥21.000

- ラスト(木型):3Eサイズ
- サイズ:グレー・ローズピンク=22.5cm~28cm、 ダークブラウン・パイングリーン=22.5cm~29cm(28.5cmナシ)

#### Caravan .

製造・販売●株キャラバン/東京本社:〒170 東京都豊島区巣鴨1-25-7 ☎03-3944-2331代 大阪☎06-866-0505代・札幌☎011-822-8664・福岡☎092-414-0795 軽く、コンパクトなテントのことなら

## ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481



# には 星よりまぶし

[編集]尾崎秀樹+陳舜臣 各巻定価:本体1、900円 ※消費税が別に加算されます

|第||回配本=||冊同時発売

第四卷 英雄台頭

巻頭エッセイ=陳

舜 臣

孫子/蘇秦·張儀/韓非子 第二巻●戦国の知者 晋の文公/呉王夫差・越王句践/秦の始皇帝政 第一巻●覇者への道(第三回配本・十二月刊社)

立間祥介

乱世を平定する蜀の戦略の全貌。

第四巻●英雄台頭 諸葛孔明/劉備

曹操/孫権

第三巻●覇権争奪 項羽/劉邦

第五卷

乱世の英雄

天下三分の計を実行した名参謀と帝。

魏に曹操あり、

呉に孫権あり。

天下制覇をねらう攻防、

その野望と戦略。

冒頓単于/張騫/李陵/玄奘三 第十巻●雄図飛翔 [全卷編成] 第五巻●乱世の英雄

荀彧/関羽/周瑜/司馬仲達 第六巻●名将の戦略

巻頭エッセイ=尾崎秀樹

漢の武帝/唐の太宗/チンギス・ハン/明の朱元琦 第七巻●興国の皇帝

呂后/女帝武則天/楊貴妃 <sup>第九巻</sup>●国をゆるがす女たち 隋の煬帝/宋の徽宗/明の崇禎帝 第八巻・亡国の皇帝

〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21



## 山と山スキーの専門店

クレッターザック キスリング 夏冬用テント イギリス、オーストリア・ オリジナルセーター



〒113 東京都文京区湯鳥3-38-9

Tel 03(3831) 1 7 9 4 FAX 03(3831) 6 6 8 0

# 信頼されて70年

山靴と登山用品専門店



山友社をかはで

四谷本店 〒160 四谷1 - 20 相田ビル TEL (3351)7432・1912

## 旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー、グループ・トレッキング等は **あぬれ** が、格安 航空券は **ラマラパンデス**タ が、皆様のお手伝いをいたします。

#### 秘境の地へ 世界の山々へ





ブータン・チョモラリトレッキングにて

~ 地球の果てまでお手伝い ~ ディスカウント航空券の専門相談室

東京な03-3237-8384代 大阪な06-362-6060代



JAI-HIMAL TREKKING社社長 ラビ・パウデル

話をいたします。 社員が、皆様のお世 ネパールではカト

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KINGが、一般観光部門は SAIYU・TRAVELがそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。



シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のバイオニア

運輸大臣登録旅行業第607号



ロイヤルネパール航空 旅客代理店

## 株式西遊旅行

本 社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス5F

章 03(3237)1391代 FAX 03(3237)1396

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5 F

☎ 06 (367) 1391#U FAX 06 (367) 1966

キャラバンデスク大阪 🗂 06 (362) 6060 (住所·FAX 同上)

カトマンズ連絡事務所 P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL (JAI HIMAL TREKKING) 🕿 224248, 221707 (アンナブルナホテル並び)

## 山と自然を愛する人々に贈る名

18点22冊+解題書+特別資料セット 本体-90、000円

日本

山岳会企画

•

編集

山岳会企画· 編集

20点29冊+解題書+特別資料セット 本体-75、000円 刻日本の山岳名著」セットには「会報」第一集が含まれていま 新選覆刻日本の山岳名著」セットには「会報」第二集が含まれ

日本山岳会企画・編集

覆刻合本1号~10号(昭和5年~ 15年) 本体-2、000

日本山岳会企画・編集

岳会「会報

覆刻合本10号~20号(昭和16年~33年) 本体-4、000円

穂苅三寿雄・穂苅貞雄 著 增 訂

版

の<決定版>。付・播隆筆「槍ヶ岳絵図」 本体3、800円あり、近代アルビニズムの先駆者でもある播隆上人一代記 文政年間に、笠ヶ岳・槍ヶ岳・穂高岳を開山した宗教者で T 101 東京都千代田区神田錦町3 24 (価格は税別

膏店にない場合やお急ぎの方は直接ご注文下さい。☎03−5999−5434

九死に一生をえた登山家が描く大量遭難の軌

跡

悲劇は

なぜ起き

エヴェレスト

海津正彦 訳

む十数名の死者を出す大量 日本人の難波康子さん 昨年五月、 事故が起きた。 エヴェ ストで を含

が語りうる衝撃の事実 本書を著した。 またま事件に遭遇、 するため登山隊に参加。 「ガイド登山」の実態をルポ 当事者のみ 生還後、

著者は

「覆刻日本の山岳名著」セットには「会報」第

全米で爆発的 ヘストセラー

●本体価格1762円(税別 世界15ヵ国で続々刊行

2524円

ディック・バス フランク・ウェルズ 三浦恵美里 訳

②文藝春秋 F-ON 東京都千代田区紀尾井町3一8

#### 日本の主要山域をカバー

毎年シーズン前に入念な実踏調査を実施。 信頼と安心の本格派登山地図です。



飯豐山 御嶽山 剱·立山 朝日・出羽三山 奥秩父1 雲取山、両神山 奥多摩 箱根 甲斐駒·北岳 中央・南アルブス総図 乗鞍高原 磐梯·吾妻·安達太良 日光 奥鬼怒 越後三山 谷川岳 苗場山・武尊山 興秩父2 金峰山·甲武信 奧武蔵·秩父 高尾·陣馬 富士·富士五洲 八ケ岳・蓼科 美ケ原・霧ケ峰 軽井沢·浅間 妙高·戸隠 塩見·赤石·聖兵 木曾駒·空木岳 上高地·槍·穂高 鹿島槍・黒部湖 大菩薩連續 四上州·妙義 志賀高原·草津

赤城·皇海·筑波(新刊 屋久島 種子島 石鎚山 奥高野 葛城高原·二上山 靈仙·伊吹·藤原 栗駒·早池峰 九重·阿蘇 福岡の山々 四国剣山 紀泉高原 金剛山・岩湧山 北摂の山々 京都西山 京都北山2 京都北山十 比良山系 倒在所·鎌ケ岳 ニセコ・羊蹄山 蔵王 面白山・船形山 大山·蒜山高原 水ノ山 鉢伏·神鍋 八甲·摩耶·有馬 大雪山·十勝岳 ス台ケ原· 大杉谷· 高見山 八幡平 岩手山 秋田駒 小日· 俱留尊高原 和田·八甲田·岩木

定価 750円(税込) お求めは全国の書店で



〒102 東京都千代田区九段北4-2-11 ☎03(3262)2141(代) 〒532 大阪市淀川区西中島6-11-23 ☎06(303)5721(代) 《インターネットで情報発信中》 http://www.mapple.co.jp/

# ヒマラヤ名峰事典

#### Mountains of The Himalaya

薬師義美・雁部貞夫編/写真=藤田弘基

ヒマラヤ山脈の巨峰500座! 詳細な解説・登山史・山群地図・ 大判写真で構成した 初の本格的山名事典

好評発売中●定価:本体10,000円(税別) 〒152 東京都目黒区碑文谷5-16-19 アントナ ☎(3-5721-1234/振替01)80-0-29639



各山群には詳細な地図を付し、 ビークの位置、周辺の峠・水河・谷などの地名と 地形の特徴がひと目で分かるように構成。 また、大型カメラを使った写真により、 各ビークの山容・山姿を鮮明に識別できるようにした。 山の項目数-510、写真(2色刷り)-330点、地図-60点、 地名・人名索引約2000項目・內容紹介付き文献案内

全体を12の山域と41の山群に分け、

四六倍判/上製/650ページ

巨峰500座 その山容と挑戦の歴史を一望できる

# よりよきテントの最高峰を めざすヨシダテント!

1978年 植村直己北極点単独旅行

1978年 日本大学北極点遠征隊

1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊

1981年 明治大学エベレスト登山隊

1981年 早稲田大学K2登山隊

1984年 第26次南極観測隊

1985年 和泉雅子北極点遠征隊

1985年 第27次南極観測隊

1987年 風間深志北極点遠征隊

1988年 日本テレビ、チョモランマ、報道隊

1989年 和泉雅子北極点遠征隊

1989年 大韓民国北極点遠征隊



小さな店の大きな自信!

株式会社

#### ヨシダテント

〒167 東京都杉並区桃井1-3-3 ☎03(3399)2548·FAX03(3395)4655

## 本社の山と旅の

価格表示は本体価格で、別途消費税が必要になります。

カメラの山旅ー山の写真とカメラハイクにカ月

**川口邦雄** A5変型判/1942円

A5変型判/(正)1903円(続)(続々)1942円 藤本一美・田代博

心に残る花の山旅

一戸義孝 A5変型判/2200円

A5変型判 2200円 エーデルワイス咲く山とっておきの花の山・

のアラスカ

花の山旅るちのくの山

花の山旅・日本アルプス

新妻喜永 45変型判/2136円

10ヨーロッパ のスイス ブルーガイド・ワールド

Ø よパール· トレッキング のオーストリア 1500E 1748円 1359円 1 1 8 0 8 1360円

黒部の山賊 車窓の山旅・中央線から見える山 一アルプスの怪 伊藤正一 86判/1165円

展望の山旅(正)(続)(続々) 山村正光 A5変型判 1909円

きのこの森の歩き方

赤沼博志 A5変型判 2000円

山の写真、主自然を見る撮る楽しむ。分割法 佐藤篤志 A5変型判 2500円

フォトスケッチの山旅ーのモチーフにカ月 A5変型判 2500円

スケッチの山旅12カ月 山里寿男

山は魔術師―私の山岳写真

田淵行男

B5判函入/4369円

A5変型判/2330円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。

イタリヤところどころ一光の国の歴史

西本晃二 四六判/1602円

●書店に遠くご不便の方は小社に送料(冊数に関係なく一律300円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制) 〒104 東京都中央区銀座1-3-9/TEL03-3535-4441/振替00110-6-326

#### 全国各地の美味・珍味を満載。

取り寄せて味わうもよし、

贈り物にもよしの、

便利な産直ガイド。

北海道から 沖縄まで、代表的な 名産と珍味を都道内にいもの 別に紹介。好物・おいしい中元、 を取り寄せたいとき、お中元、 を取り寄せたいとき、おり お歳暮などの贈答用のカタログ お歳暮などの贈答用の買い物、 として、旅先での買いも お土産のガイドとして、 お土産のあたる にあいるに活用できる 便利な本。

名産・珍味

美味探究会

編

## 全国うまいもの 1・2



1.225

定価(本体1,500円+税)

#### 

北海道=たらばガニ・新巻鮭/青森=にしん飯寿司/秋田=比内鶏きりたんぽ/岩手=南部そば/宮城=笹かまぽこ/山形=香味牛肉/福島=ウニの貝焼/新潟=大力納豆/富山=ホタルイカ墨作り/石川=加賀麩/福井=ひらめの昆布じめ/栃木=刺身こんにゃく/群馬=下仁田葱/茨城=あんこう鍋/千葉=塩ゆで落花生/埼玉=秩父源流水/東京=べったら漬/神奈川=丹沢そば/山梨=信玄煮貝/長野=馬かった/静岡=わさび漬/愛知=鮮魚味醂粕漬/三重=伊勢海老/岐阜=鮎うるか/滋賀=桑酒/京都=すぐき/大阪=水なす漬/奈良=地ビール・倭王/和歌山=封じ梅/兵庫=山の芋/岡山=浜ゆでシャコ/広島=鯛の浜焼/鳥取=砂丘山芋/島根=島津屋海苔/山口=ふぐぞうすい/香川=鰆の魚漬/徳島=たらいうどん/高知=黒潮鰹たたき/愛媛=きじ鍋/福岡=柚乃香/佐賀=いかしゅうまい/長崎=焼あご/大分=天然活き車海老/熊本=馬刺/宮崎=やまめの甘露煮/鹿児島=かつおの腹皮/沖縄=ゴーヤー 他多数

富士書店

東京都文京区本郷 4 丁目 1-14 電話 03-3814-0498 FAX. 03-3814-9250

1 ロッ

ル

ス、

最後

課題

冬季アイガ

定価 (本体1、 横 900円+ 税

そこに挑んだ男たちの 死闘をつづった古典的名著。

オリ

案 長 野 П 想 す " る登 7 0) Ш 舞 定価(本体1、900円+

合とな の喜びと恐 る Ď 3 馬 岳 × 0 Ш

M 下上 巻巻 定定価価 本本 体体 7 7 4 4 0 0 円円

か 全霊をかけ 六合 K 丰 雄 Æ 降 た克 家 盛 0 0 が、雪 明な生活 基礎 ス を築 丰 あ ild n 11 録 -

<sup>体育・スポーツ総合出版</sup> 器**ベースポール・マガジン社** 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10 ●最寄りの書店でお求め下さい。

●直接注文は、FAX03(3238)0084 電話03(3238)0181 ベースボール・マガジン社 販売局 コレクト便係まで。

++

税税

| 春払い宅配便でお届けいたします。(宅配料は冊数にかかわらず380円) | FAXの場合は書名、冊数、氏名、住所、電話番号を明記してください。 | \*インターネットでもご注文いただけます。http://www.bbm-japan.com/

#### 山の人は何を食べてきたか



時代の変遷をも物語ってやまない 自らの体験から紡ぎだされた掌篇

々と継ぎ伝えられてきた食の系譜は、

のを食べ、

どんな生活をしてきたの

国信州の人々は、

最新刊

四信

Ш 11 屋

暮らし

十余年 州 霧 4 0 峰 風 0

雪に甦る〈食〉の記

憶

700円

高原を渡来する野鳥の姿や鳴き声

小屋暮らしの日常のうちに、

出会った人々の思い

2、718日

とともに展開する

の生活者として幾星霜を過ごしてきた山男の精神の山暮らしの喜びと悲哀、自然の表情と驚異――。山

2、718円

形成史。

に触れたメロディーや音楽の思い出によせて綴る山 古き良き山小屋の青春時代から現代まで 748円 お りお b

秋月岩 〈写真〉

小屋物語。

恒文社ポストカードブック

第

弾

から

山国の食の文化史ともなっている。

個人的な随想にもかかわらず、

お

0 数々 著者

豊かな水が動 捉えたべ ままに残され ス 魚 1 T 植 ミシン目切り取りポストカードIG葉綴じ左右QQO×天地ーQLDセンチ上製カバー装 物 日 1. .7 る奥只見の四季折 を 1 養 16枚をポ 1. 濃密な自 スト 然 カ 77 0 から BOOD 魅力を 原始 K

むかしからどんな か 1) セ ーズ エッ

出山

る四季折々の自然と人間のむつみあいを淡々と綴る 高原に咲く野の花をい 口 花を見ては想起す

●2、718円

価格は 本体価格

#### 社

〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

●最寄りの書店でお求め下さい。

着払い宅配便でお届けいたします。(宅配料は豊数にかかわらず 380円) FAXの場合は書名、豊数、氏名、住所、電話番号を明記してください。 \*インターネットでもご注文いただけます。http://www.bbm-japan.com/

●直接注文は、FAX03(3238)0084 電話03(3238)0181 恒文社 販売局 コレクト便係まで。

#### 苛酷な環境に立ち向かう 高品質アウトドアギア&クロージング



# mont-bell

本 社・〒550 大阪市西区新町1-33-20 **☆**06(531)4761(代) 東京営業所・〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-18-6 **☆**03(3760)2131(代)



●山登りの話題と情報を満載した月刊誌

# 山台溪谷

毎月15日発売/定価820円

●ビギナーのためのビジュアルな登山誌

## ヤマケイノロイ

3.5.6.9.11月発売/定価990円

「山と溪谷」一ヵ年分9840円(送料は無料、特大号値上げ分サービス)、「ヤマケイJOY」一ヵ年分4950円(送料は無料、5冊)、振替または現金書留で「山と溪谷○月号より」「ヤマケイJOY○号より」と指定のうえ住所・氏名を明記して営業部宛お送り下さい。



※定価は秘込みです。



あべ みつ子 孔 版 画 作 品 価格:1万5千円~3万5千円



一原 有徳 凹版画作品 価格:1万7千円~3万6千円

インテリア用品として、また贈りも の用としてご利用をお待ち申し上げ ます。 新刊 川崎精雄

#### 冬 木 群

山の句集 著者署名入り B6判 168頁 2500円

#### ●地 図

- Mt. Everest 50,000 1991年第2版 ボストン科学博物館/スイス山岳研究 財団共同製作 2,000円
- 2. 8000M Peaks of Karakoram 1994年 改訂版 Jerzy Wala(ポーランド) 製作 スケッチ・マップ付き 2.250円
- 3. Garhwal-Himalaya East/West 各々 150,000 スイス山岳研究財団製作 3,750円
- 4. Nanga Parbat 50,0001980年改訂版 独墺山岳会製作 2,500円
- 5. Mt. Mckinley 50,000

3,000円

- 6. Kilimanjaro 75,000 1990年 A. L. Wielochowski (英国) 製 スケップ・マップ・ガイド付き 2,000円
- 7. Chamonix 25,000 1996年 第2版 3615 I.G.N.(仏)製 2,000円
- 8. Grindel wald 1993年
- スイス製 1,600円 9. Yosemite National Park 100,000
- (米国)製 1,350円
- 10. Monte Fitz Roy & Cerro Torre 1 50,000 1994年(米国)製 2,000円

JRお茶の水駅 西ロ前

営業時間 平日

10:30~20:00

定休日曜・祝日



#### 茗溪堂

■101 東京都千代田区神田駿河台2の1の11 ☎03-3291-9442 振替 00180-2-24723



### 集 後 記

岳第九十二年』 の編集を終えた。

望を示すものとし、内容の構成は従来どおりのものとした。 集の基本方針として内容的には山岳会の歴史をふまえて未来への

た。また百年史編纂への部分的内容をふまえたものも考慮に入れた。 も含めて英文サマリーも充実させた。 らに山岳会として国際的にインターネットのホームページ解説等の問題 また読みやすいという観点から今号より巻頭の評論部分の行間を拡 3 げ

史上にまだ埋もれる部分の多い各務良幸さんについて一文を頂いた。 トナーとして会の活動にも大きく寄与したシェルパ社会について鹿野勝 しみの山歩き」をご寄稿頂き、田口二郎さんには、ヒマラヤ登山のパ 山の一つの指針として木下是雄さんに「プロジェクトとしての登山 彦さんの「シェルパの二十世紀」の推薦を頂くとともに、これまで登山 巻頭の評論としては、会にとっても一つの大きな課題である中高年登

に山岳の記録にとどめておこうとの意図で中村純二さんより「学校山岳 めていますが、その中で問題となるいろいろなジャンルのことを部分的 その意味から創立百年を控えて百年史の編纂委員会が編成され仕事を始 読物も未来への踏み台としてのことと会員諸兄の認識をお願いしたい。 ん」、「立山・劔岳登山史」等歴史的観点の内容に重点をおいた。歴史的 去に在り、現在にある一 会にとって未来こそ最も大切にしていくべきテーマである。未来は過 -という観点から「登山史上の人·各務良幸さ

部の発足」の原稿を頂いた。

に編集委員一同の皆様に心から御礼を申し上げます。 残した「鳥海山のイヌワシの生態記録」についても貴重な一文であった。 を始め、パイオニアワークとしての登山の貴重な記録に足跡を残した六 海外登山に関しては山岳会青年部のK2の無事故・全員登頂という記録 つの記録を掲載することができ、 ここに『山岳第九十二号』の編集を終えて会員の皆様の御協力ととも 山岳会としてアクティブな活動として海外登山、 会の自然保護活動として大きな足跡を 自然保護があるが、

田 辺

寿

出岳 第九十二年(通巻一五〇号) 九九七年十二月五日発行

法社 人団 本山 価三五〇〇円

発行所

東京都千代田区四番町五

サンビューハイツ四番町 東京三二六一局四四三三番 (〒101-00八

替口座 発行人 001三0-一一四八二九 藤

田 辺 寿

東京都千代田区神田駿河台二一 印刷所 株式会社 株式会社 技

電話 振替口座 東京三二九一局九四四二番 00一八0一二一四七二三

写真および地図の無断転載

# A AT

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

# **ATLAS TREK**



ビギナーのための旅行から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新しいユニークな手づくりの旅をコーディネイトします。

Manaslu



Sagalmatha



Oomolangma



Nanda Devi



Kangchenjunga

Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取扱っております。

●お問合わせ・お申込みは…

運輸大臣登録旅行業第1167号

#### 株式会社アトラストレック

(東京) 03-3341-0030代 東京都新宿区三栄町23番地

〈大阪〉 06-341-9600代 大阪府北区堂島2丁目3番33号, 4F 《北海道地区総代理店》株式会社ノマド 011-261-2639代 札幌市中央区南2条西6丁目 - 関ビル6F 北海道知事登録旅行業第2-249

トレックなんでも相談

東日本地区 120-088482

西日本地区 120-884808

北海道地区 120-665-665 The Journal of
The Japanese Alpine Club

#### SANGAKU

Vol. 92

1997